

茨城県教育財団文化財調査報告第255集

やま の いり
山 ノ 入 古 墳 群
だい にち した
大 日 下 遺 跡

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII

平成 18 年 3 月

東日本高速道路株式会社
財団法人 茨城県教育財団



山ノ入古墳群全景



山ノ入古墳群 第2号墳出土須恵器

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、東日本高速道路株式会社(旧日本道路公団)は、桜川市(旧岩瀬町)本郷・長方両地区において、北関東自動車道(協和～友部)建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である山ノ入古墳群と大日下遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、東日本高速道路株式会社から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成15年12月から平成17年3月まで発掘調査を実施しました。

本書は、山ノ入古墳群と大日下遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である東日本高速道路株式会社から多大な協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、桜川市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

1 本書は、東日本高速道路株式会社(旧日本道路公団)の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成15年度から平成17年度にかけて発掘調査を実施した、茨城県桜川市(旧西茨城郡岩瀬町)本郷字山ノ入1014番地の53ほかに所在する山ノ入古墳群^{やまのいり}と、同市長方714番地の1ほかに所在する大日下遺跡^{おおいちしよ}の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調 査

山ノ入古墳群 平成15年12月1日～平成16年3月31日、平成16年4月1日～平成17年3月31日

平成17年4月1日～平成17年5月31日

大日下遺跡 平成16年6月1日～平成16年9月30日

整 理 平成17年4月1日～平成18年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

山ノ入古墳群

平成15年度

首席調査員兼班長 村上 和彦 首席調査員 江幡 良夫

主任調査員 長谷川 聡 榎 雅彦 青木 仁昌

平成16年度

首席調査員兼班長 江幡 良夫 主任調査員 小澤 重雄

主任調査員 稲田 義弘 平成16年4月1日～9月30日

主任調査員 青木 仁昌 照山 大作 平成16年4月1日～5月31日

主任調査員 飯泉 達司 同 上

平成16年7月1日～9月30日

副主任調査員 片野 靖久 平成16年4月1日～5月31日

平成16年10月1日～平成17年3月31日

平成17年度

首席調査員兼班長 川又 清明

主任調査員 青木 亨 副主任調査員 片野 靖久

大日下遺跡

首席調査員兼班長 江幡 良夫

主任調査員 石川 武志 平成16年7月1日～7月31日

主任調査員 浦和 敏郎 平成16年7月1日～9月30日

主任調査員 飯泉 達司 副主任調査員 片野 靖久 平成16年6月1日～6月30日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、主任調査員小澤重雄が担当した。

5 金属製品のX線撮影については、財団法人とちぎ生涯学習文化財団栃木県埋蔵文化財センター主査車塚哲久氏に御指導いただいた。

6 第2号墳の墳丘測量と第5号墳の石室実測は、三井考測株式に委託した。

凡 例

- 1 山ノ入古墳群、大日下遺跡の地区設定は、それぞれ日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠した。

山ノ入古墳群はX軸 = +41231.3399m, Y軸 = +19156.9343mの交点、大日下遺跡はX軸 = +40275.3220m, Y軸 = +21666.6383mの交点をそれぞれ基準点(A1a1)とした。それぞれの基準点を基に、遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j, 西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。





- 2 実測図・一覧表・遺物観察等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	S I - 住居跡	S K - 土坑	S E - 井戸跡	S D - 溝跡	S F - 道路跡	P - 柱穴
	P g - ビット群	T M - 古墳・石室	F P - 炉穴	S Y - 窯跡	K - 攪乱	
遺物	P - 土器・陶磁器	T P - 拓本記録土器	Q - 石器・石製品	M - 金属製品		
	T - 瓦					
土層	K - 攪乱					

- 3 古墳及び石室は「第○号墳」と記載し、通し番号とした。

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 施軸・旧表土・ 焼土・掘り方	 炉・火床面・ 繊維土器断面	 竈部材・粘土	 柱痕・石断面	
● 土器	□ 石器・石製品	▲ 金属製品	■ 瓦	——— 硬化面

- 6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1、遺構は60分の1、古墳は80分の1の縮尺で掲載することを原則とした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それについては個々に縮尺をスケールで示した。
- 7 「主軸方向」は、住居については炉または竈の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その他の遺構については長軸（長径）方向を主軸とみなした。主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。
- 8 遺構一覧表・遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
 - (1) 計測値の単位は、法量をm, cm, 重量をgで示した。なお、現存値は（ ）で、推定値は[]を付して示した。
 - (2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。
 - (3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品、金属製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

抄 録

ふりがな	やまのいりこふんぐん だいにちしたいせき							
書名	山ノ入古墳群 大日下遺跡							
副書名	北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	XIII							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第255集							
編著者名	小澤重雄							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL.029 (225) 6587							
発行年月日	2006(平成18)年3月24日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
山ノ入古墳群	茨城県桜川市本郷 字山ノ入1014番地 の53ほか	08231 324079	36度 22分 10秒	140度 2分 00秒	66 ～ 96m	20031201 ～ 20040331 20040401 ～ 20050331 20050401 ～ 20050531	4,933.31㎡ 8,579.69㎡ 234.00㎡	北関東自動車道(協和～友部)建設事業に伴う事前調査
大日下遺跡	茨城県桜川市長方 714番地の1ほか	08324 324096	36度 21分 42秒	140度 4分 33秒	46 ～ 50m	20040601 ～ 20040930	5,843.00㎡	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山ノ入古墳群	集落跡	縄文	竪穴住居跡 土坑 石器集中地点 炉穴	7軒 29基 2か所 2基	縄文土器、石器(石楡・石匙・石鏃・石鎌・磨石・敲石・凹石)		第2号墳の墳丘には貫石が施され、須恵器の大甕約14個体が出土している。	
		古墳	土器溜まり 土坑	1か所 3基	土師器 須恵器			
		奈良・平安	竪穴住居跡 土器溜まり 土坑	1軒 1か所 3基	土師器 須恵器 鉄器・鉄製品(刀子・釘)			
	墓域跡	古墳	前方後円墳 円墳 石室	1基 13基 9基	土師器 須恵器 石製品(切子玉・勾玉) 鉄器(直刀・円頭柄頭・鉄鏃・弓飾り金具・釘) 鉄製品(髷・鉸具) 銅製品(雲珠・帯先金具・耳環) ガラス小玉			

	生産跡	近 世	炭焼窯跡	1基	石製品(石臼)	
	その他	不 明	炉跡 溝跡 土坑	2基 3条 83基		
大日下遺跡	集落跡	縄 文	土坑	1基	縄文土器	
		古 墳	竪穴住居跡	2軒	土師器	
		奈良・平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	5軒 4棟	土師器 須恵器 土製品(瓦)	
		中・近世	方形竪穴遺構 掘立柱建物跡 溝跡 土坑	1基 2棟 3条 3基	土師質土器(内耳鍋・甕) 陶磁器(小碗・碗) 土製品(瓦)	
	時期不明	竪穴住居跡 方形竪穴遺構 掘立柱建物跡 溝跡 段切り遺構	1軒 2基 5棟 3条 1か所			
	生産跡	近 世	炭焼窯跡	4基		
	その他	旧石器				石器(尖頭器・石刃)
		中・近世	道路跡	1条		
時期不明		道路跡 地下式塚 ビット群 土坑	1条 1基 4か所 51基			
要 約	<p>山ノ入古墳群は、古墳時代後期から終末期にかけて形成された、円墳を主体とする古墳群である。このうち第2号墳は墳丘長25.3mの前方後円墳で、岩瀬盆地周辺では、最終末の前方後円墳と考えられる。</p> <p>大日下遺跡は、平安時代から近世の集落跡を中心とする複合遺跡である。東側に隣接する辰海道遺跡と深い関係を持つ遺跡と考えられる。</p>					

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 山ノ入古墳群	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 炉穴	27
(3) 土坑	28
(4) 石器集中地点	32
2 古墳時代の遺構と遺物	44
(1) 古墳	44
(2) 土器溜まり	148
(3) 土坑	150
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	156
(1) 竪穴住居跡	156
(2) 土器溜まり	157
(3) 土坑	160
4 近世の遺構と遺物	164
炭焼窯跡	164
5 その他の遺構と遺物	167
(1) 炉穴	167
(2) 溝跡	167
(3) 土坑	169
(4) 遺構外出土遺物	170

第4節	まとめ	181
第4章	大日下遺跡	195
第1節	遺跡の概要	195
第2節	基本層序	195
第3節	遺構と遺物	197
1	縄文時代の遺構と遺物	197
	土坑	197
2	古墳時代の遺構と遺物	197
	竪穴住居跡	197
3	平安時代の遺構と遺物	201
	(1)竪穴住居跡	201
	(2)掘立柱建物跡	212
4	中・近世の遺構と遺物	217
	(1)方形竪穴遺構	217
	(2)掘立柱建物跡	221
	(3)溝跡	223
	(4)井戸跡	225
	(5)道路跡	226
	(6)炭焼窯跡	226
	(7)土坑	231
5	その他の遺構と遺物	235
	(1)竪穴住居跡	235
	(2)方形竪穴遺構	236
	(3)掘立柱建物跡	238
	(4)溝跡	243
	(5)道路跡	245
	(6)ピット群	245
	(7)段切り遺構	249
	(8)地下式墳	252
	(9)土坑	253
	(00)遺構外出土遺物	259
第4節	まとめ	263

写真図版

付図

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

東日本高速道路株式会社は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通を目指している。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成11年11月25日に山ノ入古墳群の現地踏査を、平成12年2月21・22日、4月18・19日に試掘調査を実施した。また平成15年8月1日に大日下遺跡の現地踏査を、平成15年8月28日に試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年9月11日、茨城県教育委員会教育長から日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、事業地内に山ノ入古墳群が存在する旨を、さらに平成15年9月11日、大日下遺跡が存在する旨を回答した。

日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長から茨城県教育委員会教育長に対して、平成13年7月12日に山ノ入古墳群、平成16年2月9日に大日下遺跡について、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、土木工事についての通知が提出された。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、平成13年7月13日に山ノ入古墳群、平成16年2月23日に大日下遺跡について工事着手前に発掘調査を実施するようそれぞれ通知した。

日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長にあてに、北関東自動車道建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について、平成15年2月26日に山ノ入古墳群、平成16年3月10日に大日下遺跡についてそれぞれ協議書が提出された。茨城県教育委員会教育長は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、平成15年2月27日に山ノ入古墳群、平成16年3月15日に大日下遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、山ノ入古墳群は平成15年12月1日から平成17年5月31日まで、大日下遺跡は平成16年6月1日から平成16年9月30日まで発掘調査をそれぞれ実施することとなった。

第2節 調査経過

山ノ入古墳群は平成15年12月1日から平成16年3月31日、平成16年4月1日から平成17年3月31日、平成17年4月1日から平成17年5月31日まで、大日下遺跡は平成16年6月1日から平成16年9月30日までそれぞれ調査を実施した。その概要を表で記載する。

なお、山ノ入古墳群の当初の調査面積は10,951㎡であったが、調査区の西側から古墳が確認されたため、平成16年1月20・21・29日、茨城県教育委員会は追加の試掘調査を実施した。その結果、平成16年6月、発掘調査計画の変更を行い、調査面積1,136㎡を追加し、併せて調査期間を4月1日から9月30日まで6か月間延長した。さらに、調査区の東側から古墳が確認されたため、平成16年9月15日茨城県教育委員会は追加の試掘調査を実施した。その結果、平成16年9月、発掘調査計画の変更を行い、調査面積1,426㎡を追加し、併せて調査期間を10月1日から平成17年3月31日まで6か月間延長した。さらに遺跡の広がりか予想されるため、平成

17年2月、調査面積234㎡を追加し、併せて調査期間を平成17年4月1日から5月30日まで延長した。

大日下遺跡の当初の調査面積は1,779㎡であったが、調査区域外に遺跡が発見され、平成16年5月20日、茨城県教育委員会は試掘調査を実施し、発掘調査計画の変更を行い、調査面積4,064㎡を追加した。併せて調査期間を7月1日から9月30日まで3か月間延長した。

山ノ入古墳群

工程	期間	平成15年12月	平成16年1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
調査準備 表土除去 遺構確認		■						■	
遺構調査		■							
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■						
補足調査 掘取									

工程	期間	8月	9月	10月	11月	12月	平成17年1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認								■	
遺構調査		■							
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■							
補足調査 掘取									■

工程	期間	4月	5月
調査準備 表土除去 遺構確認		■	
遺構調査		■	
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■
補足調査 掘取			■

大日下遺跡

工程	期間	平成16年6月	7月	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認		■	■		
遺構調査		■			
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■		
補足調査 掘取					■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

山ノ入古墳群は桜川市(旧西茨城郡岩瀬町)本郷字山ノ入1014番地の53ほか、大日下遺跡は桜川市(旧西茨城郡岩瀬町)長方714番地の1ほかが存在している。

茨城・栃木・福島の3県に連なる八溝山地は、八溝・鷲の子・鷓足・筑波の山塊からなり、なだらかな山並みを形成している。遺跡周辺の地勢は三方を山に囲まれ、旧岩瀬町域を中心に盆地状の地形を形成している。北は鷓足山塊から派生する支脈が仏頂山(430m)、高峯(520m)、雨巻山(533m)、富谷山(365m)と連なり、西側は小貝川の沖積地が広がっている。南は御嶽山(231m)、雨引山(409m)、燕山(701m)と筑波山塊の山々がそびえている。東は棟峰(263m)を中心に、涸沼川水系との分水嶺となっている。岩瀬盆地の中央を流れる桜川は、鏡ヶ池を水源として西へ流れ、盆地の南西部で支流の泉川と合流して流れを南に変え、筑波山の西側を流れ霞ヶ浦に注いでいる。

盆地の周縁部には、浸食により開析をうけた尾根とそれに続く台地が広がっている。盆地内部には長辺寺山(142m)をはじめとする独立丘が点在し、桜川とその支流によって形成された沖積地が広がっている。

山ノ入古墳群は、盆地の外縁部に位置している。背後に標高約280mの丘陵をひかえ、そこから南へ延びる尾根上に形成された標高66-96m、幅約60mの緩やかな尾根筋とその斜面に立地している。大日下遺跡は、泉川右岸に所在する標高75mの独立丘の北側裾部に位置し、沖積地との境界付近に立地している。調査前の現況は、山ノ入古墳群は山林、大日下遺跡は宅地である。

第2節 歴史的環境

山ノ入古墳群、大日下遺跡が所在する岩瀬盆地には、他にも数多くの遺跡が知られている。以下、各時代ごとに周辺の遺跡について記述する。

辰海道遺跡¹⁾(3)、加茂遺跡²⁾、筑西市(旧協和町)宮本遺跡³⁾では、旧石器時代にさかのぼる遺物が出土しており、早い時代から人々が生活していたことがうかがえる。特に、宮本遺跡ではローム層中から石器が出土している。このほか、岩瀬地域では出土した状況は明らかではないものの、大泉地区、富谷地区、高島地区からも遺物が採集されている。

縄文時代になると、台地上や山麓付近に集落が営まれるようになり、盆地南西部の山麓には大田神社前遺跡⁴⁾、猪俣遺跡⁵⁾が、盆地中央には長辺寺山の西側斜面に長辺寺遺跡が位置している。桜川右岸には高森遺跡⁶⁾(9)、高森西遺跡⁶⁾(10)があり、小貝川の沖積地に面した台地には、石畑遺跡⁶⁾(19)、中台遺跡⁶⁾(20)などの遺跡が点在している。岩瀬盆地東部に所在する裏山遺跡⁶⁾からは中期から後期の遺構が、松田古墳群⁷⁾でも同時期の遺構が調査されている。また大田神社前遺跡⁴⁾からも中期の遺構が確認され、岩瀬地域では中期以降に人々の活動が活発となってくる。

岩瀬地域は比較的早くから弥生文化が波及し、盆地北部の大泉地区から中期の特徴を持つ甕形土器が出土している⁵⁾。後期に入ると、辰海道遺跡、当向遺跡⁸⁾(12)、大田神社前遺跡、筑西市裏山遺跡⁹⁾(21)などの遺跡で集落が形成されたことが確認されている。また南飯田遺跡と番匠免遺跡から出土した土器¹⁰⁾は、那珂川・

久慈川流域の土器と類似性が認められ、この方面と交流のあったことを示している。

古墳時代に入ると、前代に比べ遺跡の数は増加している。特に、辰海道遺跡は集落の規模が拡大し、拠点的な集落としての様相を持っている。金谷遺跡¹¹〈11〉、犬田神社前遺跡は古墳時代を通じて集落が形成されている。磯部遺跡や筑西市裏山遺跡でも当時代の遺構が確認されるなど、盆地のいたるところに集落が営まれている。辰海道遺跡では、豪族の居館跡と考えられる方形の環濠遺構や9mを超える大形の住居跡が確認され¹²、有力な豪族がこの地に基盤を置いていたことが明らかにされている。彼らの墓である古墳も、遅くとも前期末までに岩瀬地域に築かれている。長辺寺山の山麓に位置する狐塚古墳(全長約36m・前方後方墳)は、岩瀬地域で最初に築かれた首長の墓である。古墳の形状は、県内で最初に築かれた古墳に多い前方後方形の墳形であり、木棺の内部から銅鏃や短甲が出土している¹³。狐塚古墳に続いて築かれた長辺寺山古墳(全長約120m・前方後円墳)は、標高147mの長辺寺山の山頂に位置しており、岩瀬地域最大の前方後円墳である。長野県の中部高地方面と共通する特徴を持つ埴輪が採集されており¹⁴、県内でも早い時期に埴輪を樹立した古墳の一つとして知られている。後期になると盆地北部に篠ノ沢古墳¹⁵(全長43m、前方後円墳)、盆地東部に松田第1号墳¹⁶(全長40m、前方後円墳)が築かれる。篠ノ沢古墳はくびれ部から3条4段の円筒埴輪が出土し、埴輪列を持つと想定されている。松田第1号墳は埴輪を伴わないものの、粘土槌から五獣鏡・直刀・銅剣などが出土している。墳丘の規模は共に全長40m前後で、長辺寺山古墳より大幅に縮小している。また、塚本古墳(15)、遠越古墳(17)、坂戸古墳群(4)、稲古墳群¹⁷⁻¹⁸、青柳第2号墳¹⁹、古郡台原古墳²⁰(22)など、中小の古墳や群集墳が盆地を取り囲む山裾や谷地上に築かれており、古墳の数も増加している。このことは、古墳をつくることのできる層層が広がったことを反映している。さらに終末期になると装飾古墳の花園第3号墳²¹や、圭頭大刀などが出土した筑西市(旧協和町)寺山・丑塚古墳群²²(18)が築かれている。これらの古墳は、新治国造の系譜を引く首長の墓である可能性がある。

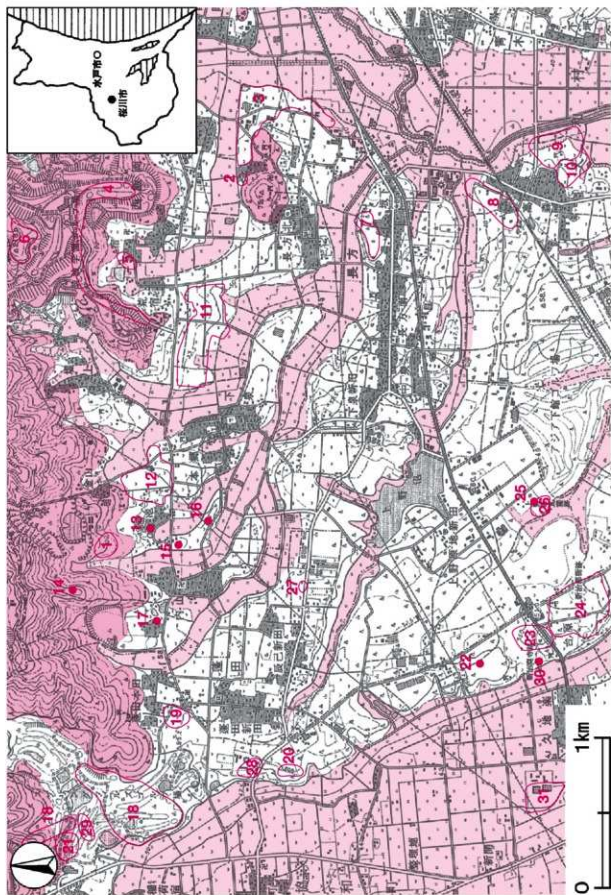
奈良・平安時代に入ると岩瀬地域は、東部は常陸国新治郡大幡郷に、西部は同じく坂門郷にそれぞれ編入される。これに伴い、この地に勢力を持っていた新治国造も、新たに郡の大領として律令制下の地方官に組み込まれている。新治郡衙跡(24)や新治庵寺(23)など郡の主要な施設は、新治郷に比定されている筑西市(旧協和町)古郡地区に設けられている²⁵。これに伴って上野原瓦窯跡²⁶(25)、本郷瓦窯遺跡(16)、富谷薬師台瓦窯跡²⁷などの瓦窯が整備され、間中遺跡²⁸では製鉄が行われるなど、盛んに生産が進められている。また須恵器生産が盛んとなり、堀ノ内古窯跡群²⁷は下野国側の益子町西山・本沼窯跡群²⁹などの窯跡と共に周辺の集落に製品を供給している。続日本紀に記載されている、新治郡大領新治直子公が錢二千貫と布布一千反を献納する記事も、こうした生産性の高い地域を掌握していたことが多額の献納を可能とした背景と考えられる。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の該当番号と同じである。

註

- 1) 仲村浩一郎・他「辰海道遺跡1 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書1」[茨城県教育財団文化財調査報告]第222集 2004年3月
- 2) 島田和宏「加茂遺跡 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書XI」[茨城県教育財団文化財調査報告]第249集 2005年3月
- 3) 協和町史編さん委員会「協和町史 通史編」協和町 1995年3月
- 4) 石川武志・榊 雅彦「犬田神社前遺跡1 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書VII」[茨城県教育財団文化財調査報告]第229集 2004年3月

- 5) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 通史編』 岩瀬町 1987年3月
- 6) 黒澤秀雄 「一般県道西小浜真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 裏山遺跡」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第73集 1992年3月
- 7) 横倉要次 「松田古墳群 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書V」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第226集 2004年3月
- 8) 小澤重雄・小野克敏 「当向遺跡1 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書III」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第224集 2004年3月
- 9) 瀬谷昌良・他 「丑塚古墳群・寺山古墳群・裏山遺跡～スプリングフィルズゴルフクラブ造成に伴う小栗地内遺跡群発掘調査報告書」 協和町教育委員会 1986年3月
- 10) 註5に同じ
- 11) 大塚雅昭・小松崎和治 「金谷遺跡1 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書IV」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第225集 2004年3月
- 12) 註1に同じ
- 13) 西宮一男 「常陸孤塚」 岩瀬町教育委員会 1969年3月
- 14) 大橋康夫・荻悦久・水沼良浩 「常陸長辺寺山古墳の円筒埴輪」〔古代〕77 早稲田大学考古学会 1984年6月
- 15) 岩瀬町教育委員会 『岩瀬町の文化財』 2002年3月
- 16) 註7に同じ
- 17) 萩原義輝 「稲古墳群7号墳」〔岩瀬町埋蔵文化財調査報告書〕第9集 岩瀬町教育委員会 1985年3月
- 18) 萩原義輝 「岩瀬ひさご塚(稲古墳群2号墳)」〔岩瀬町埋蔵文化財調査報告書〕第8集 岩瀬町教育委員会 1991年3月
- 19) 伊藤重敏 「青柳2号墳調査報告」〔岩瀬町文化財調査報告書〕第6集 岩瀬町教育委員会 1983年3月
- 20) 甲陽史学会 「常陸國上代遺跡の研究II」 1988年1月
- 21) 伊東重敏・川崎純徳 「花園壁面古墳(第3号墳)調査報告書」〔岩瀬町文化財調査報告書〕第7集 岩瀬町教育委員会 1985年3月
- 22) 註9に同じ
- 23) 高井梯三郎 「常陸國新治郡上代遺跡の研究」 1944年10月
- 24) 註23に同じ
- 25) 高井梯三郎 「茨城県西茨城郡富谷薬師台瓦室跡」〔日本考古学年報〕4 1955年
- 26) 寺門義範 「岩瀬・間中～茨城県西茨城郡岩瀬・間中遺跡の発掘調査報告～」 岩瀬町教育委員会 1976年5月
- 27) 註19に同じ
- 28) 栃木県教育委員会 「栃木県生産遺跡分布調査報告書」〔栃木県埋蔵文化財調査報告〕第89集 1988年3月



第1図 山ノ入古墳群・大日下遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院2万5000分の1「岩瀬」）

表1 山ノ入古墳群・大日下遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代					番 号	遺 跡 名	時 代					
		旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平			中 ・ 近 世	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平
①	山ノ入古墳群		○		○	○	17	遠越古墳				○		
②	大日下遺跡		○		○	○	18	寺山・丑塚古墳群				○		
3	辰海道遺跡	○	○	○	○	○	19	石畑遺跡		○		○	○	
4	坂戸古墳群				○		20	中台遺跡	○	○				
5	布着山古墳群				○		21	裏山遺跡	○	○	○	○	○	
6	坂戸城跡					○	22	古郡台原古墳				○		
7	星の宮古墳群				○		23	新治庵寺					○	
8	高森古墳群				○		24	新治郡衙跡					○	
9	高森遺跡	○					25	上野原瓦窯跡					○	
10	高森西遺跡	○				○	26	鎌倉古墳群				○		
11	金谷遺跡				○	○	27	東原遺跡		○				
12	当向遺跡	○	○	○	○	○	28	上中台南遺跡	○	○	○	○		
13	内山古墳群				○		29	寺山庵寺						○
14	二門塚古墳				○		30	久地楽長町窯跡					○	
15	塚本古墳				○		31	協和の社公園遺跡				○	○	○
16	本郷瓦塚遺跡					○								

第3章 山ノ入古墳群

第1節 遺跡の概要

山ノ入古墳群は、桜川市(旧岩瀬町)の北西部に位置し、茨城・栃木両県の県境となる丘陵から南に延びた、標高66～96m、幅約60mの緩やかな尾根筋とその斜面部に立地している。

調査によって、古墳時代後期から終末期にかけて形成された古墳群であることが確認できた。また、古墳の下層や周囲からは、縄文時代、奈良・平安時代の遺構が確認されている。

遺構は、縄文時代の竪穴住居跡7軒、炉穴2基、土坑29基、石器集中地点2か所、古墳時代の前方後円墳1基、円墳13基、石室9基、土器溜まり1か所、土坑3基、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、土器溜まり1か所、土坑3基、近世の炭焼窯跡1基、時期不明の炉穴2基、溝3条、土坑83基が検出された。

遺物は、縄文土器(深鉢)、土師器(坏、高台付坏、甕)、須恵器(坏、高台付坏、蓋、長頸瓶、フラスコ瓶、提瓶、甕)、石器・石製品(石槍、石匙、石錐、磨石、凹石、切子玉、勾玉)、鉄器(直刀、円頭柄頭、鐵、釘)、鉄製品(轡、鉸具、鉄地銀張帯先金具、弓飾り金具)、銅製品(雲珠、耳環)、ガラス小玉が出土し、コンテナ(60×40×20cm)105箱に収納された。

第2節 基本層序

調査区西部の北区にテストピットを設定し、基本層序の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は95.6mで、地表から2.4m掘り下げ、第3図のような堆積状況を確認した。以下、テストピットの観察から層序について記述する。

第1層はにがい褐色の土層である。ローム粒子を多量に含み、粘性・締まりは弱い。層厚は30～40cmである。

第2層は暗褐色の土層である。ローム粒子を中量含み、黒色粒子を含んでいる。層厚は6～12cmである。

第3層は褐色のソフトローム層である。層厚は16～40cmである。

第4層は褐色のハードローム層である。層厚は10～40cmである。

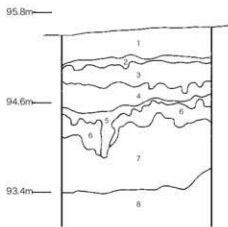
第5層は褐色の土層である。ロームブロックを中量含み、炭化粒子を微量含んでいる。粘性は普通で締まりは弱い。層厚は5～60cmである。

第6層は褐色の鹿沼バミスの漸移層である。ロームブロック・鹿沼バミスを中量含み、粘性は弱く締まりは普通である。層厚は7～45cmである。

第7層は明黄褐色の鹿沼バミス層である。粘性は普通で締まりは強い。層厚は45～100cmである

第8層は暗褐色のハードローム層である。細礫を少量含み、締まりは強い。層厚は現状で30cm以上あるが、下層が未掘のため本来の厚さは不明である。

なお、遺構は第2層の上面で確認されている。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡7軒、炉穴2基、土坑29基、石器集中地点2か所が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

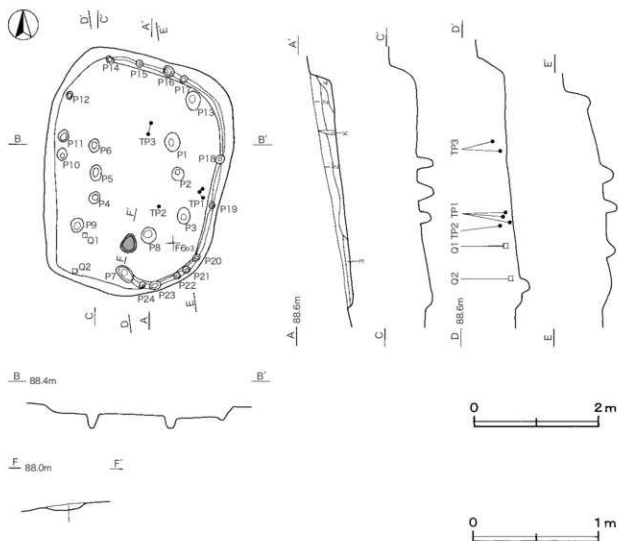
第2号住居跡(第4・5図)

位置 調査区中央部のF6a2区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第3号墳の下層から確認されている。

規模と形状 長軸3.98m、短軸3.02mの隅丸長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は8~32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であるが、北から南に向かって若干傾斜している。壁溝が北壁から南壁にかけて巡っており、断面はU字形である。



第4図 第2号住居跡実測図

炉 南壁寄りに位置している。長径30cm、短径22cmの楕円形で、床面を深さ6cm掘り込んだ地床炉である。火床面は赤変している。

炉土層解説

1 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量

ピット 24か所。深さは12～28cmで配置に規則性がなく、性格は不明である。

覆土 4層からなる。北側から流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子中量

3 褐色 ロームブロック微量

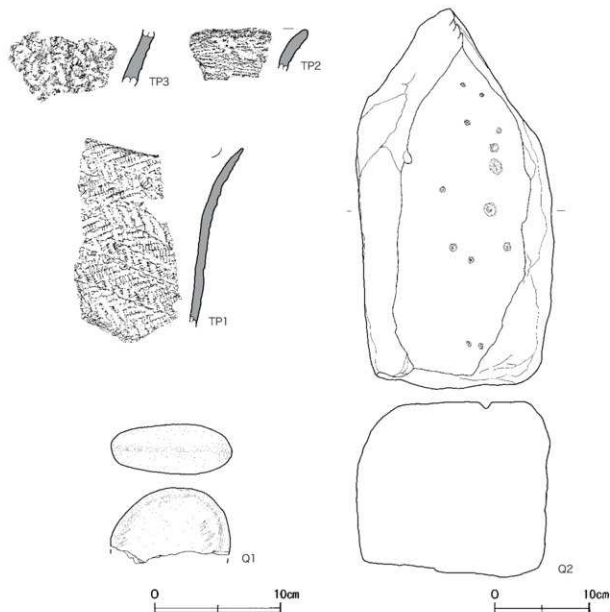
2 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

4 褐色 ローム粒子中量、炭屑パミス微量

遺物出土状況 縄文土器片20点(口縁部片2、胴部片18)、石器・石製品2点(磨石、凹石)が出土している。

TP1～TP3は覆土上層から下層にかけて出土している。Q1・Q2は南壁寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



第5図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	波状口縁 LR・RLの単筋斜縄文を羽状に施文	暗褐	長石・繊維	普通	覆土下層	
TP2	縄文土器	深鉢	断糸文を施文	暗褐	長石・繊維	普通	覆土中層	
TP3	縄文土器	深鉢	組紐を施文か	褐	雲母・白色粒子・黒色粒子・繊維	普通	覆土上～下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	磨石	(6.00)	(9.50)	(4.00)	(288.00)	砂岩	外周に磨り跡	覆土中層	
Q2	凹石	40.20	21.10	18.60	350.00	砂岩	凹み13か所	覆土中層	

第3号住居跡(第6～8図)

位置 調査区中央部のE5d9区で、丘陵屋根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第2号墳の後円部下層から確認され、第8号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径4.12m、短径3.55mの楕円形で、主軸方向はN-35°-Eである。壁高は16～38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた形跡は見られない。

炉 北壁寄りに2基確認されている。炉1は、長径100cm、短径80cmの楕円形で、床面を深さ21cm掘り込んだ地床炉である。火床面は皿状にくぼんでおり、赤変している。炉2は、長径49cm、短径36cmの楕円形で、床面を深さ13cm掘り込んでいる。掘り込みの内部から土器が出土しており、土器器皿と考えられる。火床面は平坦で、赤変している。

炉1土層解説

1 褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	4 黒 褐色	炭化物少量、ローム粒子微量
2 暗 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、縞まり強	5 暗 褐色	炭化物微量
3 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6 にいり褐色	ローム粒子中量

炉2土層解説

1 暗 赤褐色	焼土ブロック少量	3 暗 赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
2 暗 赤褐色	焼土粒子少量	4 暗 赤褐色	焼土粒子中量

ピット 2か所。深さは14～22cmで、性格は不明である。

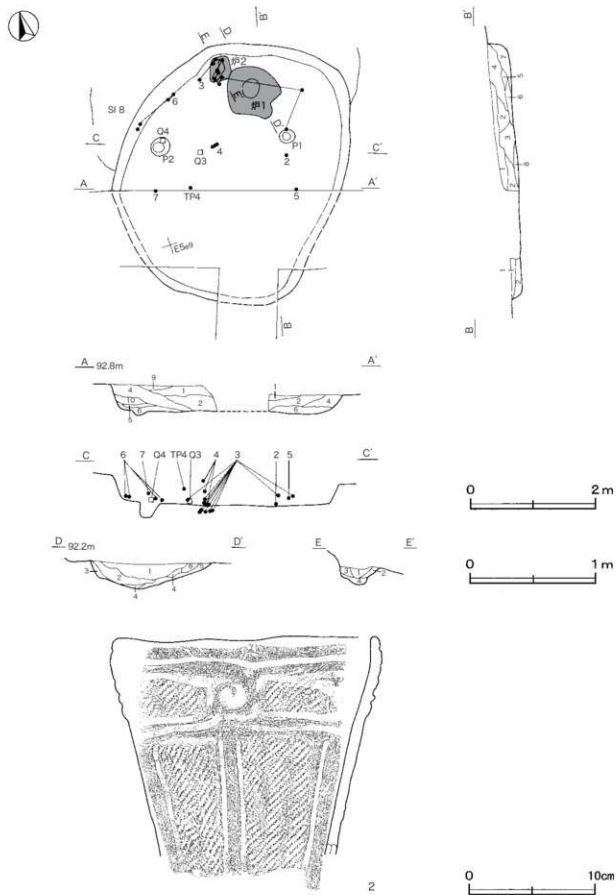
覆土 10層からなる。炭化物を含んでいる層が多いことから、人為堆積の可能性が考えられる。

土層解説

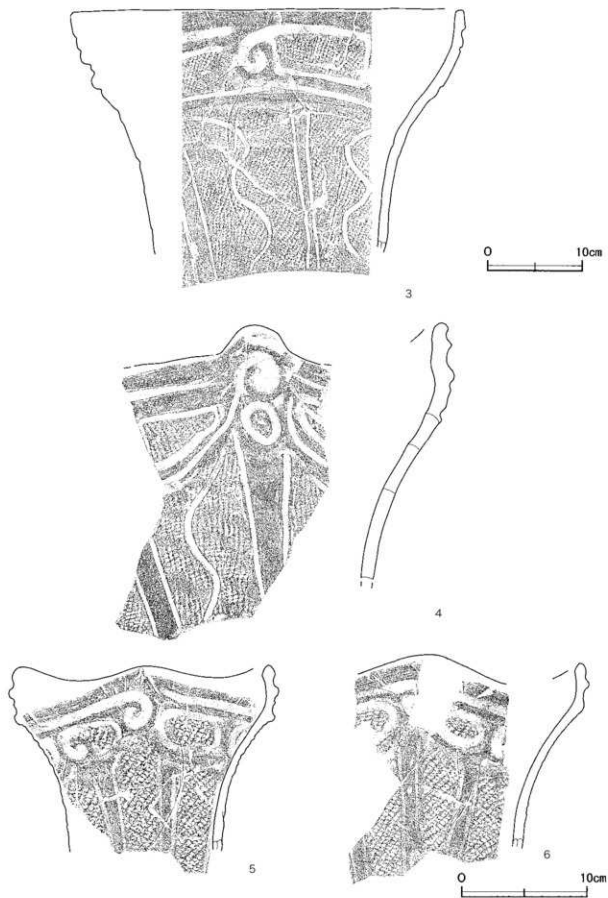
1 暗 褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	6 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、粘性強
2 暗 褐色	ローム粒子少量	7 暗 褐色	炭化粒子微量、粘性強
3 暗 褐色	炭化物中量、焼土粒子微量	8 褐 色	炭化粒子少量、焼土粒子微量
4 暗 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	9 褐 色	炭化物中量、縞まり弱
5 褐 色	焼土粒子微量	10 褐 色	ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片89点(口縁部片13、胴部片76)、石器・石製品2点(石斧、磨石)が出土している。3は炉2から出土し、炉の壁として使用されたものである。4は中央部付近の覆土上層から下層にかけて、6は西壁際の覆土下層から破片の状態出土している。2はP1付近の床面から、Q3・Q4は西壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

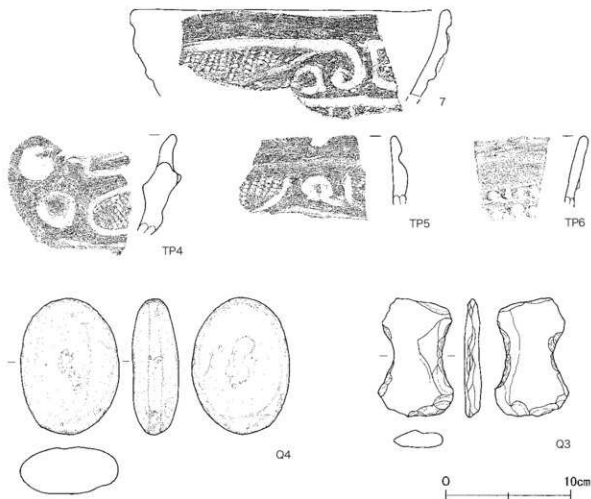
所見 時期は、出土土器から中期後半と考えられる。



第6図 第3号住居跡・出土遺物実測図



第7图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第8図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第6～8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	30.4	(17.3)	-	石英・長石・白色粒子	橙	普通	沈線が隆帯に沿う渦巻文・区画文 胴部は沈線による懸垂文 L Rの単節縄文を施文	床面	70% P L 21
3	縄文土器	深鉢	41.5	(26.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	沈線が隆帯に沿う渦巻文・区画文 胴部は沈線による懸垂文 L Rの単節縄文を施文	仰2	50% P L 21
4	縄文土器	深鉢	(29.4)	[20.4]	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	把手状の波状口縁 沈線が隆帯に沿う区画文 胴部は沈線による懸垂文 R Lの単節縄文を施文	覆土上～下層	10%
5	縄文土器	深鉢	(14.8)	3.6	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	波状口縁沈線が隆帯に沿う渦巻文・区画文 胴部は沈線による懸垂文 L Rの単節縄文を施文	覆土下層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	縄文土器	深鉢	-	(148)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	液状口縁 沈線が隆帯に沿う区画文 胴部は沈線による懸垂文 LRの単節縄文を施文	覆土下層	10%
7	縄文土器	深鉢	[247]	(6.7)	-	石英・雲母	明褐色	普通	沈線が沿う隆帯による渦巻文・区画文 LRの単節縄文を施文	覆土下層	5%

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴				色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP4	縄文土器	深鉢	把手状の口縁 沈線が隆帯に沿う区画文 LRの単節斜縄文を施文				にぶい褐色	石英・長石	良	覆土中層	
TP5	縄文土器	深鉢	口縁部直下に沈線 沈線が隆帯に沿う渦巻文・区画文 LRの単節斜縄文を施文				褐色	石英・長石	良	覆土中	
TP6	縄文土器	深鉢	内外面ナデ 輪轡直に工具による押捺				褐色	赤色粘土	良	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴		出土位置	備 考
Q3	石斧	9.35	5.95	1.40	88.20	ホルンフェルス			覆土下層	P L27
Q4	磨石	10.90	7.90	3.70	463.00	安山岩	外周に磨り跡、一部敲き痕有り		覆土下層	

第4号住居跡(第9・10区)

位置 調査区中央部のE5f8区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第2号墳の後円部下層から確認されている。

規模と形状 南壁は失われており、全容は不明である。長径6.22m、短径4.50mの楕円形で、主軸方向はN-75°-Wと推定される。壁高は5~38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 北から南に向かって若干傾斜している。踏み固められた形跡は見られない。壁溝が西壁を巡っており、断面はU字形である。

炉 北壁寄り位置している。長径4cm、短径40cmの楕円形で、床面を9cm掘り込んだ地床炉である。第13・14層が炉の土層で、火床面は赤変している。

ピット 6か所。P1・P2は深さ38~60cmで、位置と形状から主柱穴と考えられる。その他のピットの深さは9~14cmで、性格は不明である。

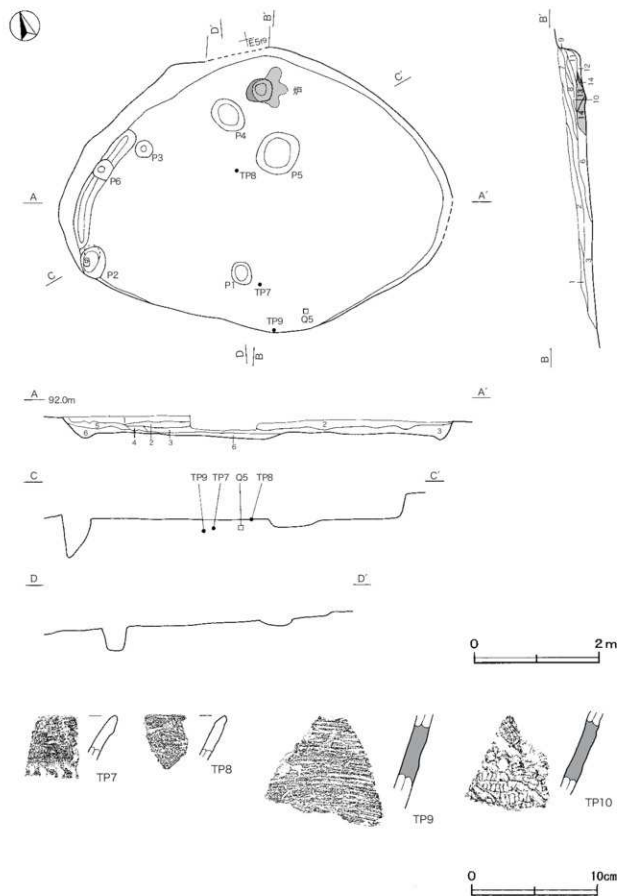
覆土 14層からなる。北側から流れ込んだ堆積状態を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

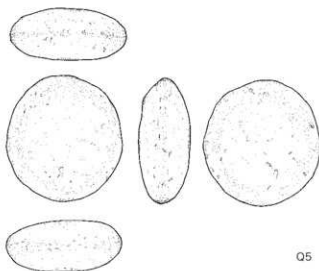
1 暗 褐色	ローム粒子・黒色粒子少量	8 明 赤 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗 褐色	ロームブロック・黒色粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量
3 褐色	ロームブロック・炭化粒子・黒色粒子微量	10 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
4 暗 褐色	ローム粒子中量	11 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
5 褐色	ローム粒子中量	12 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 にぶい赤褐色	黒色粒子少量、焼土ブロック微量	13 明 赤 褐色	焼土粒子中量
7 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	14 暗 赤 褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片29点(口縁部片2、胴部片27)、石器・石製品1点(磨石)が出土している。TP8は中央部北寄りの、TP7・TP9、Q5は南側の床面付近から出土している。

所見 時期は、出土土器から早期から前期と考えられる。



第9図 第4号住居跡・出土遺物実測図



第10図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表(第9・10図)

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴	色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP7	縄文土器	深鉢	内外面ナテ 輪積痕に工具による押捺	褐	長石	良	床面	
TP8	縄文土器	深鉢	内外面ナテ	褐	白色粒子	良	床面	
TP9	縄文土器	深鉢	内外面柔痕文	褐	白色粒子・繊維	普通	床面	
TP10	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文	褐	長石・繊維	普通	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q5	磨石	10.00	6.20	4.10	470.00	安山岩	外周に磨り跡	床面	

第5号住居跡(第11・12図)

位置 調査区中央部のE5b4区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第2号墳の前下方下層から確認され、第78号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径5.26m、短径4.01mの楕円形で、主軸方向はN-84°-Wである。壁高は20~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 北から南に向かって若干傾斜している。踏み固められた形跡は見られない。

ピット 5か所。P1・P2は深さ16~20cmで、位置と形状から支柱穴と考えられる。P3~P5は深さは12~18cmで支柱穴と考えられる。

覆土 6層からなる。北側から流れ込んだ堆積状態を示していることから、自然堆積と考えられる。

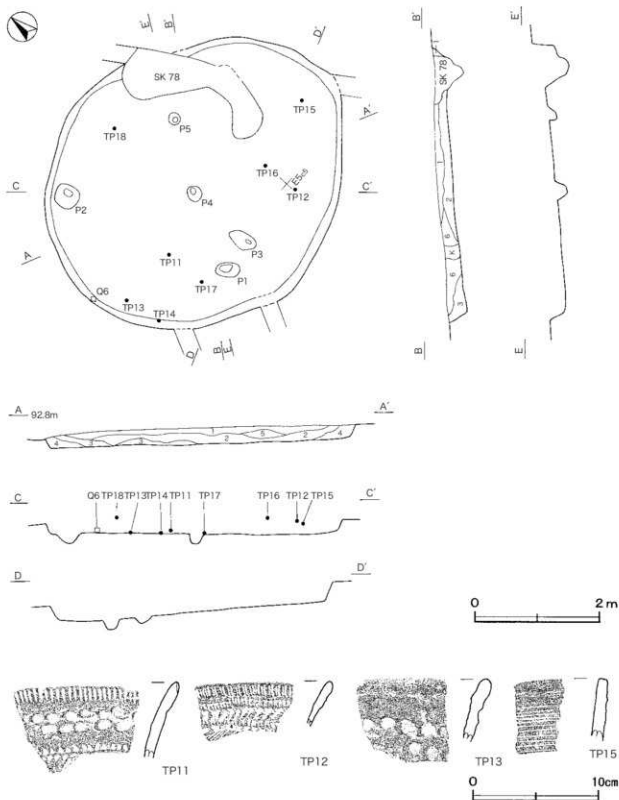
土層解説

1	暗 褐 色	ローム粒子少量、黒色粒子微量	4	褐 色	ローム粒子中量。締まり強
2	暗 褐 色	黒色粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	5	褐 色	ローム粒子中量。締まり強
3	褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	6	にぶい黄褐色	ローム粒子少量。粘性強

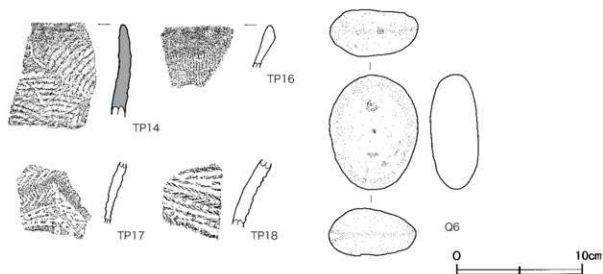
遺物出土状況 縄文土器片94点(口縁部片9、胴部片79、底部6)、石器・石製品1点(磨石)が出土している。

遺物は細片が多く、図示することができなかった。TP11・TP13・TP14・TP17、Q6は西壁寄りの床面付近から、TP18は北壁寄りの覆土上層から、それぞれ出土している。TP12・TP15・TP16は東寄りの覆土上層から出土しており、本跡が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



第11図 第5号住居跡・出土遺物実測図



第12図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表(第11・12図)

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴	色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP11	縄文土器	深鉢	口唇部割目 輪積痕に工具による押捺具段文を施文	にふい焼	石英	良	床面	
TP12	縄文土器	深鉢	口唇部割目 波状貝段文・爪形文・半截竹管文を施文	にふい焼	長石・赤色粒子	良	覆土上層	
TP13	縄文土器	深鉢	外面工具による押捺 内面ナデ	焼	長石・石英	良	床面	
TP14	縄文土器	深鉢	Lの無節縄文を施文	焼	長石・白色粒子・繊維	良	床面	
TP15	縄文土器	深鉢	半截竹管による平行沈線を施文	明焼	長石・白色粒子	良	覆土上層	
TP16	縄文土器	深鉢	口唇部肥厚 熱糸文を施文	焼	長石	普通	覆土上層	
TP17	縄文土器	深鉢	波状貝段文・爪形文・半截竹管による刺突文を施文	明焼	長石	普通	床面	
TP18	縄文土器	深鉢	L Rの単節斜縄文を施文後、粘土粒による浮線文に割目を施し、刺突文を施文	明焼	長石・石英	普通	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q 6	磨石	9.10	7.00	3.70	203.00	安山岩	外周に磨り跡	床面	

第6号住居跡(第13・14図)

位置 調査区中央部のD5g5区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第7号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西側を第7号住居に掘り込まれ、全容は不明である。規模は長径3.55m、短径2.16mの楕円形で、主軸方向はN-12°-Wと推定される。壁高は16~27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた形跡は見られない。壁溝は確認されなかった。

ピット 2か所。深さ35~38cmで、性格は不明である。

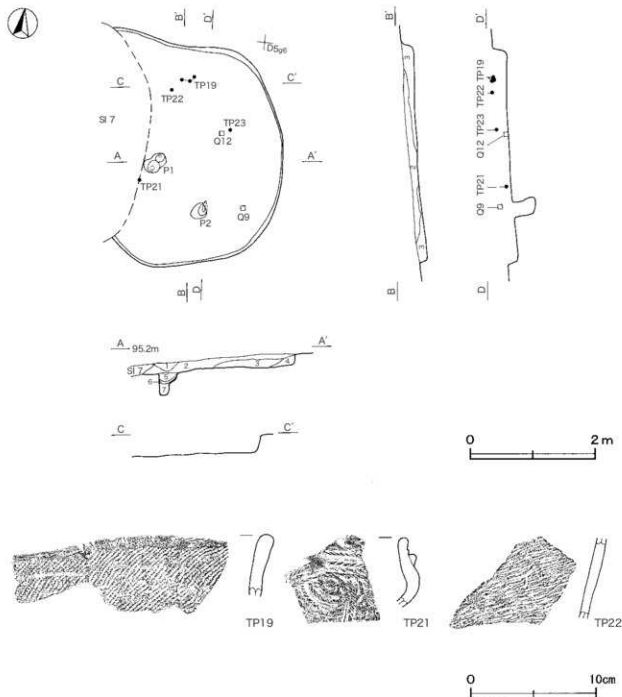
覆土 7層からなる。第5~7層はP1の土層である。その他の土層はレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

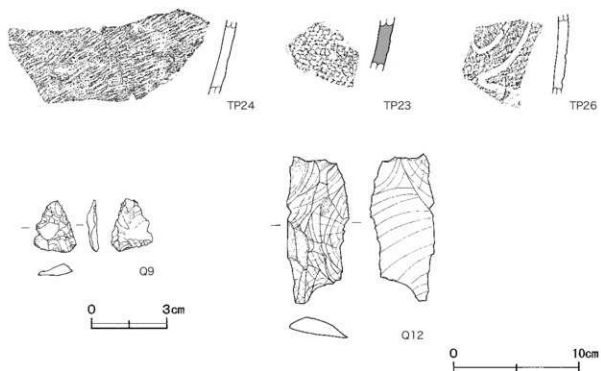
1 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量。	5 褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
2 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量。締まり強。	6 褐色	ローム粒子中量
3 褐色	ローム粒子中量。締まり強。	7 褐色	ローム粒子中量、赤色粒子微量
4 褐色	ローム粒子中量。粘性・締まり強。		

遺物出土状況 縄文土器片35点(口縁部片3, 胴部片32)、石器12点(石鏃1, 剥片11)が出土している。遺物は細片が多く、図示することができなかった。Q12は中央部東寄りの、TP21は西寄りのそれぞれ床面上から、その他の遺物は中央部から北壁寄りの覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期と考えられる。



第13図 第6号住居跡・出土遺物実測図



第14図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表(第13・14図)

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP19	縄文土器	深鉢	L Rの単節斜縄文を施文	褐	長石・赤色粒子	良	覆土上層	
TP21	縄文土器	深鉢	L Rの単節斜縄文を施文後、粘土層による浮線文に刻目を施す粘土層を貼付	褐	長石	普通	床面	
TP22	縄文土器	深鉢	L rの無節縄文を施文	橙	石英・長石	普通	覆土上層	
TP23	縄文土器	深鉢	ループ文・結束文を施文	橙	石英・白色粒子・繊維	普通	覆土上層	
TP24	縄文土器	深鉢	L rの無節縄文を施文	橙	石英・長石	普通	覆土中	
TP26	縄文土器	深鉢	L Rの単節斜縄文を沈線で区画	橙	長石・白色粒子	普通	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	石鏃	2.09	1.65	0.36	1.02	チャート	未製品	覆土上層	
Q12	刮片	11.70	4.60	1.20	88.20	チャート		床面	

第7号住居跡(第15・16図)

位置 調査区中央部のD5g5区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第6住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径3.68m、短径3.17mの楕円形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は11~14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められた形跡は見られない。

ピット 6か所。深さは15~44cmで、配列に規則性がなく、性格は不明である。

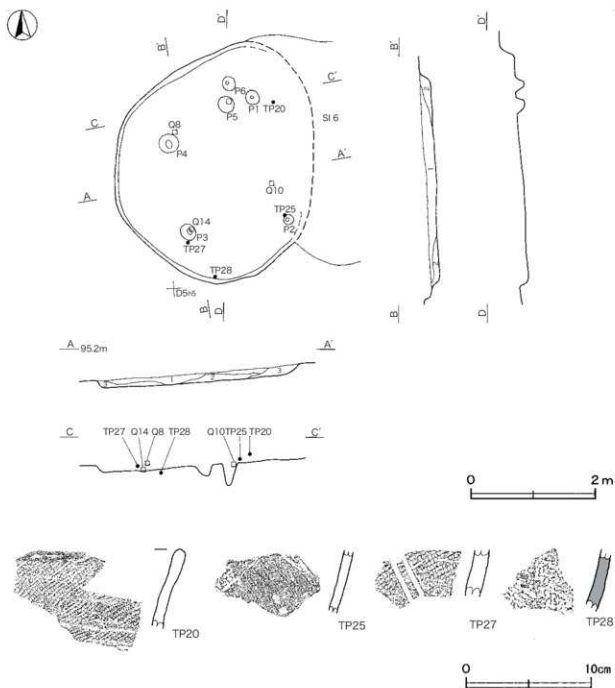
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

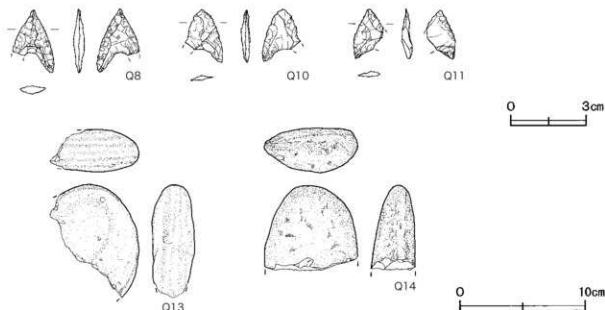
- | | | | | | |
|-----|---|-----------------|-----|---|------------------|
| 1 層 | 色 | ローム粒子中量, 黒色粒子微量 | 3 層 | 色 | ローム粒子中量, 粘性・締まり強 |
| 2 層 | 色 | ローム粒子中量, 締まり強 | | | |

遺物出土状況 縄文土器片47点(口縁部5, 胴部片42), 石器・石製品5点(石鏃3, 磨石2)が出土している。遺物は細片が多く, 図示することができなかった。TP25, Q10はP2付近, TP27・TP28, Q14は南壁寄りの床面付近からそれぞれ出土している。TP20, Q8は北壁寄りの覆土上層から出土しており, 流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から前期と考えられる。



第15図 第7号住居跡・出土遺物実測図



第16図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表(第15・16図)

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴	色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP20	縄文土器	深鉢	L Rの半節斜縄文を施文	褐	長石・赤色粒子	良	覆土上層	
TP25	縄文土器	深鉢	貝殻線緑文を沈線で区画	明褐	赤色粒子・白色粒子	良	床面	
TP27	縄文土器	深鉢	L Rの半節斜縄文を沈線で区画	にひろ	石英・長石	普通	床面	
TP28	縄文土器	深鉢	ループ文・結束文を施文	橙	石英・白色粒子・繊維	普通	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q 8	石鏃	2.52	(1.66)	0.36	(0.98)	チャート	挟り有り	覆土上層	
Q10	石鏃	2.11	(1.45)	0.34	(0.64)	チャート	挟り有り	床面	
Q11	石鏃	1.94	(1.18)	0.38	(0.64)	チャート	挟り有り	覆土中	
Q13	磨石	(9.00)	(7.10)	3.40	(200.30)	安山岩	外周に磨り跡	覆土中	
Q14	磨石	(6.70)	(8.45)	3.50	(179.00)	安山岩	外周に磨り跡	床面	

第8号住居跡(第17・18図)

位置 調査区中央部のE5d9区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第2号墳の後門部下層から確認され、第3号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南側を第3号住居に掘り込まれ、全容は不明である。径4mほどの円形で、主軸方向はN-13°-Eと想定される。壁高は17~41cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周囲が踏み固められている。

炉 中央部付近に2基確認されている。炉1は、長径76cm、短径50cmの楕円形と想定され、床面を8cm掘り込んだ地床炉である。火床面は皿状にくぼんでおり、赤変している。炉2は、長径47cm、短径42cmの楕円形と想定され、床面を12cm掘り込んだ地床炉である。火床面は皿状にくぼんでおり、赤変している。炉の重複関係は、炉1が炉2を掘り込んでいる。

炉1・2土層解説

1 暗赤色	炭化粒子少量	5 褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗赤褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量	6 暗褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量
3 暗赤褐色	炭化粒子中量、焼土粒子微量	7 褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	炭化粒子微量、粘性強		

ピット 4か所。深さ9～25cmで、壁に沿って並んでいることから柱穴の可能性が考えられる。

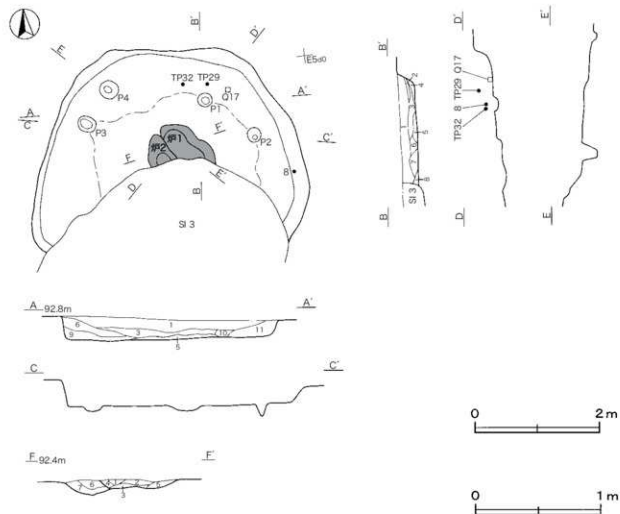
覆土 11層からなる。第2～11層は焼土ブロック及び炭化粒子を含んでいる層が多く、南北方向の土層を観察するとブロック状に堆積していることから、人為堆積の可能性が考えられる。第1層は自然堆積と考えられる。

土層解説

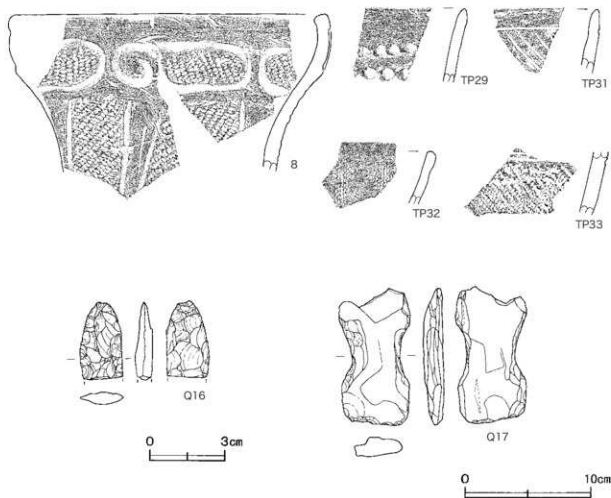
1 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量	7 暗褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
2 褐色	ロームブロック微量、締まり強	8 褐色	焼土粒子中量
3 褐色	ローム粒子中量	9 褐色	ローム粒子中量、締まり強
4 にぶい褐色	ローム粒子中量、締まり強	10 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量、締まり強
5 褐色	炭化物少量、焼土粒子微量	11 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、締まり強
6 褐色	ローム粒子中量、締まり強		

遺物出土状況 縄文土器片40点（口縁部片7、胴部片32、底部片1）、石器・石製品2点（石斧、石槍）が出土している。8は東壁際の覆土下層から、Q17は北東壁際の床面付近から出土している。TP31は、P4の覆土中から出土している。

所見 時期は、第3号住居との重複関係及び出土土器から、第3号住居より古い中期後半と考えられる。



第17図 第8号住居跡実測図



第18図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表(第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	縄文土器	深鉢	[24.4]	(11.5)	—	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	沈線が隆帯に沿う渦巻文・区画文 胴部は沈線による懸垂文 L Rの単節縄文を施文	覆土下層	20%

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴				色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP29	縄文土器	深鉢	波状口縁・輪轆痕に工具による押捺				明褐	赤色粒子	良	覆土上層	
TP31	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線				にぶい褐	長石	良	P 4内	
TP32	縄文土器	深鉢	口唇部肥厚 懸垂文を施文				にぶい褐	長石	普通	覆土中層	
TP33	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文後、沈線で区画				にぶい褐	石英・赤色粒子	普通	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
Q16	石槍	(3.04)	1.69	0.70	(3.54)	頁岩	先端部残存		覆土中	P L.26
Q17	石斧	10.08	5.62	1.60	286.0	ホルンフェルス			床面	P L.27

(2) 炉穴

第4号炉穴(第19図)

位置 調査区中央部のD5h5区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第115号土坑と重複している。

規模と形状 長径2.00m、短径1.73mの不整形円形で、長径方向はN-88°-Wである。深さは27cmで、底面は起伏があり、火熱を受けて赤変硬化し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

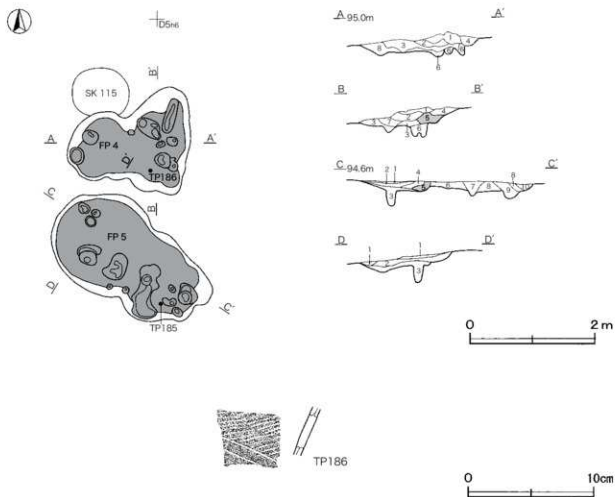
覆土 8層からなる。覆土はブロック状に堆積していることから、人為堆積の可能性が考えられる

土層解説

1 暗赤褐色	焼土ブロック少量	5 暗赤褐色	焼土ブロック中量
2 暗赤褐色	焼土粒子少量	6 褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量	7 褐色	焼土粒子少量、炭化物微量
4 褐色	ローム粒子中量	8 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片4点(副部片)が出土している。TP186は底面から出土している。

所見 焼土が堆積し、底面が火熱を受けていることから、炉穴と考えられる。時期は、出土土器から早期から前期と考えられる。



第19図 第4・5号炉穴・第4号炉穴出土遺物実測図

第4号炉穴出土遺物観察表

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP186	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線を区画し、具段線緑文を施文	明褐色	長石・石英	良	底面	

第5号炉穴(第19・20図)

位置 調査区中央部のD5h5区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径2.75m、短径1.58mの不整楕円形で、長径方向はN-49°-Wである。深さは16cmで、底面は若干起伏があり、火熱を受けて赤変硬化し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 10層からなる。覆土はブロック状に堆積していることから、人為堆積の可能性が考えられる。



第20図 第5号炉穴出土遺物実測図

土層解説

- | | | |
|----|------|---------------|
| 1 | 褐色 | 焼土ブロック微量 |
| 2 | 褐色 | 焼土粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量、粘性強 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子・黒色粒子微量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 7 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 8 | 褐色 | 焼土粒子少量 |
| 9 | 暗褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 10 | 褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片7点(口縁片1、胴部片6)が出土している。TP185は底面付近から出土している。所見 焼土が堆積し、底面が火熱を受けていることから、炉穴と考えられる。時期は、出土土器から早期から前期と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP185	縄文土器	深鉢	口唇部に斜目を施し、波状目段文・半農竹管による平行沈線を施文	にぶい褐色	長石・赤色粒子	良	底面	

(3) 土坑

袋状土坑。陥し穴と考えられる土坑について記載し、その他の土坑については一覧表に記載した。

第1号土坑(第21図)

位置 調査区中央部のD6j2区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 北側は調査区域外に延び、全容は不明である。確認面で長径2.03m、短径1.15mの楕円形と推定され、長径方向はN-36°-Eである。深さは130cmで、断面形は袋状を呈しており、底面は皿状で、壁は内傾し、上部は外反して立ち上がっている。

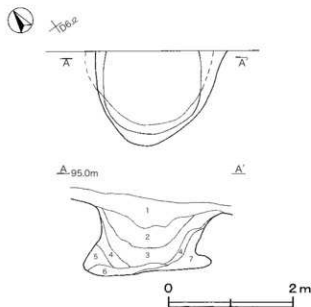
覆土 7層からなる。周辺から流入した堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|--------------------------|
| 1 | 褐色 | 黒色粒子中量、ローム粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・黒色粒子微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子少量、黒色粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子少量、埴まり質 |
| 6 | 褐色 | 鹿沼パミス少量、ローム粒子微量 |
| 7 | にぶい褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片1点(胴部片)が出土している。細片のため図示できなかった。

所見 形状から、袋状土坑と想定される。時期は、出土土器から縄文時代と考えられる。



第21図 第1号土坑実測図

第9号土坑(第22図)

位置 調査区西部のE4c3区で、丘陵西側の斜面部に位置している。

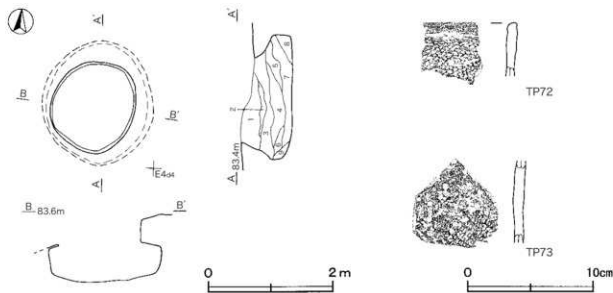
規模と形状 確認面で長径1.96m、短径1.71mの円形で、長径方向はN-0°である。深さは78cmで、断面形は袋状を呈しており、底面は平坦で、壁は内傾して立ち上がっている。

覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-------------------------|---|----|------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 | 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 7 | 褐色 | ローム粒子中量、炭化物・鹿沼パミス微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 8 | 褐色 | 鹿沼パミス中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量 | 9 | 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス少量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱 | | | |

遺物出土状況 縄文土器片2点(口縁部片、胴部片)が出土している。TP72・TP73は、覆土中から出土している。



第22図 第9号土坑・出土遺物実測図

所見 形態から、袋状土坑と想定される。時期は、出土土器から縄文時代と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP72	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文	褐色	石英・雲母	普通	覆土中	
TP73	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文	にぶい橙	長石・白色粒子	普通	覆土中	

第26号土坑(第23図)

位置 調査区部のE 6i2区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第3号墳の下層から周溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認面で長径1.60m、短径1.38mの長方形で、長径方向はN-0°である。深さは70cmで、断面形は袋状を呈しており、底面は平坦で、壁は内傾し、上部は外反して立ち上がっている。

覆土 5層からなる。ロームブロックを含んでいる層が多いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、黒色粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミス微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・黒色粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミス少量、締まり強 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | | |

所見 形状から、袋状土坑と考えられる。時期は、縄文時代と想定される。



第23図 第26号土坑実測図

第27号土坑(第24図)

位置 調査区中央部のF 6a4区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第3号墳の周溝に掘り込まれている。

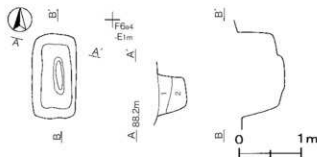
規模と形状 長径1.34m、短径0.69mの長方形で、長径方向はN-0°である。深さは71cmで、底面の中央部が溝状に4cm掘り込まれ、壁は直立している。

覆土 2層からなる。ブロックを多く含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 2 暗褐色 | ロームブロック多量 |
|-------|------------------|-------|-----------|

所見 底面にピットは確認されなかったものの、断面形と底面に溝状の掘り込みが確認されていることから、陥し穴の可能性が考えられる。時期は、縄文時代と想定される。



第24図 第27号土坑実測図

第57号土坑(第25図)

位置 調査区西部のE 4i5区で、丘陵西側の斜面部に位置している。

重複関係 第56号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.25m、短径0.50mの長楕円形で、長径方向は $N-6^{\circ}-E$ である。深さは76cmで、底面は皿状を呈しており、壁は直立している。

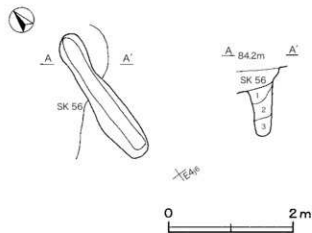
覆土 3層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|----|-------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量、粘性強 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量、粘性強 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子少量、粘性強 |

遺物出土状況 縄文土器片1点(胴部片)、石器2点(剥片)が出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 底面にピットは確認されなかったものの、形状から陥し穴の可能性が考えられる。時期は、出土土器から縄文時代と考えられる。



第25図 第57号土坑実測図

第58号土坑(第26図)

位置 調査区中央部のF 5g6区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径3.21m、短径1.87mの楕円形で、長軸方向は $N-14^{\circ}-E$ である。深さは136cmで、底面は溝状にくぼんでおり、壁は外傾して立ち上がっている。

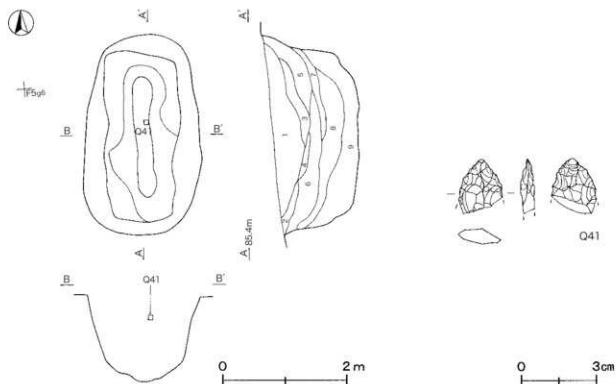
覆土 9層からなる。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------------|---|-----|---------------------|
| 1 | 暗褐色 | 黒色粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス・黒色粒子微量 | 6 | 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量、黒色粒子少量、焼土粒子微量 | 7 | 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 | 褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス微量、粘性強 |
| | | | 9 | 褐色 | 鹿沼パミス多量、ローム粒子中量 |

遺物出土状況 縄文土器片5点(口縁部片1、胴部片4)、石器13点(石槍1、剥片12)が出土している。Q41は覆土上層から出土している。

所見 底面にピットは確認されなかったものの、形状から陥し穴と想定される。時期は、出土土器から縄文時代と考えられる。



第26図 第58号土坑・出土遺物実測図

第58号土坑出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q41	石槍	(2.20)	(1.70)	0.58	(2.14)	チャート	先端部残存	覆土上層	P.L.26

(4) 石器集中地点

第1号石器集中地点(第27~31図)

位置 調査区南部のF 5e7~e9, F 5g7~g9区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

出土状況 標高85.5~86.2mの南北7m, 東西9mの範囲内にかけて出土している。遺物は特にF 5e7・e8, F 5f7・f8区に集中している。

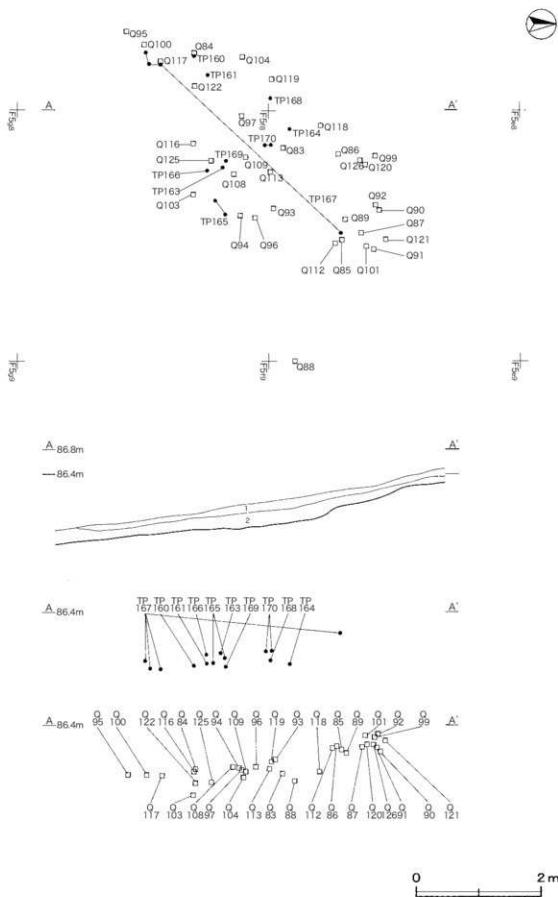
土層 グリッドを利用して土層を観察した結果、2層からなる。第1層は基本層序(第3図)の第2層、第2層は同じく第2層と第3層の漸移層に相当する。

土層解説

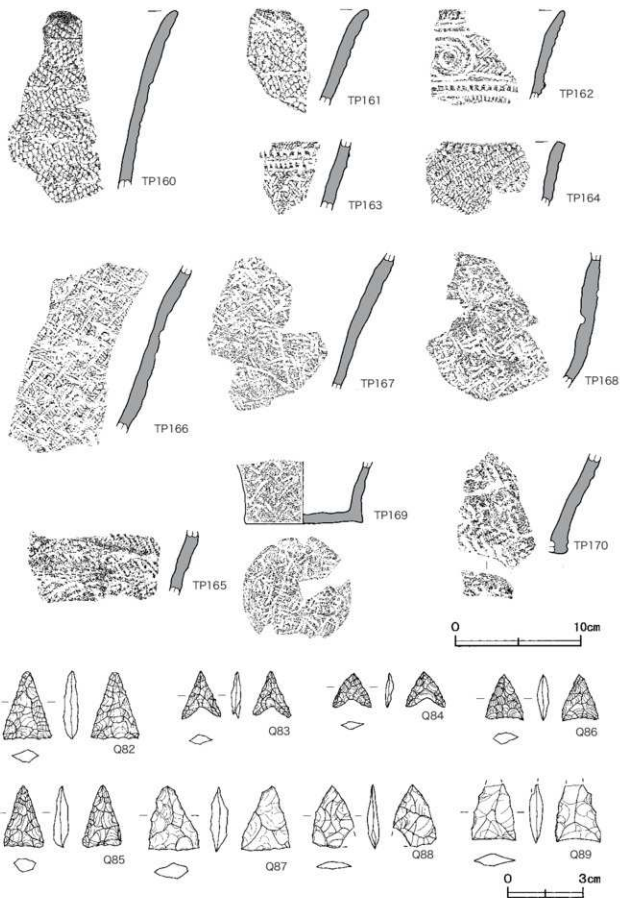
1 褐色 黒色粒子少量

2 褐色 ローム粒子多量

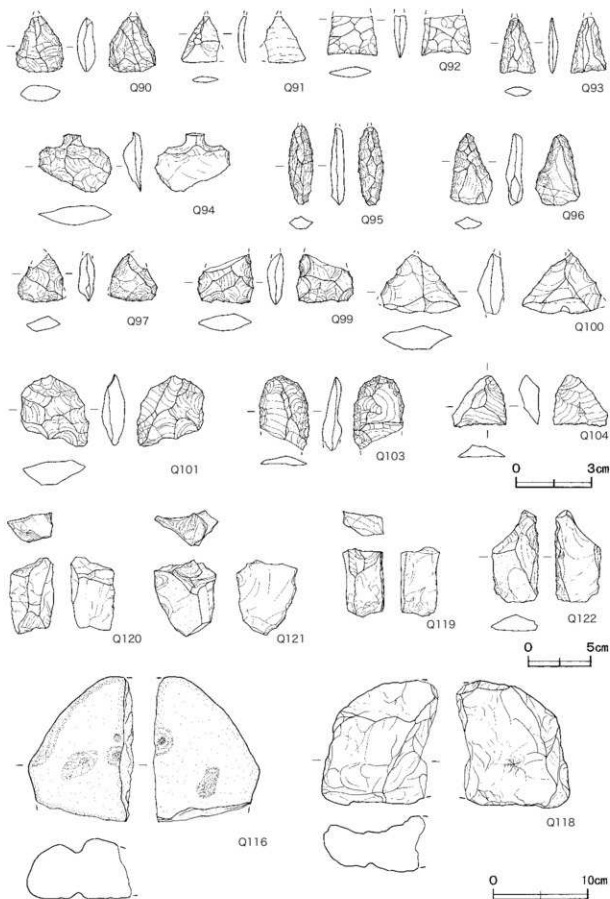
遺物 縄文土器片252点(口縁部8, 胴部242, 底部2), 石器・石製品片1729点(石鏃及び未製品18, 有舌尖頭器1, 石匙1, 石槍又は未製品1, 磨石4, 台石5, 剥片1699)が出土している。石材は大半がチャートで、頁岩, 砂岩, ホルンフェルスが見られる。石器・剥片と混在した状況で縄文土器片が出土している。



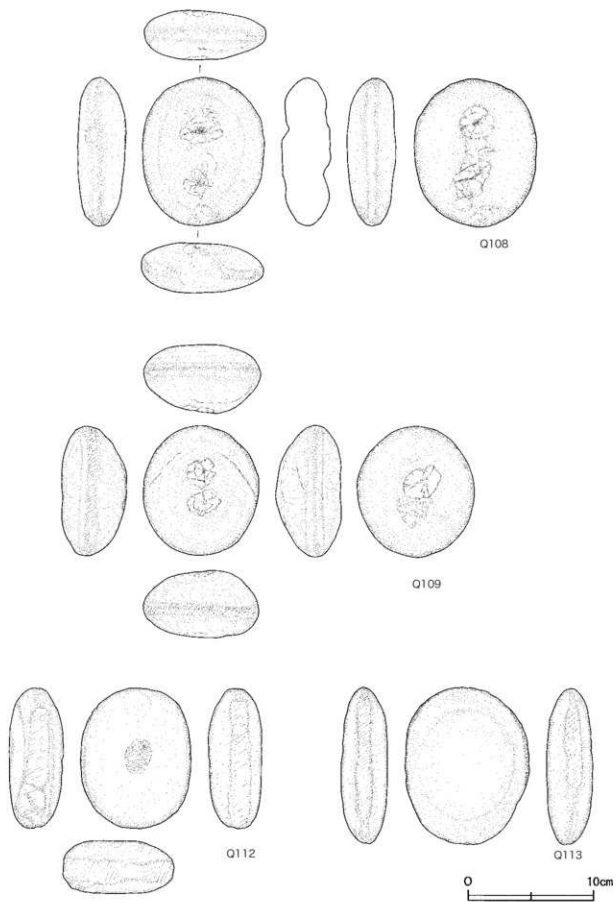
第27図 第1号石器集中地点実測図



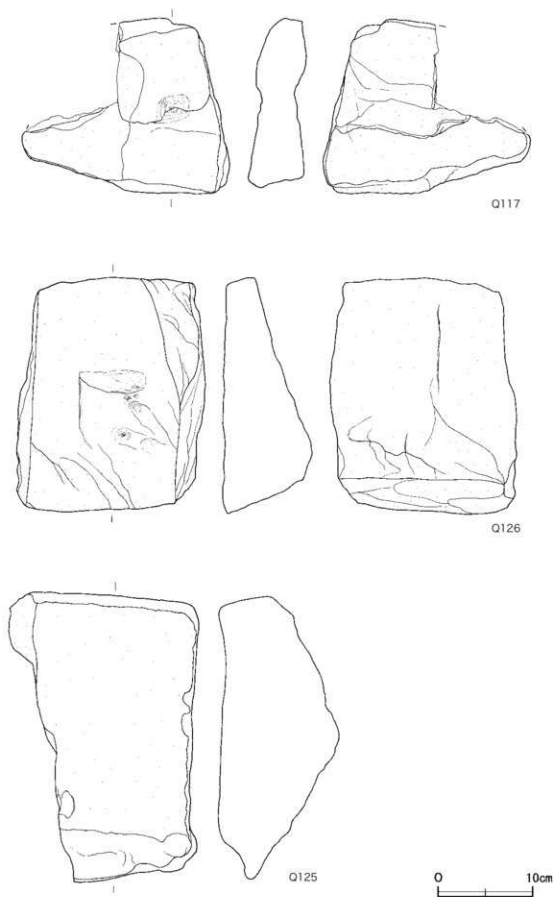
第28图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(1)



第29図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(2)



第30图 第1号石器集中地点出土遺物実測図(3)



第31図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(4)

所見 石器群の構成は、石鏃と剥片がほとんどであり、石材はチャートを主体としている。また、石器・剥片と共に縄文土器片も出土しており、平面及び垂直分布から同一時期と考えられる。未製品が出土していることから、本跡は石器製作跡の可能性が考えられる。時期は、出土土器から前期と考えられる。

第1号石器集中地点出土遺物観察表(第28～31図)

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴	色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP160	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文	にぶい褐	長石・白色粒子・繊維	普通	F 5 f7区	
TP161	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文	にぶい褐	長石・白色粒子・繊維	普通	F 5 f7区	
TP162	縄文土器	深鉢	組紐を施文後、原体押圧 輪積痕に刻目を施文	にぶい褐	長石・赤色粒子・繊維	普通	F 5 g9区	
TP163	縄文土器	深鉢	ループ文を施文* 輪積痕に刻目を施し、原体押圧	褐	長石・繊維	普通	F 5 f8区	
TP164	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文	褐	長石・石英・繊維	普通	F 5 e8区	
TP165	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文	褐	長石・繊維	普通	F 5 f8区	
TP166	縄文土器	深鉢	L Rの単節斜縄文を施文後、絡条体縄文を施文	褐	長石・繊維	普通	F 5 f8区	
TP167	縄文土器	深鉢	結束文を施文	明褐	長石・繊維	普通	F 5 e8区	
TP168	縄文土器	深鉢	結束文を施文	明褐	長石・繊維	普通	F 5 e7区	
TP169	縄文土器	深鉢	結束文を施文	明褐	長石・繊維	普通	F 5 f8区	
TP170	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文	にぶい褐	長石・繊維	普通	F 5 f8区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q82	石鏃	2.70	1.90	0.60	2.12	チャート	平根	F 5 g0区	P L26
Q83	石鏃	1.90	1.50	0.40	0.49	頁岩	挟り有り	F 5 e8区	P L26
Q84	石鏃	1.40	1.50	0.30	0.42	チャート	挟り有り	F 5 f7区	P L26
Q85	石鏃	2.50	1.50	0.60	1.70	チャート	平根	F 5 e8区	
Q86	石鏃	1.78	1.45	0.38	0.81	チャート	若干挟り有り	F 5 e8区	
Q87	石鏃	2.5	2.00	0.68	2.88	チャート	平根。未製品*	F 5 e8区	P L26
Q88	石鏃	2.40	(1.60)	0.50	(1.54)	チャート	平根	F 5 e8区	
Q89	石鏃	(2.28)	1.82	0.45	(1.86)	チャート	若干挟り有り。先端欠	F 5 e8区	
Q90	石鏃	(2.15)	1.85	0.70	(2.72)	チャート	平根	F 5 e8区	P L26
Q91	石鏃	(1.85)	(1.60)	0.30	(0.64)	チャート	未製品*	F 5 e8区	
Q92	石鏃	(1.50)	1.95	0.50	(1.64)	チャート	若干挟り有り。先端欠	F 5 e8区	
Q93	石鏃	(2.20)	1.35	0.32	(0.94)	チャート	若干挟り有り。未製品*	F 5 e8区	
Q94	石鏃	2.40	2.95	7.00	3.50	頁岩	横長形	F 5 f8区	P L26
Q95	有舌尖頭器	(3.10)	0.94	0.50	(1.58)	チャート		F 5 f7区	P L26
Q96	石鏃*	2.80	1.68	0.60	2.92	チャート	未製品*	F 5 f8区	
Q97	石鏃*	1.85	(1.80)	0.70	(1.96)	チャート	未製品*	F 5 f8区	
Q99	石鏃	(1.95)	2.20	0.62	(2.72)	チャート	平根	F 5 e8区	
Q100	石鏃*	(2.40)	(3.20)	1.05	(6.30)	メノウ	未製品	F 5 f7区	
Q101	未製品	2.80	2.70	0.90	6.30	チャート	石鏃*	F 5 e8区	P L26
Q103	未製品	(3.00)	(2.00)	0.80	(3.20)	チャート	石鏃*	F 5 f8区	P L26
Q104	未製品	2.20	2.00	0.80	2.72	チャート	石鏃*	F 5 f7区	
Q108	磨石	11.75	9.70	3.80	623.00	安山岩	外周に磨り跡、凹みあり	F 5 f8区	
Q109	磨石	10.40	9.20	5.20	590.00	砂岩	外周に磨り跡、凹みあり	F 5 f8区	
Q112	磨石	11.10	8.80	4.30	642.00	砂岩	外周に磨り跡	F 5 e8区	
Q113	磨石	12.40	9.90	3.70	549.00	砂岩	側面に磨り跡	F 5 e8区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q116	台石	(15.26)	(11.05)	6.20	679.00	軽石	凹み5ヶ所	F5f8区	
Q117	台石	21.80	18.40	6.20	2540.00	ホルンフェルス	凹み1ヶ所	F5e8区	
Q118	台石	13.70	(10.70)	5.78	(1070.00)	ホルンフェルス	不明確な凹みあり	F5e8区	
Q119	剥片	5.43	3.15	1.60	34.00	チャート		F5e7区	
Q120	剥片	6.00	3.50	2.12	56.00	チャート	柱状	F5e8区	
Q121	剥片	6.00	5.00	2.36	60.80	チャート		F5e8区	
Q122	剥片	7.30	3.70	1.27	34.60	チャート		F5f7区	
Q125	台石	30.60	20.20	12.80	9.10	砂岩		F5f8区	
Q126	台石	25.00	19.90	9.30	6.20	ホルンフェルス	浅い凹み4ヶ所	F5e8区	

第2号石器集中地点(第32～34図)

位置 調査区西部のF5b2・b3、F5c2・c3区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

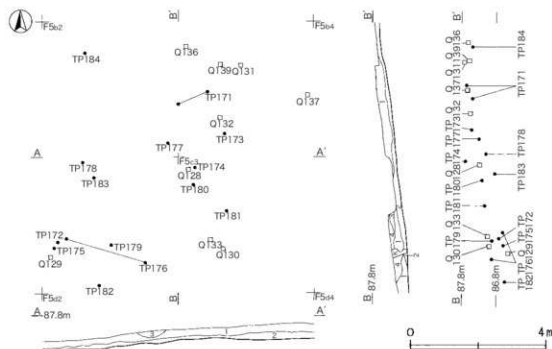
出土状況 標高86.4～87.7mの南北8m、東西8mの範囲内にかけて出土している。遺物は、F5c2区に比較的多く分布しているが、顕著な集中は見られない。

土層 グリッドを利用して土層を観察した。4層からなり、第1層は当遺跡の基本層序(第3図)の第2層、第2層は同じく第2層と第3層の漸移層に相当する。

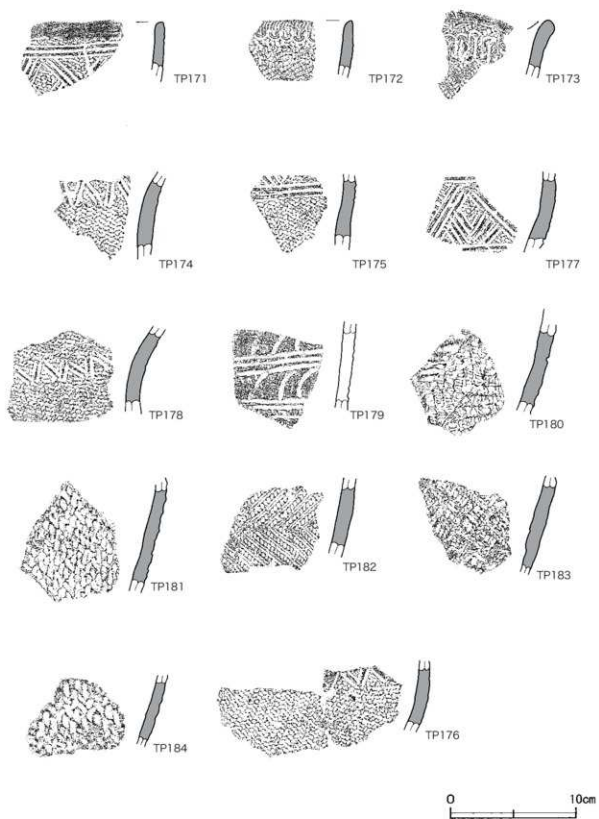
土層解説

- | | |
|--------------|----------------------|
| 1 暗褐色 黒色粒子少量 | 3 暗褐色 黒色粒子中量、ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ローム粒子多量 | 4 暗褐色 黒色粒子少量 |

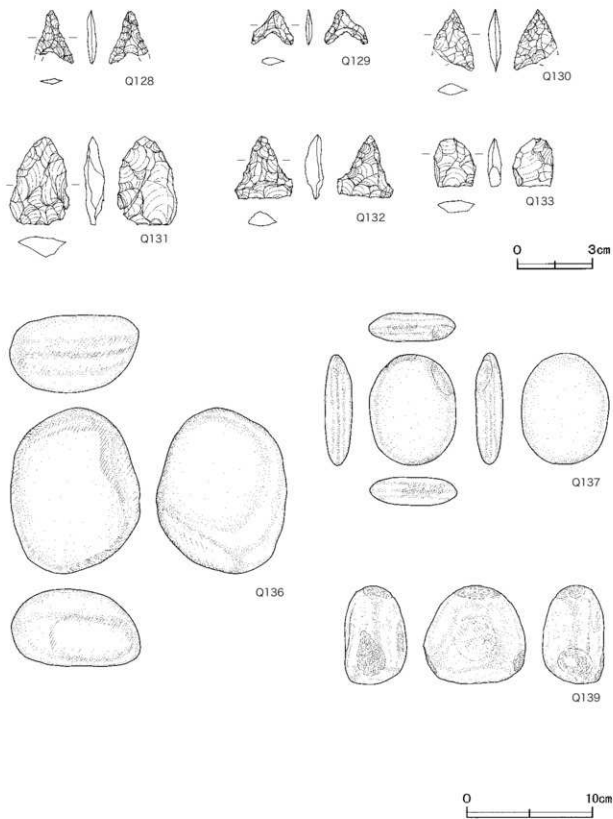
遺物 縄文土器片224点(口縁部24、胴部200)、石器・石製品片301点(石鏃又は未製品6、磨石2、敲石1、剥片292)が出土している。石材は大半がチャートで、一部に頁岩が見られ、磨製石器は安山岩が多く見られる。石器・剥片と混在した状況で縄文土器片が出土している。



第32図 第2号石器集中地点実測図



第33图 第2号石器集中地点出土遺物实测图(1)



第34図 第2号石器集中地点出土遺物実測図(2)

所見 石器群の構成は、石鏃及びその未製品と剥片がほとんどである。石材はチャートを主体としている。また、石器・剥片と共に縄文土器片も出土しており、平面及び垂直分布から同一時期と考えられる。本跡では未製品が出土しているものの、第1号石器集中地点よりは石器・剥片の密度は薄い。このため、本跡の近隣で石器が製作された可能性が考えられる。時期は出土土器から前期と考えられる。

第2号石器集中地点出土遺物観察表(第33～34図)

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴	色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP171	縄文土器	深鉢	口縁部下に半截竹管による平行沈線 R Lの単節斜縄文を施文後、半截竹管による変形文を施文	明褐色	白色粒子・繊維	普通	F 5 b3区	
TP172	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文後、口縁部下に半截竹管による点状文、コンパス文を施文	明褐色	赤色粒子・繊維	普通	F 5 c2区	
TP173	縄文土器	深鉢	波状口縁 附加条一種を羽状に施文後、口縁部下に半截竹管によるコンパス文を施文	褐色	長石・白色粒子・繊維	普通	F 5 b3区	
TP174	縄文土器	深鉢	組紐を施文後、半截竹管による連続山形文を施文	にぶい褐色	長石・繊維	普通	F 5 c3区	
TP175	縄文土器	深鉢	組紐を施文後、半截竹管による平行沈線で区画	にぶい褐色	長石・繊維	普通	F 5 c2区	
TP176	縄文土器	深鉢	組紐を施文後、半截竹管による連続山形文を施文	にぶい褐色	長石・繊維	普通	F 5 c2区	
TP177	縄文土器	深鉢	半截竹管による平行沈線で区画し、同じく変形文を施文	にぶい褐色	白色粒子・繊維	普通	F 5 b2区	
TP178	縄文土器	深鉢	ループ文を施し、半截竹管による連続山形文を施文	にぶい褐色	長石・雲母・繊維	普通	F 5 c2区	
TP179	縄文土器	深鉢	半截竹管による平行沈線で区画し、具段線文を施文	にぶい褐色	長石・石英・雲母	普通	F 5 c2区	
TP180	縄文土器	深鉢	L R・R Lの単節斜縄文を羽状に施文	褐色	長石・繊維	普通	F 5 c3区	
TP181	縄文土器	深鉢	ループ文を施文	褐色	長石・繊維	普通	F 5 c3区	
TP182	縄文土器	深鉢	附加条一種を羽状に施文	暗褐色	長石・白色粒子・繊維	普通	F 5 c2区	
TP183	縄文土器	深鉢	組紐を施文	暗褐色	長石・繊維	普通	F 5 c2区	
TP184	縄文土器	深鉢	ループ文を施文	褐色	長石・繊維	普通	F 5 b2区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q128	石鏃	2.1	(1.50)	0.20	(2.20)	頁岩	挟り有り 逆刺欠	F 5 c3区	P L26
Q129	石鏃	1.30	1.64	0.22	2.10	チャート	挟り有り	F 5 c2区	P L26
Q130	石鏃	2.50	(1.60)	0.46	(3.10)	チャート	挟り有り 逆刺欠	F 5 c3区	P L26
Q131	未製品	3.52	2.36	0.82	8.30	チャート	石鏃	F 5 b3区	P L26
Q132	未製品	2.45	2.25	0.75	4.80	チャート	石鏃	F 5 b3区	P L26
Q133	未製品	1.89	1.60	0.55	3.70	チャート	石鏃	F 5 c3区	
Q136	磨石	13.20	10.25	6.20	1060.00	安山岩	小口に磨り跡	F 5 b3区	
Q137	磨石	8.70	6.78	2.20	180.00	安山岩	外周に磨り跡	F 5 b3区	
Q139	敲石	7.74	8.15	4.84	34.90	安山岩	側面に敲り痕有り	F 5 b3区	

表2 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	竪溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)	
								主柱	穴	出入口	ピット					貯蔵
2	F6a2	N-5'-E	隅丸長方形	3.98×3.02	8-32	平坦	半周	-	-	24	1	-	自然	縄文土器片、磨石、凹石	縄文前期	
3	E5a9	N-35'-E	楕円形	4.12×3.55	16-38	平坦	-	-	-	2	2	-	人為	縄文土器(深鉢)、石鏃、磨石	縄文中期	S18→本跡

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)	
								主軸	出入口	ピット	石室					
4	E518	N-75°-W	楕円形	6.22×[4.50]	5-38	平坦	一部	-	-	6	1	-	自然	縄文土器片、磨石	縄文早期	
5	E514	N-84°-W	楕円形	5.26×4.01	20-30	平坦	-	2	-	3	-	-	自然	縄文土器片、磨石	縄文前期	本跡→SK78
6	D5g5	N-12°-W	楕円形	3.55×[2.16]	16-27	平坦	-	-	-	2	-	-	自然	縄文土器片、石鏃	縄文前期	本跡→SI7
7	D5g5	N-8°-W	楕円形	3.68×3.17	11-14	平坦	-	-	-	6	-	-	自然	縄文土器片、石鏃、磨石	縄文前期	SI6→本跡
8	E5d9	N-13°-E	[円形]	4.36×[1.90]	17-41	平坦	-	4	-	-	2	-	人為	縄文土器(漆器)、石鏃、石鏃	縄文中期	本跡→SI3

表3 竪穴一覽表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(m)					
4	D5h5	N-88°-W	不整形円形	2.00×1.73	27	緩斜	凸凹	人為	縄文土器片	SK115と重複
5	D5h5	N-49°-W	不整形円形	2.75×1.58	16	緩斜	凸凹	人為	縄文土器片	

表4 土坑一覽表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	D6j2	N-36°-E	[楕円形]	[2.03]×[1.15]	130	袋状	皿状	自然	縄文土器片	
8	E4i0	N-10°-W	不整形円形	3.73×3.34	89	緩斜	凸凹	人為	縄文土器片	
9	E4c3	N-0°	円形	1.96×1.71	78	袋状	平坦	自然	縄文土器片	
14	F5b7	N-39°-W	不整形円形	3.77×3.26	57	外傾	凸凹	自然	縄文土器片、剥片	
20	E4g5	N-78°-E	円形	2.77×2.69	112	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	
21	F5a4	N-78°-E	隅丸長方形	2.10×1.43	87	外傾	皿状	自然	縄文土器片、剥片	
25	E6i2	N-0°	方形	1.60×1.38	70	内傾	平坦	人為		本跡→TM3
27	F6a4	N-0°	長方形	1.34×0.69	71	垂直	凹	人為		本跡→TM3
34	F6i3	N-45°-W	楕円形	0.85×0.65	10	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	
35	E4i5	N-12°-E	楕円形	[2.10]×1.01	40	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	
37	E4i5	N-6°-E	長楕円形	2.25×0.50	76	垂直	皿状	自然	土師器(甕)、縄文土器片、剥片	本跡→SK56
38	F5g6	N-14°-E	楕円形	3.21×1.87	136	外傾	凹	自然	土師器(甕)、縄文土器片、剥片	
39	F5g7	N-81°-W	不定形	2.00×0.78	36	緩斜	皿状	自然	縄文土器片、剥片	
40	F5f7	N-33°-W	不整形円形	0.79×0.49	13	緩斜	皿状	自然	縄文土器片、石鏃、石鏃	
47	E5f9	N-79°-W	不整形楕円形	2.15×1.87	35	外傾	平坦	自然	土師器(甕)、縄文土器片、剥片	
71	E5g9	N-45°-W	不整形楕円形	1.53×1.32	38	緩斜	皿状	自然	土師器(甕)、縄文土器片、剥片	
72	E5e8	N-20°-W	長楕円形	1.31×0.73	8	緩斜	平坦	自然		
75	E5e8	N-0°	規形	3.25×0.61	15	外傾	凸凹	人為	縄文土器片	
80	E5d8	N-41°-E	不定形	1.85×0.80	30	外傾	平坦	自然	縄文土器片	SK81と重複
92	F7g3	N-82°-W	不定形	1.61×[0.80]	41	垂直	皿状	-	縄文土器片	SK91と重複
94	F7g3	N-75°-W	不定形	2.00×[1.95]	123	直立	皿状	人為		SK93と重複
101	E5e7	N-69°-E	楕円形	1.87×1.54	22	外傾	平坦	自然	縄文土器片、剥片	SK113→本跡
109	E4b0	N-73°-E	不整形長方形	1.75×1.52	43	外傾	平坦	自然	縄文土器片、剥片	
113	E5e6	N-46°-E	楕円形	1.41×[1.10]	19	外傾	平坦	自然	縄文土器片	本跡→SK101
114	D5h6	N-0°	楕円形	0.45×0.36	34	外傾	皿状	人為	縄文土器片、剥片	

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	高さ(cm)					
116	E 4e0	N-0°	円形	1.00 × 0.95	20	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
118	E 5f1	N-16°-E	長楕円形	1.65 × 0.63	40	直立	平坦	自然	縄文土器片	
119A	E 5d0	N-39°-E	楕円形	1.23 × 1.07	35	外傾	平坦	自然	縄文土器片、石器	SK119B→本跡
119B	E 5d0	N-41°-W	楕円形	1.43 × [0.93]	30	外傾	平坦	自然	縄文土器片	本跡→SK119A

2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、前方後円墳1基、円墳13基、石室9基、土器溜まり1か所、土坑3基が、調査区の中央部から西部にかけて確認した。古墳は第2号墳と、調査区域外に位置している第1号墳が旧岩瀬町による分布調査によって確認されていたが、その他の古墳はこれまで周知されていなかった。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 古墳

第2号墳(第35～47図、付図1・2)

位置 調査区中央部のE5区で、標高90.5～94.0mの丘陵尾根上に位置している。

確認状況 旧岩瀬町が行った分布調査では、円墳として記載されている。調査開始時点で、墳丘が東西に長く伸びていることから、前方後円墳の可能性があるため測量を行った。その結果、長さ約36m、高さ約3mの前方後円墳であることが確認された。

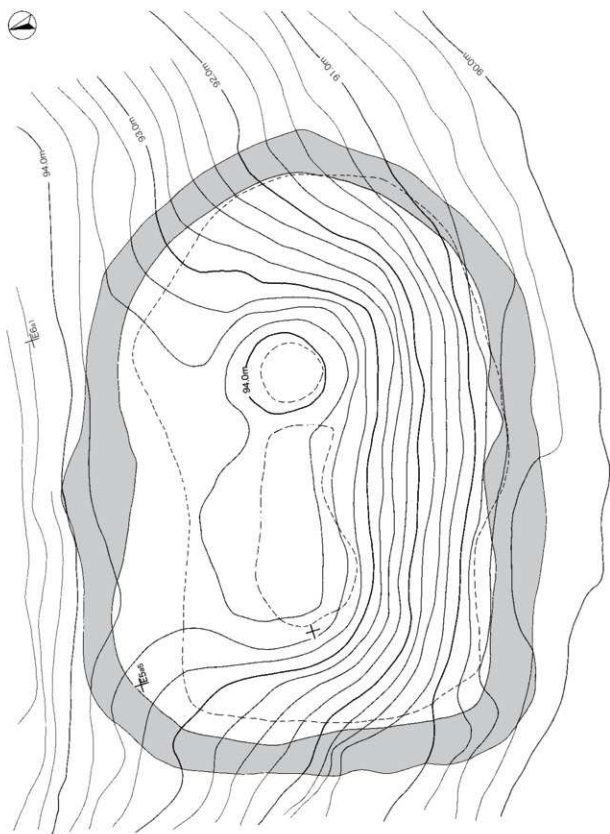
重複関係 墳丘下に縄文時代の第3～5・8号住居跡と土坑が確認された。

規模と形状 周溝外縁を含む全長42.7m、墳丘長25.3mの前方後円墳である。後円部の墳丘径は11.5m、前方部の墳丘の長さ14.5m、前方部の幅は前端で12.0m、括れ部で6.4mである。墳丘の主軸方向はN-108°-Eで、古墳が位置している尾根に対して、かなり東に向いている。前方部の南側は外反して北側はほぼ直線的に開き、括れ部は後円部の中心より若干北側に位置している。このため、古墳の形状は、墳丘の主軸線に対して対称形となっていない。

墳丘 後円部の高さ約1.8m、前方部の高さ約1.2mで、遺存状態は良好である。後円部の見かけ上の高さは南側が2.6m、北側で1.1mと南側が高くなっており、平野側から見られることを意識していると考えられる。旧表土は第40層が相当し、旧表土を基底部としている。前方部と後円部は、いずれもローム又は鹿沼バミス混じりの褐色土と暗褐色土で構築されている。

前方部は、横穴式石室を構築した後、石室を中心にドーム状に盛土を行っている。前方部の端部はロームを主とする褐色土を積み上げ、葺石が施されている。前方部からくびれ部にかけては、付図2で示したようにIとIIで盛土の断絶が認められ、前方部から括れ部へ段階的に墳丘を構築したと考えられる。IIでは割石が見られ、この段階で前方部側に葺石が施された可能性がある。後円部の築造は、ロームを主とする褐色土を土提状に積み上げた後、褐色土と暗褐色土を層状に積み上げている。

墳丘の表面には葺石が施され、法面を中心に残存している。葺石は、墳丘の端部に沿って比較的大型の割石を並べ、その上に小形の割石や礫を充填している。後円部の墳頂付近にも葺石が見られることから、段築はなかったと考えられる。



■ 周溝

0 5m

第35図 第2号墳測量図

周溝 全周している。上幅1.80～4.80m、下幅0.60～2.90m、深さ22～140cmで、壁は外傾して立ち上がり、断面形はU字形又は逆台形である。周溝の内縁は墳丘の端部から4.5～9.3m外側で掘り込まれ、全体の形状は、くびれ部に平行してわずかに周溝の幅が狭まる部分があるものの、盾形である。覆土はレンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって自然に堆積したと考えられる。

埋葬施設 前方部に横穴式石室が構築されている。天井石は奥壁から2枚目が石室内に転落しており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と玄室を有する単室構造で、全長は6.42mである。玄室の規模は内法で長さ3.38m、幅1.80～2.02mの長方形で、残存している高さは1.70～1.94mである。石室の主軸方向はN-18°-Eである。

羨道部は長さ2.75m、幅0.85～1.34mで、高さ1.50mである。南側には墓道が構築され、長さは欄柱石から約7.5mである。墓道は周溝に向かって緩やかに傾斜している。

石室土層解説

78	褐	色	ローム粒子中量。粘性強	89	暗	褐色	ローム粒子微量		
79	暗	褐色	色	ローム粒子少量。締まり強	90	褐	色	ローム粒子・炭化粒子微量	
80	褐	色	ローム粒子中量。締まり強	91	灰	褐色	色	ローム粒子・粘土粒子微量。粘性強	
81	灰	褐色	色	粘土粒子少量。粘性強	92	暗	褐色	色	ローム粒子・少量
82	灰	褐色	色	粘土粒子微量	93	黒	褐色	色	黒色粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
83	褐	灰色	色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量。粘性・締まり強	94	暗	褐色	色	ローム粒子・炭化粒子少量
84	暗	褐色	色	鹿沼ガミス微量	95	暗	オリーブ色	色	ローム粒子微量
85	にぶい黄褐色	色	鹿沼ガミス・炭化粒子少量	96	灰	黄褐色	色	粘土粒子少量	
86	褐	色	粘土粒子微量	97	灰	黄褐色	色	粘土粒子中量、ローム粒子微量。粘性強	
87	暗	褐色	色	鹿沼ガミス微量	98	にぶい黄褐色	色	ローム粒子少量	
88	黒	褐色	色	炭化粒子微量。粘性・締まり強	99	にぶい黄褐色	色	ローム粒子微量。粘性・締まり強	

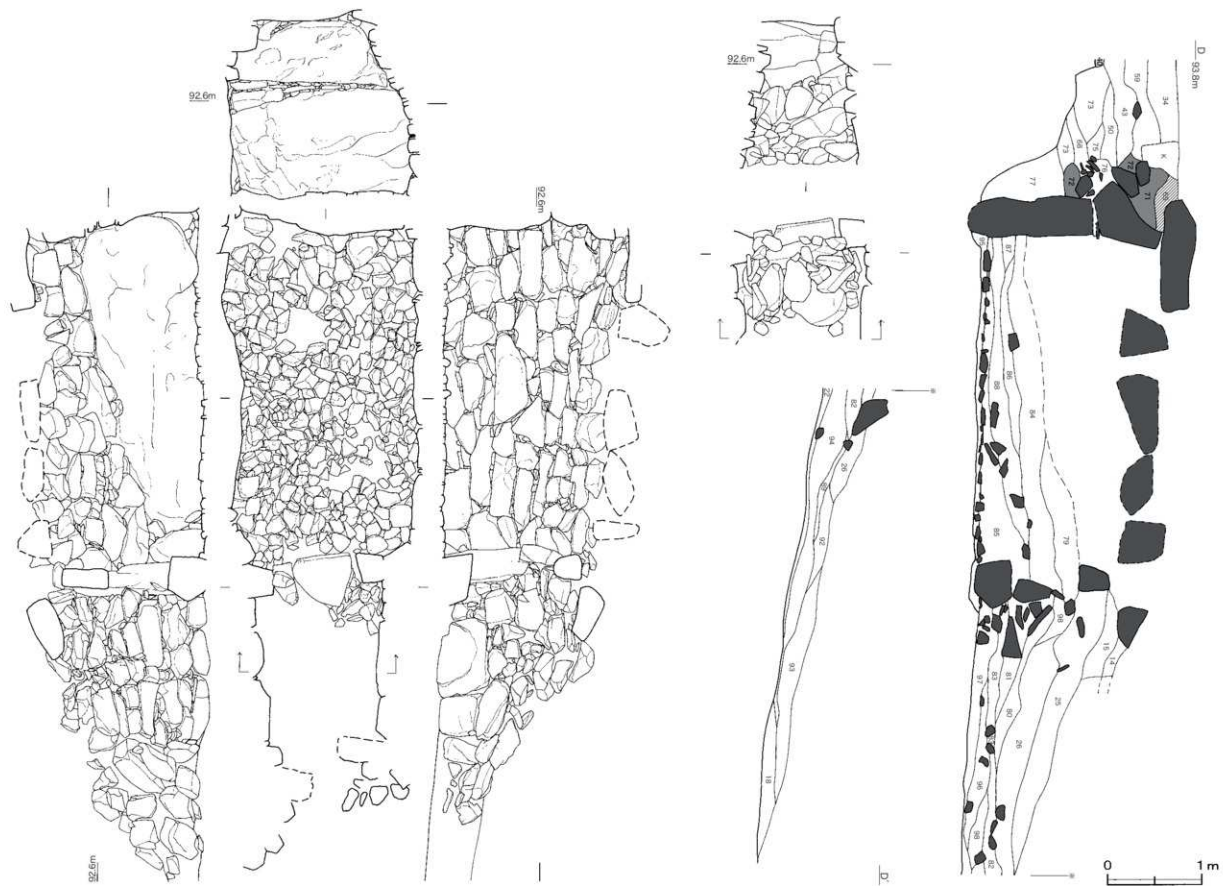
西側壁は、奥壁側に長さ3.2m、高さ1.2mの大きな一枚岩を設置し、その上に割石を平坦な面を石室内部に向けて小口積みしている。東側壁は割石を根石とし、ほぼ同じ大きさの割石を平坦な面を石室内部に向けて小口積みしており、石材を水平方向に揃えて比較的横目地の通った積み方をしている。側壁は内傾して立ち上がっており、天井部付近で持ち送りが顕著である。奥壁は二段積みで、基底部に長さ1.75m、高さ1.05mの長方形の一枚岩を設置し、その上に長さ1.55m、高さ0.65mの台形の石を重ねている。一段目の上に割石と礫を充填し、二段目の石の水平を調整している。石室側は若干内傾して立ち上がっている。床面には礫を敷き詰めている。

玄門部は、長さ66cm、幅55cm、厚さ38cmの三角形の割石を設置して楣石としている。玄室の床面と羨道部の床面との間には段差は見られない。楣石の両側に長さ90～135cm、推定幅30～52cm、厚さ25～38cmの石材を掘り方に直接建てて欄柱石としている。東の欄柱石に使用された石材は短く、西側と高さを揃えるために一段石材を切組み状に破断面を合わせて積み上げている。欄柱石は石室側に若干傾き、両欄柱石の間は70～82cmである。欄柱石の上に、天井石より一段下げて楣石を設置している。羨道部は方形又は長方形の割石を小口積みにしており、東側は基底部に西側よりも大形の石材を使用している。壁は内傾しており、持ち送りが認められる。天井石は、大形の自然石を玄室の上に5枚、羨道部の上に1枚載せている。石材間は礫を充填している。

石室の掘り方は、石室の構築材が崩落する危険があったため、土層断面での確認に止まった。平面形は、玄室の形状と類似していると推定される。深さは、地山を奥壁側で125cm、玄室側壁で65～90cm、羨道部で60～72cm掘り込んでいる。奥壁側は二段にわたって掘り込まれており、各壁はそれぞれ外傾して立ち上がっている。

表込めは、底面に奥壁及び側壁の根石を底面に設置した後、粘土混じりの灰褐色土とローム混じりの褐色土を側壁を積み上げながら埋めている。

石室は長さ83cm、幅38cm、厚さ35cmの割石を楣石に置き、外側に扁平な割石や礫を充填して閉塞している。楣石付近には閉塞の石材は見られなかったが、基本的には二段積みにして閉塞されていたと考えられる。



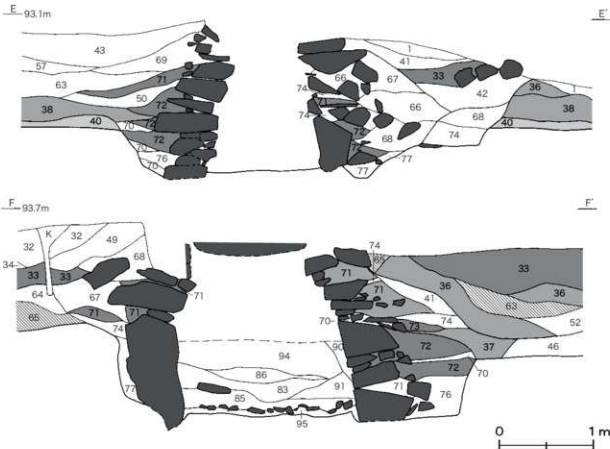
第36図 第2号墳 石室実測図

遺物出土状況 土師器片289点(坏類45, 甕類244), 須恵器片1,407点(坏類33, 蓋7, 瓶類28, 甕類1,339), 鉄器片48点(刀子3, 切刃1, 鉄鏃42, 釘2), 鉄製品片21点(馬具11, 帯先金具5, 弓飾り金具4, 不明1), 銅製品片7点(耳環4, 銚子3)が出土している。このほか、縄文土器片1521点, 石器・石製品片139点も出土しており, これらはすべて古墳の築造に伴って混入したものと考えられる。

墳丘上及びその周辺からは, 64・66・67・72~86が出土している。73~86は, 墳丘上とその周辺の広い範囲から破片の状態で出土している。底部の残存状況と出土位置から, 73・74は後円部に南北に並んだ状態で, くびれ部付では南側の墳丘端部に81が, 北側から77・79がそれぞれ置かれていたものと考えられる。前方部及び石室周辺では, 石室の玄門部付近の東側に76が, さらに東側に75が置かれていたと考えられる。その他の須恵器大甕は底部まで復元できなかった。84・86は後円部の墳丘上から墳丘端部にかけて, 79・85は北側のくびれ部付近から, 82は南側のくびれ部付近からそれぞれ出土している。83は前方部の北側から墳丘端部にかけて, 80は石室西側から墓道にかけてそれぞれ破片の状態で出土している。これらは, 設置された場所を確認できなかったが, 付近の墳丘上に置かれていたものと考えられる。そのほか, 64・66・67は墓道の西側から, 72はやや南側から出土している。

玄室内からは, 遺物はあまり出土していない。玄室の入り口付近で, M103・M106・M123が床面上から出土しており, その他は鉄鏃片が床面に敷かれた礫の間から出土している。

羨道部から墓道にかけては, 多くの遺物が出土している。羨道部からはM101・M104が出土し, M167~M172の鉄鏃は東側袖部の石材の間に突き刺さった状態で出土している。墓道からは, 弓の飾り金具, 帯先金具, 耳環, 鉄鏃などの金属製品が多数出土しているが, 鉄鏃は鋒の方向が不揃いで, 完形品が少ないことから玄室



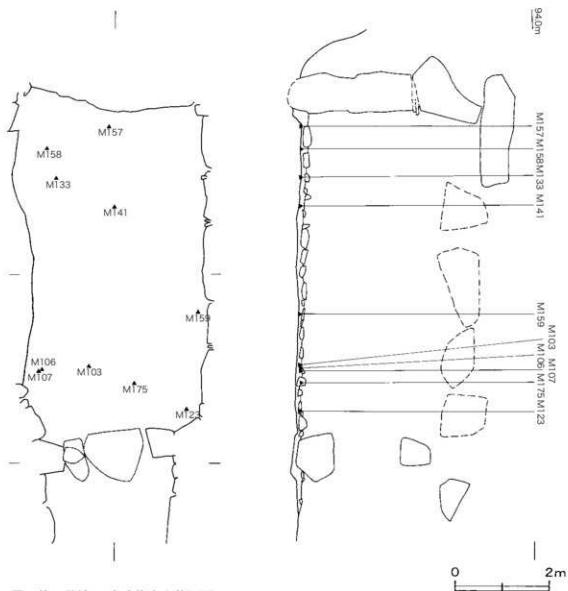
第37図 第2号墳 石室土層断面図

から追葬あるいは盗掘に伴ってかき出されたものと考えられる。61は、墓道の底面を深さ15cmほど掘り込んだ中に正位の状態出土しており、初葬に伴う土器の可能性もある。69も墓道から破片がまとまって出土していることから、墓道に置かれた可能性が考えられる。その他の土器は、破片の状態出土しており、玄室側から周溝側へ破片が分布していることから、玄室内からかき出されたものか、墓道内に転落したものと考えられる。

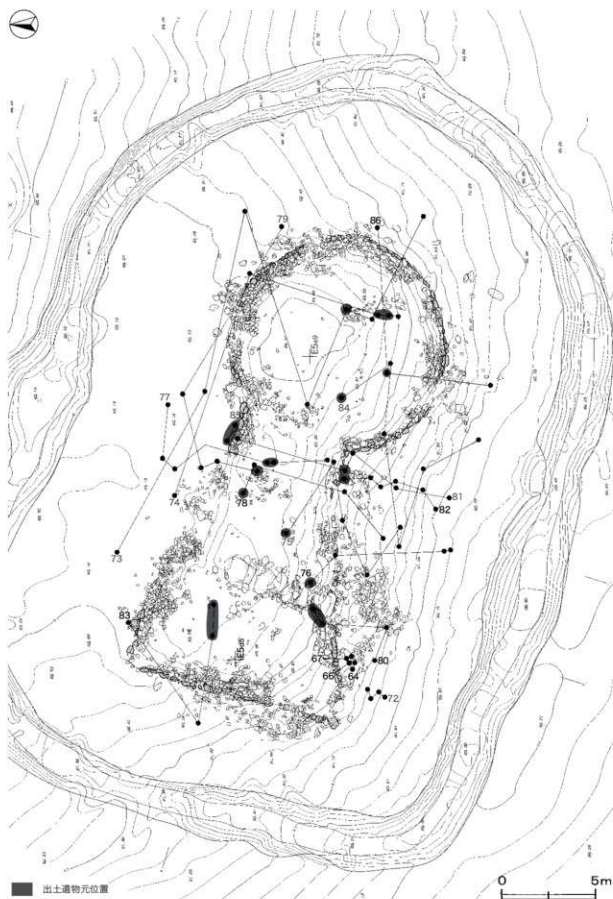
所見 盛土の観察から、墳丘は横穴式石室を構築後、前方部側から構築した可能性が考えられる。墳丘の形状は左右対称ではなく、前方部は後円部の中心に対して北側に偏って構築されており、横穴式石室が前方部に構築されていることから伝統的な前方後円墳の企画性が失われた時期の古墳である。

本跡では墳丘端部と周溝内縁との間に4.5～9.3mの空間が設けられ、この部分には盛土は確認されなかった。周溝と墳丘との間に空間を設けることで、実際より古墳を大きく見せる効果がある。また栃木県の6世紀末から7世紀前葉の古墳の中で、周溝と墳丘との間に基壇と呼ばれる広い平坦面を持つものが存在することから、その影響を受けたと考えられる。

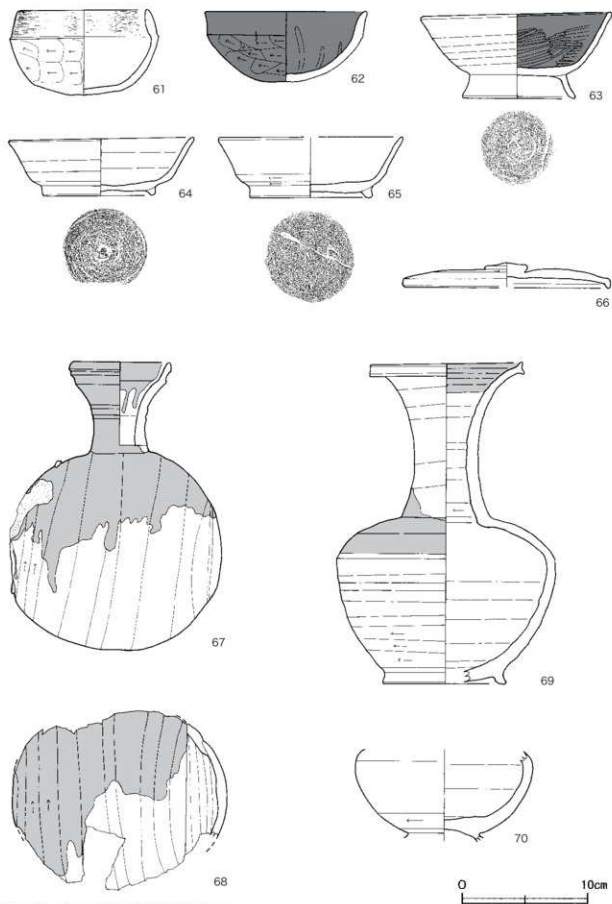
また、墳丘の外表には葺石が施されていることが確認された。山ノ入古墳群の他の古墳には見られないことから、本跡に限定的に行われたものと推定される。墳丘上から埴輪は確認されず、須恵器の大甍が十数個出土



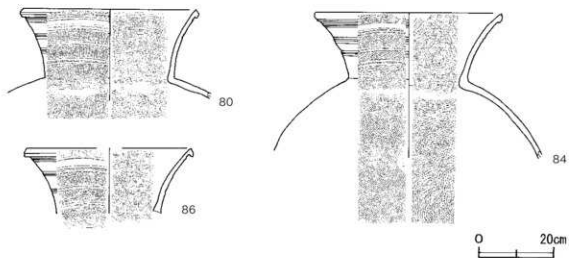
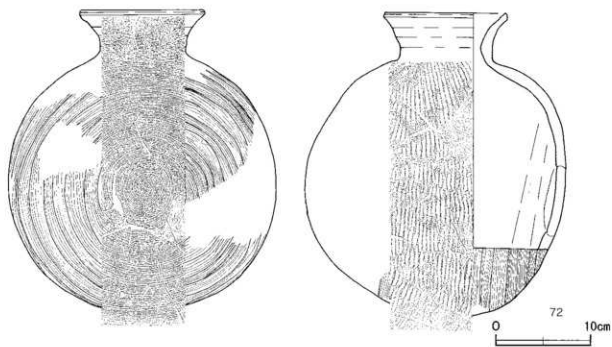
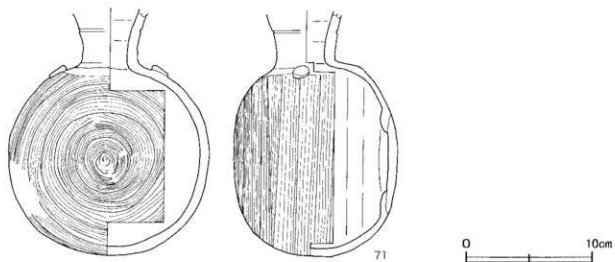
第38図 第2号墳 石室遺物出土状況図



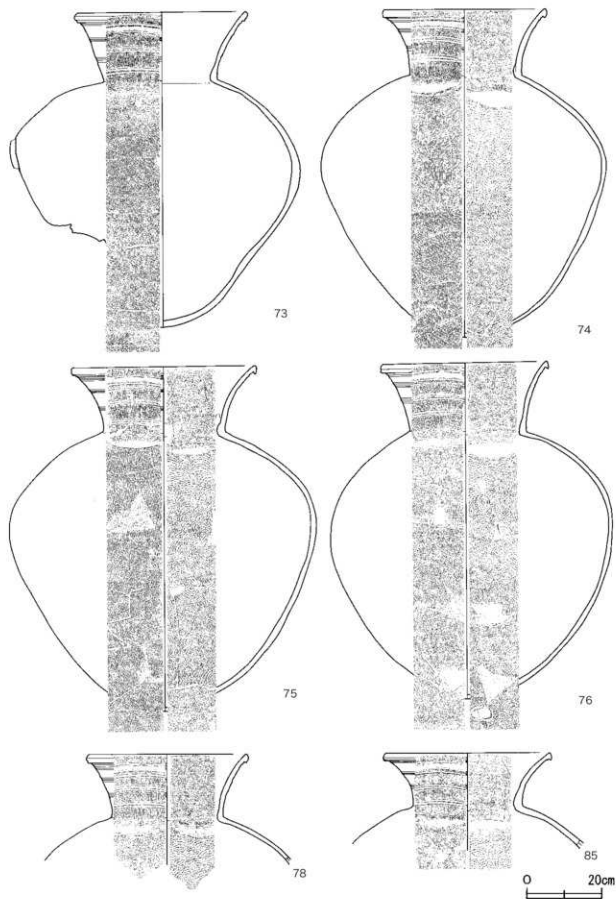
第40図 第2号墳 墳丘遺物出土状況図



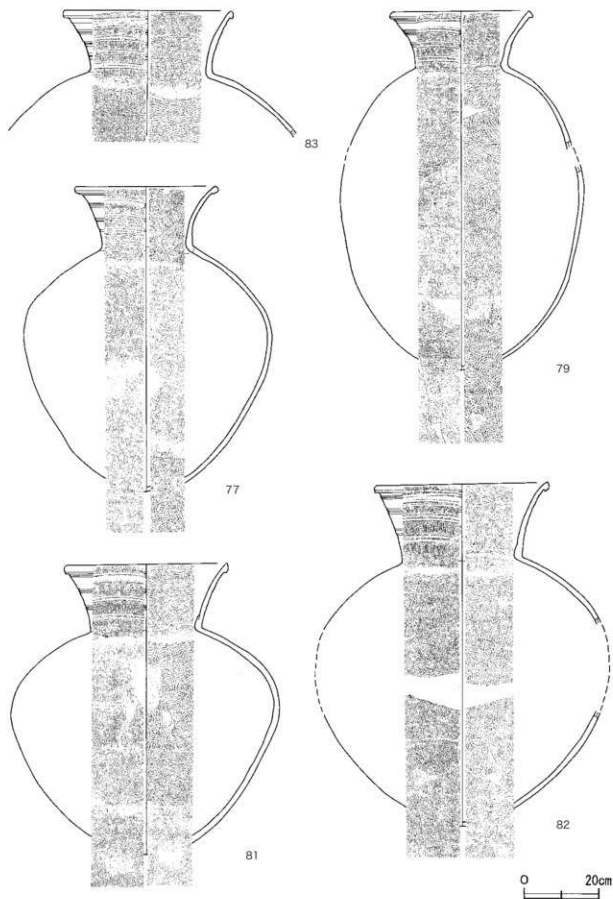
第41図 第2号墳 出土遺物実測図(1)



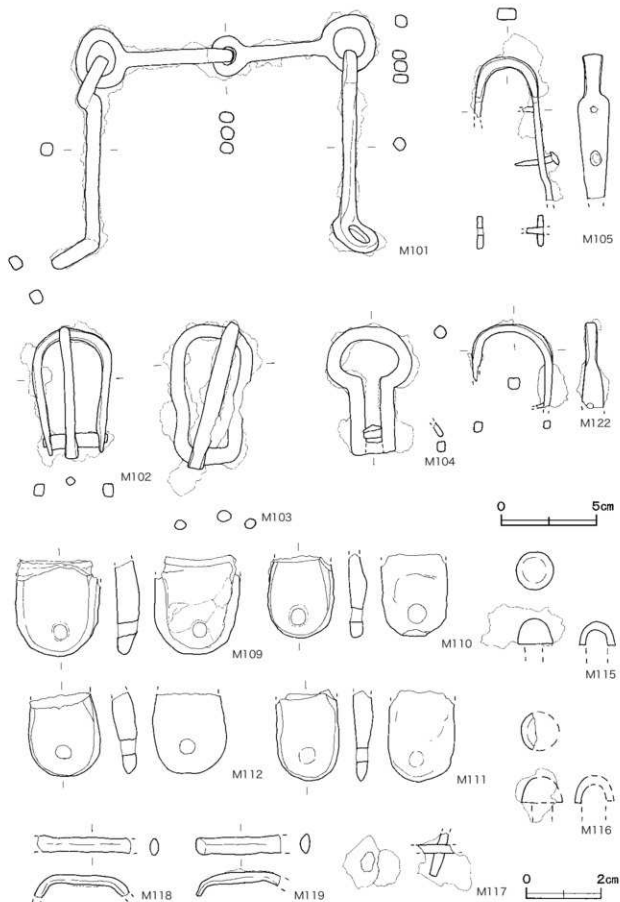
第42图 第2号墳 出土遺物実測図(2)



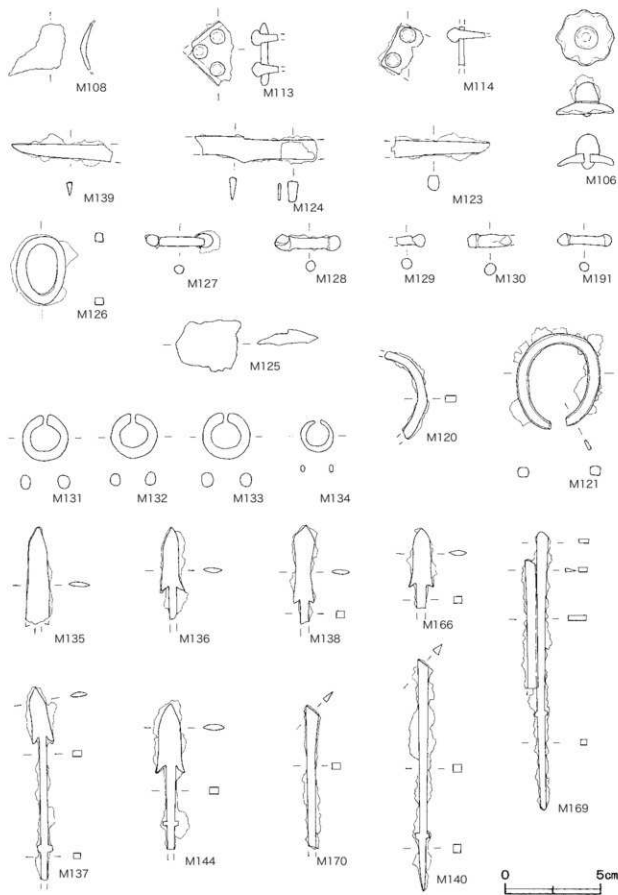
第43図 第2号墳 出土遺物実測図(3)



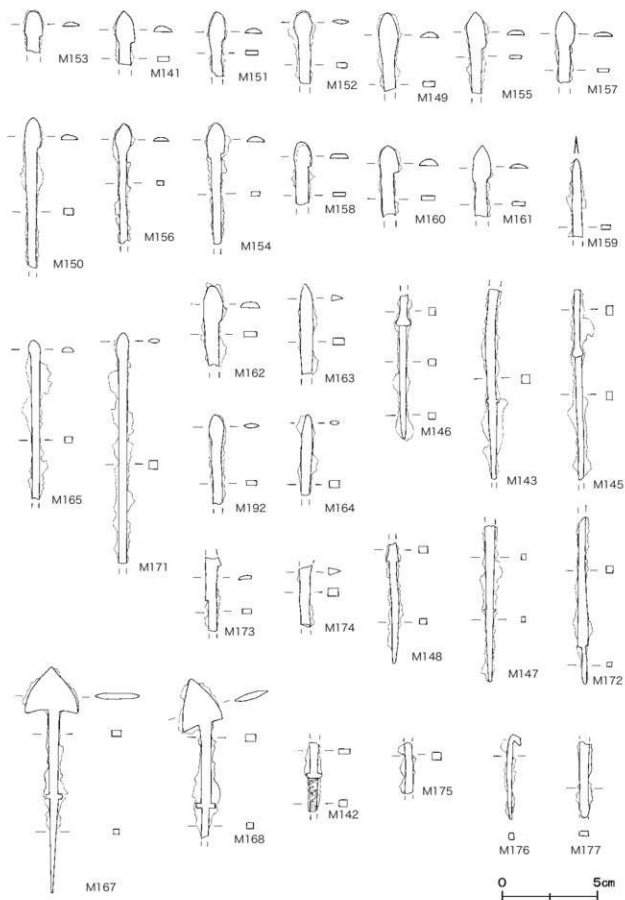
第44图 第2号墳 出土遺物実測図(4)



第45図 第2号墳 出土遺物実測図(5)



第46图 第2号坑 出土遗物实测图(6)



第47図 第2号墳 出土遺物実測図(7)

第2号墳出土遺物観察表(第41~47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
61	土師器	坏	10.2	6.7	6.6	雲母・白色粒子・赤色粒子	橙	普通	外面手持ちへう削り 内面ナデ	墓道内坑	70% P.L.21
62	土師器	坏	12.7	5.6	-	赤色粒子	黒	普通	外面手持ちへう削り 内面ミガキ	墓道底面 ~下層	70% P.L.21
63	土師器	高台付坏	14.9	6.9	8.8	白色粒子・黒色粒子	にぶ・黄橙	普通	外面ロクロナデ 内面ミガキ	表土	100%
64	須恵器	高台付坏	14.8	4.7	8.9	長石・白色粒子	灰	普通	内外面ロクロナデ 底部回転へう削り	墓道西側	80% P.L.21
65	須恵器	高台付坏	[14.5]	4.8	9.6	白色粒子・赤色粒子	にぶ・黄橙	普通	内外面ロクロナデ 底部回転へう削り	墓道下層	50%
66	須恵器	蓋	[16.0]	2.0	-	白色粒子・黒色粒子	灰黄	普通	天井部回転へう削り 内外面ロクロナデ	墓道西側	70% P.L.21
67	須恵器	ワコ瓶	7.6	22.7	-	砂粒	灰	良	体部回転へう削り・ロクロナデ	墓道西側	100% 自然釉 P.L.21
68	須恵器	ワコ瓶	-	(14.2)	-	砂粒	灰	良	体部回転へう削り・ロクロナデ	墓道西側 ~底面	50% 自然釉
69	須恵器	長頸瓶	11.9	25.3	9.7	白色粒子・黒色粒子	灰黄	良	内外面ロクロナデ 体部下端・底部回転へう削り	墓道下層	80% P.L.22
70	須恵器	長頸瓶々	-	(7.2)	-	白色粒子	黄灰	普通	内外面ロクロナデ 体部下端回転へう削り	墓道東壁	30%
71	須恵器	提瓶	-	(19.6)	-	石英・白色粒子	暗灰黄	良	外面カキ目 内面ロクロナデ	墓道西壁	75% P.L.22
72	須恵器	提瓶	[12.6]	32.3	-	白色粒子	黄灰	良	外面カキ目、平行叩き、格子叩き 内面ロクロナデ、同心円当て具痕	墓道西側	60% P.L.22
73	須恵器	壺	44.8	83.9	5.8	石英	灰白	良	口唇部櫛掻波状文 口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線 胴部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	後円部	80% P.L.23
74	須恵器	壺	43.0	87.0	-	長石・白色粒子	灰白	良	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	後円部	70% 自然釉 P.L.23
75	須恵器	壺	48.1	91.6	-	長石・白色粒子	黄灰	良	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	前方部溝内	70% P.L.23
76	須恵器	壺	43.2	88.9	-	長石・白色粒子	黄灰	良	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	石室東側	70%
77	須恵器	壺	37.2	81.2	-	白色粒子	黄灰	良	口縁部外面櫛掻波状文・刺突文を平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	くびれ部付近	70% P.L.23
78	須恵器	壺	41.5	(29.2)	-	白色粒子	黄灰	普通	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	くびれ部付近	70% 自然釉
79	須恵器	壺	36.1	-	-	白色粒子	にぶ・黄橙	普通	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	くびれ部付近	45% 図上復元

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
80	須恵器	甕	45.6	(23.5)	-	長石・白色粒子	黄灰	良	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当てて具痕	石室西側	20%
81	須恵器	甕	42.5	77.0	-	石英	灰	良	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当てて具痕	南側くびれ部	80% P L 23
82	須恵器	甕	45.0	[91.0]	-	石英	灰	良	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当てて具痕	南側くびれ部	30%
83	須恵器	甕	44.5	(33.2)	-	白色粒子	黄灰	良	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当てて具痕	前方部西側	20%
84	須恵器	甕	49.5	(38.2)	-	長石・白色粒子	黄灰	普通	口縁部外面斜位の刺突文に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当てて具痕	後円部	20%
85	須恵器	甕	43.5	(25.8)	-	黒色粒子・白色粒子	にひい黄澄	普通	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当てて具痕	北側くびれ部	15% P L 23
86	須恵器	甕	[43.3]	(17.2)	-	長石・白色粒子	黄灰	普通	口縁部外面縦位の櫛目に平行沈線で区画 胴部外面平行叩き 内面同心円当てて具痕	後円部	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M101	甕	15.00	12.70	0.80	138.10	鉄	衝に直接引手が残っている	羨道下層	P L 28
M102	鍔具	14.00	9.30	0.62	39.50	鉄	断面四角	羨道底面	P L 28
M103	鍔具	7.80	4.40	0.65	(52.00)	鉄	断面丸 一部欠	玄室南部床面	P L 28
M104	鍔金具	6.80	4.50	0.80	43.50	鉄	断面丸	羨道下層	P L 28
M105	鍔金具	(7.70)	(4.10)	0.40	(21.90)	鉄	木製鍔の吊り金具々	羨道下層	P L 28
M106	鍔床(宮車)	3.00	3.00	1.80	15.40	鉄地銀貼り	八葉	玄室南部床面	P L 28
M107	雲珠々	-	-	-	(2.08)	銅地金貼り	箔片のため実測不可	玄室南部床面	M106の直下より出土 P L 28
M108	雲珠々	(3.00)	(2.79)	0.25	(4.34)	鉄	彎曲している	羨道底面	
M109	帯先金具	2.50	2.20	0.68	7.80	鉄地銀貼り	銀1か所	羨道下層	P L 29
M110	帯先金具	2.20	1.82	0.50	4.22	鉄地銀貼り	銀1か所	羨道下層	P L 29
M111	帯先金具	2.40	1.70	0.50	4.12	鉄地銀貼り	銀1か所	玄室床面	P L 29
M112	帯先金具	2.18	1.90	0.55	5.00	鉄地銀貼り	銀1か所	羨道覆土中	P L 29
M113	方形金具	(3.34)	(2.31)	1.50	(9.85)	鉄	銀3か所 一部欠	羨道底面	P L 28
M114	方形金具	(2.50)	(2.25)	(2.00)	(7.30)	鉄	銀2か所 一部欠	玄室北西部床面	P L 28
M115	鍔	1.00	1.00	(0.76)	(2.46)	鉄地銀貼り	頭部	羨道床面	P L 28
M116	鍔	1.00	1.00	(0.70)	(0.76)	鉄地銀貼り	頭部 銀一部剥落	羨道西壁	P L 28
M117	鍔	(1.40)	(0.96)	(1.10)	(2.20)	鉄地銀貼り々	頭部欠	羨道下層	P L 28
M118	鍔金具	(2.50)	0.37	0.20	(0.54)	銅	帯先金具に付属々	玄室北西部床面	P L 29
M119	鍔金具	(4.75)	(0.48)	0.30	(0.61)	銅	帯先金具に付属々 一部鍔金	羨道下層	P L 29
M120	鍔金具	(4.75)	(0.51)	(0.32)	(2.78)	鉄	刀鍔具々	玄室北西部床面	
M121	鍔金具	(5.05)	4.40	0.50	(11.60)	鉄	刀鍔具々	羨道付近上層	P L 29
M122	鍔金具	(4.50)	(4.20)	4.20	(8.95)	鉄	木製鍔の吊り金具々	羨道東壁	P L 28
M123	刀子	(5.20)	(0.80)	(0.60)	(6.60)	鉄	茎	玄室南部底面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M124	刀子	(6.40)	1.40	0.50	(9.55)	鉄	片岡 刃部・茎欠	玄室床面	
M125	不明鉄製品	(3.50)	(2.70)	(0.70)	(10.50)	鉄	彎曲している 雲珠々	玄室床面	
M126	切刃	3.60	2.50	0.48	8.30	鉄		墓道床面	P L 29
M127	弓飾り金具	3.40	0.60	0.50	3.12	鉄	木質付着	玄室南東部床面	P L 29
M128	弓飾り金具	3.50	0.80	0.60	3.04	鉄	木質付着	墓道東壁	P L 29
M129	弓飾り金具	(1.60)	0.70	0.50	(0.89)	鉄	一部欠	墓道下層	
M130	弓飾り金具	(2.30)	0.70	0.60	(1.84)	鉄	一部欠	玄室東壁側床面	
M131	耳環	2.90	2.30	0.75	12.20	銅	銀貼り	墓道下層	P L 29
M132	耳環	2.51	2.39	0.70	11.50	銅		墓道付近上層	P L 29
M133	耳環	2.62	2.41	0.71	14.20	銅		玄室床面	P L 29
M134	耳環	1.73	1.65	0.41	2.70	銅		玄室床面	P L 29
M135	鉄線	(5.10)	(1.25)	0.19	(3.68)	鉄	長柳葉々 両丸造 鎌身部のみ残存	墓道東壁	P L 30
M136	鉄線	(4.96)	1.14	0.20	(4.70)	鉄	脇扶柳葉 両丸造 鉤被欠	墓道下層	P L 30
M137	鉄線	(10.20)	1.20	0.31	(8.20)	鉄	脇扶柳葉 両丸造 鎌 茎欠	墓道下層	P L 30
M138	鉄線	(5.15)	1.10	0.32	(4.34)	鉄	脇扶柳葉 両丸造 鉤被欠	墓道下層	P L 30
M139	刀子	(5.35)	(0.98)	0.70	(5.30)	鉄	両部・茎欠	墓道床面	
M140	鉄線	12.20	0.56	0.40	9.90	鉄	片刃箭 切刃造 鎌 両	墓道西壁	P L 30
M141	鉄線	(2.89)	1.00	0.32	1.96	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	玄室床面	
M142	鉄線	(3.67)	0.56	0.37	(2.00)	鉄	鉤被片 鎌 両	墓道東壁	
M143	鉄線	(10.01)	0.70	0.40	(8.20)	鉄	鉤被片 鎌 両	墓道下層	P L 30
M144	鉄線	(7.66)	1.60	0.34	(9.15)	鉄	脇扶柳葉 鎌 短刃 茎欠	墓道下層	P L 30
M145	鉄線	(10.00)	0.60	0.49	(5.55)	鉄	鉤被片 台形 両	墓道下層	P L 30
M146	鉄線	(7.46)	7.50	0.32	(3.56)	鉄	鉤被片 台形 両	墓道下層	
M147	鉄線	(8.23)	0.65	0.29	(5.20)	鉄	鉤被片 鎌 両	墓道部東端部	
M148	鉄線	(6.37)	(0.70)	0.32	(2.92)	鉄	鉤被片 台形 両	墓道部東端部	
M149	鉄線	(4.20)	1.01	0.31	(3.40)	鉄	鑿箭 片丸造	玄室東壁側床面	P L 30
M150	鉄線	(7.89)	0.91	0.30	(6.30)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	玄室東壁側床面	P L 30
M151	鉄線	(3.51)	(0.91)	0.21	(1.86)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	玄室掘り方内	P L 30
M152	鉄線	(3.91)	0.88	0.32	(2.68)	鉄	鑿箭 両丸造 鉤被欠	墓道部底面	P L 30
M153	鉄線	(2.20)	0.93	0.24	(1.32)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	墓道西壁	
M154	鉄線	(6.40)	0.98	0.28	(3.82)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	墓道下層	P L 30
M155	鉄線	(4.26)	1.02	0.25	(3.02)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	墓道西壁	P L 30
M156	鉄線	(6.37)	0.89	0.29	(3.48)	鉄	鑿箭 片丸造 鉤被欠	墓道下層	P L 30
M157	鉄線	(3.65)	0.98	0.22	(2.72)	鉄	鑿箭 片丸造 鉤被欠	玄室床面	
M158	鉄線	(3.26)	0.94	0.25	(2.44)	鉄	鑿箭 片丸造 鉤被欠	玄室床面	
M159	鉄線	(4.08)	0.49	0.22	(3.82)	鉄	鑿箭 切刃造々 鉤被欠	玄室下層	
M160	鉄線	(3.70)	1.00	0.35	(2.66)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	墓道中層	P L 30
M161	鉄線	(3.78)	1.00	0.18	(1.78)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	墓道床面	
M162	鉄線	(4.17)	1.00	0.30	(2.88)	鉄	鑿箭 片岡 片丸造 鉤被欠	墓道下層	P L 30
M163	鉄線	(4.72)	0.72	0.30	(3.36)	鉄	片刃箭 切刃造 鉤被欠	玄室東壁側床面	P L 30
M164	鉄線	(4.26)	0.50	0.30	(2.88)	鉄	鑿箭 片丸造 鉤被欠	墓道下層	P L 30
M165	鉄線	(8.35)	0.65	0.32	(6.05)	鉄	鑿箭 片丸造 鉤被欠	墓道下層	
M166	鉄線	(4.25)	1.20	0.32	(3.38)	鉄	脇扶柳葉 両丸造 鉤被欠	墓道下層	
M167	鉄線	11.95	2.75	0.30	14.70	鉄	脇扶三角形 平造 鎌 両	墓道部東端部	P L 30
M168	鉄線	(8.39)	2.03	0.33	(12.30)	鉄	脇扶三角形 平造 鎌 両	墓道部東端部	P L 30

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M169	鉄鍔	14.68	0.55	0.33	(14.20)	鉄	鑿溝 片丸造 韓洞	羨道部東袖部	2本踏著 P L30
M170	鉄鍔	(7.55)	0.42	0.32	(5.25)	鉄	片刃箭 切刃造	羨道部東袖部	P L30
M171	鉄鍔	(12.20)	0.65	0.42	(9.35)	鉄	鑿溝 両丸造 茎欠	羨道部東袖部	
M172	鉄鍔	(8.80)	0.39	0.40	(5.75)	鉄	鍔被片 直間々	羨道部東袖部	P L30
M173	鉄鍔	(3.95)	0.90	2.65	(1.78)	鉄	鑿溝 鍔 鍔身部先端・鍔被欠	墓道中層	
M174	鉄鍔	(3.20)	0.70	0.32	(1.84)	鉄	片刃箭 鍔身部先端・鍔被欠	墓道床面	
M175	鉄鍔	(2.70)	0.50	0.40	1.72	鉄	鍔被片	玄室床面	
M176	釘	4.50	0.40	0.30	2.06	鉄		墓道付近上層	
M177	釘	(4.00)	0.70	0.50	(2.12)	鉄	頭部・先端部欠	墓道下層	
M191	弓筒り金具	2.80	0.60	0.50	1.70	鉄		玄室東壁側床面	P L29
M192	鉄鍔	(3.59)	0.78	0.22	(2.50)	鉄	鑿溝 鍔被欠	玄室東壁側床面	

第3号墳(第48～50図)

位置 調査区中央部のE 5 j1～j3, F 6 b1～b3区で、標高87.8～89.8mの丘陵尾根上に位置している。本跡の南東に第4号墳、南西に第11号墳、北東に第12号墳が構築されている。

確認状況 現地踏査の際に、石室材と思われる石塊が露出していたため周辺の測量を行ったところ、89.5～90.0mの等高線が不自然に南方に張り出し、88.5mの等高線が北に入り込んでいる状況が観察された。この時点で長径13.0m、短径10.5mの円墳と推定され、ボーリングステッキによる探査とトレンチによって埋葬施設と周溝が確認された。

重複関係 第2号住居跡、第26・27号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 周溝外縁で長径14.34m、短径12.64mの円墳である。主軸方向はN-38°-Wである。

墳丘 盛土の遺存は少なく、確認できた高さは最大で34cmである。旧表土は第10層が相当し、東西方向で一部切れているが、南北方向はほぼ残存していることから、墳丘構築に際して地山を整形することは行われなかったと考えられる。墳丘の盛土は第5～9・11・13・14層が相当し、石室構築後、中央部から形状を整えながら、ロームを主体とする褐色土と暗褐色土を積み上げたと考えられる。

周溝 全周している。上幅1.50～1.82m、下幅0.36～0.96m、深さ20～68cmで、壁は外傾して立ち上がり、断面形状は逆台形である。覆土は第3・4・15層で、レンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

墳丘・周溝土層解説

1 褐色	ロームブロック多量、炭屑パミス微量	9 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量、黒色粒子少量	10 暗褐色	ローム粒子多量、黒色粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック多量、黒色粒子微量	11 褐色	ロームブロック多量、赤色粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック多量、黒色粒子微量	12 褐色	ロームブロック多量、黒色粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、黒色粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子多量、粘土粒子微量、締まり強
6 暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量、締まり強	14 暗褐色	ローム粒子多量、粘土粒子微量、締まり強
7 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量、締まり強	15 褐色	ロームブロック少量
8 褐色	ロームブロック多量		

埋葬施設 中央部に地下式の横穴式石室が構築されている。天井石は奥壁から3枚目が石室内に転落しており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と玄室を有する単室構造で、全長は4.26mである。玄室の規模は内法で長さ2.43m、幅0.90～1.11mの若干胴の張った長方形で、残存している高さは159cmである。石室の主軸方向はN-0°である。

羨道部は長さ1.42m、幅0.96～1.12mで、残存している高さは102cmである。南側には墓道が構築され、長さ

は欄柱石から約7mである。墓道は玄門部に向かって緩やかに傾斜している。

石室土層解説

1 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	11 黄褐色	ロームブロック・鹿沼バミス中量
2 暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、締まり弱	12 褐色	ロームブロック多量、鹿沼バミス中量
3 暗褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック多量、鹿沼バミス微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、締まり弱	14 暗灰黄色	ロームブロック・粘土粒子中量、粘性強
5 褐色	ロームブロック多量、赤色粒子少量	15 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、締まり弱
6 暗褐色	黒色粒子中量、ロームブロック少量	16 暗褐色	ロームブロック少量、締まり弱
7 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量、締まり強
8 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量	18 暗褐色	ロームブロック多量、粘土粒子微量、締まり弱
9 灰褐色	粘土粒子中量、ロームブロック少量、鹿沼バミス微量、粘性・締まり強	19 暗褐色	ロームブロック多量、鹿沼バミス少量、締まり弱
10 暗灰黄色	粘土粒子多量、ロームブロック・鹿沼バミス少量、粘性・締まり強	20 暗灰黄色	粘土粒子多量、ロームブロック中量、粘性・締まり強
		21 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・鹿沼バミス少量、締まり強

石室の側壁は、比較的大形の石材の平坦面を石室内側に向けて根石とし、割石を小口積みしている。側壁の石材は、上へ行くに従って小形のものが使用されている。側壁は石室側に内傾して立ち上がっており、持ち送りが見られる。奥壁は大形の割石を2段に積み重ねており、石材の合わせ目は平滑に処理されている。石室側の一段目は直立して、2段目は若干内傾して立ち上がっている。床面には礫を敷き詰めている。

玄門部は、長さ87cm、幅50cm、厚さ25～44cmの割石を立てて欄石とし、玄室底面との段差は35cmである。欄石の表面は平滑に処理されており、平面形はL字状を呈している。その上に長さ65～75cm、推定幅25～30cm、厚さ20～27cmの割石を立てて欄柱石としている。欄柱石は石室側に傾き、両欄柱石の間は45～52cmである。欄柱石の上に、稜石を設置している。羨道部は、割石を小口積みして袖部を構築している。石材は玄室側壁と同じく、上へ行くに従って小形のものが使用されている。壁は内傾しており、持ち送りが認められる。天井石は、大形の自然石を玄室上3枚、羨道部に1枚乗せている。石材間は礫を充填し、粘土混じりのローム土で密閉している。

石室の掘り方は、南側は不明であるが長さ約5.3m、幅3.06mの楕円形で、地山を72～182cm掘り込んでいる。壁は、外傾又はほぼ直立している。底面は平坦であるが、玄室では側壁の内側が外側よりも14～15cm深く掘り込まれている。

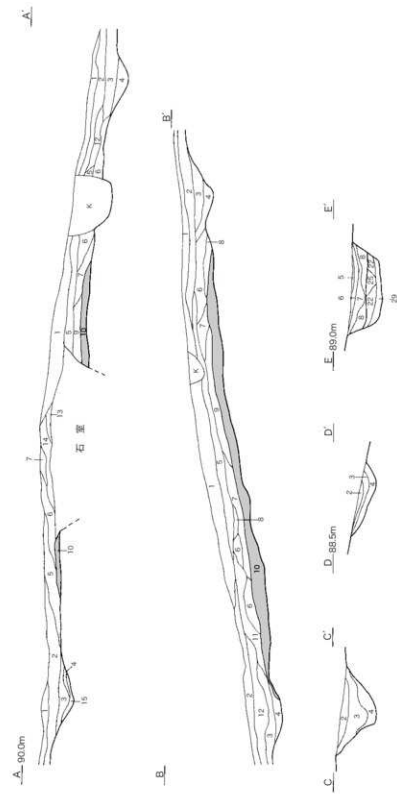
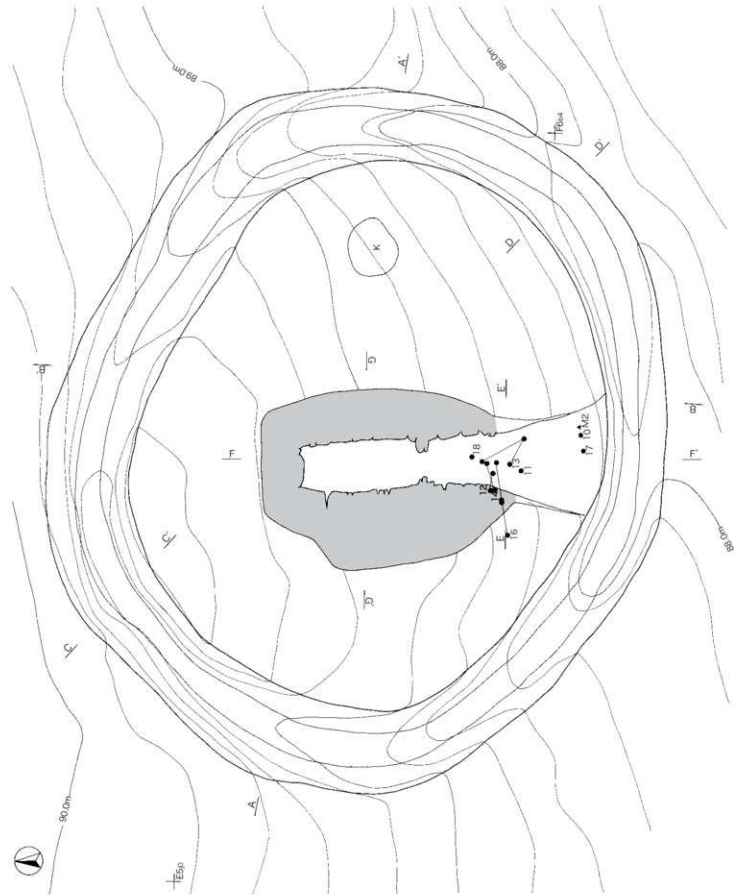
表込めは、奥壁及び側壁の根石を掘り方底面に設置した後、鹿沼バミス混じりのローム土を側壁に積み上げながら埋めている。締まりの強い層が見られることから、突き固められたものと考えられる。控え積みの石材は使用されていない。

石室は長さ58cm、幅42cm、厚さ10cmの六角形の割石で玄門部を閉鎖した後、割石を充填している。

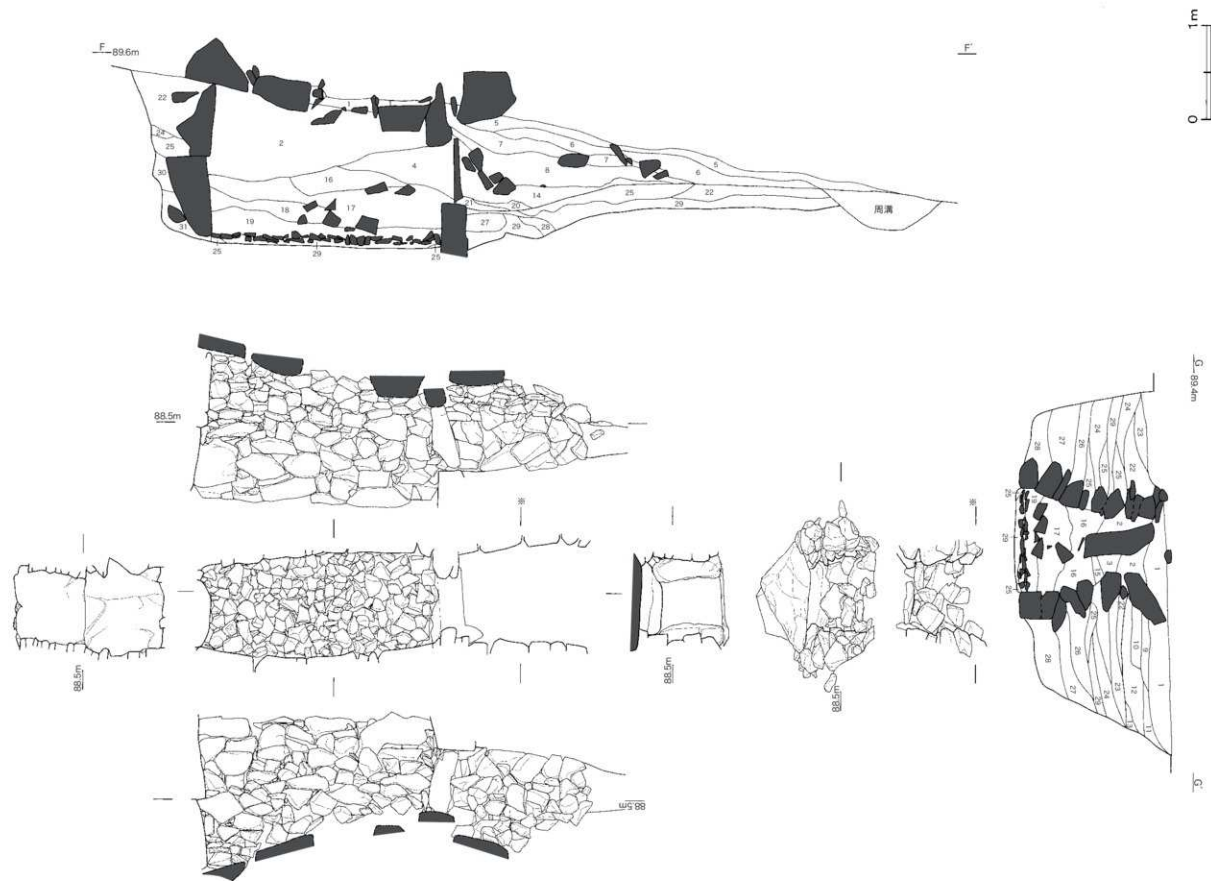
掘り方土層解説

22 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、黒色粒子微量	27 褐色	鹿沼バミス多量、ロームブロック・炭化粒子少量、締まり強
23 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼バミス微量、締まり強	28 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス中量、締まり強
24 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量、締まり強	29 暗褐色	黒色粒子中量、ロームブロック少量、締まり強
25 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、鹿沼バミス少量、粘性・締まり強	30 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量
26 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量、炭化粒子微量	31 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・鹿沼バミス少量

遺物出土状況 土師器片15点(坏類14, 甕類14), 須恵器片173点(坏類112, 甕類61), 鉄器片1点(刀子)のほか、縄文土器片50点、石器片20点も出土している。遺物は、羨道部から墓道にかけて出土している。10・17、M2は墓道の底面から、14は逆位の状態、18は横位の状態で羨道部の覆土下層から出土している。11は墓道の覆土上層から、12は羨道部の覆土中層から、13は墓道の覆土中～下層にかけて、15は玄室の覆土中層からそれぞれ破片の状態で出土している。これらの土器は石室外から転落したり、玄室からかき出されたものと考えられる。

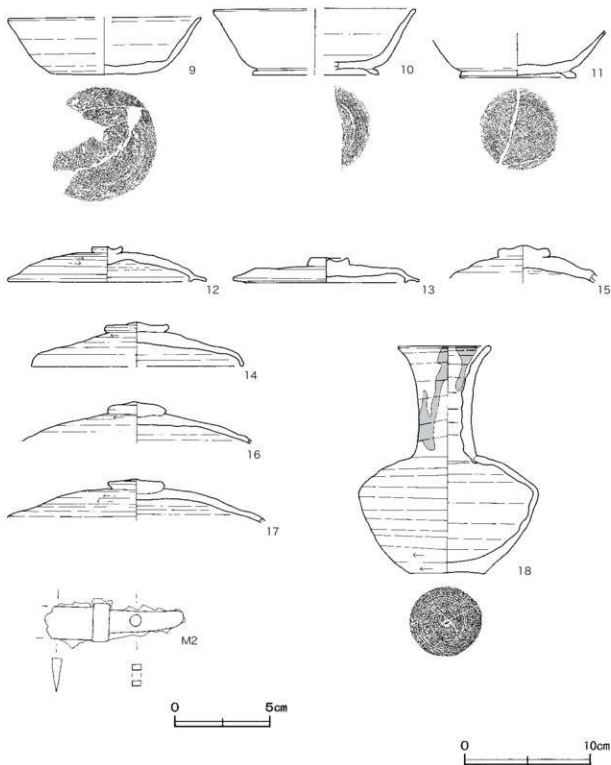


第48図 第3号墳 墳丘実測図



第49図 第3号墳 石室展開図

所見 石室の掘り方は地山を大きく掘り込み、天井石はほぼ旧表土に沿って側壁上に乗せている。盛土はほとんど失われているが、石室入り口からみると尾根の傾斜により見かけの規模が大きく見えるような工夫がされている。構築された時期は、墳丘と石室の構築形態や出土遺物などから、7世紀中葉と考えられる。また土器の様相から、8世紀前葉まで土器が供献されていたと想定される。



第50図 第3号墳 出土遺物実測図

第3号墳出土遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	須臾器	坏	[15.3]	4.5	9.2	雲母・白色粒子・ 黒色粒子	灰白	普通	内外面ロクロナテ 底部回転ヘラ削り	周溝内	50%
10	須臾器	高台付坏	[15.9]	5.2	[10.0]	白色粒子・赤色 粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	外面摩滅のため調整不明 内面 ロクロナテ	墓道底面	50%
11	須臾器	高台付坏	-	(3.7)	9.2	長石	にぶい黄橙	普通	内外面摩滅のため調整不明 底 部回転ヘラ削り	墓道部上層	50%
12	須臾器	蓋	15.9	2.8	-	長石・白色粒子	黄灰色	普通	天井部回転ヘラ削り 内外面口 タロナテ	玄室中層	95% P L 25
13	須臾器	蓋	14.9	1.9	-	石英・長石	灰白	良	天井部回転ヘラ削り 内外面口 タロナテ	玄室中 〜下層	80% P L 25
14	須臾器	蓋	[16.8]	3.5	-	白色粒子・黒色 粒子	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り 内外面口 タロナテ	玄室下層	80% P L 25
15	須臾器	蓋	-	(2.9)	-	長石・雲母	黄灰色	普通	天井部回転ヘラ削り 内面口 タロナテ	玄室中層	30%
16	須臾器	蓋	(18.3)	(3.3)	-	石英・白色粒子	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り 内外面口 タロナテ	周溝内	30%
17	須臾器	蓋	(20.5)	(3.4)	-	石英・赤色粒子・ 黒色粒子	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り 内外面口 タロナテ	墓道底面	20%
18	須臾器	長頸瓶	7.1	18.2	5.8	石英	灰白	良	内外面ロクロナテ 底部回転ヘ ラ削り	玄室下層	95% 自然釉 P L 25

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M2	刀子	(7.4)	1.7	0.5	(231)	鉄	切先・茎欠損 両側カ 鑿有り	墓道底面	P L 32

第4号墳(第51～56図)

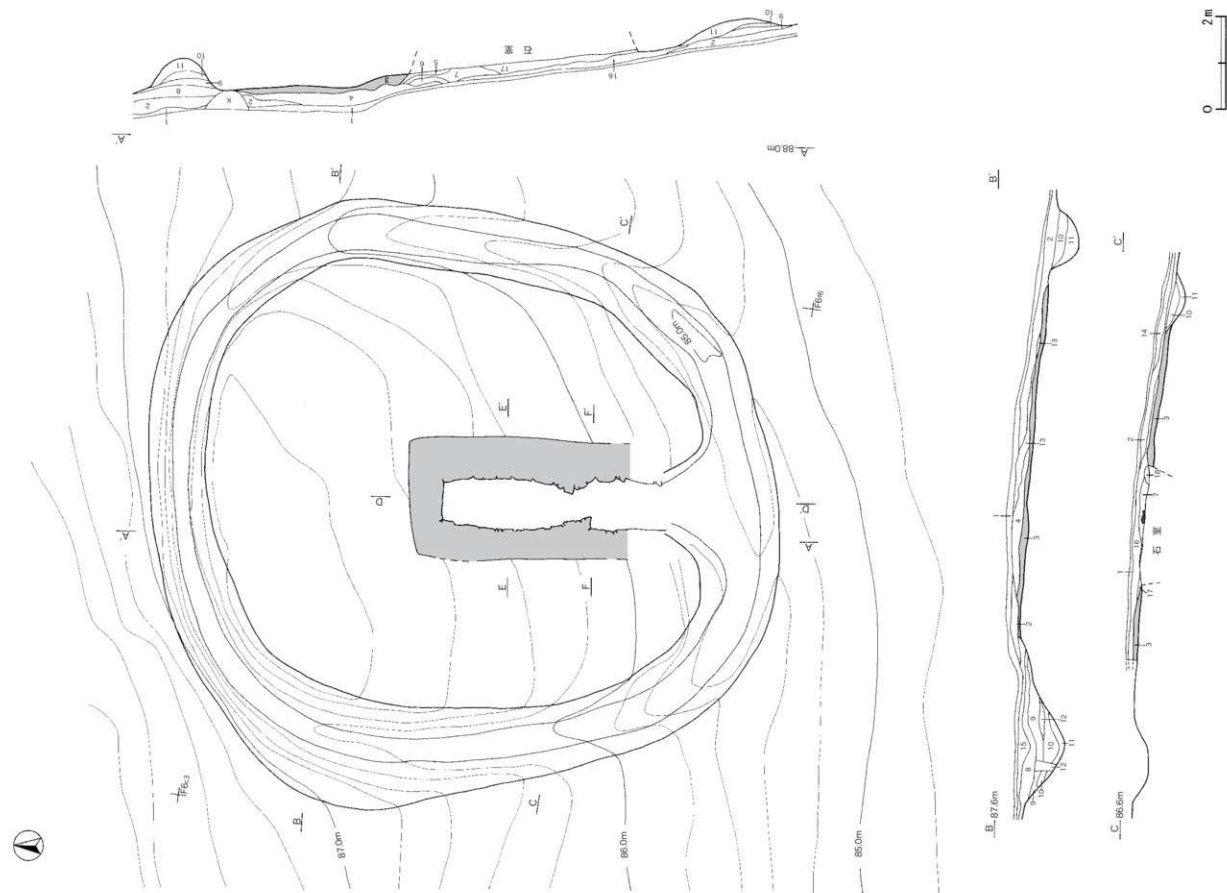
位置 調査区中央部のF6c3～e5区で、標高85.2～87.2mの丘陵尾根上に位置している。本跡の北西に第3号墳が構築されている。

確認状況 調査前は周知されていなかった。第3号墳を測量する際に地表面がわずかに高かったため、測量調査を行った。その結果、86.5～87.5mの等高線が南方に張り出している状況が確認された。この時点で長径8.5m、短径6.5mの円墳と推定され、表土除去後に埋葬施設と周溝が確認された。

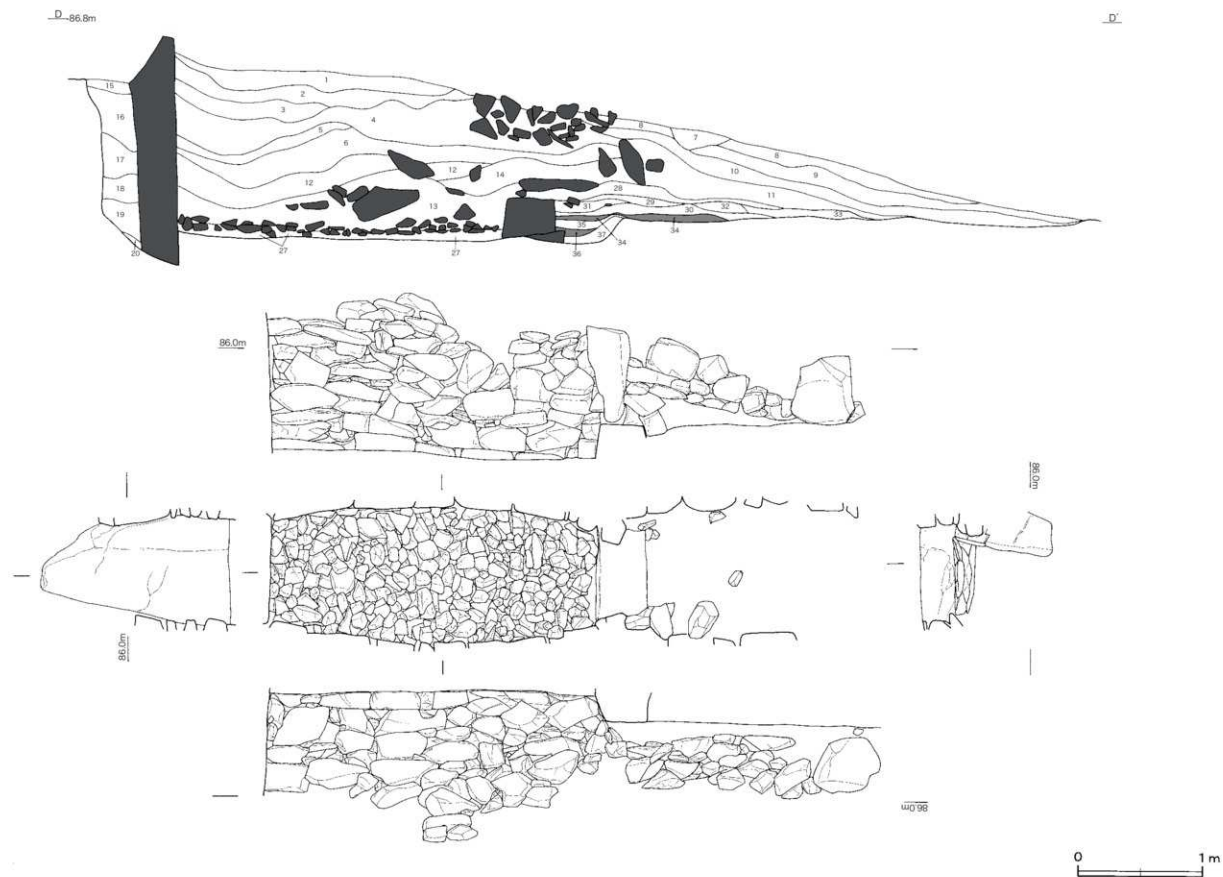
規模と形状 周溝外縁で長径13.7m、短径13.0mの円墳である。主軸方向はN-4°-Wである。

墳丘 盛土の遺存は少なく、確認できた高さは最大で42cmである。旧表土は第3層が相当する。周溝が第3層を掘り込んでいることから、墳丘構築に際して地山を整形することは行われなかったと考えられる。墳丘の盛土は、第4～6・12・15・16層が相当する。盛土は石室構築後、天井石の上に粘土混じりのロームで被覆し、その後ローム土を主体とする褐色土を積み上げたと考えられる。

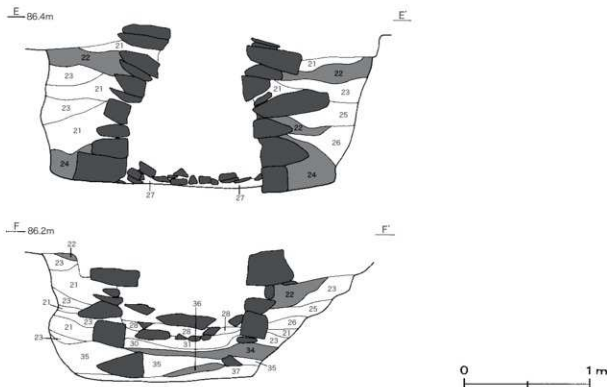
周溝 全周している。上幅1.2～2.3m、下幅0.31～0.75m、深さ30～80cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形はU字形である。覆土は第8～11層で、レンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。



第51図 第4号墳 墳丘実測図



第52図 第4号墳 石室展開図



第53図 第4号墳土層断面図

墳丘・周溝土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性・締まり弱 | 10 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量、炭化物・焼土粒子少量 | 11 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 12 極暗褐色 | ロームブロック中量、黒色粒子少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック多量、締まり強 | 13 極暗褐色 | ローム粒子中量、黒色粒子少量 |
| 5 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量、締まり強 | 14 褐色 | ロームブロック多量、黒色粒子微量、締まり強 |
| 6 褐色 | ロームブロック多量、粘土粒子微量、締まり強 | 15 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量、締まり強 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック・黒色粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 16 褐色 | ロームブロック多量、粘土粒子少量、締まり強 |
| 8 極暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・黒色粒子少量 | 17 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 18 褐色 | ローム粒子少量、黒色粒子微量 |

埋葬施設 中央部やや南寄りに地下式の横穴式石室が構築されている。天井石は既に失われ、西側の側柱石も抜き取られており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と支室を有する単室構造で、全長は4.83mである。支室の規模は、内法で長さ2.57m、幅0.84～1.05mの若干胴の張った長方形で、残存している高さは150cmである。石室の主軸方向はN-6°-Wである。

羨道部は長さ2.00m、幅0.96～1.00mで、残存している高さは78cmである。南側には墓道が構築され、長さは側柱石から約2.7mである。墓道は周溝に向かって緩やかに傾斜している。

石室土層解説

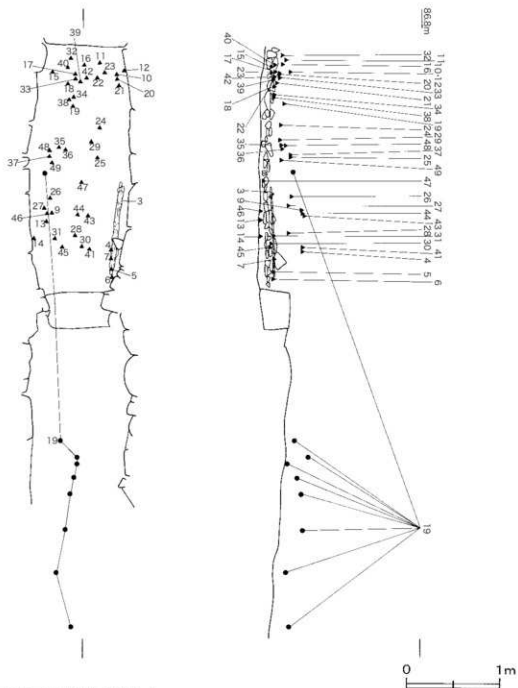
- | | | | |
|-------|-----------------------|---------|-------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・粘土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量、締まり弱 | 9 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量、粘土粒子微量、締まり弱 | 10 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック多量、締まり弱 | 11 極暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック多量、粘土粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック・焼土粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 13 褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量、黄砂・パミス微量 |
| 7 褐色 | ロームブロック多量、締まり強 | 14 褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック・黒色粒子微量 |

石室の側壁は、大形の石材の平坦面を石室内側に向けて根石とし、その上にはほぼ同じ大きさの割石を小口積みにし、隙間には礫を充填している。石材の側面を水平方向に揃えようとしており、比較的横目地が通った積み方をしている。側壁は石室側に内傾して立ち上がり、持ち送りが見られる。奥壁は、台形の一枚石で

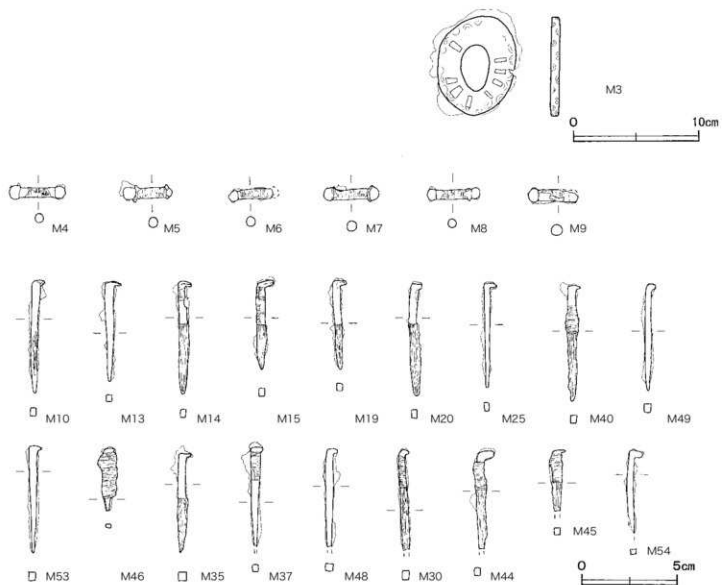
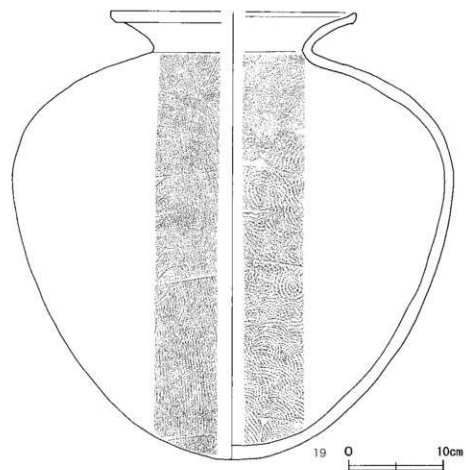
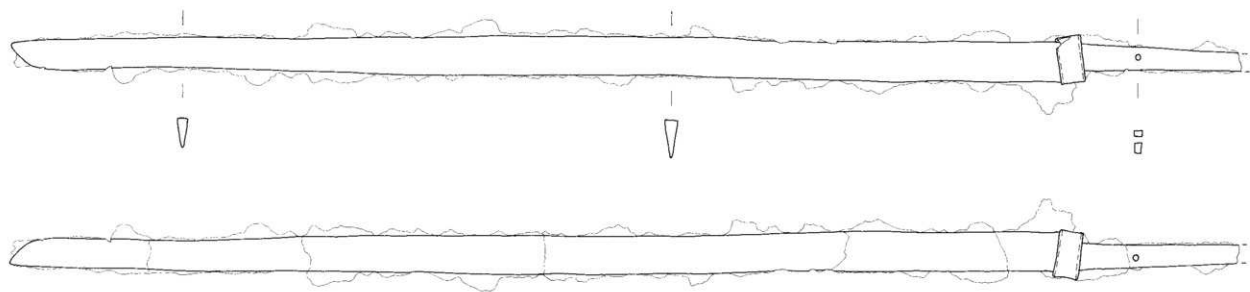
構成されている。石室側はほぼ直立している。床面には礫を敷き詰めている。

玄門部は、推定長さ80cm、幅38cm、厚さ32cmの長方形の割石を設置して棚石とし、玄室底面との段差は25cmである。その上に長さ78cm、幅35cm、厚さ33cmの割石を立てて側柱石としている。東側の側柱石は残存し、ほぼ直立している。棚石の上には、薄い割石を挟んで長さ66cm、幅60cm、厚さ11cmの台形の割石が置かれている。羨道部は、玄室よりも小形の割石を小口積みにして袖部を構築している。積み方は乱雑で、壁面はほぼ直立している。

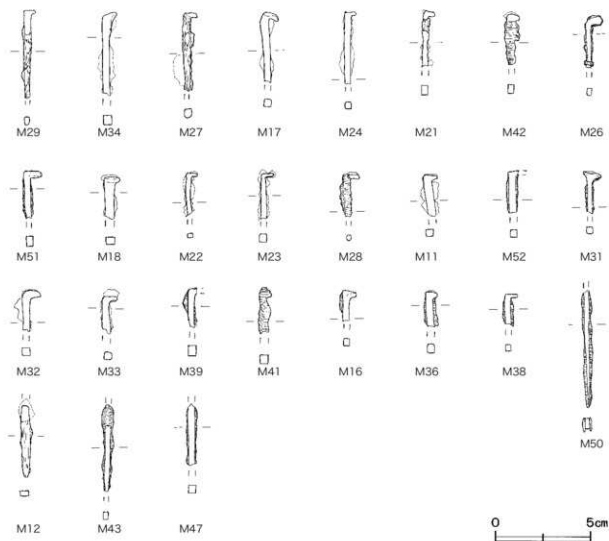
石室の掘り方は、長さ4.35m、幅2.62mの長方形で、地山を55～183cm掘り込んでいる。南壁は外傾して、その他の壁はほぼ直立している。底面は北壁側に幅60cm、深さ28cmの掘り込みが見られるほかは、ほぼ平坦である。



第54図 第4号墳 石室遺物出土状況図



第55図 第4号墳 出土遺物実測図(1)



第56図 第4号墳出土遺物実測図(2)

表込めは、奥壁側は奥壁を掘り方の底面に設置した後、鹿沼バミス混じりのローム土を主体として埋めている。締まりの強い層は第1層だけで、突き固められた形跡は見られない。側壁側は底面に根石を設置して青灰色の粘土で固定した後、側壁を積み上げながら、ロームを主体とする褐色と暗褐色を交互に埋め、その間に側壁を固定するために粘土混じりの褐色土を使用している。締まりの強い層がほとんどで、突き固められたものと考えられる。羨道部は、掘り方底面をローム混じりの褐色土と粘土混じりの灰黄褐色土を埋め、第34層の上面に袖部の石材を設置している。その後、袖部を積み上げながらロームを主体とする褐色土と暗褐色土を交互に埋め、一部に粘土混じりの褐色土を使用している。控え積みの石材は見られない。

楣石上に台形の割石があり、これが閉塞に用いられた可能性が考えられる。玄門部・墓道から確認された割石や礎は、玄室の側壁又は羨道部の袖部から転落した可能性がある。

堀り方土層解説

15	褐色	ローム粒子中量、鹿沼バミス微量、締まり強	23	暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量、締まり強
16	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・鹿沼バミス微量	24	青灰色	粘土粒子中量、ロームブロック少量、締まり強
17	暗褐色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量	25	褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック・鹿沼バミス微量
18	暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス中量	26	暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土ブロック微量、締まり強
19	暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量	27	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・鹿沼バミス少量、締まり強
20	黒褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス微量、締まり弱	28	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、締まり強
21	褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、締まり強	29	暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量、鹿沼バミス微量、締まり強
22	褐色	粘土ブロック・ローム粒子中量、締まり強			

30	褐	色	ローム粒子少量、粘土粒子微量。締まり強
31	暗褐色	褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
32	褐	褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量。締まり強
33	暗褐色	褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量。締まり強
34	灰黄褐色	褐色	ロームブロック・粘土ブロック・鹿沼パミス中量。粘性・締まり強

35	褐	色	ロームブロック多量、粘土粒子少量、粘性・締まり強
36	灰黄褐色	褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、鹿沼パミス微量。粘性・締まり強
37	褐	色	ロームブロック多量、鹿沼パミス微量。粘性・締まり強

遺物出土状況 須恵器片25点(坏類6、甕類19)、鉄器片47点(直刀1、釘46)、鉄製品片7点(弓飾り金具6、不明1)のほか、縄文土器片16点も出土している。19は墓道の底面を長径45cm、短径43cm、深さ7cmの円形に掘り込んだ中から、正位の状態出土している。M3は東側壁の玄門部寄りの床面上から、柄を奥壁側に向けて出土している。M4～M7は、M3の鋒付近から並んで出土している。M10～M54は、玄室内の長さ2.2m、幅75cmの範囲から出土している。

所見 石室は地山を大きく掘り込んで構築されており、天井石はほぼ旧表土に沿って側壁に乗せていたものと考えられる。M3及びM4～M7は出土状況から原位置を保っており、少なくとも弓1張りか副葬されたと考えられる。M3の鐔には銀象嵌が施されており、柄頭は失われているものの裝飾大刀であったと想定される。構築された時期は、石室の構築形態や出土遺物などから7世紀前葉と考えられる。

第4号墳出土遺物観察表(第55・56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
19	須恵器	甕	[26.0]	47.2	-	石黄・白色粒子・黒色粒子	にぶ褐色	負	口縁部・頸部内外面横ナデ 体部外面平行叩き 内面同心円当て具痕(磨り消し)	墓道底面	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	直刀	(98.0)	1.8	3.0	-	鉄	至欠 鐔(銀象嵌・10窓*)・鏝有り	玄室床面	石材のため不明な箇所有り P L32
M4	弓飾り金具	2.96	0.72	0.48	2.50	鉄	木質付着	玄室床面	P L31
M5	弓飾り金具	2.53	0.89	0.50	2.04	鉄	木質付着	玄室床面	P L31
M6	弓飾り金具	(2.30)	0.63	0.56	(1.66)	鉄	木質付着 一部欠損	玄室床面	P L31
M7	弓飾り金具	2.94	0.93	0.51	2.54	鉄	木質付着	玄室床面	P L31
M8	弓飾り金具	2.82	0.75	0.49	2.16	鉄	木質付着	玄室下層	P L31
M9	弓飾り金具	(2.66)	0.69	0.55	(1.90)	鉄	木質付着 一部欠損	玄室床面	P L31
M10	釘	6.02	0.44	0.34	3.44	鉄	木質付着	玄室北部下層	P L31
M11	釘	(2.07)	0.47	0.46	(2.28)	鉄	先端部欠	玄室北部下層	
M12	釘	(3.80)	0.42	0.31	(2.20)	鉄	頭欠 柁目方向の木質付着	玄室北部下層	
M13	釘	5.31	0.36	0.32	3.20	鉄		玄室南部中層	
M14	釘	5.99	0.52	0.40	3.88	鉄	柁目・横目方向の木質付着	玄室南部中層	P L31
M15	釘	4.71	0.44	0.34	3.18	鉄	柁目・横目方向の木質付着	玄室西北部床面	P L31
M16	釘	(1.57)	0.43	0.32	(1.36)	鉄	先端部欠	玄室北部下層	
M17	釘	(3.69)	0.42	0.35	(2.68)	鉄	先端部欠	玄室北部床面	
M18	釘	(2.15)	0.44	0.42	(1.86)	鉄	先端部欠	玄室北部床面	
M19	釘	4.67	0.36	0.32	2.66	鉄	柁目・横目方向の木質付着	玄室北部下層	P L31
M20	釘	5.92	0.47	0.29	3.66	鉄	柁目・横目方向の木質付着	玄室北部床面	P L31
M21	釘	(2.90)	0.50	0.35	(2.24)	鉄	先端部欠	玄室北部床面	
M22	釘	(2.30)	0.23	0.30	2.36	鉄	先端部欠	玄室北部床面	
M23	釘	(2.40)	0.50	0.35	(1.98)	鉄	先端部欠	玄室北部床面	
M24	釘	(3.80)	0.40	0.30	(2.44)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室中央部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M25	釘	5.50	0.46	0.30	3.04	鉄	木質付着	玄室中央部下層	P L 31
M26	釘	(2.70)	0.41	0.25	(1.84)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部下層	
M27	釘	(4.10)	0.45	0.33	(3.54)	鉄	縦目・横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部下層	
M28	釘	(2.20)	0.25	0.30	(1.58)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部下層	
M29	釘	(4.60)	0.40	0.26	(2.94)	鉄	木質付着	玄室中央部表面	
M30	釘	(5.30)	0.50	0.40	(3.02)	鉄	縦目・横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部分表面	P L 31
M31	釘	(2.20)	0.40	0.30	(1.46)	鉄	先端部欠	玄室南部分表面	
M32	釘	(2.20)	0.43	0.50	(2.20)	鉄	先端部欠	玄室北部分表面	
M33	釘	(2.05)	0.35	0.40	(1.14)	鉄	先端部欠	玄室北部分表面	
M34	釘	(4.40)	0.52	0.40	(2.90)	鉄	先端部欠	玄室北部分表面	
M35	釘	(5.20)	0.49	0.41	(3.22)	鉄	縦目・横目方向の木質付着 先端部欠	玄室中央部表面	P L 31
M36	釘	(1.83)	0.48	0.34	(1.44)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室中央部表面	
M37	釘	(5.25)	0.35	0.32	(3.44)	鉄	2方向の横目方向の木質付着 先端部欠	玄室中央部下層	P L 31
M38	釘	(1.60)	0.35	0.32	(1.00)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室北部分表面	
M39	釘	(2.13)	0.50	0.40	(1.62)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部分表面	
M40	釘	6.10	0.45	0.37	4.04	鉄	縦目・横目方向の木質付着	玄室北部分表面	P L 31
M41	釘	(2.40)	0.48	0.40	(1.68)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部分表面	
M42	釘	(2.60)	0.50	0.30	(2.32)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室北部分表面	
M43	釘	(4.67)	0.40	0.25	(3.10)	鉄	横目方向の木質付着 頭部・先端部欠	玄室南部分表面	
M44	釘	(5.22)	0.40	0.33	(3.42)	鉄	縦目・横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部分表面	P L 31
M45	釘	(3.19)	0.39	0.36	(2.48)	鉄	縦目・横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部分表面	
M46	釘	(3.30)	0.21	0.32	(1.42)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南部分表面	
M47	釘	(3.25)	0.40	0.36	(1.62)	鉄	横目方向の木質付着 頭部・先端部欠	玄室中央部表面	
M48	釘	(5.21)	0.40	0.39	(3.58)	鉄	縦目・横目方向の木質付着 先端部欠	玄室中央部下層	
M49	釘	5.70	0.48	0.36	3.04	鉄	横目方向の木質付着	玄室中央部下層	P L 31
M50	釘	(6.22)	0.55	0.25	(4.36)	鉄	横目方向の木質付着 頭部欠	玄室下層	
M51	釘	(2.51)	0.51	0.31	(1.96)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室北東部分表面	
M52	釘	(2.19)	0.44	0.37	(1.60)	鉄	横目方向の木質付着 先端部欠	玄室南東部分表面	
M53	釘	5.70	0.46	0.36	3.40	鉄	横目方向の木質付着	玄室北東部分表面	P L 31
M54	釘	(4.30)	0.31	0.32	(1.80)	鉄	先端部欠	玄室北東部分表面	

第5号墳(第57～60図)

位置 調査区南部のF 5j9-0, G 5a・b9-0, G 6a・b1区で、標高81.4～84.4mの丘陵尾根上に位置している。本跡の南側に第1号墳が構築されている。

確認状況 調査前は周知されていない。地表面にわずかな高まりが観察され、石室材と考えられる石材が露出していたため、測量調査を行った。その結果、82.0～84.5mの等高線がわずかに南方に張り出している状況が確認された。この時点で長径17.5m、短径14mの円墳と推定され、ベルトを設定して表土除去を行ったところ、埋葬施設と周溝が確認された。

重複関係 第3号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 周溝外縁で長径18.8m、短径13.5mの楕円形状の円墳である。長径方向はN-6°-Eである。

墳丘 盛土の遺存は少なく、確認できた高さは最大45cmである。旧表土は第9層が相当し、土層の観察から周溝の内側と南東側を中心に残存していない範囲が認められる。墳丘の盛土は、第7・8・10・13・14・22・23層が相当する。天井石は失われていたが、その抜き取りの痕跡は確認できなかった。石室構築後、ローム混じ

りの褐色土を積みあげたものと考えられる。

周溝 全周している。上幅1.21～2.52m、下幅0.43～1.08m、深さ15～98cmで、壁は外傾してして立ち上がり、断面形は北側は逆台形、その他はU字形である。覆土は第3～6・17・18・22層で、レンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

墳丘・周溝土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、黒色粒子微量。粘性弱	12 褐色	ローム粒子微量粘性・締まり弱
2 褐色	ローム粒子多量、黒色粒子微量。粘性弱	13 褐色	焼土粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、黒色粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量。粘性弱
4 褐色	ローム粒子多量、黒色粒子微量。粘性・締まり弱	15 褐色	ローム粒子多量、黒色粒子少量
5 黒褐色	黒色粒子多量、ローム粒子・焼土粒子少量。締まり弱	16 褐色	ローム粒子多量・黒色粒子微量
6 褐色	ローム粒子多量	17 褐色	黒色粒子少量、ロームブロック微量
7 褐色	ローム粒子多量、黒色粒子微量。締まり弱	18 暗褐色	ローム粒子中量、黒色粒子微量
8 褐色	ローム粒子多量、黒色粒子・赤色粒子微量	19 暗褐色	ローム粒子中量、赤色粒子微量
9 黒褐色	黒色粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量。粘性弱	20 暗褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量。締まり弱
10 褐色	ローム粒子多量。締まり弱	21 暗褐色	ローム粒子中量、黒色粒子微量。粘性弱
11 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・鹿沼粒子微量	22 褐色	ローム粒子多量、赤色粒子微量。粘性弱
		23 褐色	ローム粒子多量、黒色粒子中量、鹿沼パミス少量

埋葬施設 中央部やや北寄り地下式の横穴式石室が構築されている。天井石は既に失われ、玄門部・羨道部も後世の破壊を受けており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と玄室を有する単室構造で、全長は4.61mである。玄室の規模は、内法で長さ2.80m、幅0.70～0.93mの若干胴の張った長方形で、残存している高さは157cmである。石室の主軸方向はN-6°-Eである。

羨道部は長さ1.40m、幅0.70～0.93mで、残存している高さは43～45cmである。南側には墓道が構築され、長さは柵石端から約6.8mである。墓道は周溝に向かって緩やかに傾斜している。

石室土層解説

1 黒暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量。締まり弱	10 灰黄褐色	粘土粒子多量、ロームブロック少量、炭化粒子微量。粘性・締まり強
2 黒暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量。締まり弱	11 濃い黄褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量。締まり弱	12 灰黄褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、鹿沼パミス少量。粘性・締まり強
4 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量。締まり弱	13 暗褐色	ローム粒子多量、黒色粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック中量。締まり弱	14 暗褐色	ローム粒子多量
6 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量。締まり強	15 黒褐色	ロームブロック少量、黒色粒子微量
7 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量。締まり弱	16 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、黒色粒子微量。粘性強
8 黒暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量		
9 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量		

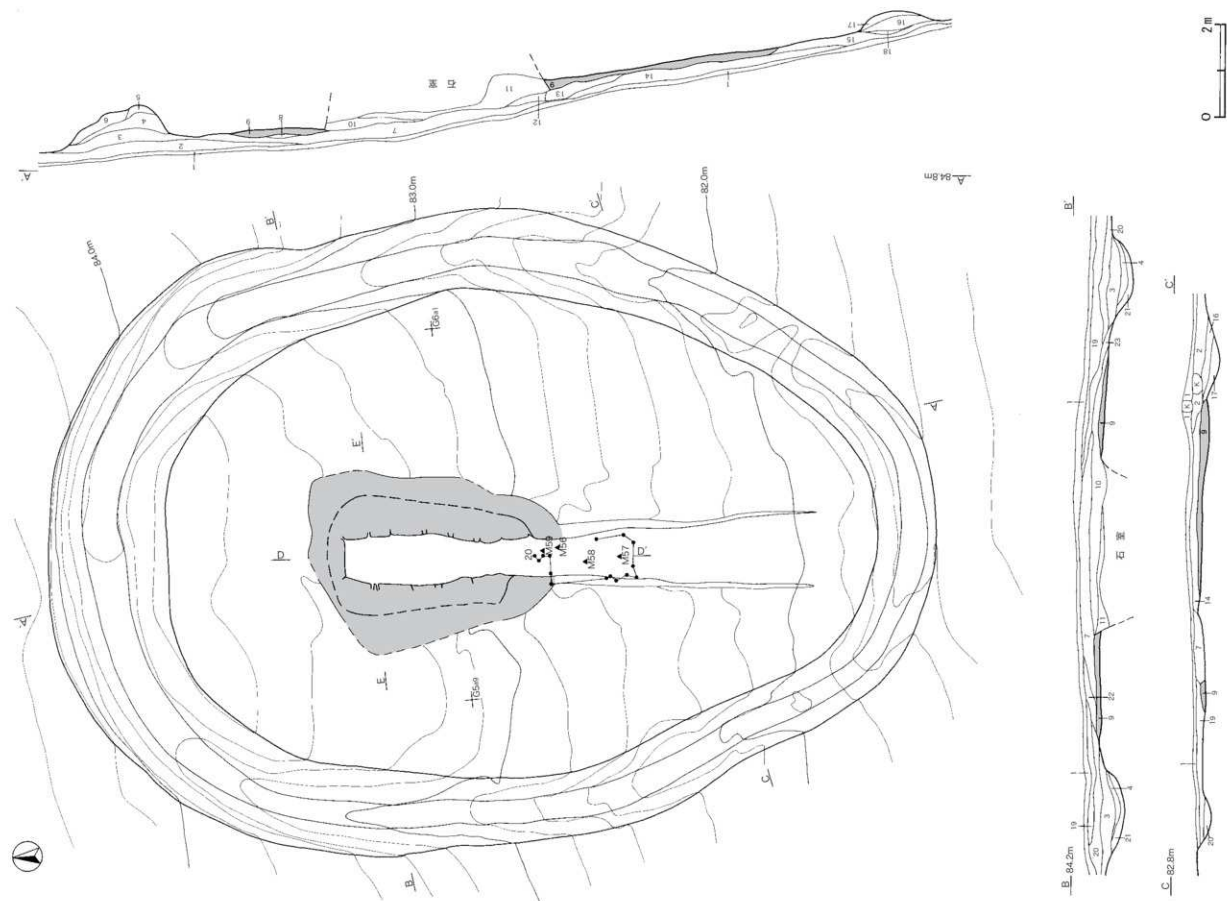
石室の側壁は長方形の割石を根石とし、奥壁側は根石と同じ規模の石材を積み上げている。玄門部側は小形の割石を、東側壁は根石の上に同規模の割石を1～2段積み上げて、西側壁は根石の上に直接小口積みしている。側壁は石室側に内傾して立ち上がっており、持ち送りが見られる。奥壁は、大形の石材を2段に積み重ねており、石材の合わせ目は平滑に処理されており、石室側は直立している。床面には礫が残存しており、本来は敷き詰められていたと考えられる。

玄門部は、推定長さ80cm、幅64cm、厚さ54cmの割石を柵石とし、玄室床面との段差は42cmである。側柱石は確認されなかった。羨道部は玄室寄りに玄室の根石とはほぼ同じ大きさの石を設置し、外側に小形の割石を小口積みにして袖部を構築している。

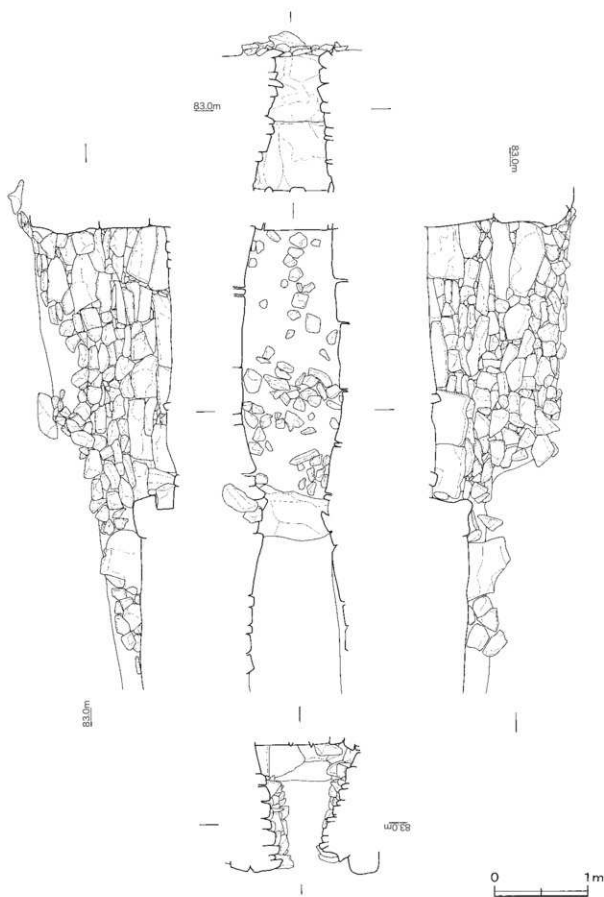
石室の掘り方は、長さ約10.7m、幅6.5mの不整楕円形で、地山を90～160cm掘り込んでいる。壁は、外傾して立ち上がっている。底面は、横断面が浅い皿状である。

表込めは、奥壁側は奥壁を掘り方の底面に設置した後、ローム混じりの褐色土を主体として埋めている。粘性・締まりの強い層は少なく、突き固められた形跡はあまり見られない。側壁側は底面に根石を設置して褐色土で固定した後、側壁を積み上げながらローム混じりの褐色土と粘土を多く含む褐色土又は灰褐色土を交互に埋めている。粘性・締まりの強い層が多いことから、突き固められたものと考えられる。

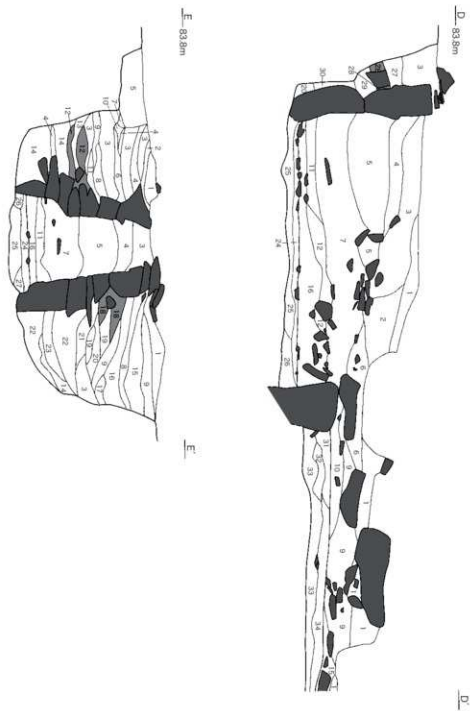
石室の閉塞は、玄室側に上層から礫が確認されていることから、礫によって行われていたものと考えられる。



第57图 第5号墳 墳丘夷测图



第58図 第5号墳 石室展開図



0 1m

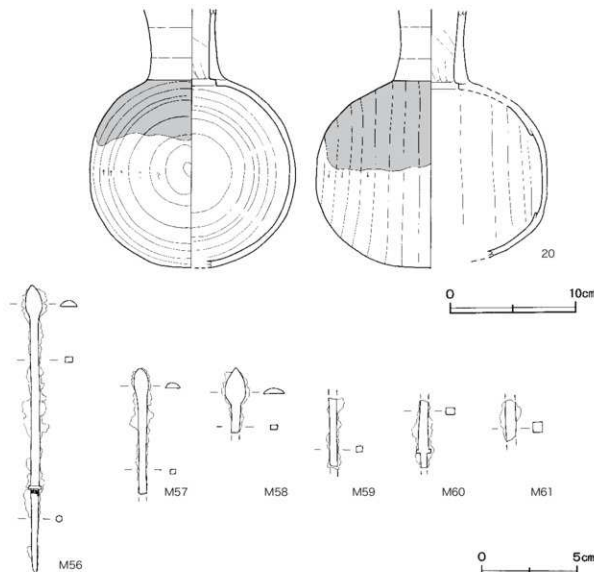
第59图 第5号墳 石室土層断面図

掘り方土層解説

17	にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、焼土ブロック少量、鹿沼パミス微量、粘性・締まり強	26	暗褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス・黒色粒子少量
18	褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、焼土粒子少量、鹿沼パミス微量、粘性強	27	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・黒色粒子少量
19	褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量	28	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、粘性強
20	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、粘性強	29	暗褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量
21	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	30	暗褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量、鹿沼パミス微量、粘性強
22	にぶい褐色	粘土粒子多量、ローム粒子中量、鹿沼パミス微量、粘性強	31	灰褐色	粘土粒子多量、ローム粒子少量、赤色粒子微量、粘性・締まり強
23	黄褐色	ローム粒子中量	32	褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量
24	褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス微量、粘性強	33	明褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量、粘性強
25	暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・黒色粒子少量、鹿沼パミス微量	34	暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、黒色粒子微量、粘性強

遺物出土状況 須恵器片9点(瓶類)、鉄器片6点(鉄鏝)のほか、縄文土器片25点も出土している。遺物は墓道の覆土下層から中層にかけて出土している。20は破片の状態で、M56～M61はそれぞれ不揃いな方向を向いて出土していることから、玄室から掻き出されたものと考えられる。

所見 本跡は楕円形を呈しており、円形古墳の中で最大の規模である。石室も第2号墳に次ぐ規模であり、同じく尾根の中央部付近に位置していることから、第2号墳の被葬者に続く世代が埋葬されたものと想定される。構築された時期は、石室の構築形態や出土遺物などから7世紀前葉と考えられる。



第60図 第5号墳出土遺物実測図

第5号墳出土遺物観察表(第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
30	須恵器	ワタ瓶	-	(20.5)	-	白色粒子	灰黄	良	外面回転へう削り・ロクロナデ 内面ロクロナデ	墓道底面	80% P.L.25

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M56	鉄鍔	15.30	0.90	0.30	10.10	鉄	韓国 鑿削 片丸造	墓道中層	P.L.31
M57	鉄鍔	(6.70)	0.80	0.28	(4.42)	鉄	鑿削 片丸造 鋭欠	墓道下層	P.L.31
M58	鉄鍔	(3.40)	1.10	0.25	(2.96)	鉄	鑿削 片丸造 鋭欠	墓道中層	P.L.31
M59	鉄鍔	(3.53)	0.38	0.31	(2.02)	鉄	抛削片	墓道中層	
M60	鉄鍔	(3.55)	0.50	0.41	(2.94)	鉄	韓国 抛削片	羨道部下層	
M61	鉄鍔	(2.20)	0.50	0.50	(2.94)	鉄	抛削片	羨道部下層	

第6号墳(第61・62図)

位置 調査区北部のD5h・i・j7~9区で、標高94.0~95.2mの丘陵尾根上に位置している。本路の南側に第2号墳、西側に第8号墳が構築されている。

確認状況 戦後に開墾を受けており、地形は改変されている。調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、表土除去後に石材が散乱していたため、ボーリングステッキによる探査とトレンチを設定したところ、埋葬施設と周溝が確認された。

規模と形状 北側は調査区域外に延び、全容は明らかではない。周溝外縁で長径12.9m、短径9.5mの円墳と推定される。長径方向はN-24°-Eである。

周溝 上幅1.22~2.78m、下幅0.38~0.85m、深さ0.40~0.65mで、壁は途中段を形成しながら外傾して立ち上がり、断面形は逆台形である。覆土はレンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

周溝土層解説

1	褐色	ロームブロック多量、黒色粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・締まり弱	4	褐色	ローム粒子多量、黒色粒子少量、粘性弱
2	黒褐色	ロームブロック・黒色粒子中量。粘性・締まり弱	5	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・黒色粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック多量、黒色粒子少量、炭化粒子微量			

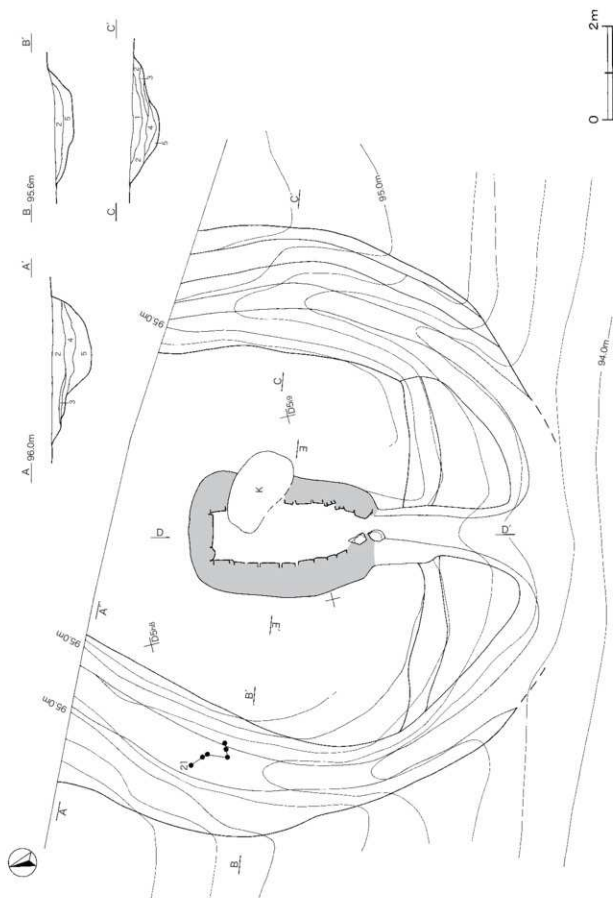
埋葬施設 中央部付近に半地下式の横穴式石室が構築されている。石室上部と羨道部は失われ、東側壁も破壊されている。玄室の規模は、内法で長さ2.54m、幅0.83~1.20mの若干胴の張った長方形で、残存している高さは63cmである。石室の主軸方向はN-19°-Eである。

南側には墓道が構築され、長さは榊石から約3.2mである。墓道は南に向かって緩やかに傾斜している。

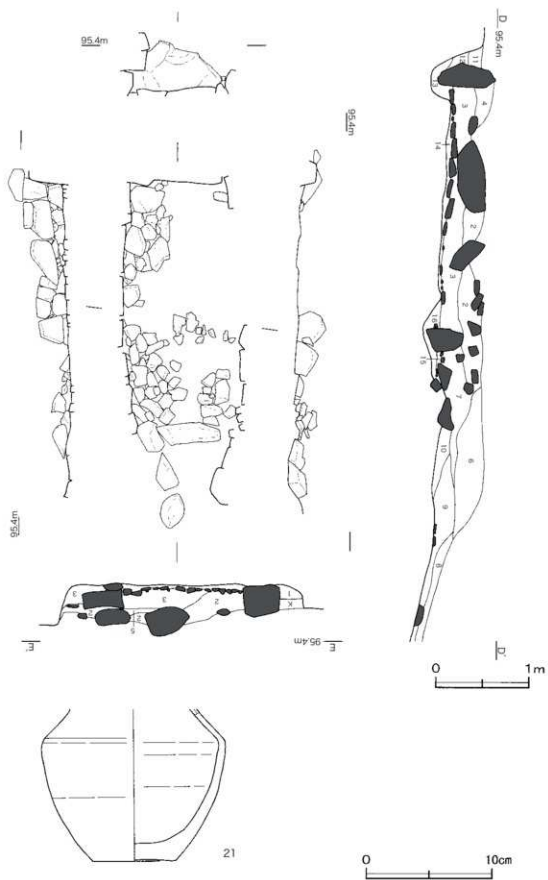
石室土層解説

1	褐色	ロームブロック多量、粘土粒子少量。粘性弱	5	褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量
2	褐色	ロームブロック多量、粘土粒子少量、炭化物微量。締まり弱	6	褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック中量。粘性弱
3	褐色	ローム粒子多量、粘土ブロック少量、炭化物微量。粘性・締まり弱	7	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量。締まり弱	8	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
			9	褐色	粘土粒子多量、ローム粒子中量。締まり強
			10	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量

石室の側壁は割石を小口積みにし、隙間には礫を充填している。壁は石室側に若干内傾又は直立している。奥壁は、高さ53cmの割石で構成され、石室側は直立している。床面には礫を敷き詰めている。



第61図 第6号墳 墳丘実測図



第62図 第6号墳 石室展開図・出土遺物実測図

玄門部は、長さ65cm、幅40cm、厚さ25cmの割石を柵石とし、玄室の床面との段差は25cmである。側柱石は確認されなかった。

石室の掘り方は、南側は不明であるが長さ4.0m、幅2.5mの隅丸長方形で、地山を25～43cm掘り込んでいる。壁は、外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、北壁側に幅60cm、深さ23cm、南側に幅60cm、深さ20cmの掘り込みが見られる。

表込めは、壁を積み上げながらローム混じりの褐色土を埋めている。第16層を除いて粘性・締まりの強い層は確認されず、突き固められた痕跡は認められない。

掘り方土層解説

11	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14	褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック微量
12	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	15	褐色	ロームブロック少量
13	褐色	ロームブロック多量、炭化物微量	16	褐色	ロームブロック中量、黒色粒子少量、締まり強

遺物出土状況 土師器片1点(甕類)、須恵器片10点(甕類)のほか、縄文土器片28点、石器片2点も出土している。21は、周溝の覆土中～下層にかけて破片の状態でも出土している。本来は墳丘上に供献されていたものが、周溝内に流れ込んだものと考えられる。

所見 掘り方の掘り込みは、第3・4号墳と比較すると浅く、本来は盛土の量が多い古墳であったと想定される。構築された時期は、石室の構築形態や出土遺物などから7世紀前葉と考えられる。

第6号墳出土遺物観察表(第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
21	須恵器	長頸甕	-	(12.0)	6.0	白色粒子・黒色粒子	灰白	普通	内外面口ロナデ	周溝中～下層	30%

第7号墳(第63～65図)

位置 調査区中央部のE6a3・4、E6b・c3～5区で、標高92.4～93.4mの丘陵尾根上に位置している。本跡の南西に第3号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、ボーリングステッキによる探査とトレンチによって埋葬施設と周溝が確認された。

規模と形状 北側は調査区域外に延び、全容は明らかではない。周溝外縁で長径11m、短径9mの楕円形状の円墳と想定される。長径方向はN-10°-Wである。

墳丘 遺存していない。盛土は薄く、流出してしまったものと考えられる。

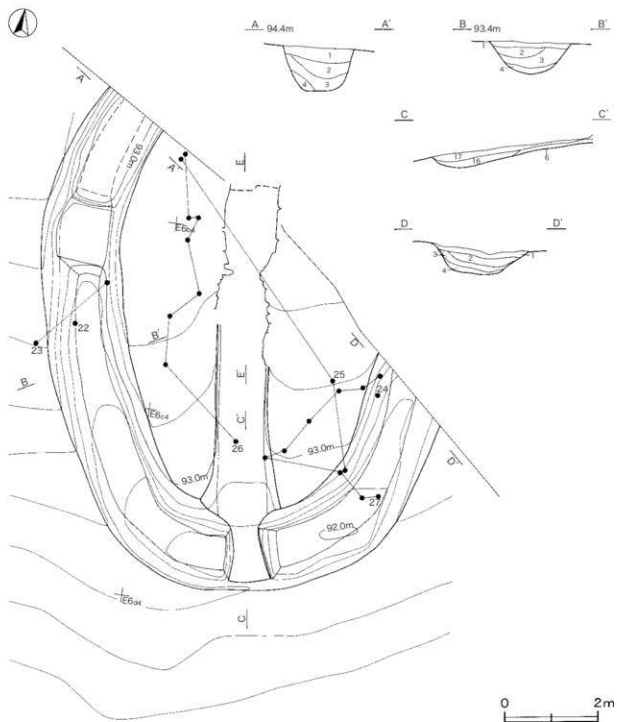
周溝 全周しているものと推定される。上幅1.6～1.7m、下幅0.5～0.8m、深さ44～92cmで、壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形又はU字形である。西側と南側の2か所に地山を掘り残して幅50～120cm、高さ約40cmの陸橋部を設けており、南側の陸橋部はそのまま墓道へと続いている。覆土はレンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

周溝土層解説

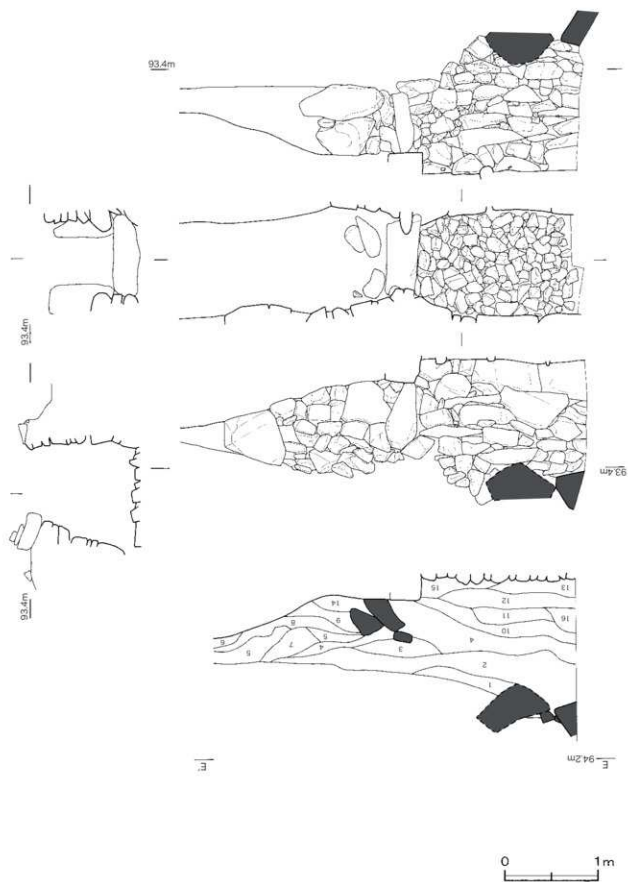
1	褐色	ローム粒子・黒色粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量、締まり弱	3	褐色	ローム粒子・黒色粒子微量、締まり弱
2	にぶい褐色	ローム粒子少量、黒色粒子微量、締まり弱	4	褐色	ローム粒子・黒色粒子微量

埋葬施設 中央部やや北寄りに地下式の横穴式石室が構築されている。石室の北側は調査区域外に延びており、全容は不明である。南側の天井石と柱石は失われており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と玄室を有し、調査された規模は全長で3.6mである。玄室の規模は、内法で長さ1.80m以上、幅0.72～1.12mの若干胴の張った長方形と想定され、高さは120cmである。石室の主軸方向はN-4°-Wである。

羨道部は長さ1.80m、幅0.60～1.08mで、残存している高さは100cmである。南側には墓道が構築され、長さは側柱石から約5.2mである。墓道は石室に向かって緩やかに傾斜している。



第63図 第7号墳 墳丘実測図



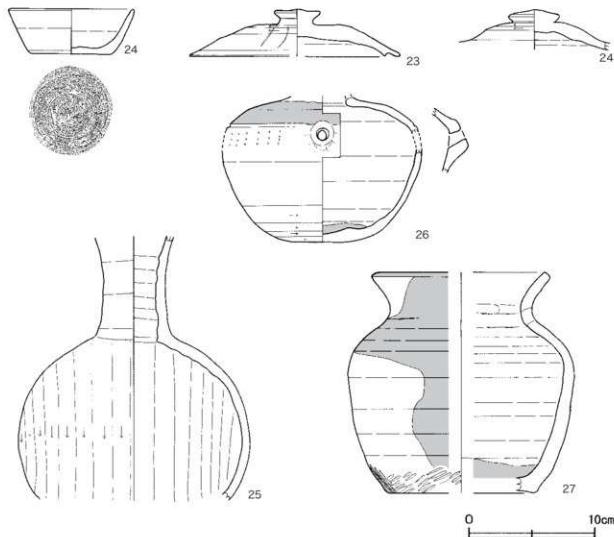
第64図 第7号墳 石室展開図

石室土層解説

1	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量。締まり弱	9	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	炭化粒子・鹿沼パミス微量。締まり弱	10	褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量。締まり弱
3	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子・鹿沼パミス微量	11	褐色	鹿沼パミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量。締まり弱
4	褐色	鹿沼粒子少量、粘土ブロック・ローム粒子微量。締まり弱	12	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量。締まり弱
5	褐色	鹿沼パミス中量、ローム粒子微量。締まり弱	13	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子微量	14	褐色	ローム粒子微量
7	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	15	灰褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
8	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量。締まり弱	16	褐色	ロームブロック・鹿沼パミス中量

石室の東側壁は奥壁側に長さ65cm、幅30cmほどの割石を根石とし、桐石との間には小形の割石を充填している。その上に一部根石と同じ大きさの石を積み上げているものの、大半は長さ30～60cm、幅15cm前後の割石を小口積みしている。西側壁は小形の割石を根石とし、その上にはほぼ同じ大きさの割石を小口積みしている。側壁は若干石室側に内傾して立ち上がりしており、持ち送りが見られる。床面には礫を敷き詰めている。

玄門部は長さ85cm、幅32cm、推定厚さ30cmの長方形の割石を設置して桐石とし、玄室床面との段差は25cmである。その上に長さ65～72cm、推定幅30cm、厚さ18～34cmの割石を立てて傾柱石としている。側柱石は墓道側に傾き、両側柱石の間は48～58cmである。羨道部は、長さ50～90cm、幅40～60cmの石材と、それより小形の割石を併用して構築されている。割石は小口積みになされ、若干内傾している。天井石は、大形の自然石を玄室上に2枚載せている。



第65図 第7号墳出土遺物実測図

石室は、厚さ18cmの板状の石材を玄関部に立てて閉塞している。

遺物出土状況 土師器片12点(坏類6, 甕類6), 須恵器片66点(坏類34, 瓶類18, 甕類14)が出土している。25・26はそれぞれ石室の東西から破片の状態で出土しており, 本来は墳丘上に供献されたものと考えられる。27は墓道の底面から破片の状態で出土している。22・23は西側の陸橋部付近の覆土上層から, 24は東側周溝の底面付近からそれぞれ出土しており, 墳丘上から転落したものと考えられる。

所見 本跡の周溝から確認された南側の陸橋部は墓道へと続いており, 石室の出入りに使用されたものと考えられる。本跡の南側の周溝は, 他の古墳よりも深いために陸橋部が設けられたものと推定される。構築された時期は, 石室の構築形態や出土遺物などから7世紀中葉で, 8世紀前葉まで土器が供献されたものと考えられる。

第7号墳出土遺物観察表(第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	須恵器	坏	10.0	3.6	6.5	長石・白色粒子	灰	良	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り	周溝上層	100% P.L.21
23	須恵器	蓋	[16.8]	3.7	-	白色粒子・黒色粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り 内外面ロクロナデ	周溝上層	70% ヘラ記号[1]
24	須恵器	蓋	-	(3.2)	-	長石	灰	良	天井部回転ヘラ削り 内外面ロクロナデ	周溝下層	50%
25	須恵器	ワカ瓶	-	(20.9)	-	長石・黒色粒子	灰褐	良	外面回転ヘラ削り・ロクロナデ 内面ロクロナデ	石室上	40%
26	須恵器	甕	-	(12.8)	-	長石・黒色粒子	褐灰	良	内外面ロクロナデ 唇部刺突文 底部回転ヘラ削り	石室上	40%
27	須恵器	甕	10.4	17.6	10.4	石英・白色粒子	灰赤	良	内外面ロクロナデ 体部下端平行叩き	墓道底面	70% 一部自然蝕

第8号墳(第66・67図)

位置 調査区中央部のD5g1~3, D5i・j1~2, E4a・b0区で, 標高92.8~94.4mの丘陵尾根上に位置している。本跡の東側に第6号墳, 南東側に第2号墳, 南西側に第9号墳が構築されている。

確認状況 戦後に開墾を受けており, 地形は改変されている。調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり, 表土除去後に石材が検出されたため, ボーリングステッキによる探査とトレンチを設定したところ, 埋葬施設と周溝が確認された。

規模と形状 本跡の北側は調査区域外に延び, 全容は明らかではない。周溝外縁で長径約11.6m, 短径約10mの円墳と推定される。長径方向はN-65°-Wである。

周溝 全周していると考えられる。上幅1.2~2.86m, 下幅0.66~0.94m, 深さ20~50cmで, 壁は東側は2段にわたって, その他は緩やかに外傾して立ち上がり, 断面形はU字形である。覆土はレンズ状の堆積状況であることから, 墳丘上と周溝外側からの流入によって, 自然に堆積したと考えられる。

周溝土層解説

1	褐	色	ロームブロック・黒色粒子少量	6	褐	色	ロームブロック中量。粘性弱
2	褐	色	ロームブロック中量	7	褐	色	黒色粒子少量
3	褐	色	ロームブロック少量	8	褐	色	ロームブロック少量。粘性弱
4	褐	色	ロームブロック中量, 黒色粒子少量	9	灰	褐色	黒色粒子微量
5	極暗	褐色	ローム粒子少量	10	灰	褐色	ロームブロック少量

埋葬施設 中央部に地下式の横穴式石室が構築されている。天井石は石室内に転落しており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と玄室を有する単室構造で、全長は2.85mである。玄室の規模は、内法で長さ2.00m、幅0.67～1.00mの若干削れた長方形で、残存している高さは115cmである。石室の主軸方向はN-1°-Wである。

羨道部は西袖部が残存しており、長さ0.70m、幅0.65mで、残存している高さは45cmである。南側には墓道が構築され、長さは柵石端から約2.7mである。墓道と周溝の境界は明瞭ではない。墓道は周溝に向かって緩やかに傾斜している。

石室土層解説

1	褐色	ローム粒子多量、粘土ブロック少量	8	褐色	粘土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子・赤色粒子微量
2	褐色	ローム粒子多量、赤色粒子少量	9	灰褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量
3	灰褐色	粘土ブロック・ローム粒子中量	10	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、赤色粒子微量	11	灰褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・黒色粒子少量
5	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	12	褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量
6	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子中量	13	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量
7	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・黒色粒子少量			

石室の側壁又は台形の割石を根石として設置した後、扁平な割石を小口積みになっている。使用された石材は、東側が若干小振りである。側壁は石室側に若干内傾して立ち上がっている。奥壁は、最下段を台形の割石で構成されている。石室側はほぼ直立している。床面には襪を敷き詰めている。

玄門部は、推定の長さ70cm、幅50cm、厚さ35cmの割石を柵石とし、玄室床面との段差は55cmである。側柱石は確認されなかった。羨道部は、玄室より小形の割石を積み上げたものと考えられる。

石室の掘り方は、長さ3.5m、幅2.2mの隅丸長方形で、地山を約90cm掘り込んでいる。壁は、ほぼ直立している。底面は、ほぼ平坦である。

裏込めは、奥壁側はローム混じりの褐色土を埋め、上部に粘土を含む灰色土を埋めている。側壁側は根石を粘土を含む灰色土で固定し、側壁を積み上げながら灰色土とローム混じりの褐色土をほぼ交互に埋めている。

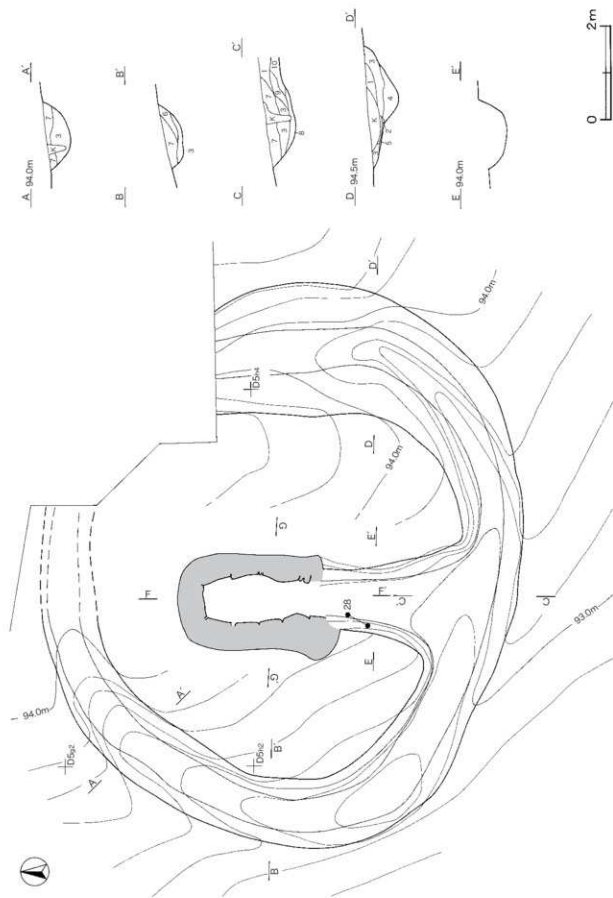
石室の閉塞は、閉塞石は確認されず、玄門部付近の第11層は粘土を含んでいることから、粘土によって行っていたものと想定される。

掘り方土層解説

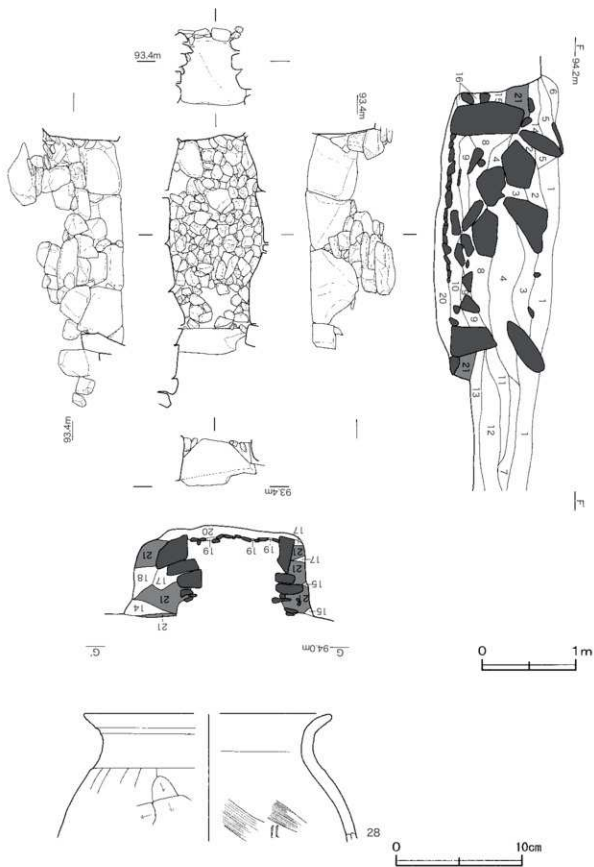
14	褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	18	褐色	褐色ロームブロック中量、粘土粒子少量
15	褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	19	褐色	褐色ローム粒子・粘土粒子少量
16	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量	20	褐色	ローム粒子中量、鹿沼パズルス少量
17	褐色	ローム粒子中量、締まり前	21	灰褐色	粘土粒子多量

遺物出土状況 土師器片38点(坏類4、甕類34)、須恵器片4点(坏類1、甕類3)のほか、縄文土器片78点(深鉢)、石器片3点(磨石)も出土している。28は墓道の覆土層から破片の状態で出土しており、墳丘上から流れ込んだものと考えられる。

所見 本跡の玄室には、根石に大形の割石を使用するという特徴が見られる。石室は地山を大きく掘り込んで構築されており、少ない労力で天井石を玄室上に設置する工夫が見られる。玄室の平面形は軽い胴張りがあり、石材の積み方など他の古墳と共通性が認められる。また、玄門部に側柱石は確認されなかったが、第4号墳のように石材が抜き取られた可能性が考えられる。構築された時期は、石室の構築形態などから7世紀代と考えられる。



第66図 第8号墳 墳丘実測図



第67图 第8号墳 石室展開図・出土遺物実測図

第8号墳出土遺物観察表(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
									口縁部ナデ外面ヘラ削り 内面ヘラ削り後ナデ		
28	土師器	甕	[19.6]	(10.1)	-	石灰・長石	橙	普通	口縁部ナデ外面ヘラ削り 内面ヘラ削り後ナデ	墓道土層	5%

第9号墳(第68～70図)

位置 調査区中央部のD 4i・j9～10, D 5i・j 1～2, D 4i・j0, E 4a・b0, E 5a・b1区で、標高90.8～92.2mの西側斜面部に位置している。本跡の東側に第2号墳、北東側に第8号墳、南西側に第10号墳、北西側に第15号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、表土除去後に石材を検出したため、ボーリングステッキによる探査とトレンチを設定したところ、埋葬施設と周溝が確認された。

規模と形状 周溝外縁で長径14.7m、南北10.7mの楕円形状の円墳である。主軸方向はN-3°-Wである。

周溝 全周している。上幅1.5～2.7m、下幅0.54～1.4m、深さ30～120cmで、壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形又はU字形である。覆土はレンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

周溝土層解説

1	にぶい褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量。粘性・締まり弱	6	褐色	色	ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼パミス微量
2	暗褐色	黒色粒子中量、ロームブロック少量。粘性・締まり弱	7	褐色	色	ロームブロック中量、黒色粒子微量
3	褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量	8	褐色	色	ローム粒子中量、黒色粒子少量、炭化粒子・鹿沼パミス微量
4	にぶい褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量	9	褐色	色	ローム粒子中量、黒色粒子微量。粘性・締まり弱
5	褐色	ロームブロック中量、粘性弱	10	灰褐色	色	ロームブロック・黒色粒子少量

埋葬施設 中央部に地下式の横穴式石室が構築されている。天井石は既に失われており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と支室を有する単室構造で、全長は5.30mである。支室の規模は、内法で長さ2.5m、幅0.77～1.02mの若干側の張った長方形で、残存している高さは126cmである。石室の主軸方向はN-1°-Eである。

羨道部は長さ2.00m、幅0.77～0.85mで、高さ74cmである。南側には墓道が構築され、長さは側柱石から約4.7mである。墓道は周溝に向かって緩やかに傾斜している。

石室土層解説

1	褐色	ローム粒子多量、粘土ブロック少量	8	灰褐色	色	ローム粒子中量、粘土粒子・赤色粒子少量
2	褐色	ローム粒子多量、赤色粒子微量	9	褐色	色	ローム粒子中量、粘土粒子微量。締まり弱
3	暗褐色	ロームブロック・黒色粒子少量	10	褐色	色	ロームブロック中量、黒色粒子少量。締まり弱
4	暗褐色	ロームブロック中量、黒色粒子少量	11	褐色	色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量
5	暗褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量。締まり弱	12	褐色	色	ローム粒子・粘土粒子中量
6	褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	13	褐色	色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
7	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・赤色粒子・黒色粒子少量	14	褐色	色	ロームブロック中量、黒色粒子微量

石室構築 側壁は大形の割石の平坦面を石室内部に向けて根石とし、その上に若干小形の割石を小口積みにして隙間には礫を充填している。玄門部側には小形の割石を積み上げている。石材の側面を水平方向に揃えようとしており、比較的横目地が通った積み方をしている。側壁は若干内傾して立ち上がっており、奥壁側では持ち送りが見られる。奥壁は、台形の1枚石で構成されている。上部には天井石との間に充填された方形の割石が残存し、石室側はほぼ直立している。床面は、礫が第29・30層の上面からそれぞれ確認されたことから、2面からなると考えられる。

玄門部は、推定長さ90cm、推定幅52cm、厚さ27cmの割石を設置して欄石とし、玄室床面との段差は20cmである。その上に長さ67～70cm、推定幅30cm、厚さ22～23cmの割石を立てて欄柱石としている。欄柱石は玄室側に傾き、両側柱石の間は43～45cmである。羨道部は、玄室より小形の割石を小口積みにして袖部を構築している。西側袖部の南側と、東側袖部の上部は礫を乱雑に積んでいる。

石室の掘り方は、長さ6.24m、幅2.92mの隅九長方形で、地山を40～124cm掘り込んでいる。規模が大きく、南側は墓道にまで達している。壁は、北・東壁はほぼ直立し、南・西壁は外傾して立ち上がっている。底面は、概ね平坦である。

表込めは、奥壁側は奥壁を掘り方底面に設置した後ローム混じりの褐色土を埋めており、最上部に粘土を用いている。側壁側は、側壁を積み上げながら粘土を含む灰褐色土とロームを主体とする褐色土を交互に埋めている。

石室は、欄石上に推定長さ50cm、幅30cm、厚さ16cmの板状の割石が残存していたことから、この石材を用いて閉塞が行われたものと考えられる。

掘り方土層解説

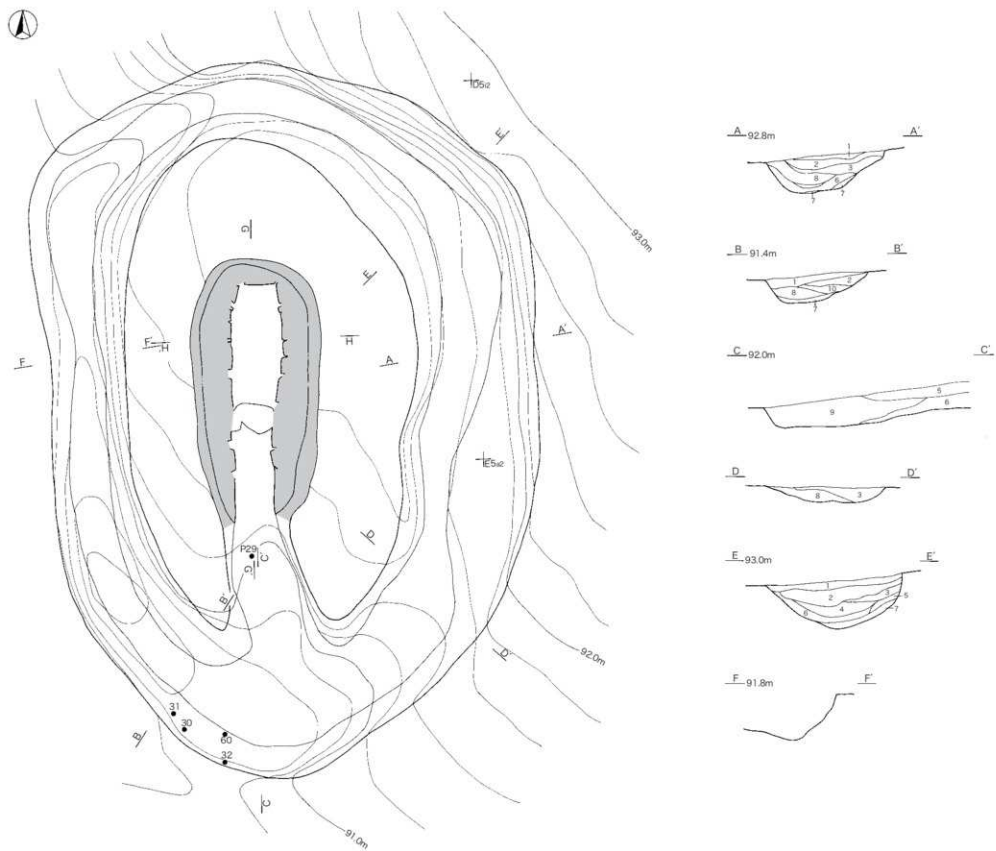
15	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、締まり面	23	灰褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量
16	褐色	ロームブロック中量	24	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
17	褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、粘性面	25	灰褐色	粘土ブロック・ローム粒子中量
18	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・黒色粒子少量	26	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量
19	褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、鹿沼パミス少量	27	灰黄褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
20	褐色	ロームブロック中量、黒色粒子少量、粘土ブロック微量	28	褐色	ロームブロック中量
21	褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	29	明褐色	ローム粒子中量
22	褐色	ロームブロック中量、ブロック少量、鹿沼パミス・黒色粒子微量	30	褐色	ローム粒子少量、赤色粒子・黒色粒子微量
			31	灰褐色	粘土粒子少量、締まり強
			32	褐色	ローム粒子少量、黒色粒子微量

遺物出土状況 須恵器片16点(甕類4、瓶類11、高坏1)のほか、縄文土器片187点、石器片8点も出土している。29は墓道の覆土下層から破片の状態で出土している。30～32・60は墓道に接する南側周溝の覆土上層付近から、それぞれ破片の状態で出土している。30～32・60は、墳丘上に供養されていた土器が流れ込んだものと考えられる。

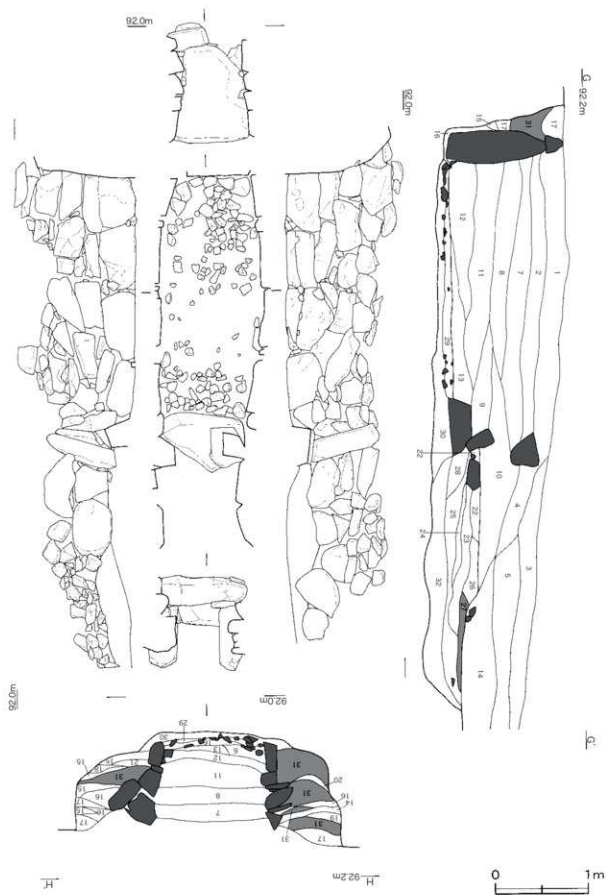
所見 石室の掘り方は玄室の部分だけでなく、墓道側にも及んでいることが確認された。掘り方の掘り込みは深く、天井石は原地形の傾斜を利用して側壁に乗せられたと考えられる。玄室の底面は2面確認され、少なくとも2期にわたって埋葬が行われたものと考えられる。構築された時期は、石室の構築形態や出土遺物などから7世紀中葉と考えられる。

第9号墳出土遺物観察表(第70図)

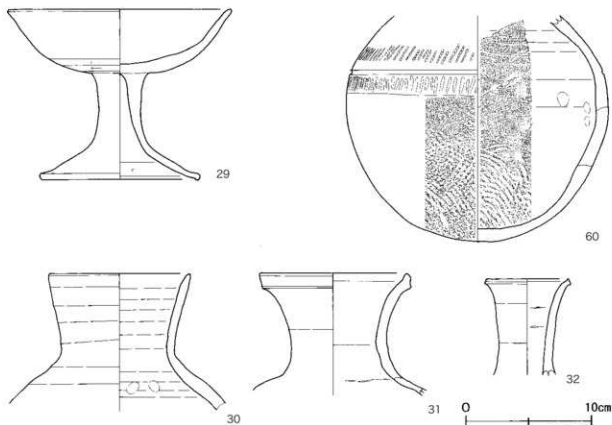
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	須恵器	高坏	17.7	13.5	12.4	白色粒子・黒色粒子	灰白	普通	坏部下層・脚部内面へラ 掘り内外面口クロナデ	墓道下層	70%
30	須恵器	提瓶	11.1	(10.9)	-	石英・白色粒子	灰	普通	天井部回転へラ削り 内外面口クロナデ	周溝上層	20%
31	須恵器	提瓶	10.7	(9.8)	-	白色粒子・黒色粒子	灰黄	普通	内外面口クロナデ	周溝上層	10%
32	須恵器	瓶	6.4	(7.6)	-	雲母・白色粒子・黒色粒子	灰白	良	内外面口クロナデ	周溝上層	10%
60	須恵器	瓶	-	(18.0)	-	石英・白色粒子	オリーブ黒	良	肩部刻突文・横目 外面平行叩き 内面同心円状具痕	周溝上層	40%



第68図 第9号墳 墳丘実測図



第69図 第9号墳 石室展開図



第70図 第9号墳出土遺物実測図

第10号墳(第71～73図)

位置 調査区西部のE4b9区で、標高90.0mの西側斜面部に位置している。本跡の東側に第9号墳が、南側に第14号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認で、第9号墳の周溝確認作業時に埋葬施設が確認された。

埋葬施設 地下式の石室である。天井石は既に失われており、石室内には土砂が流入していた。石室は南側に開口し、羨道部と玄室を有する単室構造で、全長は3.72mである。玄室の形状は、内法で長さ2.34m、幅0.60～1.06mの羽子板形で、残存している高さは102cmである。石室の主軸方向はN-14°-Wである。

羨道部は長さ0.50m、幅0.50mで、残存している高さは65cmである。南側に墓道が構築され、長さは御柱石から約0.8mである。墓道は南に向かって階段状に立ち上がっている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------|--------|------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量 | 6 灰黄褐色 | ローム粒子微量、粘性・締まり強 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 灰褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、粘性強 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、粘性強 | 8 灰黄褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量、粘性・締まり強 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | 9 褐色 | ローム粒子中量、粘性強 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子微量、粘性強 | 10 褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量、粘性・締まり強 |

石室の側壁は方形又は長方形の切石を根石とし、東西とも3枚で構成されている。根石は、奥壁側に大形の石材が使用され、一部には設計のためと考えられる線刻が見られる。根石の上には、扁平な割石を小口積みになっている。東側壁は若干内傾して、西側壁は直立しており、奥壁近くでは持ち送りが認められる。奥壁は、最下段を台形と逆台形の2枚の石材で構築されている。奥壁と側壁の隙間には割石や礫が充填され、上部には扁

平な割石を小口積みにしている。奥壁は若干内傾して立ち上がっている。床面は礫を敷き詰めている。

玄門部は、長さ78cm、幅65cm、厚さ14cmの割石を柵石とし、玄室床面との段差は20cmである。その上に長さ53～65cm、推定幅19～20cm、厚さ11～23cmの割石を西側は直接、東側は割石を1枚介して立てて側柱石としている。側柱石は奥壁側に傾き、両側柱石の間は35～45cmである。羨道部は、2～3個の礫を積み上げて袖部を構築されている。羨道部は、小形の割石や礫を積み上げて構築している。

石室の掘り方は、長さ4.28m、幅2.65mの隅丸長方形で地山を60～99cm掘り込んでいる。壁は外傾して立ち上がり、南壁は墓道を構成している。底面は若干起伏がある。

表込めは、奥壁及び側壁の根石を掘り方の底面に設置した後、粘土混じりの灰褐色土とロームを主体とする土を交互に埋めている。

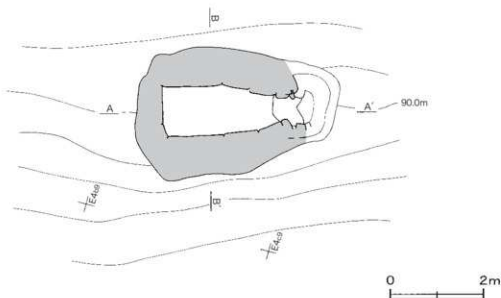
石室は長さ65cm、幅55cm、厚さ10cmの台形の割石で玄門部を閉鎖した後、礫を積み上げて閉塞されている。さらに墓道部分を粘性の強い土層で埋めている。

掘り方土層解説

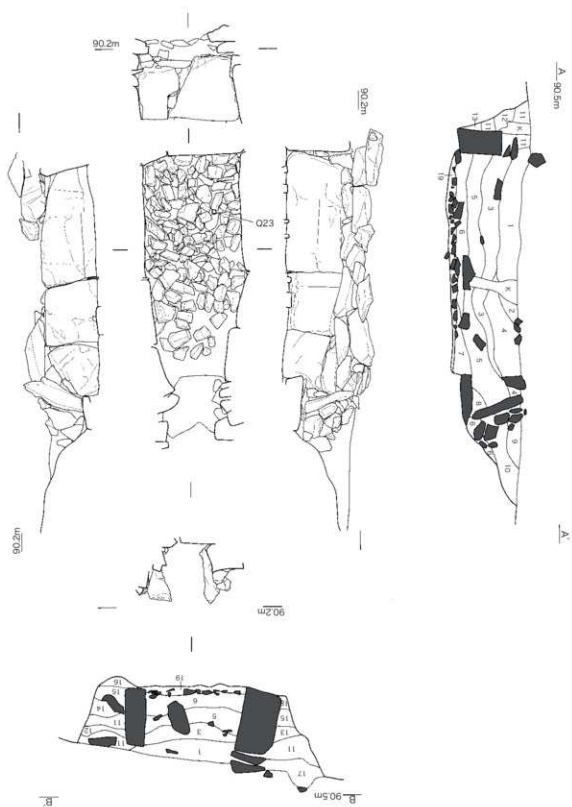
11 深い黄褐色	ローム粒子中量。粘性強	16 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量。粘性・締まり強
12 深い黄褐色	ローム粒子少量	17 暗褐色	ロームブロック少量、炭屑バミス微量
13 褐色	ローム粒子少量	18 深い褐色	ローム粒子中量
14 灰褐色	粘土粒子少量	19 明褐色	ローム粒子中量。粘性・締まり強
15 暗褐色	ローム粒子中量。粘性・締まり強		

遺物出土状況 土師器片1点(坏類)、須恵器片8点(坏類1、甕類6、瓶類1)、石製品5点(勾玉1、白玉3、切子玉1)、ガラス製品15点(小玉)、鉄器片1点(鉄鏃)のほか、縄文土器片20点も出土している。Q23は玄室東寄りの床面上から、その他のガラス小玉も東寄りの床面から出土している。

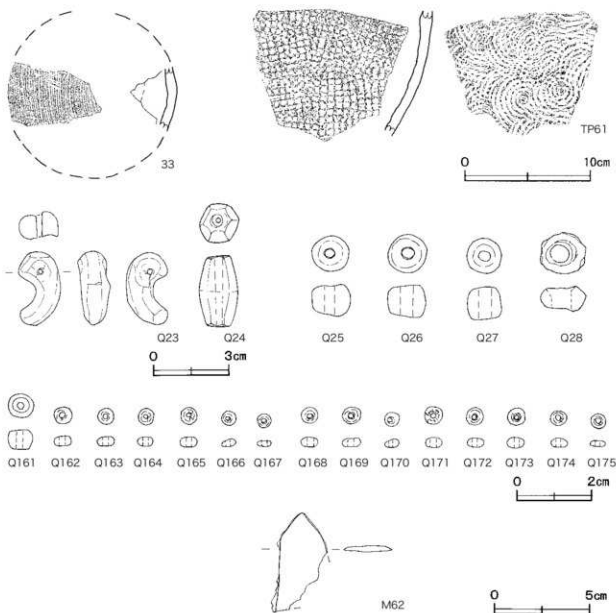
所見 埋葬施設には切石が使用されており、他の石室とは異なる技法で構築されている。玄室の南側には短い羨道部と階段状の墓道が構築されており、構造的には筑波山南麓から霞ヶ浦周辺に分布している石棺系石室に類似している。時期は、石室の構築形態及び出土遺物から7世紀中葉と考えられる。



第71図 第10号墳 墳丘実測図



第72図 第10号墳 石室展開図



第73図 第10号墳 出土遺物実測図

第10号墳出土遺物観察表(第73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
33	須恵器	提瓶	-	(5.1)	-	石英	灰	良	外面掻目 内面ロケロナア	石室覆土中	5%
TP61	須恵器	甕	-	-	-	長石	黄灰	良	外面格子印き 内面同心円当て具痕	石室覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q23	勾玉	2.90	1.60	1.20	6.95	ヒスイナ	片面穿孔	玄室床面	P L 27
Q24	切子玉	2.81	1.58	0.48	9.05	水晶	片面穿孔	玄室北西部	P L 27

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	白玉	0.82	0.98	0.27	1.00	ガラス	片面穿孔	玄室覆土中	P L 27
Q26	白玉	0.84	1.02	0.29	1.16	ガラス	片面穿孔	玄室南東部	P L 27
Q27	白玉	0.84	0.95	0.31	0.68	ガラス	片面穿孔	玄室北東部	P L 27

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q28	ガラス玉	0.62	1.17	0.70	1.46	ガラス	鉛 ガラスカ	玄室北東部	P L 27
Q161	ガラス小玉	0.48	0.64	0.20	0.31	ガラス	面取り有り	玄室南東部	P L 27
Q162	ガラス小玉	0.25	0.43	0.17	0.07	ガラス	面取り有り	玄室南東部	P L 27
Q163	ガラス小玉	0.25	0.41	0.16	0.05	ガラス		玄室南東部	P L 27
Q164	ガラス小玉	0.26	0.44	0.16	0.07	ガラス		玄室南東部	P L 27
Q165	ガラス小玉	0.26	0.44	0.15	0.08	ガラス		玄室南東部	
Q166	ガラス小玉	0.21	0.38	0.15	0.05	ガラス		玄室北東部	
Q167	ガラス小玉	0.17	0.35	0.18	0.04	ガラス		玄室北東部	
Q168	ガラス小玉	0.25	0.43	0.17	0.07	ガラス		玄室北東部	
Q169	ガラス小玉	0.24	0.47	0.15	0.07	ガラス		玄室北東部	P L 27
Q170	ガラス小玉	0.23	0.36	0.11	0.04	ガラス		玄室南西部	P L 27
Q171	ガラス小玉	0.24	0.45	0.15	0.07	ガラス	歪み有り	玄室南西部	P L 27
Q172	ガラス小玉	0.22	0.45	0.20	0.07	ガラス		玄室北東部	P L 27
Q173	ガラス小玉	0.24	0.44	0.19	0.06	ガラス	歪み有り	玄室北東部	P L 27
Q174	ガラス小玉	0.24	0.42	0.11	0.06	ガラス		玄室覆土中	P L 27
Q175	ガラス小玉	0.17	0.39	0.11	0.04	ガラス		玄室覆土中	P L 27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M62	鉄鏝	(5.20)	(2.80)	0.28	(8.55)	鉄	柳葉 平造 鏝身部・鏝柄欠	玄室北東部下層	P L 31

第11号墳(第74・75図)

位置 調査区中央部部のF5b・c9~0区で、標高87.2~88.8mの丘陵尾根上に位置している。本跡の北東に第3号墳が構築されている。

確認状況 調査前の現況は山林である。これまで墳丘の高まりや周溝は未確認であり、表土除去後に若干の石材が散乱していたため、ボーリングステッキによる探査によって埋葬施設が確認された。

重複関係 第23・25号土坑を掘り込んでいる。

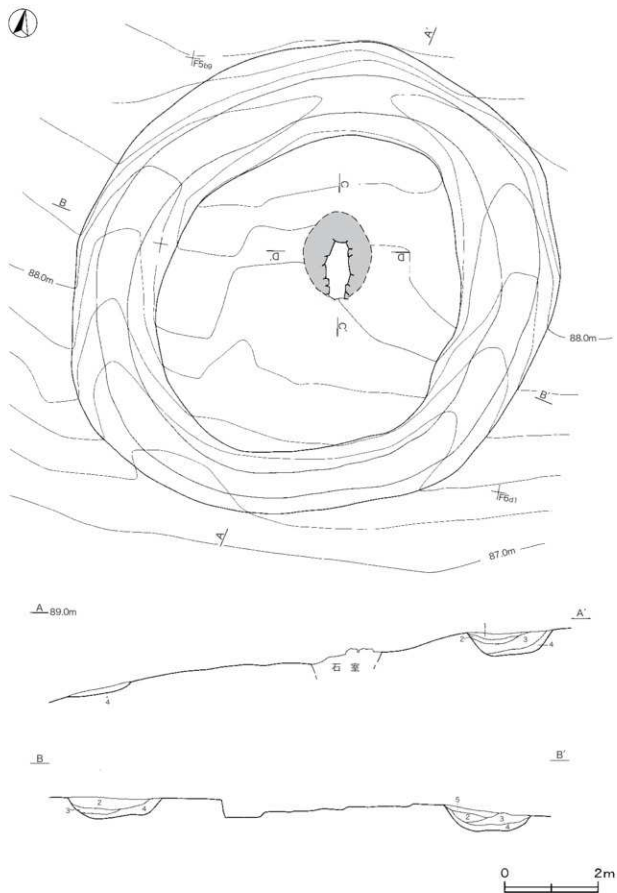
規模と形状 周溝外縁で長径11.0m、短径9.8mの円墳である。主軸方向はN-37°-Eである。

周溝 全周している。上幅1.28~2.00m、下幅0.48~1.00m、深さ10~50cmで、壁は外傾して立ち上がり、断面形状は逆台形である。覆土はレンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

周溝土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック・黒色粒子中量。締まり強 | 4 黒 色 | ロームブロック多量、黒色粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック中量、黒色粒子少量 | 5 黒 褐色 | ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量。 |
| 3 暗 褐色 | ロームブロック中量、黒色粒子微量 | | 締まり弱 |

埋葬施設 北側に横穴系の小石室が構築されている。天井石は、奥壁上の1つを除いて失われている。石室の南に石材が散乱しており、これらは天井石の可能性が考えられる。石室は南側に開口し、羨道部は確認できなかった。規模は、内法で長さ1.02m、幅0.26~0.48mの楕形で、現存している高さは48cmである。石室の主軸方向はN-9°-Wである。



第74図 第11号墳 墳丘実測図

石室土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・黒色粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子多量、締まり強
2 暗褐色 ロームブロック中量

石室の側壁は、扁平な割石を立てて根石として設置した後、礫を小口積みになっている。側壁は石室側に内傾して立ち上がっており、持ち送りが見られる。奥壁は、最下段を基底部幅20cm、高さ26cmの台形の割石を設置し、その上に2段割石を積み上げている。基底部の石は外傾して立ち上がっており、2段目以降に持ち送りが見られる。床面には礫を敷き詰めている。

玄門部は、長さ42cm、幅16cm、推定厚さ7cmの割石を楣石とし、玄室床面との段差は見られない。

石室の掘り方は、長さ1.8m、幅1.6mの楕円形で、地山を48～60cm掘り込んでいる。壁は、北壁は直立して、その他の壁は外傾して立ち上がっている。底面は、西側に幅20cm、深さ10cmの掘り込みが見られ、そのほかは平坦である。

表込めは、奥壁及び側壁の根石を掘り方の底面に設置した後、ローム混じりの褐色土を側壁に積み上げながら埋めている。締まりの強い層が見られることから、突き固めたと考えられる。

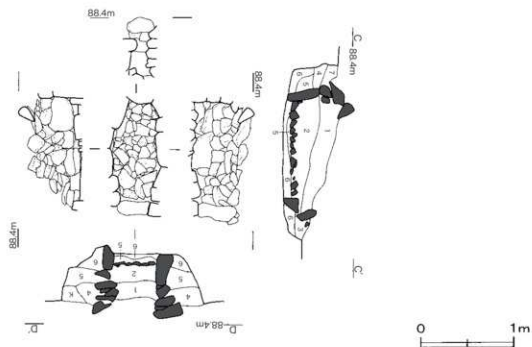
石室の閉塞は、長さ30cm、幅21cm、厚さ10cmほどの割石が数個楣石に接して残存していることから、これらの割石を積み上げて行ったと考えられる。

掘り方土層解説

- 4 暗褐色 ローム粒子中量、締まり強 6 褐色 ロームブロック多量、締まり強
5 暗褐色 ロームブロック中量、締まり強 7 極暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片4点(坏類3、甕類1)のほか、縄文土器片(深鉢)3点、石器片3点も出土している。破片のため、図示できなかった。

所見 石室の内法で長さ1.02mであることから、成人の伸展葬は困難で、火葬などの二次的な埋葬か小人の埋葬が行われたものと考えられる。閉塞石は見られるものの楣石の長さは40cmほどであることから、石室への埋葬は天井石を設置する前に行ったものと想定される。構築された時期は、石室の構築形態から7世紀中葉と考えられる。



第75図 第11号墳 石室展開図

第12号墳(第76・77図)

位置 調査区中央部のE 6j4区で、丘陵尾根上の標高89mの緩斜面に位置している。本跡の南西側に第3号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。表土除去後に埋葬施設が確認された。

埋葬施設 竪穴系の小石室である。4枚の扁平な割石が蓋石として使用され、隙で石材間の隙間を充填している。石室内には土砂が流入していた。石室の形状は、内法で長さ1.78m、幅0.32～0.51mの南側がやや狭い長方形で、現存している高さは51cmである。石室の主軸方向はN-27°-Eである。

石室土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・粘土粒子・黒色粒子微量。締まり弱 3 赤い褐色 ローム粒子微量。締まり弱
2 褐色 ローム粒子微量。締まり弱

石室の側壁は基本的に3枚の扁平な割石で構築されている。北壁寄りの2枚は扁平な面を石室側に向け、壁を1枚で構築している。南側は最下段に根石を設置し、西壁は二段積み、東壁は割石を小口積みになっている。側壁は若干内傾しており、その上に蓋石を設置している。北壁は扁平な1枚の割石を立てており、石室側はほぼ直立している。南壁は割石を立て、その上に割石を二段にわたって平積みしている。床面は北側に2枚の割石を、南側は礫を敷き詰めている。北壁は1枚で構築され、南壁よりも大型の石材が使用されていることから、奥壁として意識されているものと考えられる。

石室の掘り方は、長さ2.75m、幅1.36mの長楕円形で、地山を60～75cm掘り込んでいる。壁は、東壁は直立して、その他の壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、壁際には幅25～35cm、深さ3～10cmの溝が巡っている。

裏込めは底面に第7層を埋めて側壁を設置した後、ローム混じりの褐色土で埋められている。粘性又は締まりの弱い土層が多く、突き固められた形跡は見られない。

掘り方土層解説

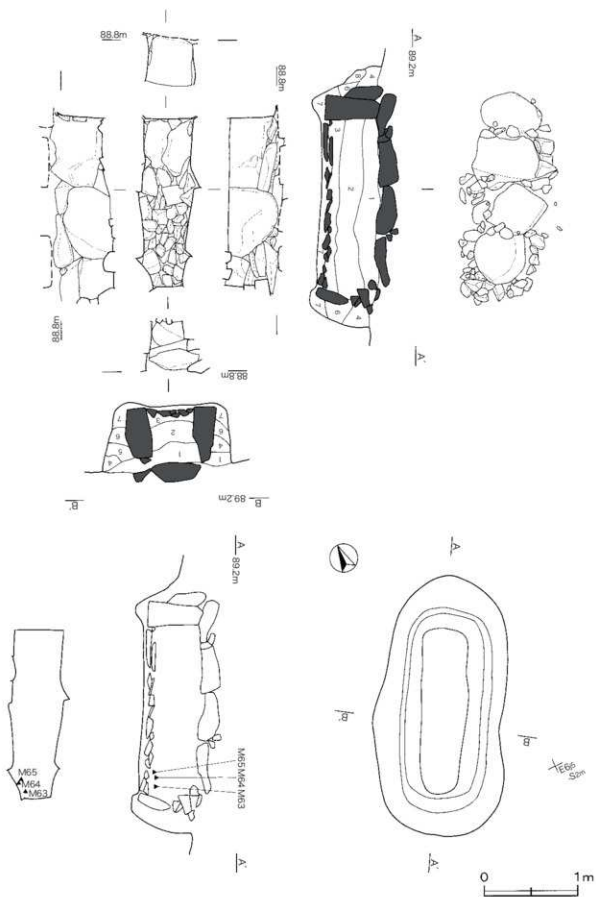
- 4 褐色 ローム粒子中量、黒色粒子少量。粘性・締まり弱 7 褐色 ローム粒子多量。締まり弱
5 褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量。粘性弱 8 褐色 ロームアロック中量。粘性弱
6 褐色 ローム粒子中量。締まり弱

遺物出土状況 鉄器片3点(鉄鏃)が出土している。M63は鏃を南壁側に、M64は同じく北壁側に向けて床面上から出土している。

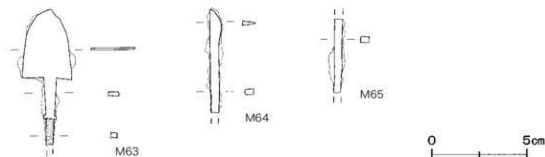
所見 石室内は、出土した鉄鏃がそれぞれ逆方向を向いていることから、一度片付けられた可能性が高いと考えられる。時期は、石室の構築形態及び出土遺物から7世紀前葉と考えられる。

第12号墳出土遺物観察表(第77図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M63	鉄鏃	(7.20)	2.50	0.25	(6.30)	鉄	三角形 平造 側面 茎欠	玄室床面	P L.31
M64	鉄鏃	(3.50)	0.70	0.30	30.00	鉄	片刃形 切刃造 莖欠	玄室床面	P L.31
M65	鉄鏃	(3.90)	0.48	0.30	(16.20)	鉄	鹿角片	玄室床面	



第76図 第12号墳 石室展開図・遺物出土状況図



第77図 第12号墳 出土遺物実測図

第13号墳(第78～80図)

位置 調査区中央部のF 6g・h8～0区で、標高80.4～82.6mの丘陵尾根上に位置している。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。道路の法面に石材を含む土層の落ち込みが見られたため、トレンチを設定したところ周溝が確認された。

規模と形状 本跡の北側は削平されており、全容は不明である。周溝外縁で推定径14～18mの円墳と想定される。長径方向はN-15°-Eと推定される。

墳丘 確認できなかった。第1・2層は後世に堆積した土層である。旧表土は第4層が相当する。

周溝 南側が残存している。上幅1.48～1.98m、下幅0.52～1.04m、深さ18～92cmで、壁は外傾して立ち上がり、断面形はU字形である。覆土は第5～7層で、レンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

墳丘・周溝土層解説

1 褐色	黒色粒子微量	5 黒褐色	黒色粒子中量、ローム粒子少量
2 褐色	ローム粒子・黒色粒子少量、焼土粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量、黒色粒子微量
3 暗褐色	黒色粒子微量	7 褐色	ローム粒子中量、黒色粒子微量
4 暗褐色	黒色粒子中量、炭化物・焼土粒子微量		

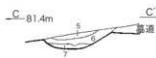
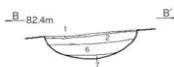
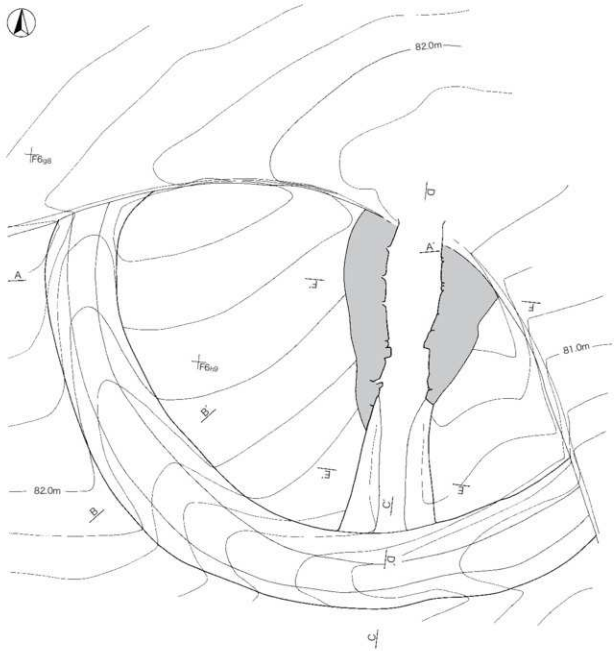
埋葬施設 地下式の石室である。天井石・奥壁は既に失われており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と支室を有し、残存している石室の長さは4.02mである。支室の規模は内法で長さ2.55m、幅0.75～1.14mの若干削れた長方形で、高さは135cmである。石室の主軸方向はN-1°-Wである。

羨道部は長さ0.80m、幅0.80～1.00mで、残存している高さは60cmである。南側には墓道が構築され、長さは根石端から3.78mである。墓道は支門部に向かって緩やかに傾斜している。

石室土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 褐色	粘土粒子多量、ロームブロック中量。粘性・締まり強
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、黒色粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック多量
3 暗褐色	ロームブロック中量	11 極暗褐色	黒色粒子少量、ローム粒子微量
4 灰オリーブ色	ロームブロック・粘土粒子中量。粘性強	12 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・黒色粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	13 極暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・黒色粒子少量、焼土粒子微量。締まり弱
6 極暗褐色	ロームブロック中量、黒色粒子少量		
7 灰黄褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量		
8 暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量		

石室の側壁は、長さ40～85cm、幅20～50cmの割石を根石として掘り方に設置したのち、扁平な割石を小口積みになっている。根石は西側のものが方形に近い割石を用いており、東西で壁の状況が異なる。壁は内傾して立ち上がっており、持ち送りが見られる。床面には礎が残存しており、本来は敷き詰められていたと考えられる。



第78图 第13号墳 墳丘実測図

玄門部は、長さ65cm、幅32~50cm、厚さ30cm前後の割石を2段積み上げて欄石とし、玄室床面との段差は50cmである。欄石は確認されなかった。羨道部は、玄室とほぼ同じ大きさの割石を若干乱雑に積み上げて袖部を構築している。

石室の掘り方は、長さ4.6m、幅3.23mの楕円形と推定され、地山を最大125cm掘り込んでいる。壁は、東壁は若干外傾して、西壁は途中で角度を変えながら外傾して立ち上がっている。底面は概ね平坦で、墓道の底面へと続いている。

表込めは、ローム混じりの褐色土、粘土を含む灰褐色土などを層状に側壁を積み上げながら埋めている。墓道部分は、上段の欄石上面までローム粒子や粘土粒子を含む褐色土や灰褐色土で埋めている。粘性・締まりの強い層が多いことから、突き固められたものと考えられる。

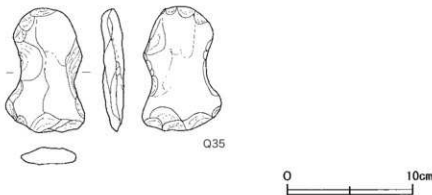
玄門部付近に大量の石材が散乱していたが、板状の石材は見られなかった。これらの石は側壁の崩落による可能性があり、閉塞の状況は不明である。

掘り方土層解説

14 暗褐色	炭化物・ローム粒子少量、黒色粒子微量、粘性・締まり強	20 濃い黄褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、粘性・締まり弱
15 褐色	ローム粒子多量、粘性・締まり強	21 暗褐色	ローム粒子・黒色粒子少量
16 灰褐色	粘土粒子少量、粘性・締まり強	22 灰黄褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量
17 暗褐色	炭化粒子少量、粘性・締まり強	23 黒褐色	粘土粒子少量、黒色粒子微量、粘性・締まり強
18 暗オリーブ色	ローム粒子少量、粘性・締まり強	24 褐色	ローム粒子多量、粘性強
19 オリーブ色	ローム粒子多量、粘性・締まり強	25 灰オリーブ色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量、粘性・締まり強

遺物出土状況 土師器片10点(坏類9、甕類1)のほか、石器片1(石斧)も出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 本跡の奥壁の状況は不明であるが、平面形は軽い胴張りを持つなど他の石室と共通性が認められることから、本来は単室構造の横穴式石室であったと判断される。石室の掘り方は墓道の底面と同じ高さであることから、同時に掘り込まれた可能性が考えられる。割石を2段積み上げて欄石としているのは、当古墳群では他に類例がない構造である。第8号墳と同じく欄石は確認されなかったが、石材が抜き取られた可能性が考えられる。構築された時期は、石室の構築形態から7世紀前葉と考えられる。



第80図 第13号墳出土遺物実測図

第13号墳出土遺物観察表(第80図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q35	石斧	9.80	6.40	1.70	117.90	4427443		石室掘り方内	P.L.27

第14号墳(第81～84図)

位置 調査区西部のE 4b・c6～8区で、標高86.8～89.0mの西側斜面部に位置している。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。表土除去後石材が見られたため、ボーリングステッキによる探査を行ったところ、石室を確認した。

規模と形状 周溝外縁で推定径約10mの円墳と考えられる。主軸方向はN-20°-Eと推定される。

墳丘 第1～4層は表土又は上方から流れ込んだ土層である。盛土は早い段階で流出したと考えられる。

周溝 石室の東側を巡っている。上幅1.04～1.4m、下幅0.24～0.48m、深さ30～50cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形はU字形である。覆土は第5・6層で、レンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

周溝土層解説

1 黒 褐色	ローム粒子少量。粘性・締まり弱	4 暗 褐色	ローム粒子・黒色粒子中量
2 黒 色	ローム粒子少量、黒色粒子微量	5 暗 褐色	ローム粒子中量
3 褐色	黒色粒子少量	6 褐色	ローム粒子中量

埋葬施設 北寄りに半地下式の横穴式石室が構築されている。天井石の一部と東側壁が石室内に落ち込み、内部には土砂が流入していた。石室は短い羨道部と玄室を有する単室構造で、全長は3.65mである。玄室の規模は、内法で長さ2.68m、幅0.75～1.35mの胴の張った長方形で、残存している高さは98cmである。石室の主軸方向はN-2°-Eである。

羨道部は長さ0.50m、幅約0.70mで、高さ70cmである。南側には墓道が構築され、残存している長さは柵石端から約2mである。

石室土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子中量、黒色粒子微量	5 褐色	ローム粒子少量。締まり弱
2 暗 褐色	ローム粒子中量	6 褐色	ローム粒子微量
3 褐色	ロームブロック多量	7 不自然な褐色	ローム粒子少量。粘性強
4 褐色	ローム粒子少量。粘性・締まり弱		

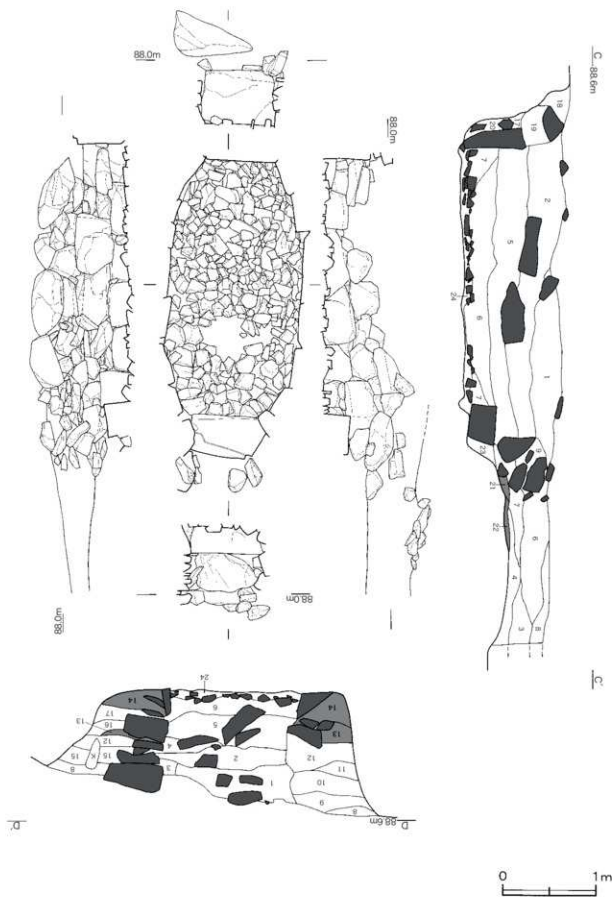
石室の側壁は方形又は長方形の割石を根石とし、基本的にその上にはほぼ同規模の割石を小口積みしている。側壁は、奥壁及び玄門部付近で若干内傾している。奥壁には、方形の一枚石が残存している。上の小口がほぼ水平であることや、上方に若干小形の割石が残存していることから、2段積みであったと可能性が考えられる。玄室側は平滑に処理され、ほぼ直立している。床面には礫を敷き詰めている。

玄門部は、推定長さ77cm、幅40cm、厚さ30cmの割石を柵石とし、玄室床面との段差は26cmである。側柱石は確認されなかった。羨道部は、東側は玄室より若干小形の割石を、西側は小形で扁平な割石を小口積みにして袖部を構築している。

石室の掘り方は、長さ4.55m、幅3.45mの隅丸形で、地山を80～120cm掘り込んでいる。壁は、東壁は直立し、その他の壁は外傾して立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦である。

裏込めは、基本的に根石及び奥壁底面を粘土で固定した後、ローム混じりの褐色土を側壁に積み上げながら埋めている。粘性・締まりの強い層が見られることから、突き固められたものと考えられる。

石室は、推定長さ60cm、幅42cm、厚さ25cmの長方形の割石で玄門部を閉塞した後、外側に割石や礫を充填している。



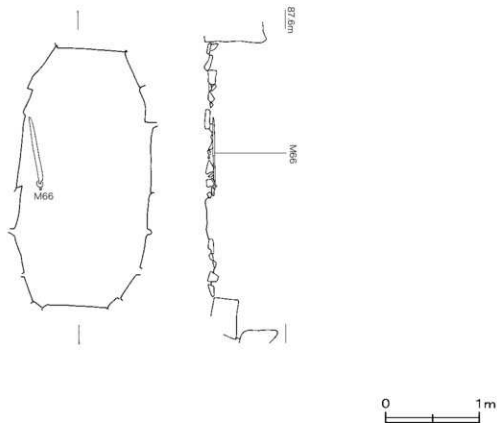
第82図 第14号墳 石室展開図

掘り方土層解説

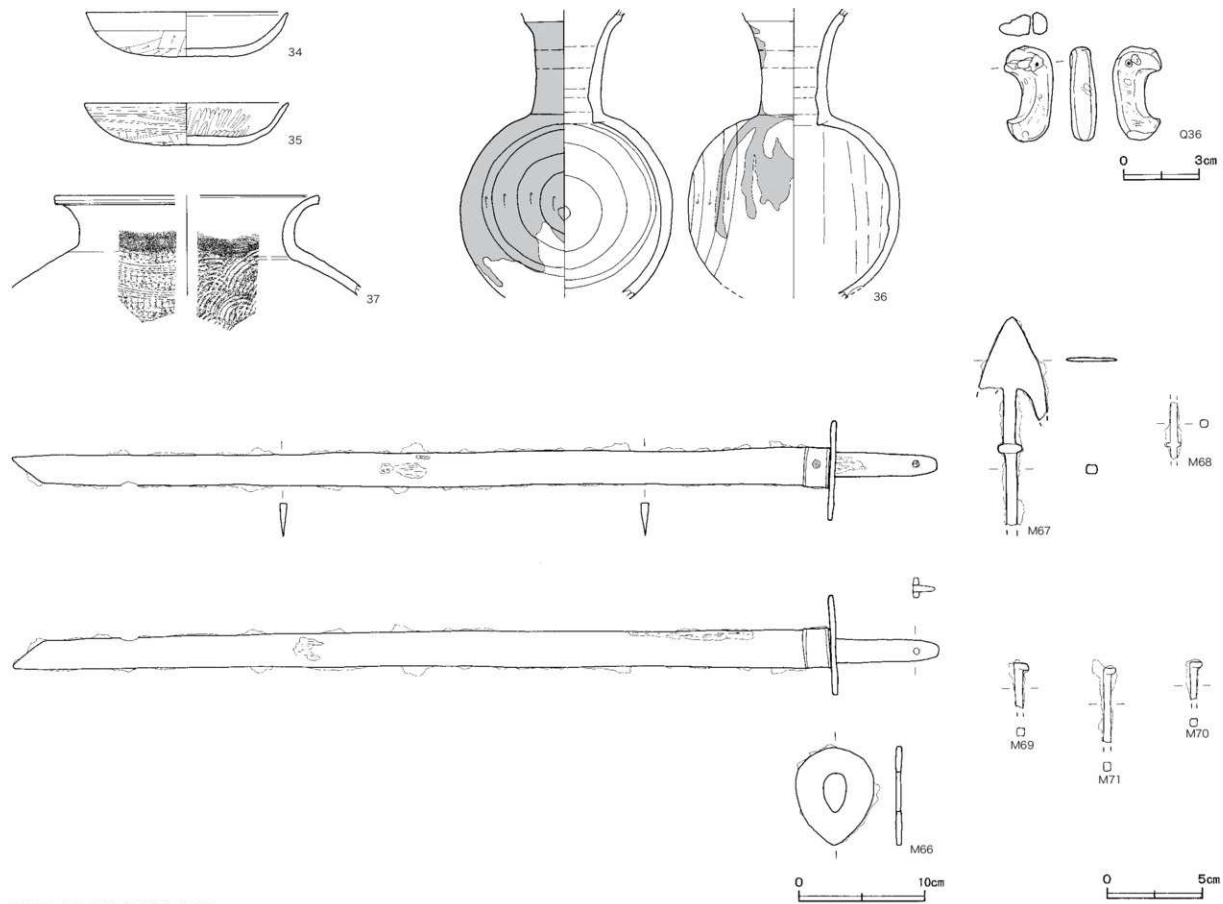
8	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子・鹿沼バミス微量	17	黄褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、締まり強
9	にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、鹿沼バミス微量	18	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子・鹿沼バミス微量
10	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・鹿沼バミス少量	19	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
11	褐色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量、粘土粒子微量	20	黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・鹿沼バミス微量、粘性・締まり強
12	オリーブ褐色	粘土粒子中量、ローム粒子微量、締まり強	21	黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子微量、締まり強
13	黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子微量、粘性・締まり強	22	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
14	暗灰黄色	粘土粒子多量、粘性・締まり強	23	褐色	ローム粒子中量
15	にぶい褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、鹿沼バミス微量	24	褐色	ローム粒子中量、粘性強
16	明褐色	ローム粒子多量、粘土粒子・鹿沼バミス少量			

遺物出土状況 土師器片31点(坏類2, 甕類28, 壺1), 須恵器片10点(坏類5, 甕類4, 瓶類1), 鉄器片6点(直刀1, 鉄鎌2, 釘3), 石製品1点(勾玉)のほか, 縄文土器片28点も出土している。土器は周溝から出土しており, 34は下~中層から, 35は中層から, 36は下層からそれぞれ破片の状態で出土している。また, M67・70は上層から, M68・M69・M71は中層から出土している。M66は西側壁の玄室底面から, 葦を玄門部側に向けて出土している。Q36は, 周溝外縁から出土している。

所見 いわゆる山寄せの古墳である。石室は羨道部が短い, 玄室底面が深い位置にあることや平面形が胴張り呈していることなど, 他の古墳との共通性が認められる。M66の直刀は, 葦に目釘と木質が残存し, 刀身部にも木質が残存していることから木装の柄と鞘を持っていた可能性が高い。その他の遺物は周溝から出土しており, 須恵器は本墳丘上に供献されていたものが転落したと考えられる。鉄鎌及び鉄釘も周溝から出土しているが, これらは追葬などに伴って石室内から掻き出されたものと想定される。構築された時期は, 石室の構築形態や出土遺物から7世紀中葉と考えられる。



第83図 第14号墳石室遺物出土状況図



第84図 第14号墳 出土遺物実測図

第14号墳出土遺物観察表(第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
34	土師器	坏	16.0	3.5	8.0	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部・内面ナデ 外面手持ちヘラ削り	周溝中～下層	70% P L25
35	土師器	坏	16.2	3.5	8.0	石英・白色粒子・赤色粒子	明赤褐	普通	内外面ミガキ 底部手持ちヘラ削り	周溝中層	70%
36	須恵器	7933瓶	-	(22.8)	-	白色粒子・黒色粒子	灰白	良	外面回転ヘラ削り・ロクロナデ 内面ロクロナデ	周溝下層	50% 自然釉 P L25
37	須恵器	罍	[30.9]	(8.0)	-	石英・白色粒子	黄灰	良	口縁部ロクロ整形後ナデ 外面格子叩き内面当具痕	表土層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q36	勾玉	3.70	2.00	1.00	10.40	メノウ	片面穿孔 穿孔途中の孔有り	東側周溝外縁	P L27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M66	直刀	74.70	2.70	6.50	662.00	鉄	鈔(無意) 鍔有り	玄室床面	P L32
M67	鉄鏃	(11.10)	(3.60)	0.44	(19.10)	鉄	脇伏三角形 平造 鍔開 鏃身部・茎欠	周溝上層	P L31
M68	鉄鏃	(3.00)	0.80	0.40	(2.22)	鉄	鹿角片 棘開	周溝中層	
M69	釘	(2.40)	0.40	0.40	(1.90)	鉄	先端部欠	周溝中層	
M70	釘	(2.10)	0.40	0.40	(1.18)	鉄	先端部欠	周溝上層	
M71	釘	(4.00)	0.50	0.40	(2.02)	鉄	先端部欠	周溝中層	

第15号墳(第85・86図)

位置 調査区西部のD 419区で、標高89.8mの西側斜面部に位置している。本跡の東側に第9号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で埋葬施設が確認された。

埋葬施設 竪穴系の小石室である。既に蓋石は失われ、石室内には土砂が流入していた。石室は北側を中心に壊されており、北壁は失われ西側壁の北半は最下段の石材が残存していた。石室の形状は、内法で長さ2.31m、幅0.50～0.51mの長方形で、残存している高さは80cmである。石室の主軸方向はN-18°-Eである。

石室土層解説

1	褐色	ローム粒子少量。粘性弱	7	暗褐色	ローム粒子微量。粘性弱
2	暗褐色	ローム粒子少量	8	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子・鹿沼パミス少量
3	暗褐色	ローム粒子微量	9	褐色	ロームアロックス中量。締まり弱
4	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	10	褐色	ロームアロックス中量。鹿沼パミス微量。締まり弱
5	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量。粘性強	11	褐色	ロームアロックス・鹿沼パミス少量。締まり弱
6	褐色	ローム粒子微量			

石室の側壁は掘り方の底面に設置した後、大きさの異なる割石を小口積みと平積みを用いて構築されている。北壁の石材は失われているが、北壁に接している掘り方の土層がほぼ垂直に残存していることから、一枚の割石を立てていた可能性が考えられる。南壁は東側に大形の割石を立て、西壁との隙間に小形の割石を充填して構築されている。床面には礫が若干残存しているが、蓋石の撤去に伴って転落したものが、もともと敷かれていたものかは明らかではない。

石室の掘り方は、長さ3.16m、幅1.49mの長方形で、地山を深さ57～85cm掘り込んでいる。壁は、南壁は外傾して、その他はほぼ直立している。底面は平坦である。

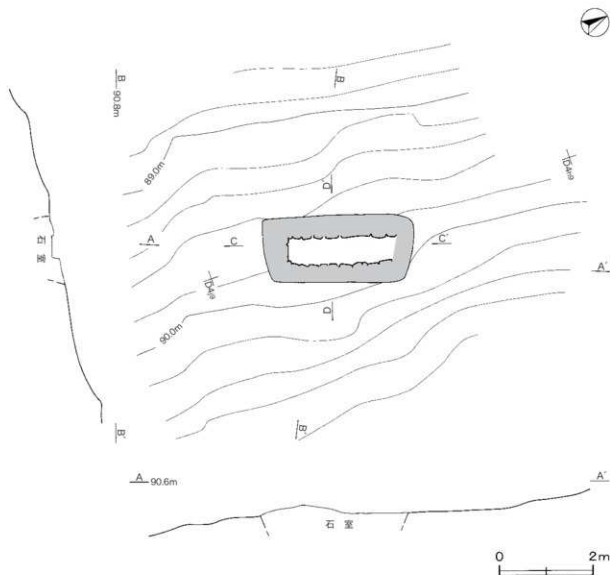
表込めはロームと鹿沼バミス混じりの土を、側壁を積み上げながら埋めている。底面の第12層と北壁側の第17層を除き、突き固められた形跡は認められない。第12層は、根石を設置した後に踏み固めたものと考えられる。控え積みの石材は使用されていない。

掘り方土層解説

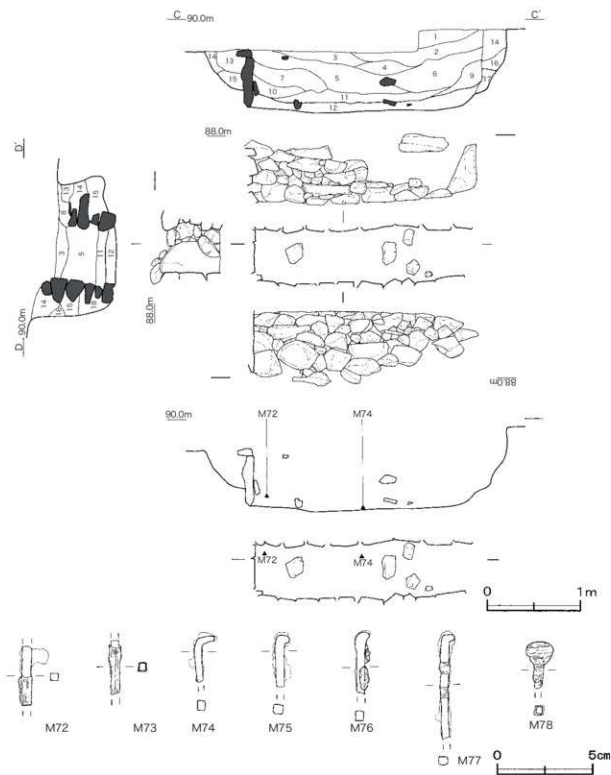
12 褐色	鹿沼バミス少量。粘性強	16 っぽい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
13 っぽい褐色	鹿沼バミス中量	17 褐色	鹿沼バミス中量。粘性強
14 褐色	ローム粒子少量	18 明褐色	鹿沼バミス多量
15 褐色	ロームブロック微量		

遺物出土状況 土師器片4点(甕類)、鉄器片7点(鉄鏝2、釘5)が出土している。M72は南壁寄りの第10層中から、M74は中央部の第12層の上面からそれぞれ出土している。M73・M78は南東部の底面付近から、M76・M77は北側の底面付近から出土している。

所見 竪穴式の石室であるが、南壁は複数の割石で構成され、掘り方の傾斜も北側と比べると緩やかであることから、横穴式石室の影響を受けたと考えられる。構築された時期は、石室の構築形態及びM73の筒被部に棘状突起が見られることから7世紀代と考えられる。



第85図 第15号墳 墳丘実測図



第86図 第15号墳石室展開図・石室遺物出土状況図・出土遺物実測図

第15号墳出土遺物観察表(第84図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M72	鉄錐	(3.30)	0.40	0.38	(2.90)	鉄	錐身部・茎欠	第12層	
M73	鉄錐	(2.90)	0.40	0.40	(1.42)	鉄	錐身部・茎欠	玄室床面	
M74	釘	(2.50)	0.50	0.40	(1.58)	鉄	先端部欠	第12層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M75	釘	(2.70)	0.50	0.40	(2.26)	鉄	先端部欠	支室南東部下層	
M76	釘	(3.30)	0.50	0.48	(3.20)	鉄	木質付着 先端部欠	支室北東部下層	
M77	釘	(5.55)	0.43	0.37	(3.72)	鉄	木質付着 先端部欠	支室北西部下層	
M78	釘	(2.40)	0.38	0.32	(1.80)	鉄	頭部・先端部欠 木質付着	支室南東部下層	

第16号墳(第87図)

位置 調査区西部のD4h・i5～6区で、標高84.8～86.8mの西側斜面部に位置している。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査とトレンチによって石室と周溝が確認された。

規模と形状 周溝外縁で推定径約6mの円墳と考えられる。主軸方向はN-15°-Eと推定される。

周溝 石室の東側を巡っている。上幅1～1.24m、下幅0.42～0.78m、深さ15～62cmで、壁は東側は外傾して、西側は緩やかに立ち上がり、断面形はU字形である。覆土はレンズ状の堆積状況であることから、主に周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

墳丘・周溝土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|--------|--------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。締まり弱 | 5 褐色 | 焼土粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 6 褐色 | 黒色粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 極暗 褐色 | ロームブロック・黒色粒子中量 | 7 暗 褐色 | 黒色粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 | | |

埋葬施設 竪穴系の石室である。天井石と西側壁は既に失われており、石室内には土砂が流入していた。規模は、内法で長さ0.98m、幅0.34～0.45mの長方形で、残存している高さは46cmである。石室の主軸方向はN-22°-Eである。

石室土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|--------|-----------------------|
| 1 極暗 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・黒色粒子微量 | 2 暗 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・黒色粒子微量 |
| | | 3 暗 褐色 | ロームブロック中量 |

石室構築 側壁は長さ25～35cm、幅10～25cmの割石を根石とし、割石・礫を小口積みになっている。東側壁は内傾して立ち上がっている。南北壁は、最下段に台形の割石を設置し、その上に小形の割石を小口積みになっている。南北壁は直立している。床面には礫を敷き詰めているが、南西部は失われている。

石室の掘り方は、長さ1.65m、幅1.12mの隅丸長方形で、地山を28～55cm掘り込んでいる。壁は、東壁は直立して、その他の壁は外傾して立ち上がっている。底面は、中央部がやや皿状にくぼんでいる。

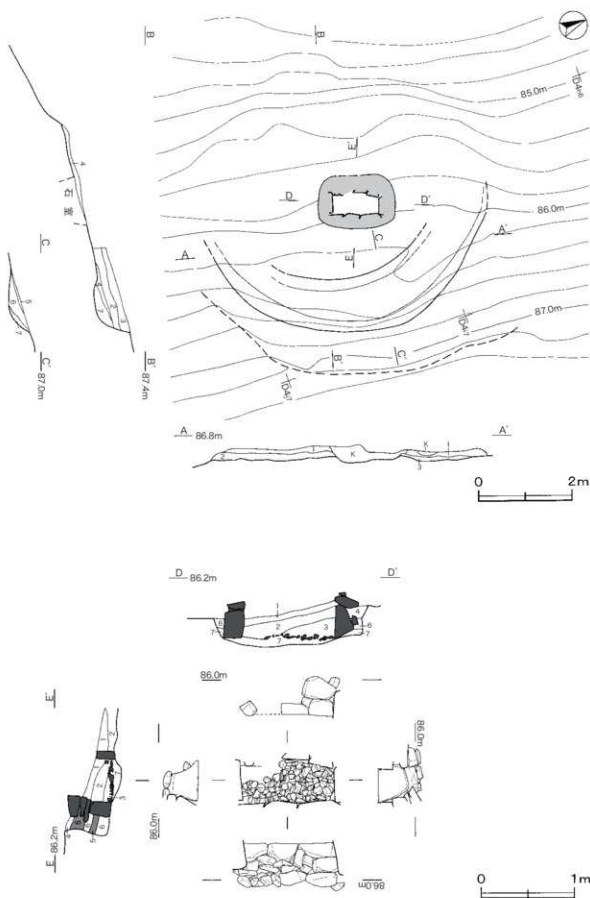
表込めは、東壁は根石を設置した後、ローム混じりの暗褐色土と粘土を含む灰黄褐色土を交互に埋めている。南北壁はローム混じりの暗褐色土を埋めている。

掘り方土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|--------|------------------|
| 4 暗 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量 | 6 暗 褐色 | ロームブロック多量 |
| 5 灰黄 褐色 | ロームブロック・粘土粒子中量。粘性・締まり強 | 7 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土器器片2点(環頸、甕類)のほか、縄文土器片6点(深鉢)も出土している。細片のため、図示できなかった。

所見 いわゆる山寄せの古墳である。石室の長さは内法で98cmであることから、成人の伸展葬は困難であり、火葬などの二次的な埋葬か又は小人の埋葬が行われたものと考えられる。竪穴系の小石室で羨道部の痕跡は確認されず、第12号墳の埋葬施設と同じ系列に属すると考えられる。構築された時期は、石室の構築形態から7世紀中葉と想定される。



第87図 第16号墳 墳丘実測図・石室展開図

第17号墳(第88～90図)

位置 調査区西部のE 5j1-3, F 5a1-3区で、の標高87.4～88.4mの丘陵尾根上に立地している。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査とトレンチを設定したところ、埋葬施設と周溝が確認された。

規模と形状 周溝外縁で推定径約12mの円墳と考えられる。主軸方向はN-17°-Eと想定される。

墳丘 第2層が盛土と考えられるが、非常に薄い。旧表土は第3・10層が相当する。

周溝 石室の北側が残存している。上幅1.05～1.92m、下幅0.4～0.67m、深さ20～47cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形はU字形である。覆土は第4～7・9層で、レンズ状の堆積状況であることから、墳丘上と周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

墳丘・周溝土層解説

1 褐 色	ローム粒子少量。粘性・締まり強	6 褐 色	ローム粒子中量、黒色粒子微量
2 暗 褐 色	ローム粒子少量	7 褐 色	ローム粒子少量、黒色粒子微量。粘性・締まり強
3 暗 褐 色	ローム粒子・黒色粒子少量	8 暗 褐 色	ローム粒子・黒色粒子少量
4 暗 褐 色	ローム粒子少量、黒色粒子微量	9 褐 色	ローム粒子中量
5 褐 色	ローム粒子少量	10 褐 色	黒色粒子中量

埋葬施設 北寄りに地下式の横穴式石室が構築されている。天井石は既に失われており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と支室を有する単室構造で、全長は2.74mである。支室の規模は、内法で長さ2.02m、幅0.68～0.79mの奥壁側が若干狭い長方形で、残存している高さは91cmである。石室の主軸方向はN-20°-Eである。

羨道部は長さ0.65m、幅0.53～0.63mで、高さ48cmである。南側には墓道が構築され、残存している長さは棚石端から1.6mである

石室土層解説

1 褐 色	ローム粒子少量	6 暗 褐 色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 褐 色	ローム粒子少量、赤色粒子微量	7 褐 色	ローム粒子微量
3 褐 色	ローム粒子中量。粘性強	8 褐 色	黒色粒子少量、ローム粒子・産沼バミス微量、粘性強
4 褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子微量。粘性強	9 褐 色	ローム粒子少量。粘性強
5 暗 褐 色	ローム粒子・粘土粒子微量		

石室の側壁は、方形又は長方形の割石を根石とし、その上に根石より若干小形の割石を小口積みしている。東側壁は西側壁よりやや積み方が乱雑である。側壁は若干内傾して立ち上がっている。奥壁は、一枚の割石で構成されている。石室側は直立している。床面には、奥壁側は扁平な割石を、その他は礫を敷き詰めている。

玄門部は、推定長さ50cm、幅25cm、厚さ15cmの割石を2段積み上げて棚石とし、支室床面との段差は2cmである。棚石石は確認されなかった。羨道部は短く、小形の割石を小口積みにして袖部を構築している。

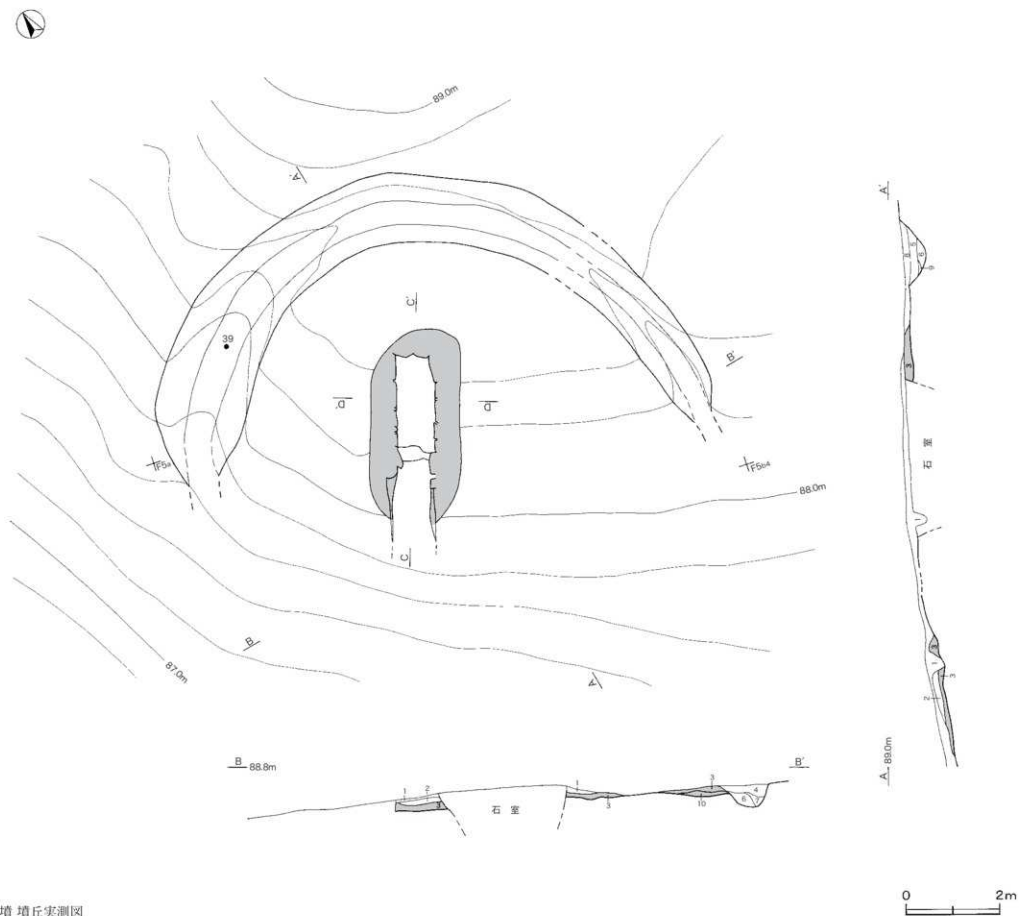
石室の掘り方は、長さ4.22m、幅1.91mの隅丸長方形で、地山を66～93cm掘り込んでいる。壁は、南壁は緩やかに外傾して、その他の壁はほぼ直立している。底面は、中央部がややくぼんでいる。

表込めは、底面に第17層を埋めてから側壁の根石を設置し、その後ローム混じり又は粘土を含む褐色土を側壁に積み上げながら埋めている。締まりの強い層がみられることから、突き固められたものと考えられる。

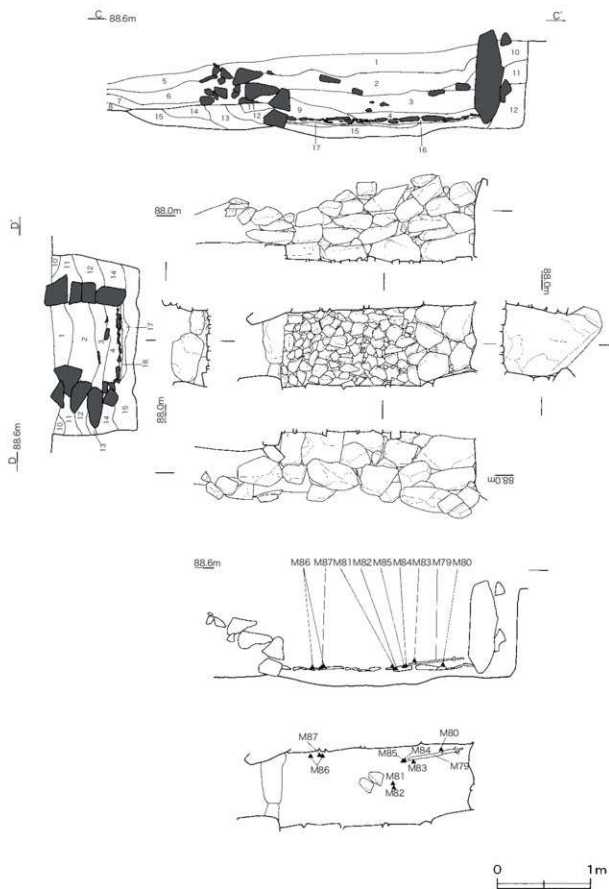
石室の閉塞は、長さ52cm、幅32cm、厚さ23cmの割石と礫で玄門部を閉鎖した後、割石と礫を充填して行われている。

掘り方土層解説

10 暗 褐 色	ローム粒子中量	15 褐 色	ローム粒子多量、粘土粒子少量、炭化粒子・産沼バミス微量。締まり強
11 褐 色	ローム粒子多量、粘土粒子微量。締まり強	16 褐 色	ローム粒子・炭化粒子中量、粘土粒子少量
12 褐 色	ローム粒子多量。締まり強	17 褐 色	ローム粒子中量。締まり強
13 褐 色	ロームブロック多量。締まり強		
14 褐 色	ロームブロック多量、粘土粒子少量。粘性・締まり強		



第88図 第17号墳 墳丘夷測図



第89図 第17号墳 石室展開図・石室遺物出土状況図

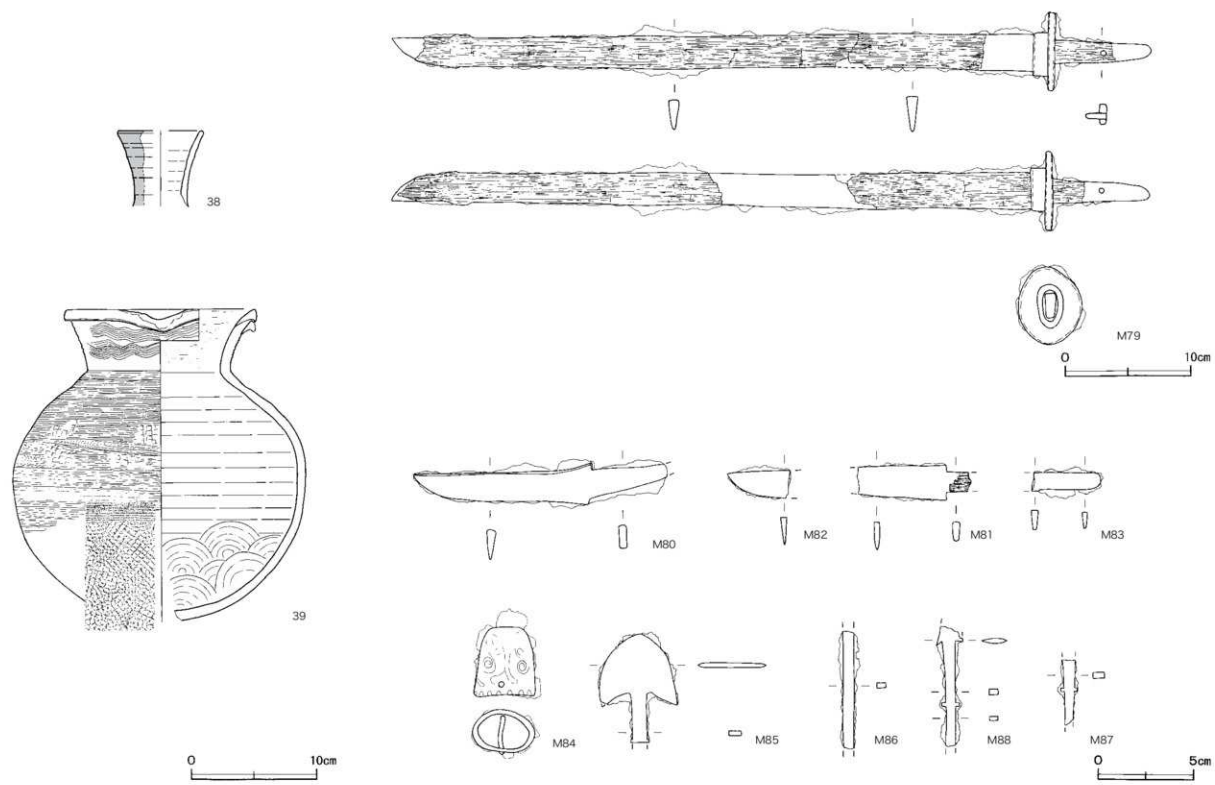
遺物出土状況 須恵器片3点(瓶類)、鉄器片9点(直刀1、小刀1、刀子3、鉄鏃4)、鉄製品片1(円頭柄頭)のほか、縄文土器片33点、石器2点も出土している。38は周溝の北側から破片の状態、39は周溝の北西底面から横位の状態でも出土している。M79・M80は西側壁に沿って茎を奥壁側に向けた状態で、M84はM79の鋒付近の床面から、M83はM79に付着した状態でそれぞれ出土している。M81・M82は奥壁寄りの床面から、M85はM84の下から出土している。M86・87は玄門部寄りの床面上から、鋒を奥壁側に向けた状態で出土している。

所見 本跡の横穴式石室は地下に構築されているものの、玄室の平面形は長方形に近く、この点他の古墳と異なっている。本跡からは円頭柄頭と直刀が出土している。M84の円頭柄頭はM79の直刀の鋒付近から出土しているため、副葬当時の位置を保っているかどうかは明らかではない。M79の直刀は、茎に目釘と木質が残存しており、柄は木装と考えられる。M84にも目釘が残存し木装の柄に固定されていたと考えられることから、M79にM84が装着されていた可能性は高い。またM84は、意匠的にはかなり形骸化が進んでいるものの銀象嵌が施されており、本跡の被葬者は装飾付大刀を保有する身分であったと考えられる。構築された時期は、石室の構築形態や出土遺物から7世紀前葉と考えられる。

第17号墳出土遺物観察表(第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
38	須恵器	長頸瓶	[6.6]	(6.1)	-	白色粒子・黒色粒子	灰黄	良	内外面口タロナデ	周溝底面中	5% 外面自然釉
39	須恵器	壺	14.9	(24.7)	-	白色粒子	黄灰	良	頸部外面横溝液状文 体部外面カキ目・格子叩き 内面口タロナデ・同心円当て具痕	周溝底面	98% 底部境或は穿孔 P L 25

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M79	直刀	60.40	2.80	0.95	470.00	鉄	片側カ 鈔(無意)・鏃・切羽有り 粘材付着	玄室床面	P L 32
M80	小刀	(13.50)	2.30	0.40	-	鉄	両側 茎尻欠 目釘孔不明	玄室床面	石材付着のため重量不明 P L 32
M81	小刀	(5.97)	1.79	0.40	(11.40)	鉄	両側 切先・茎尻欠 本質付着	玄室床面	
M82	小刀	(3.33)	1.41	0.30	(4.46)	鉄	切先残存	玄室床面	
M83	刀子	(3.50)	1.03	0.25	(4.96)	鉄	茎残存	玄室床面	
M84	円頭柄頭	3.70	3.30	2.20	40.50	鉄	銀象嵌有り 目釘あり	玄室床面	象嵌はX線写真からの作図 P L 32
M85	鉄鏃	(5.71)	(4.15)	0.25	(16.00)	鉄	三角形 平造 韓国 茎欠	玄室床面	P L 31
M86	鉄鏃	(6.21)	0.51	0.32	(5.50)	鉄	鹿柄片	玄室床面	P L 31
M87	鉄鏃	(3.48)	0.60	0.37	(2.94)	鉄	韓国 鹿柄片	玄室床面	
M88	鉄鏃	(6.38)	1.39	0.31	(3.68)	鉄	長三角形の 両丸造 韓国 鏃身部・茎欠	盛土内	P L 31



第90図 第17号墳 出土遺物実測図

第18号墳(第91～93図)

位置 調査区西部のD 4i・j3～4, E 4a3～4区で、標高82.2～85.0mの西側斜面部に位置している。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で埋葬施設が確認された。

規模と形状 周溝外縁で推定径約12mの円墳と考えられる。主軸方向はN-5°-Eと推定される。

墳丘 盛土は流出しており、確認できなかった。

周溝 石室の東側を巡っている。上幅1.24～1.64m、下幅0.50～0.68m、深さ12～63cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形はU字形である。覆土はレンズ状の堆積状況であることから、周溝外側からの流入によって、自然に堆積したと考えられる。

墳丘・周溝土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子中量、締まり弱	5 褐 色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量、粘性弱
2 暗 褐色	ロームブロック・黒色粒子中量	6 褐 色	ローム粒子中量・鹿沼パミス中量
3 暗 褐色	ロームブロック中量、黒色粒子微量	7 褐 色	ロームブロック多量
4 暗 褐色	ロームブロック中量		

埋葬施設 中央部に半地下式の横穴式石室が構築されている。天井石は既に失われており、石室内には土砂が流入していた。石室は羨道部と玄室を有する単室構造で、全長は3.30mである。玄室の規模は、内法で長さ2.77m、幅0.7～1.12mの若干削れた長方形で、残存している高さは100cmである。石室の主軸方向はN-15°-Eである。

羨道部は長さ0.80m、幅0.75mで、残存している高さは65cmである。南側には墓道が構築され、長さは榊石端から約3mである。墓道は玄室に向かって若干傾斜している。

石室土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	7 灰 褐色	ローム粒子多量、粘土粒子少量
3 暗 褐色	ローム粒子多量	8 暗 褐色	ローム粒子中量
4 褐 色	ローム粒子多量、粘土粒子微量	9 暗 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量
5 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、粘性強	10 暗 褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量

石室は、長方形の割石を根石とし、その上に扁平な割石を小口積みになっている。奥壁側に大形の石材が使用されている。側壁は石室側に内傾し、特に東側壁で持ち送りが顕著に見られる。奥壁は、台形の1枚石で構成されており、石室側は直立している。床面には礫を敷き詰めている。

玄門部は、長さ85cm、幅38cm、推定で厚さ22cmの割石を榊石とし、玄室の床面との段差は20cmである。その上に長さ60～62cm、推定幅30cm、厚さ10～15cmの割石を立てて御柱石としている。御柱石は奥壁側に傾き、両御柱石の間は53～58cmである。羨道部は、割石を小口積みにして袖部を構築している。

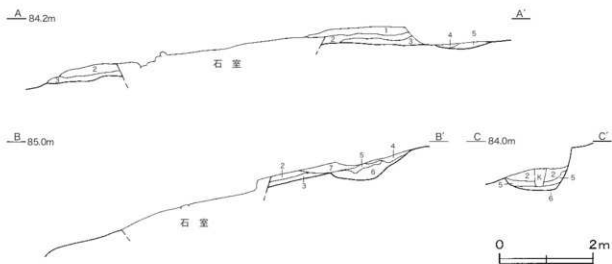
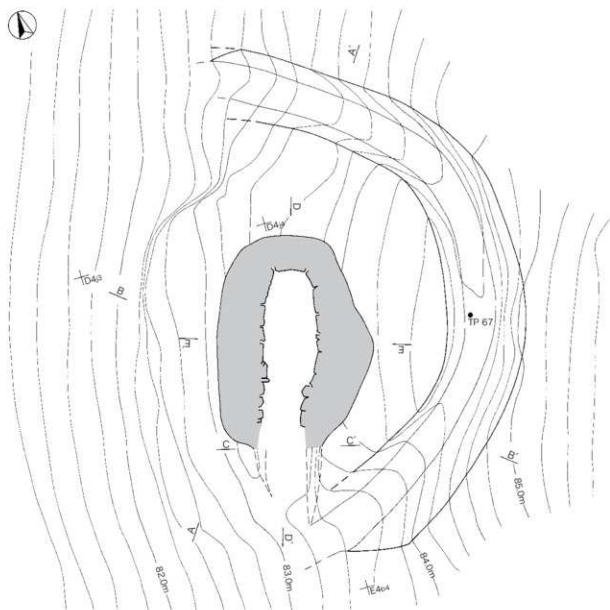
石室の掘り方は、長さ4.32m、幅3.35mの不整形長方形で、地山を50～144cm掘り込んでいる。壁は、外傾して立ち上がっている。南壁は墓道が構築されているため不明である。

裏込めは、根石を設置した後、鹿沼パミス混じりの褐色土を主体として側壁を積み上げながら埋めている。粘性・締まりの強い土層が見られることから、突き固められたものと考えられる。

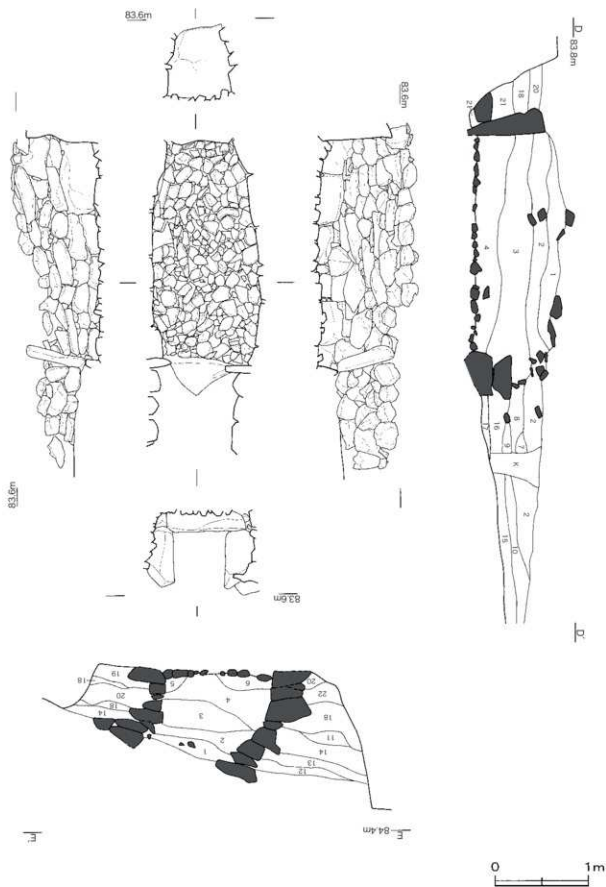
榊石上に長さ60cm、幅45cm、厚さ18cmの板石が残存しており、閉塞石と考えられる。

掘り方土層解説

11 褐 色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量	17 にぶい黄褐色	ローム粒子少量、粘性・締まり強
12 オリーブ灰色	ローム粒子・粘土粒子少量	18 暗オリーブ色	炭化物・鹿沼パミス微量、粘性・締まり強
13 褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス微量	19 褐 色	鹿沼パミス少量
14 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子中量、粘性・締まり強	20 褐色	鹿沼パミス中量、粘土粒子少量、粘性弱
15 暗 褐色	ローム粒子少量、粘土粒子・鹿沼パミス微量	21 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量、粘性強
16 灰黄褐色	ローム粒子・粘土粒子少量	22 褐 色	鹿沼パミス中量



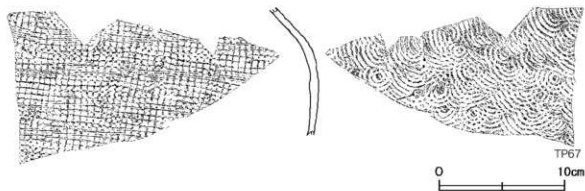
第91图 第18号墳 墳丘実測図



第92図 第18号墳 石室展開図

遺物出土状況 土師器片6点(坏類2、甕類4)、須恵器片27点(甕類)のほか、縄文土器片6点(深鉢)も出土している。TP67は周溝の覆土下層から出土している。

所見 いわゆる山寄せの古墳である。玄室の平面形態は扇張りを有しており、他の古墳との共通性が見られる。構築された時期は、石室の構築形態から7世紀代と考えられる。



第93図 第18号墳 出土遺物実測図

第18号墳出土遺物観察表(第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
									外面格子叩き残カキ目 内面同心円当て具痕		
TP67	須恵器	甕	-	-	-	赤色粒子	褐灰	良	外面格子叩き残カキ目 内面同心円当て具痕	周溝下層	

第19号墳(第94・95図)

位置 調査区西部のE4b1区で、標高79.6mの西側斜面部に位置している。本跡の南側に第20号墳が、西側に第21・22号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で埋葬施設が確認された。

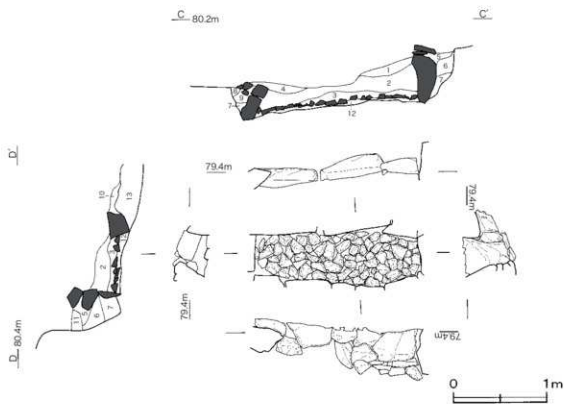
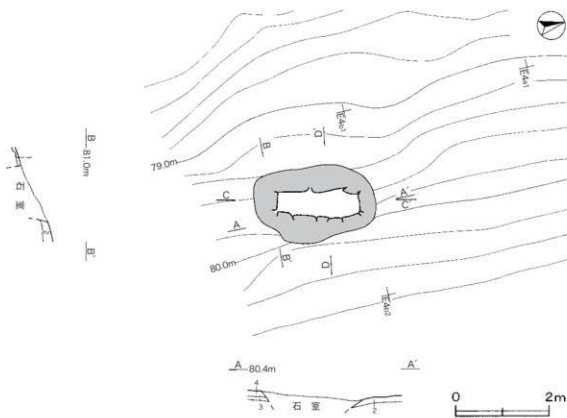
埋葬施設 堅穴系の小石室である。既に蓋石と西側内壁の石材が失われており、石室内には土砂が流入していた。石室の形状は、内法で長さ1.75m、幅0.41~0.6mの北側がわずかに狭い長方形で、残存している高さは52cmである。石室の主軸方向はN-12°-Eである。

石室土層解説

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 1 褐色 ローム粒子中量、炭化物微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 4 極暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子微量 |

石室の側壁は、東西で根石の設置方法が異なる。西側壁は扁平な割石の側面を石室内に向けて根石とし、東側壁は扁平な割石を立てて根石としている。根石の上方は、小形の扁平な割石を平積みにして壁が構築されている。側壁は内傾しており、若干持ち送りが見られる。北壁は台形の割石を立て、その上に一段扁平な割石が平積みされている。西側壁との隙間は割石を充填し、石室側に若干内傾している。南壁は割石を二段に積み上げており、石室側に内傾して立ち上がっている。床面は礫を敷き詰めている。

石室の掘り方は、長さ2.35m、幅1.58mの隅丸長方形で、地山を12~87cm掘り込んでいる。西壁の上部と東壁の一部は失われている。壁は、途中角度を変えてほぼ直立している。底面は、西側に傾斜している。



第94図 第19号墳 墳丘実測図・石室展開図

表込めは、ローム主体の土を側壁を積み上げながら埋めている。締まりの強い層が見られることから、突き固められたものと考えられる。



第95図 第19号墳 出土遺物実測図

掘り方土層解説

- | | | |
|----|-------|---------------------|
| 5 | 褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 6 | 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 7 | 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 8 | 褐色 | ローム粒子中量、黒色粒子微量 |
| 9 | 暗褐色 | ローム粒子少量、締まり強 |
| 10 | 青イリーブ | ローム粒子・粘土粒子少量、締まり強 |
| 11 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 12 | 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、粘性強 |
| 13 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量、締まり強 |

遺物出土状況 銅製品2点(耳環)が出土している。M89・M90は石室の覆土下層から出土している。

所見 石室の平面形は北壁側が若干狭く、胴張りを持つ石室の影響を受けたものと考えられる。構築された時期は、石室の構築形態から7世紀代と考えられる。

第19号墳 出土遺物観察表(第95図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M89	耳環	1.75	1.71	0.41	2.48	銅	表面剥落	石室下層	
M90	耳環	1.65	1.50	0.36	0.66	銅	建銀	石室下層	

第20号墳(第96・97図)

位置 調査区西部のE4d1区で、標高79.2mの西側斜面部に位置している。本跡の北側に第19号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で埋蔵施設が確認された。

埋葬施設 竪穴系の小石室である。既に蓋石と西側壁が失われており、石室内には土砂が流入していた。石室の形状は、内法で長さ2.31m、幅0.43~0.61mの若干胴の張った長方形で、残存している高さは70cmである。石室の主軸方向はN-11°-Eである。

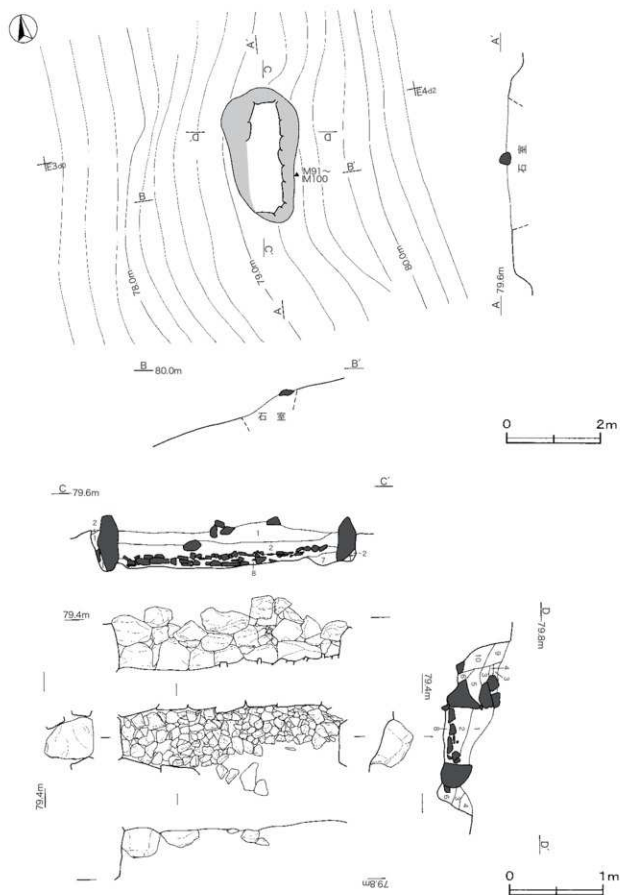
石室土層解説

- | | | | |
|------|-------------|-------|-------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、粘性弱 | 2 暗褐色 | ローム粒子少量、粘性強 |
|------|-------------|-------|-------------|

石室の西側壁は、北側に2個の根石が残存しており、平坦な面を石室内に向けて設置している。東側壁は大形の割石を根石とし、西側壁と同じく平坦な面を石室内に向けて設置している。上部に割石を積み上げ、隙間に礫を充填している。石室側からみると、石材の見かけの大きさを揃えるように積み上げている。北壁は台形の割石を立て、石室側はほぼ垂直に立ち上がっている。南壁は割石を立て、石室側は若干外傾して立ち上がっている。床面は礫を敷き詰めている。

石室の掘り方は西壁の南側が失われている。規模は長さ2.78m、幅1.60mの長楕円形と推定され、地山を35~71cm掘り込んでいる。壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、東側に根石を設置するために高さ約10cmの段を設け、北壁には幅18cm、深さ10cmの掘り込みが見られる。

表込めは東側に第9・10層を埋め、側壁の根石を第6層で固定した後に側壁を積み上げるに従ってロームを主体とする土で埋めている。上部と南・北壁側に粘土を含む土を使用しており、締まりの強い層が多いことか



第96図 第20号墳 墳丘実測図・石室展開図

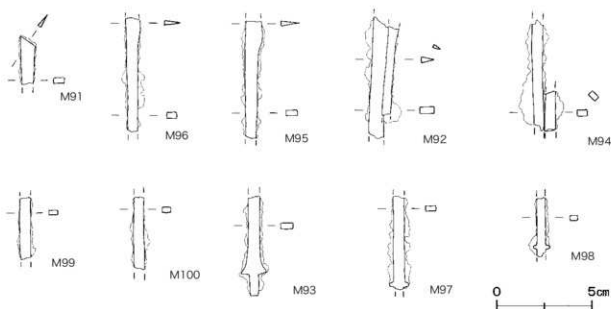
ら突き固められたものと考えられる。壁の傾きを調節するため、北壁の石材及び西側壁の根石の背後に割石を置いている。

掘り方土層解説

3 緑 灰 色	粘土粒子中量、ローム粒子少量	7 暗 褐 色	ロームブロック少量、粘土粒子微量、締まり強
4 褐 色	ローム粒子中量、粘土粒子微量	8 暗 褐 色	ロームブロック・粘土粒子少量、締まり強
5 暗 褐 色	ロームブロック少量、締まり強	9 暗 褐 色	ローム粒子中量
6 暗 褐 色	ロームブロック少量、締まり強	10 褐 色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片1点(甕類)、須恵器片1点(甕類)、鉄器片14点(鉄)のほか、縄文土器片6点も出土している。M91～M100は東側壁の上面付近から一括して出土している。

所見 南壁は北壁と同じく1枚の石で閉塞しており、石棺と同じ構造となっている。掘り方の南壁と石室南壁との間に空間的な余裕がないことも横穴式石室の構造を意識していないと考えられる。構築された時期は、石室の構築形態及び出土遺物から7世紀中葉と考えられる。



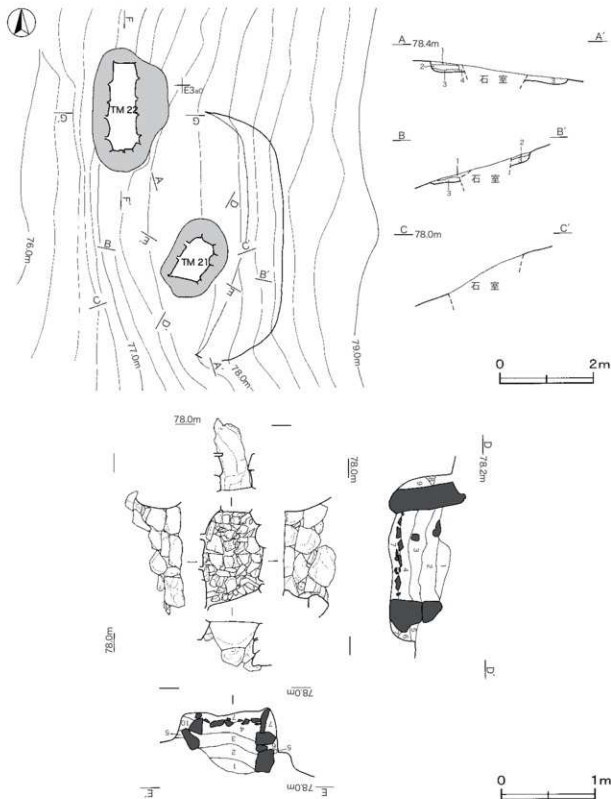
第97図 第20号墳 出土遺物実測図

第20号墳 出土遺物観察表(第95図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M91	鉄鏃	(2.47)	0.61	0.36	(1.62)	鉄	片刃箭 切刃造 鋭狭欠	東側壁上面	
M92	鉄鏃	(6.33)	0.67	0.27	(10.60)	鉄	鋭狭片 2本踏着	東側壁上面	
M93	鉄鏃	(5.29)	1.34	0.30	(5.50)	鉄	鋭狭片 台形開	東側壁上面	
M94	鉄鏃	(5.96)	0.52	0.36	(11.00)	鉄	鋭狭片 2本踏着	東側壁上面	
M95	鉄鏃	(6.27)	(0.95)	0.32	(6.27)	鉄	片刃箭 切刃造 鋭狭欠	東側壁上面	
M96	鉄鏃	(6.02)	0.80	0.25	(3.70)	鉄	片刃箭 切刃造 鋭狭欠	東側壁上面	
M97	鉄鏃	(4.98)	0.97	0.30	(4.62)	鉄	鋭狭片 轉開	東側壁上面	
M98	鉄鏃	(3.14)	(0.82)	(0.27)	(2.04)	鉄	鋭狭片 轉開	東側壁上面	
M99	鉄鏃	(3.29)	0.46	0.21	(1.56)	鉄	鋭狭片	東側壁上面	
M100	鉄鏃	(3.88)	0.59	0.26	(2.28)	鉄	鋭狭片	東側壁上面	

第21号墳(第98図)

位置 調査区西部のE3a0区に位置し、標高77.8mの西側斜面部に立地している。本跡の東側に第19号墳、北側に第22号墳が構築されている。



第98図 第21・22号墳 墳丘実測図・第21号墳石室展開図

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で石室が確認された。

埋葬施設 竪穴系の小石室である。蓋石及び西側壁の一部は失われており、石室内には土砂が流入していた。石室の形状は、内法で長さ1.00m、幅0.30～0.65mの胴の張った長方形で、残存している高さは70cmである。石室の主軸方向はN-34°-Eである。

石室土層解説

- | | | | |
|------|---------------------|--------|----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量 | 3 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・黒色粒子微量 | | |

石室の東側壁は板状の割石を根石とし、その上に割石を積み上げて構築している。西側壁は礫を根石とし、東側壁と同じような割石を積み上げている。側壁は石室側に割石の平らな面を向け、石室側から見ると石材の見かけの大きさをそろえている。壁はほぼ直立している。北壁は長方形の割石を立てて構築され、石室側は若干外傾して立ち上がっている。南壁は台形の割石を設置し、その上に割石を積み上げており、側壁との隙間に礫を充填している。石室側は直立している。床面は礫を敷き詰めている。

石室の掘り方は、長さ1.80m、幅1.08mの隅丸長方形で、地山を27～65cm掘り込んでいる。壁は若干外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、北壁際に幅27cm、深さ9cmの掘り込みを設けている。

裏込めは根石を設置した後第7層を埋め、石室底面に礫を敷いた後、側壁を積み上げるに従ってロームを主体とする土で埋めている。第5・8層に粘土が含まれており、締まりの強い層が見られることから、若干固めながら埋めたものと考えられる。

掘り方土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|-------|----------------|
| 4 褐色 | ローム粒子中量 | 7 褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子微量 |
| 6 極暗褐色 | ロームブロック微量、締まり強 | 9 黒褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 北壁の高さから、側壁及び南壁はさらに数段割石を積み上げていたものと想定される。構築された時期は、石室の構築形態から7世紀代と考えられる。

第22号墳(第98・99図)

位置 調査区西部のE3a9区で、標高77.0mの西側斜面部に位置している。本跡の南側に第21号墳が構築されている。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で石室が確認された。

埋葬施設 竪穴系の小石室である。蓋石は南側の1枚が残存しており、石室内には土砂が流入していた。石室の形状は、内法で長さ1.35m、幅0.40～0.50mの長方形で、残存している高さは48cmである。石室の主軸方向はN-2°-Eである。

石室土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|--------|----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、黒色粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量、黒色粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・黒色粒子微量 | 4 極暗褐色 | ローム粒子少量、締まり強 |

石室の側壁は扁平な割石を立てて根石とし、東側壁は根石を設置した後、主に小形の割石を小口積みにして構築されている。西側壁は根石の上に方形に近い割石を積み上げており、石室側から見ると、石材の見かけの大きさを揃えるように積み上げている。東側壁は若干内傾し、西側壁はほぼ直立している。北壁は幅約43cm、

高さ37cmの割石を立て、石室側はほぼ直立している。南壁は3個の割石で構成され、その内の1個は大形の石で、平らな面を石室の内側に向けて設置されている。床面は礫を敷き詰めている。

石室の掘り方は、長さ2.65m、幅1.31mの東側に張り出した長楕円形で、地山を26~102cm掘り込んでいる。壁は、ほぼ外傾して立ち上がっている。東壁は二段にわたって掘り込まれており、途中幅約30cmの平坦面が見られる。この平坦面は、斜面部のため足場を確保するために設けられたと考えられる。底面は平坦面である。

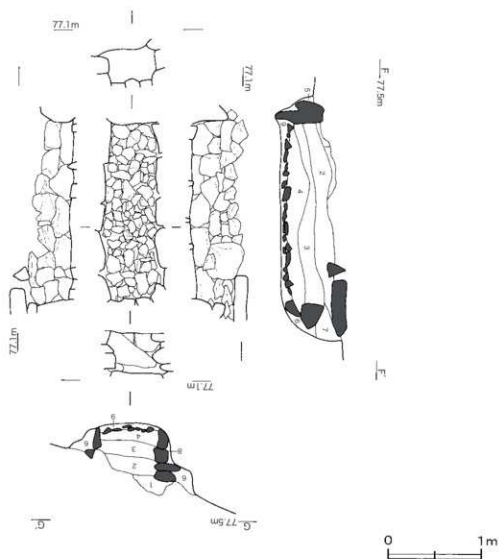
表込めは、側壁を積み上げながらロームを主体とする土で埋めている。南・北壁側は粘土混じりの土を用いており、粘性の強い層が見られることから、突き固められたものと考えられる。

掘り方土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|----------------|---|-----|--------------------|
| 5 | にぶい褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量 | 8 | 褐色 | ローム粒子中量、赤色粒子微量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量、粘性強 | 9 | 灰褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量、粘性強 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子中量、粘性強 | | | |

遺物出土状況 須恵器5点(坏類1, 甕類4)が出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

所見 北壁を1枚石で構成し、南壁を複数の石を用いて構築されていることから、横穴式石室の影響を受けたと考えられる。構築された時期は、石室の構築形態から7世紀代と考えられる。



第99図 第22号墳 石室展開図

第23号墳(第100・101図)

位置 調査区西部のD4f6区で、標高86mの西側斜面部に位置している。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で石室が確認された。

埋葬施設 竪穴系の小石室で北側は調査区域外に延びており、全容は不明である。石室内には土砂が流入していた。石室の形状は、内法で長さ1.02m、幅0.20～0.43m中央がやや広い長方形で、残存している高さは68cmである。石室の主軸方向はN-2°-Eである。

石室土層解説

- | | | | |
|------|----------------|------|----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量、粘土粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 4 褐色 | ローム粒子多量、粘土粒子微量 |

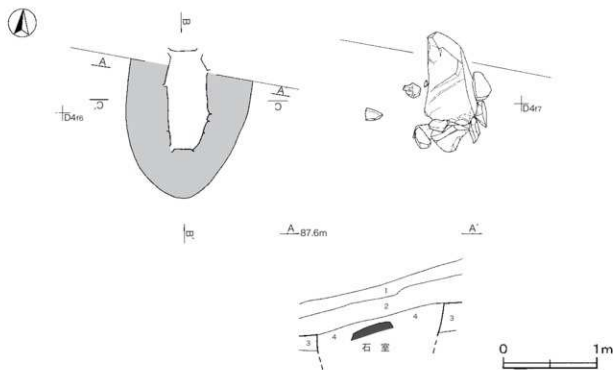
石室の側壁は割石を根石とし、東側壁は割石を平積みし、西側壁は小口積みになっている。側壁は若干内傾して立ち上がっており、最上段の積石には持ち送りが見られ、特に北側壁は顕著である。北壁は一枚石を立てており、石室側は垂直に立ち上がっている。南壁は4個の割石を積み上げて構築しており、若干内傾して立ち上がっている。蓋石として長さ97cm、幅54cm、厚さ21cmの割石を乗せており、側壁との間に小形の割石を充填している。床面は礫を敷き詰めている。

石室の掘り方は、長さ1.7m以上、幅1.28mの楕円形と推定され、地山を52～68cm掘り込んでいる。壁は西壁をほぼ直立に、その他の壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

表込めは、側壁を積み上げながらロームを主体とする土と粘土混じりの土層を交互に埋めている。粘性があり締まりの強い層がほとんどであることから、突き固められたものと考えられる。

掘り方土層解説

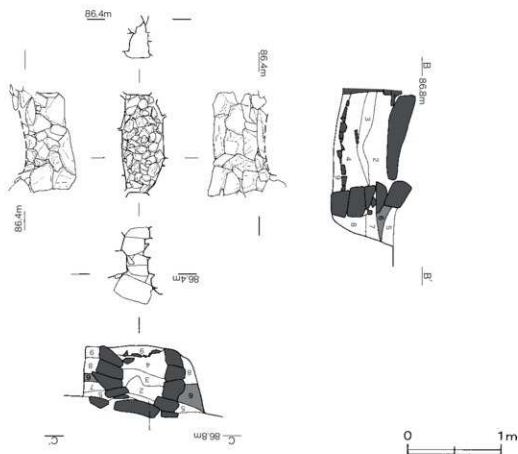
- | | | | |
|---------|--------------------------|-------|--------------------------|
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック多量、粘土粒子微量。粘性・締まり強 |
| 6 灰ネリブ色 | 粘土粒子多量、ロームブロック少量。粘性・締まり強 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量。粘性・締まり強 |
| 7 灰褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量。粘性・締まり強 | | |



第100図 第23号墳実測図

遺物出土状況 覆土に流れ込んだ縄文土器片4点(深鉢)が出土している。

所見 石室の内法で長さ1.02mであることから、成人の伸展葬は困難であり、火葬などの二次的な埋葬か小人の埋葬が行われたものと考えられる。竪穴系の小石室であるが、北壁を1枚石で構成し、南壁を複数の石を使用していることや、平面形は中央部の幅が広がっていることなどから、胴張りのある横穴式石室の影響を受けたものと考えられる。時期は、石室の構築形態から7世紀後葉と考えられる。



第101図 第23号墳 石室展開図

第24号墳(第102図)

位置 調査区西部のD 4i1区で、丘陵西側の標高79mの斜面部に位置している。

確認状況 調査前は墳丘の高まりや周溝は未確認であり、周知されていなかった。ボーリングステッキによる探査で石室が確認された。

埋葬施設 竪穴系の小石室と考えられる。南壁と東壁の根石の一部が残存しており、その他の石材は失われている。石室の形状は、現存する内法で長さ0.95m、幅0.42mの長方形又は中央がやや広い長方形と推定され、残存している高さは28cmである。主軸方向は、東壁からN-28°-Eと推定される。

石室土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量。締まり強 | 3 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量。締まり強 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量。締まり強 | 4 褐色 | ロームブロック中量。締まり強 |

石室構築 削石を立てて根石とし、石室側は垂直に立ち上がっている。上部の構造は不明である。南壁は基底部幅35cm、高さ37cmの削石を立てており、石室側は若干外傾して立ち上がっている。床面は、礫が残存していることから、礫が敷かれていたと考えられる。

石室の掘り方は、長さ2.51m、幅90cmの楕円形又は隅丸長方形と推定され、地山を10～25cm掘り込んでいる。壁はほぼ直立して立ち上がっている。底面は平坦である。

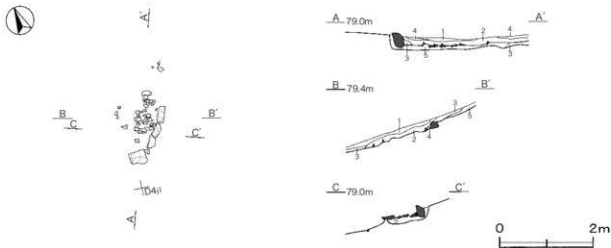
表込めは、粘土とローム混じりの土を石室の構築に従って埋めたものと考えられる。

掘り方土層解説

- 5 黒 褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量、締まり強

遺物出土状況 覆土に流れ込んだ縄文土器片4点が出土している。

所見 南壁と東壁との位置関係から、平面形は胴張りであった可能性が考えられる。構築された時期は、石室構造から7世紀代と考えられる。



第102図 第24号墳実測図

(2) 土器溜まり

第1号土器溜まり(第103図)

位置 調査区中央部のE5e1区で、丘陵尾根上の緩斜面に位置している。第2号墳の前方部周溝外縁に隣接している。

規模と形状 長径0.83m、短径0.56mの双円形で、深さは28cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-48°-Wである。

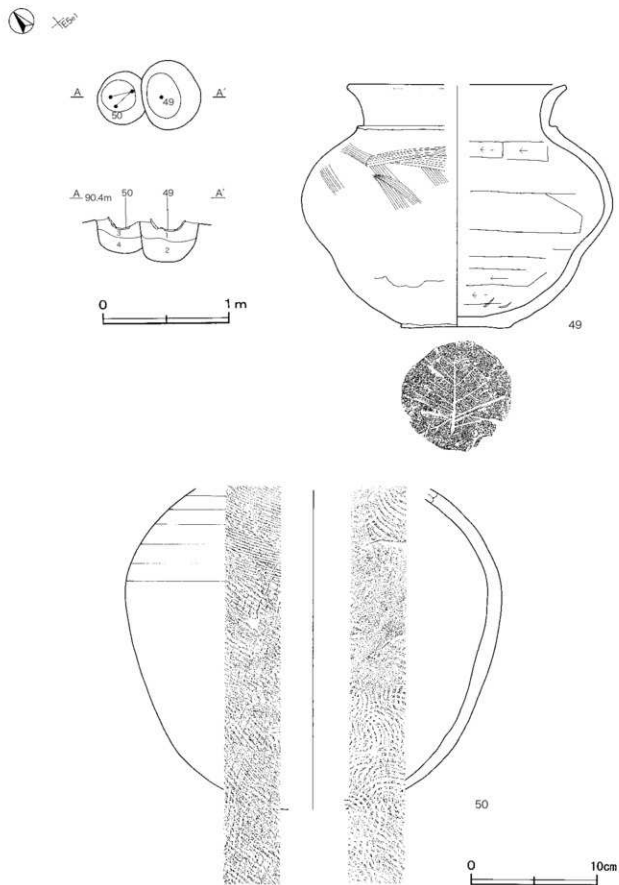
覆土 4層からなる。粘性の弱い土層であることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量、黒色粒子微量、粘性弱 3 褐 色 ローム粒子少量、粘性弱
2 灰 褐色 ローム粒子少量、黒色粒子微量、粘性弱 4 暗 褐色 ローム粒子・黒色粒子微量

遺物出土状況 土師器片30点(甕類)、須恵器片12点(甕類)のほか、縄文土器片7点が出土している。49は東側から、50は西側からそれぞれ横位の状態を確認面から出土している。

所見 本跡の掘り込みは49・50を設置するためのもので、土層の観察から50の後49が置かれたと考えられる。本跡の位置や他の古墳から同時期の須恵器が出土していることなどから、古墳に供献された土器の可能性が考えられる。時期は、出土土器から古墳時代後期から終末期と考えられる。



第103図 第1号土器溜まり・出土遺物実測図

第1号土器溜まり出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
49	土師器	甕	[17.2]	19.2	8.8	白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部ナテ 外面ハケ目 内面ハラ削り後ナテ	確認済	50%
50	須恵器	甕	-	(25.4)	-	石英・長石	灰	良	外面カキ目・格子叩き 内面同心円当て具痕	確認済	30%

(3) 土坑

第2号土坑(第104・105図)

位置 調査区中央部のF6h1区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径3.17m、短径2.83mの楕円形で、長径方向はN-3°-Wである。深さは97cmで、底面は起伏があり、壁は外傾して立ち上がっている。

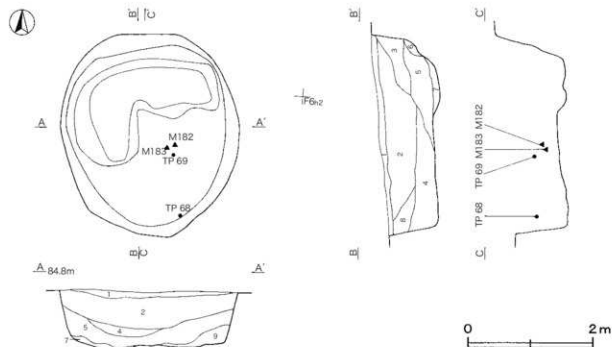
覆土 9層からなる。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

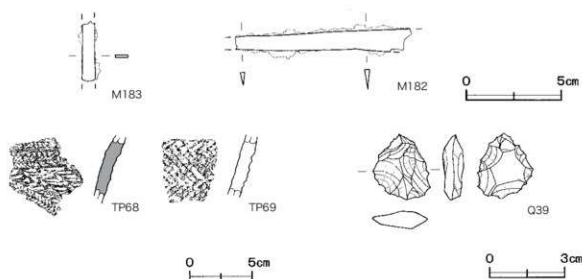
1 黒 褐色	黒色粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	6 褐色	色	ローム粒子中量、鹿沼パミス微量
2 褐色	ローム粒子・黒色粒子少量、焼土粒子微量	7 明 褐色	色	ローム粒子・鹿沼パミス中量
3 暗 褐色	ローム粒子・黒色粒子少量	8 褐色	色	ローム粒子・黒色粒子少量
4 褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量	9 褐色	色	ローム粒子中量、鹿沼パミス・赤色粒子微量
5 褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量			

遺物出土状況 土師器片15点(坏類)、鉄器片2点(刀子、鉄鏝)のほか、縄文土器片25点、石器片25点(鎌カ1、剥片24)が出土している。M182・M183は中央部の底面付近の覆土下層から出土している。その他の遺物は、埋没の過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から古墳時代後期と推定される。



第104図 第2号土坑実測図



第105図 第2号土坑出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表(第105図)

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP68	縄文土器	深鉢	粘土紐を添付し、刺目を施す刺突文を施文	にぶい橙	赤色粒子・繊維	普通	覆土中層	
TP69	縄文土器	深鉢	L・R・Lの単節斜縄文を羽状に施文	にぶい褐	長石	普通	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q39	石鏡	2.60	2.25	0.82	4.78	チャート	未製品	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M182	刀子	(9.31)	1.23	0.33	(8.60)	鉄	茎欠	覆土下層	
M183	鉄鏡	(3.10)	0.84	0.22	(2.12)	鉄	鏡破片	覆土下層	

第5号土坑(第106図)

位置 調査区西部のD4g8区で、丘陵西側の斜面部に位置している。

規模と形状 長径2.80m、短径1.95mの楕円形で、長径方向はN-80°-Wである。深さは22cmで、底面は西側に傾斜しており、壁は外傾して立ち上がっている。なお覆土に焼土を含んでいるが、底面に焼けた形跡は認められない。

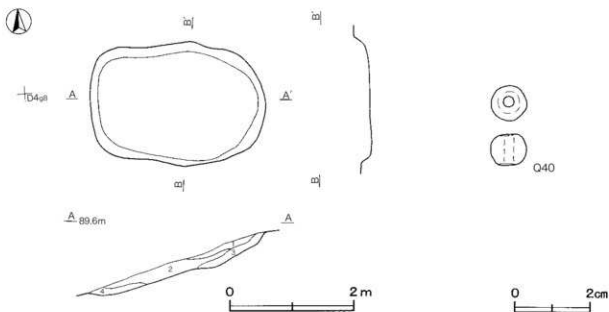
覆土 4層からなる。焼土を含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|------------------|---|-----|----------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量 | 3 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 ガラス製品1点(丸玉)のほか、縄文土器片5点が出土している。Q40は、南側の覆土中から出土している。

所見 本跡の性格は不明である。時期は、出土遺物から古墳時代と想定される。



第106図 第5号土坑・出土遺物実測図

第5号土坑跡出土遺物観察表(第106図)

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q40	丸玉	0.82	0.92	0.28	0.92	ガラス	面取り有り	覆土中	P.L.27

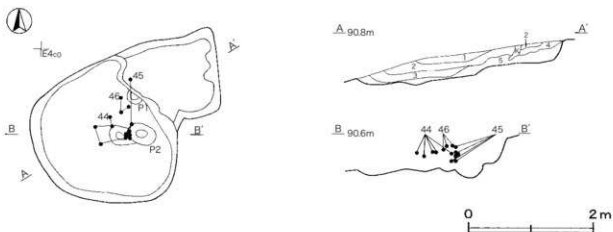
第108号土坑(第107・108図)

位置 調査区中央部のE4c0区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。第9号墳の南側で、第2号墳の前方形周溝外縁に隣接している。

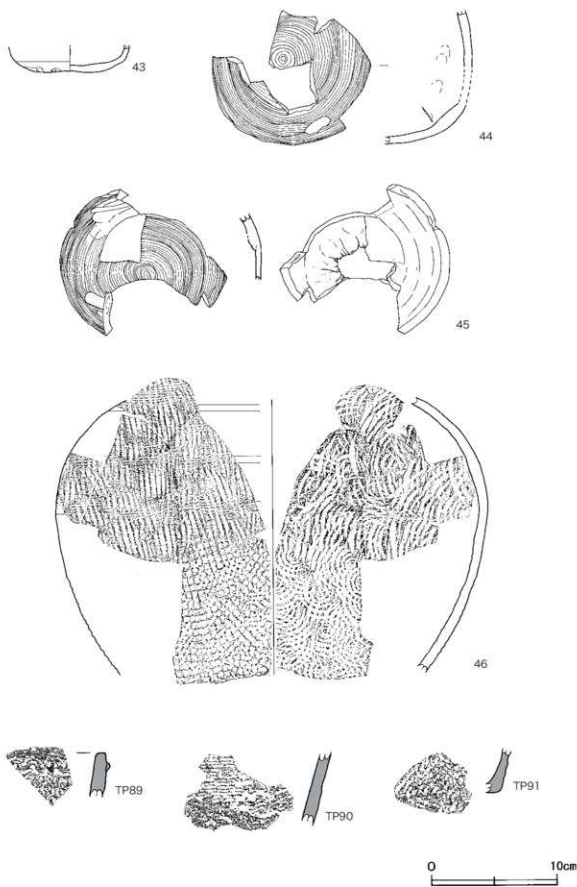
規模と形状 長径3.23m、短径2.36mの不定形で、長径方向はN-55°-Eである。深さは67cmで、底面は起伏があり、壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 2か所。P1・P2は中央部付近に位置し、深さは9~12cmである。性格は不明である。

覆土 5層からなる。東から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積と考えられる。



第107図 第108号土坑実測図



第108図 第108号土坑出土遺物実測図

土層解説

1 褐色	ローム粒子中量	4 褐色	ローム粒子・黒色粒子少量、焼土粒子微量
2 褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量、締まり強	5 褐色	ローム粒子中量、締まり強
3 褐色	ローム粒子中量、締まり強		

遺物出土状況 須恵器片39点(坏類4、甕類22、瓶類13)のほか、縄文土器片52点、石器・石製品片1点(剥片)が出土している。44・45は覆土中層から底面付近にかけて、46は覆土上層付近からそれぞれ破片の状態でも出土している。

所見 本跡の位置から、第2号墳又は第9号墳に関わる遺構の可能性が考えられる。時期は、出土土器から7世紀前葉から中葉と考えられる。

第108号土坑出土遺物観察表(第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
43	須恵器	坏	-	(2.2)	-	石英・長石	黄灰	良	内外面ロクロナデ 底部手持ちヘラ削り	覆土中	10%
44	須恵器	提瓶	-	(10.5)	-	白色粒子	灰	良	外面掻目・ロクロナデ 内面ロクロナデ	底面~覆土中層	30%
45	須恵器	提瓶	-	(11.8)	-	白色粒子	黄灰	良	外面掻目・ロクロナデ 内面ロクロナデ	底面~覆土中層	25%
46	須恵器	甕	-	(21.9)	-	白色粒子・黒色粒子	灰	普通	外面格子叩き・カキ目 内面同心円当て真直	覆土上層	10%

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴				色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP89	縄文土器	深鉢	口縁部に手裁竹管によるコンパス文を施し、粘土層を貼付 L R・R Lの単節斜縄文を履位に施文				褐色	雲母・白色粒子・繊維	普通	覆土中	
TP90	縄文土器	深鉢	L Rの無節縄文を施文				明褐色	雲母・繊維	普通	覆土中	
TP91	縄文土器	深鉢	外面・底面にL Rの単節斜縄文を施文				褐色	雲母・繊維	良	覆土中	

表5 古墳・石室一覧表

番号	位置	墳形	墳丘主軸方向 石室主軸方向	墳丘規模(m)					周溝規模(m)			埋葬施設	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
				全長	高さ	基壇幅	基壇深	総幅	総深	溝幅	溝深				
2	E5	前方後円	N-108°-E N-18°-E	25.3	1.80	12.0	6.4	11.5	4.80	2.90	1.40	横穴式石室	須恵器(甕・フラスコ瓶)、瓦片、鉄器	後期 (6世紀末)	S13~5・8 SD2→本跡
3	E5j F6b	円	N-28°-W N-0°	14.3	0.34	-	-	-	1.82	0.96	0.30 ~ 0.68	横穴式石室	須恵器(坏・高台付坏・蓋・長頸瓶)、刀子	終末期 (7世紀中葉)	S12、SK26・27→本跡
4	F6c3 ~c5	円	N-4°-W N-6°-W	13.7	0.42	-	-	-	2.30	0.75	0.30 ~ 0.80	横穴式石室	須恵器(甕)、直刀、弓矢り金具、釘	終末期 (7世紀前葉)	直刀の例に顕象嵌
5	F5j G5a	楕円	N-6°-E N-6°-E	18.8	0.45	-	-	-	2.52	1.08	0.15 ~ 0.98	横穴式石室	須恵器(フラスコ瓶)、鉄器	終末期 (8世紀前葉)	本跡→SK3
6	D5h・i j7-9	[円]	N-24°-E N-19°-E	12.9	-	-	-	-	2.78	0.85	0.40 ~ 0.65	横穴式石室	須恵器(長頸瓶)	終末期 (7世紀前葉)	
7	E6a ・b・c	[楕円]	N-10°-W N-4°-W	[11.0]	-	-	-	-	1.70	0.80	0.44 ~ 0.92	横穴式石室	須恵器(坏、坏蓋、フラスコ瓶、鐵器)	終末期 (7世紀中葉)	
8	D5g ・h・i	[円]	N-65°-W N-1°-W	[11.6]	-	-	-	-	2.86	0.94	0.20 ~ 0.50	横穴式石室	土師器(甕)	終末期 (7世紀代)	

番号	位置	墳形	墳丘主軸方向 石室主軸方向	墳丘規模(m)				周溝規模(m)			埋葬施設	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)	
				全長	高さ	墓室幅	墓室長	墓室幅	墓室長	最大幅					最大径
9	D 4i・D 5i・E 5a	楕円	N-3°-W N-1°-E	14.7	-	-	-	-	2.70	1.40	0.30 ~ 1.30	横穴式石室	須恵器(高坏, 埴 瓶, 甕)	終末期 (7世紀中葉)	
10	E 4b9	-	N-14°-W	-	-	-	-	-	-	-	-	横穴式石室	勾玉, 白玉, ガ ラス小玉	終末期 (7世紀中葉)	
11	F 5b ・c9-0	円	N-37°-E N-9°-W	11.0	-	-	-	-	2.00	1.00	0.10 ~ 0.50	横穴式石室		終末期 (7世紀中葉)	SK25→本跡
12	E 6j4	-	N-27°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室	鉄鏝	終末期 (7世紀前葉)	
13	F 6g・h	[円]	N-15°-E N-1°-W	[8.0]	-	-	-	-	1.98	1.04	0.18 ~ 0.92	横穴式石室	土師器(坏)	終末期 (7世紀前葉)	
14	E 4b ~46・7	[円]	N-20°-E N-2°-E	[10.0]	-	-	-	-	1.40	0.48	0.30 ~ 0.50	横穴式石室	土師器(坏), 須 恵器(フラスコ 瓶, 甕), 直刀, 鉄鏝, 鉄釘	終末期 (7世紀中葉)	
15	D 4i9	-	N-18°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室	鉄鏝, 鉄釘	終末期 (7世紀代)	
16	D 4h ・i5-6	[円]	N-16°-E N-22°-E	[6.0]	-	-	-	-	1.24	0.78	0.15 ~ 0.62	竪穴式石室	縄文土器片	終末期 (7世紀中葉)	
17	E 5j ・F 5a	[円]	N-17°-E N-20°-E	[12.0]	-	-	-	-	1.92	0.67	0.20 ~ 0.47	横穴式石室	須恵器(甕), 直 刀, 小刀, 刀子, 円頭柄頭, 鉄鏝	終末期 (7世紀前葉)	円頭柄頭(須 恵器)
18	D 4a ・j, E 4a	[円]	N-3°-E N-15°-E	[12.0]	-	-	-	-	1.64	0.68	0.12 ~ 0.63	横穴式石室	土師器片, 須恵 器片	終末期 (7世紀代)	
19	E 4b1	-	N-12°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室	耳環	終末期 (7世紀代)	
20	E 4d1	-	N-11°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室	鉄鏝	終末期 (7世紀中葉)	
21	E 3a0	-	N-34°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室		終末期 (7世紀代)	
22	E 3a9	-	N-2°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室		終末期 (7世紀代)	
23	D 4i9	-	N-2°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室		終末期 (7世紀後葉)	
24	D 4i1	-	N-28°-E	-	-	-	-	-	-	-	-	竪穴式石室		終末期 (7世紀代)	

表6 土坑一覧表

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	F 6h1	N-3°-W	楕円形	3.17×2.83	97	垂直	凹凸	自然	土師器(坏), 刀子	
5	D 4g8	N-80°-W	楕円形	2.80×1.95	22	外傾	平坦	人為	丸玉	
108	E 4c0	N-55°-E	不定形	3.23×2.36	67	外傾	凹凸	自然	須恵器(坏, 長頸瓶, 甕)	

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡1軒、土器溜まり1か所、土坑3基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第109・110図)

位置 調査区東部のG7j5区で、東に傾斜する斜面部に位置している。

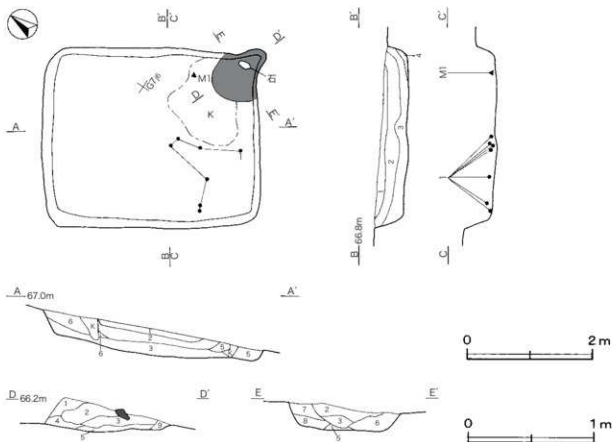
規模と形状 長軸3.45m、短軸2.82mの長方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は17~45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 東に傾斜しており、竈の前面が踏み固められている。

竈 東コーナー部に位置している。規模は焚口部から煙道部先端まで98cm、竈の掘り込み幅44cmである。天井部及び袖部はすでに失われており、煙道部の掘り込み付近に構架材と考えられる石材が確認されている。火床部の掘り込みはほとんど認められず、火床面は赤変している。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

電土層解説

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量。粘性強 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子中量 | 7 黒褐色 ローム粒子微量。粘性強 |
| 3 暗褐色 焼土粒子少量。粘性強 | 8 黒褐色 ローム粒子微量。粘性・締まり強 |
| 4 黒褐色 焼土粒子微量。粘性強 | 9 暗褐色 ローム粒子微量。粘性・締まり強 |
| 5 暗褐色 焼土粒子微量 | |



第109図 第1号住居跡実測図

覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

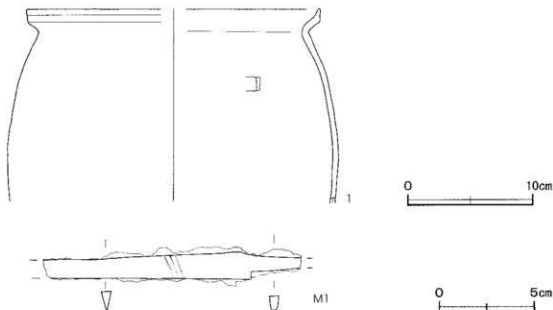
土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 灰暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量、粘性・締まり強 | 5 極暗褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量、粘性・締まり強 |

遺物出土状況 土師器片146点(坏類10, 甕類136), 須恵器片1点(坏類), 鉄器片1点(刀子)が出土している。

1は破片の状態で南コーナー寄りの, M1は竈前面の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 同時期の住居は見られず、単独で存在している。時期は、出土土器から平安時代と考えられる。



第110図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡土遺物観察表(第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	[23.1]	(15.3)	-	雲母・白色粒子・赤色粒子	橙	良	内外面ヨコナデ 内面一部ヘラ削り	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀子	(13.6)	1.4	0.5	(28.4)	鉄	切先・茎欠損 片側	覆土下層	

(2) 土器溜まり

第2号土器溜まり(第111・112図)

位置 調査区中央部のE 5g1区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。第2号墳の前方形周溝外縁に隣接している。

規模と形状 長径0.8m、短径0.5mの範囲に土器が出土している。

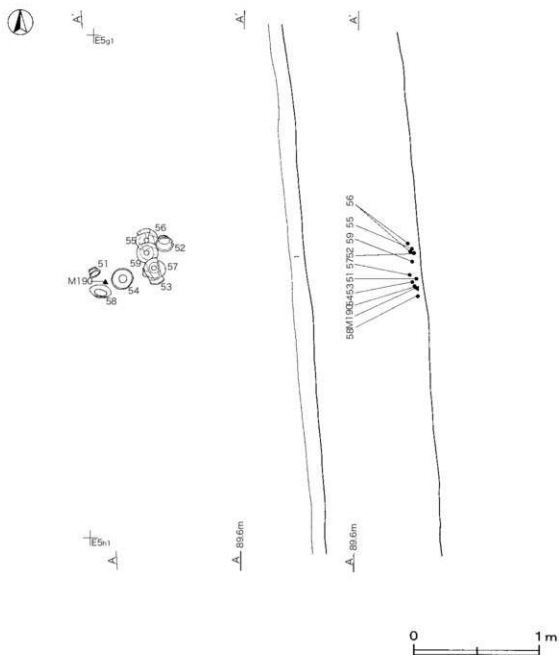
覆土 1層からなる。掘り込みは確認できず、地表面上に自然に堆積した土層と考えられる。

土層解説

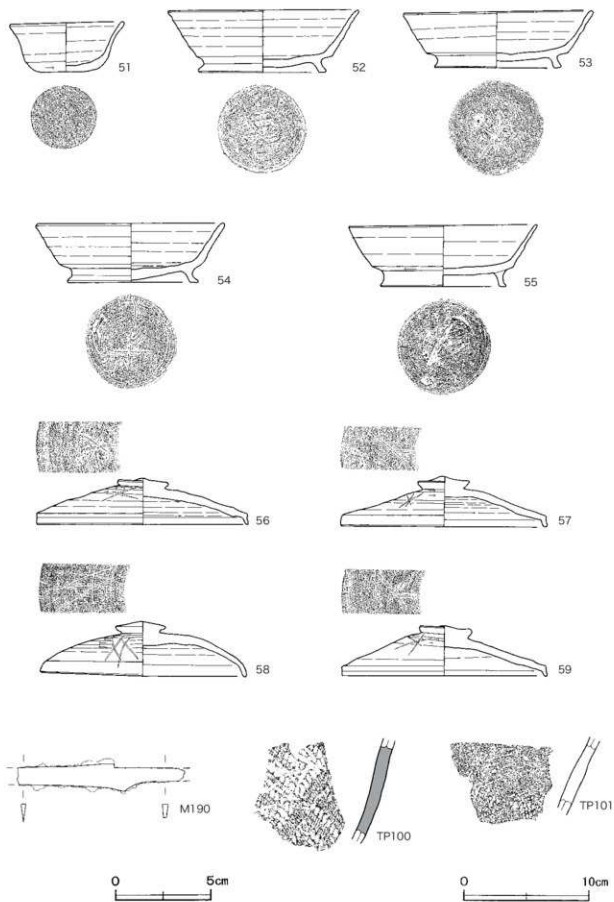
1 褐色 ローム粒子中量, 黒色粒子少量

遺物出土状況 須恵器10点(坏類9, 瓶類1), 鉄器・鉄製品片1点(刀子)が出土している。51は斜位の状態
で西寄りから出土している。52・53・55の高台付坏は並んで出土しており, 本来は56・57・59の蓋をかぶせて
あったものと考えられる。これらの土器群より若干西側からの位置から, 54は正位の状態で, 58は逆位の状態
で出土しており, 2つの土器の間からM190が出土している。

所見 高台付坏と蓋は4個体ずつ出土しており, セット関係にあると判断される。これらの土器は, 第2号墳
の前方部周溝外縁に位置していることや, 他の古墳から同時期の須恵器が出土していることなどから, 古墳に
対して供献された土器と考えられる。時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第111図 第2号土器溜まり実測図



第112図 第2号土器溜まり出土遺物実測図

第2号土器溜まり 出土遺物観察表(第112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
51	須恵器	坏	8.9	4.1	5.1	白色粒子・黒色粒子	灰	普通	内外面口クロナテ 底部回転ヘラ削り	確認面	100% P.L.24
52	須恵器	高台付坏	15.0	5.0	10.2	石英・白色粒子	灰	良	内外面口クロナテ 底部回転ヘラ削り	確認面	98% ヘラ記号「*」 P.L.24
53	須恵器	高台付坏	15.0	4.6	10.1	石英・長石	灰	良	内外面口クロナテ 底部回転ヘラ削り	確認面	98% ヘラ記号「*」 P.L.24
54	須恵器	高台付坏	14.7	4.7	10.5	石英	灰	良	内外面口クロナテ 底部回転ヘラ削り	確認面	100% ヘラ記号「*」 P.L.24
55	須恵器	高台付坏	15.0	4.9	10.0	長石	灰	良	内外面口クロナテ 底部回転ヘラ削り	確認面	100% ヘラ記号「*」 P.L.24
56	須恵器	蓋	[16.7]	3.8	-	石英・白色粒子	灰	良	天井部回転ヘラ削り 内外面口クロナテ	確認面	95% ヘラ記号「*」 P.L.24
57	須恵器	蓋	16.5	4.0	-	石英・長石	黄灰	良	天井部回転ヘラ削り 内外面口クロナテ	確認面	100% ヘラ記号「*」 P.L.24
58	須恵器	蓋	16.4	4.4	-	石英・長石	オリーブ灰	良	天井部回転ヘラ削り 内外面口クロナテ	確認面	100% ヘラ記号「××」 P.L.24
59	須恵器	蓋	16.3	4.0	-	長石・白色粒子・黒色粒子	灰	良	天井部回転ヘラ削り 内外面口クロナテ	確認面	100% ヘラ記号「*」 P.L.24

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴					色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP100	縄文土器	深鉢	附加美一種を羽状に施文					褐	長石・赤色粒子・繊維	普通	覆土中	
TP101	縄文土器	深鉢	L.R.の単節斜縄文を施文					いぶい褐	石英・長石	普通	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	口径	重量	材質	特 徴		出土位置	備 考
M190	刀子	(8.88)	1.51	0.32	(11.40)	鉄	両側 切先・茎穴		確認面	

(3) 土坑

第47号土坑(第113図)

位置 調査区中央部のF6j4区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 南側は調査区域外に延びており、全容は不明である。長径3.20m、短径2.55mの楕円形で、長径方向はN-2°-Eと想定される。深さは126cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

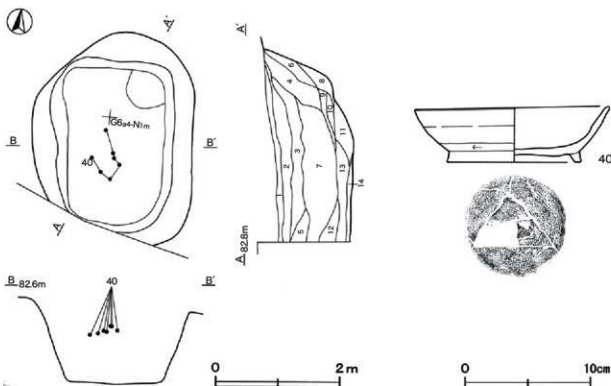
覆土 14層からなる。第10~14層は鹿沼バミスを含み粘性の強い土層であることから、人為的に堆積した可能性があり、第1~9層はレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗 褐色	黒色粒子中量、ローム粒子少量	9	褐色	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス微量
2	褐色	ローム粒子・黒色粒子中量	10	褐色	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量。粘性強
3	褐色	ローム粒子中量、黒色粒子少量	11	明 褐色	色	ローム粒子・鹿沼バミス中量、粘土粒子少量。粘性強
4	褐色	ローム粒子中量、黒色粒子微量	12	暗 褐色	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス・粘土粒子微量。粘性強
5	褐色	ローム粒子中量、黒色粒子微量	13	暗 褐色	色	ローム粒子中量。粘性強
6	明 褐色	ローム粒子中量	14	褐色	色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量。粘性強
7	褐色	ローム粒子中量				
8	褐色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量				

遺物出土状況 土師器片1点(甕類)、須恵器片25点(坏類1, 甎類24)のほか、縄文土器片3点が出土している。遺物のほとんどは細片で、図示できなかった。40は中央部付近の第7層中から、破片の状態で出土している。

所見 本跡の性格は不明である。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第113図 第47号土坑・出土遺物実測図

第47号土坑出土遺物観察表(第113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考

第64号土坑(第114図)

位置 調査区中央部のE5h1区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径3.01m, 短径1.92mの楕円形で、長径方向はN-15°-Wである。深さは123cmで、底面は皿状で中央部は溝状に6cm深くになっており、壁は外傾して立ち上がっている。

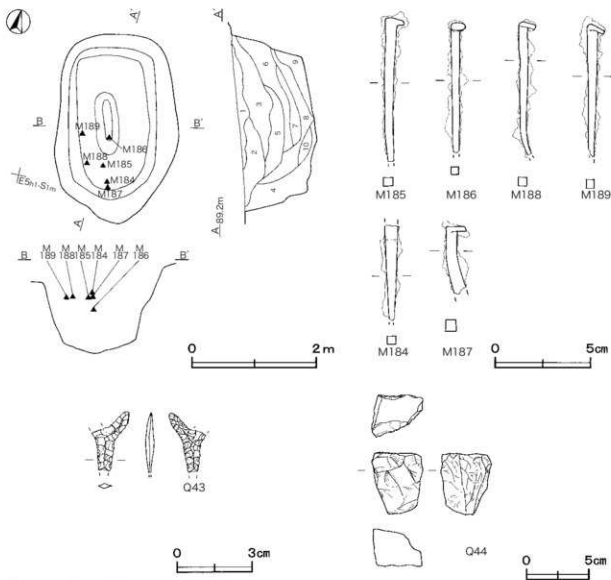
覆土 10層からなる。鹿沼パミスを含み粘性の強い土層があることから、人為堆積の可能性が考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・黒色粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子・黒色粒子微量
2 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子微量、粘性強
3 褐色	ローム粒子少量	8 にぶい黄褐色	鹿沼パミス・黒色粒子微量、粘性強
4 褐色	鹿沼パミス中量	9 にぶい黄褐色	鹿沼パミス少量、粘性強
5 褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量、粘性強	10 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量

遺物出土状況 土師器片19点(甕類), 須恵器片2点(瓶類), 鉄製品6点(釘)のほか, 縄文土器片26点, 石器・石製品片10点(石鏃1, 剥片9)が出土している。土器は細片のため図示できなかった。M184～M189は南西部の覆土中層から上層にかけて出土している。

所見 鉄釘が出土しているものの, 性格は不明である。時期は, 出土土器から奈良時代と想定される。



第114図 第64号土坑・出土遺物実測図

第64号土坑出土遺物観察表(第114図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q43	石鏃	(2.43)	(1.48)	0.33	(0.55)	頁岩	雁叉	覆土中	P.L.26
Q44	石塊	4.88	3.90	3.40	63.40	チャート		覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M184	釘	(5.05)	0.46	0.46	(5.30)	鉄	正目方向の本質付着 頭部欠	覆土上層	
M185	釘	(7.64)	0.52	0.52	(10.50)	鉄	先端欠	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M186	釘	(6.89)	0.48	0.48	(7.10)	鉄	先端欠	覆土中層	
M187	釘	(3.54)	0.59	0.52	(5.60)	鉄	先端欠	覆土上層	
M188	釘	(6.96)	0.51	0.47	(7.70)	鉄	先端欠	覆土上層	
M189	釘	(7.06)	0.45	0.39	(9.60)	鉄	先端欠	覆土上層	

第75号土坑(第115図)

位置 調査区中央部のD5j0区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

規模と形状 長軸2.23m、短軸2.11mの隅丸方形で、長径方向はN-21°-Eである。深さは31cmで、底面はほぼ平坦であり、底面に踏み固められた形跡はない。壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 6か所。深さは10~31cmで、東西の壁に沿って並んでいることから、柱穴の可能性が考えられる。

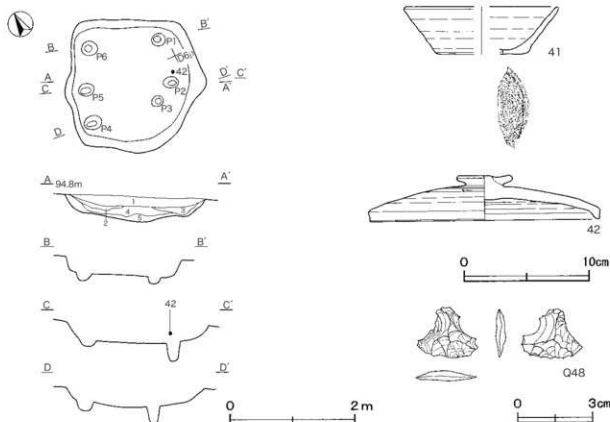
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|----------------------|
| 1 黒 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 4 黒 褐色 | 炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 須恵器片4点(坏類)のほか、縄文土器片28点、石器・石製品1点(石匙)が出土している。41は覆土中から破片の状態で、42は覆土下層から出土している。

所見 ピットが規則的に並んでいることから、簡易的な上屋構造を持つ施設と考えられる。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第115図 第75号土坑・出土遺物実測図

第75号土坑出土遺物観察表(第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	須恵器	蓋	18.2	3.6	-	石英・白色粒子・黒色粒子	灰	良	天井部回転ヘラ削り 内外面口 クロナテ	覆土下層	65%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q48	石硯	1.96	2.37	0.33	1.28	チャート	横長	覆土中	P.L.26

表7 堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
								主出入口	ピット	貯蔵	貯蔵	貯蔵	貯蔵				
1	G75	N-35°-W	長方形	3.45×2.82	17-45	平土	-	-	-	-	1	-	自然	土師器(甕), 刀子	平安		

表8 土坑一覧表

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
47	F 6j4	N-2°-E	[楕円形]	3.20×2.55	126	外傾	平土	自然	土師器片, 須恵器片	
64	E 5h1	N-15°-W	楕円形	3.01×1.92	123	外傾	皿状	人為	土師器(甕), 須恵器(長頸瓶), 剥片, 鉄釘	
75	D 5j0	N-21°-E	隅丸方形	2.23×2.11	31	外傾	平土	自然	須恵器(坏)	

4 近世の遺構と遺物

近世の遺構として、炭焼窯跡1基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

炭焼窯跡

第1号炭焼窯跡(第116・117図)

位置 調査区西部のD3i9区で、丘陵西側の斜面部に位置している。

規模と形状 上面は削平されている。窯体は斜面を利用して構築され、規模は長径3.20m、短径2.38mの洋梨形で、長径方向はN-76°-Wである。壁高は30～137cmで、壁はほぼ直立している。底面には割石を敷き、窯の床面としている。壁面は割石を小口積みにし、石材の間に粘土を充填している。焚口部には比較的大型の割石を敷いて窯の内外を区画されている。煙道部は東壁の中央部を幅45cm、奥行き67cm掘り込み、壁面に扁平な割石を立てている。焚口部の西側には幅3.3m、奥行き1.1mの平坦な区画と、その北に径1.40mの円形で、深さ40cmの土坑が設けられており、作業空間が形成されている。

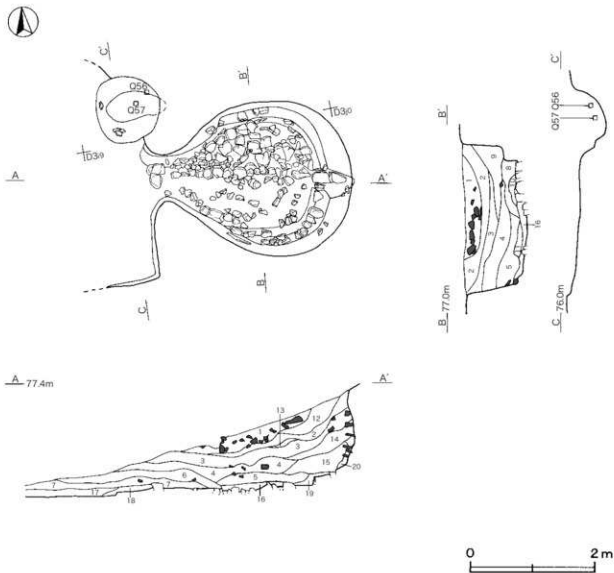
覆土 20層からなる。第1～17層は窯体内に堆積した土層である。

土層解説

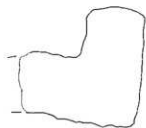
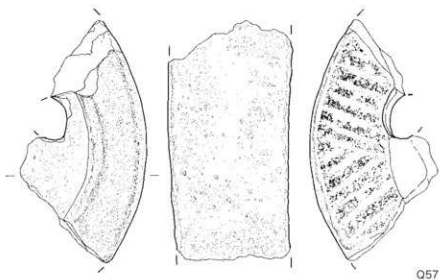
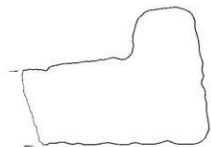
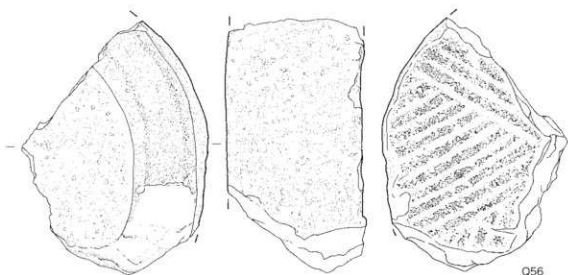
- | | | | |
|----------|-----------------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量。締まり弱 | 10 赤褐色 | 焼土粒子中量。灰少量。炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。締まり弱 | 11 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物・灰少量。粘性・締まり弱 |
| 3 に近い赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量。炭化粒子微量。締まり弱 | 12 褐色 | ローム粒子少量。焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 に近い褐色 | 焼土ブロック中量。粘土粒子少量。炭化物微量。粘性弱 | 13 黒色 | 炭化粒子多量。ローム粒子・焼土粒子微量。締まり弱 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量。炭化物・灰少量。粘性弱 | 14 暗赤褐色 | 焼土粒子中量。炭化物少量。締まり弱 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量。炭化物少量。灰微量。粘性弱 | 15 灰オリーブ色 | 焼土粒子・粘土粒子中量。炭化物少量。粘性弱 |
| 7 褐色 | ローム粒子中量。焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量。締まり強 | 16 極暗褐色 | 焼土ブロック中量。炭化物少量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土粒子中量。炭化物・灰少量。粘性弱 | 17 褐色 | ローム粒子少量 |
| 9 暗赤褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量 | 18 暗褐色 | ローム粒子少量。粘性強 |
| | | 19 灰オリーブ色 | 焼土粒子・粘土粒子中量。炭化粒子少量 |
| | | 20 赤褐色 | 焼土粒子中量。粘土粒子少量 |

遺物出土状況 須恵器片1点(甕類)、陶器片3点(播り鉢)、石製品点2点(石臼)が出土している。遺物は、北側の土坑から破片の状態で出土している。

所見 底面及び壁面に石材が使用され、耐久性に優れた構造となっている。時期は、出土土器から近世以降と考えられる。



第116図 第1号炭焼窯跡実測図



第117图 第1号炭烧窑跡出土遺物実測図

第1号炭焼窯跡出土遺物観察表(第117図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q56	石臼	(20.20)	(14.80)	(10.90)	(2990.00)	安山岩	上白	土坑覆土中	P.L.27
Q57	石臼	(19.10)	(10.10)	(9.60)	(1660.00)	安山岩	上白	土坑覆土中	

表9 第1号炭焼窯跡一覧表

番号	位置	長径(軸) 方向	平面図	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(m)					
1	D 319	N-76°-W	非梨形	3.20×2.38	30~137	直立	平坦	自然	須恵器片・陶器片・石臼片	

5 その他の時代の遺構と遺物

時期の明確でないが跡2基、溝跡3条、土坑3基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

(1) 炉穴

第1号炉穴(第118図)

位置 調査区西部のD 4e4区で、丘陵西側の斜面部に位置している。

規模と形状 長径0.50m、短径0.43mの楕円形で、深さは6cmである。底面は皿状で火熱を受けて赤変しており、壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-79°-Eである。

所見 底面に火熱を受けていることから、炉穴と考えられる。時期は不明である。

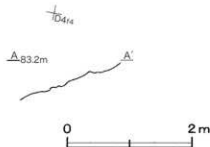


第2号炉穴(第118図)

位置 調査区西部のD 4e3区で、丘陵西側の斜面部に位置している。

規模と形状 長径0.60m、短径0.56mの楕円形で、深さは7cmである。底面は皿状で火熱を受けて赤変しており壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-32°-Wである。

所見 底面に火熱を受けていることから、炉穴と考えられる。時期は不明である。



第118図 第1・2号炉穴実測図

(2) 溝跡

第1号溝跡(第119図・付図3)

位置 調査区東部のE 6i9~0区で、丘陵東側の斜面部に位置している。

重複関係 第48号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 東側は削平され、全容は不明である。東側から北側に向かってN-82°-Eに伸び、途中N-11°-Wへ方向を変えている。確認された長さは52mで、上幅0.31～0.61m、下幅0.09～0.35m、深さ18～25cmである。断面はU字形で、壁は外傾して立ち上がっている。変換点付近で分岐し、3mほど南へ伸びている。

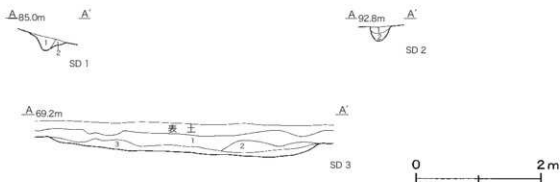
覆土 2層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子中量

2 褐色 鹿沼バミス微量

所見 時期は不明である。



第119図 第1・2・3号溝跡実測図

第2号溝跡 (第119図・付図3)

位置 調査区中央部のE5c8区で、丘陵尾根上の緩斜面部に位置している。

重複関係 第2号墳の墳丘下から確認され、第80・81号土坑と重複している。

規模と形状 南側は第81号土坑と重複しており、全容は不明である。南東から北西に向かってN-16°-Wの方向に伸びている。確認された長さは2.2mで、上幅0.31～0.35m、下幅0.18～0.24m、深さ21～30cmである。断面はU字形で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなる。第2層に鹿沼バミスを含んでいることから、人為堆積の可能性が考えられる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子中量

2 褐色 鹿沼バミス微量

所見 時期は明らかではないが、第2号墳の構築以前と考えられる。

第3号溝跡 (第119図・付図3)

位置 調査区東部のF8b・c6～7区で、丘陵東側の谷部に位置している。

規模と形状 南北は調査区域外に伸び、全容は不明である。N-3°-Wの方向に伸びている。確認された長さは4.30mで、上幅4.30～5.51m、下幅3.22～3.51m、深さ10～20cmである。断面は緩やかな弧状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は礫が露出している。

覆土 3層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰黄褐色 黒色粒子中量、粘性弱
2 黒褐色 黒色粒子中量

- 3 黒褐色 黒色粒子中量、粘性弱

遺物出土状況 土師器片6点(坏類5、甕類1)、須恵器片2点(甕類)が出土している。摩耗が著しく、本跡の埋没に伴って流れ込んだものと考えられ、また細片のため図示できなかった。

所見 谷部に位置し、底面に礫が露出していることから、一時期の間水が流れていたと考えられる。時期は明らかではないが、平安時代以降に埋没したと考えられる。

(3) 土坑

ここでは、主要な土坑について記述し、その他の土坑については土層解説を記載する。

第19号土坑(第120図)

位置 調査区部のE4f4区で、丘陵西側の斜面部に位置している。

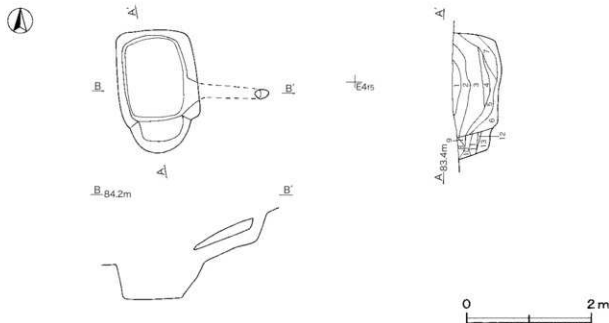
規模と形状 長軸1.97m、短軸1.25mの不整形長方形で、長軸方向はN-7°-Wである。深さは56cmで、底面は2段に掘り込まれており、壁は外傾して立ち上がっている。東壁に壁外へ1.1mほど延びる煙突状の施設が認められる。底面や煙突状の施設には、火熱を受けた痕跡は確認されなかった。

覆土 13層からなる。土層の観察から、第8~13層が一度堆積した後、掘り込まれて第1~9層が堆積したと判断される。覆土は鹿沼バミスを含んでいる層が多いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・黒色粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子・黒色粒子少量、鹿沼バミス微量
3 暗褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス微量
4 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス微量
5 暗褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス・赤色粒子微量
6 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス少量
7 褐色 ローム粒子・鹿沼バミス少量

- 8 明褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
9 褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量
10 黒褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
11 明褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量
12 極暗褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
13 橙褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量



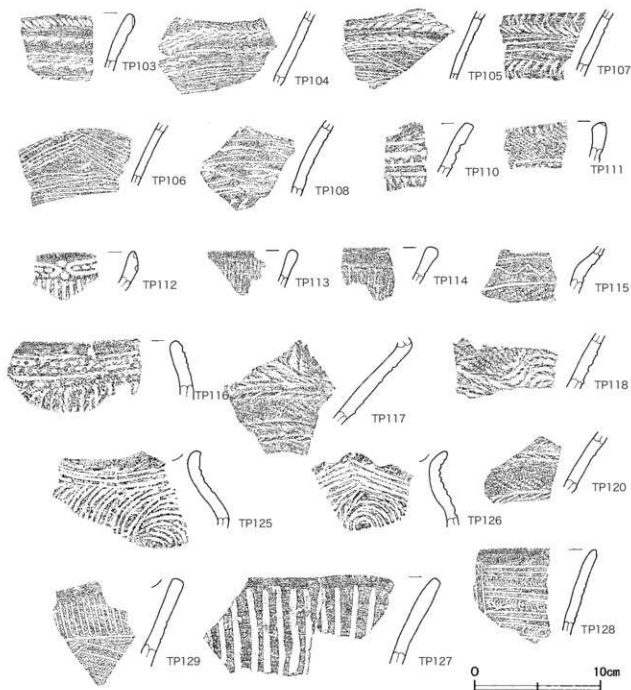
第120図 第19号土坑実測図

遺物出土状況 縄文土器片3点(胴部片)が出土している。遺物は本跡に伴うものではなく、また細片のため図示できなかった。

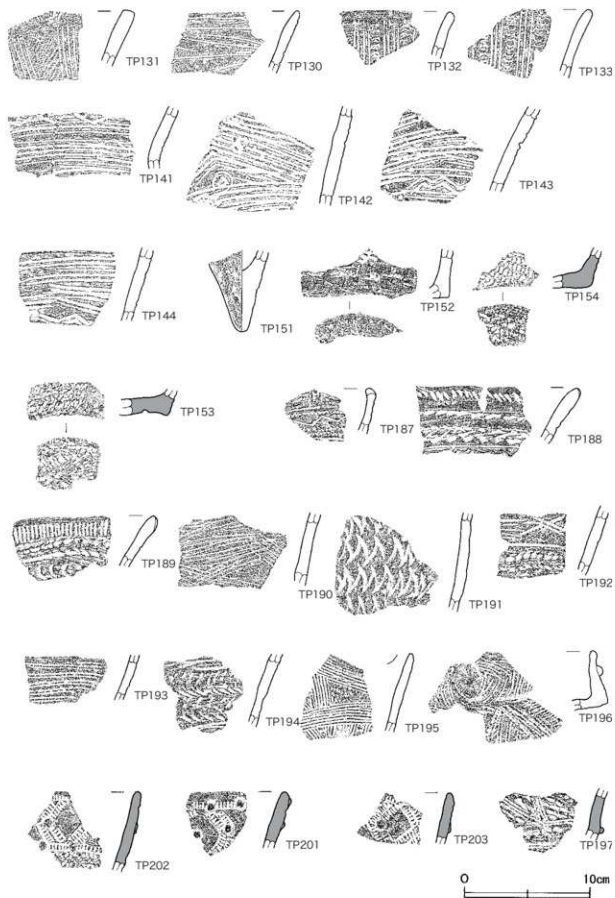
所見 性格・時期とも不明である。

(4) 遺構外出土遺物 (第121～126図)

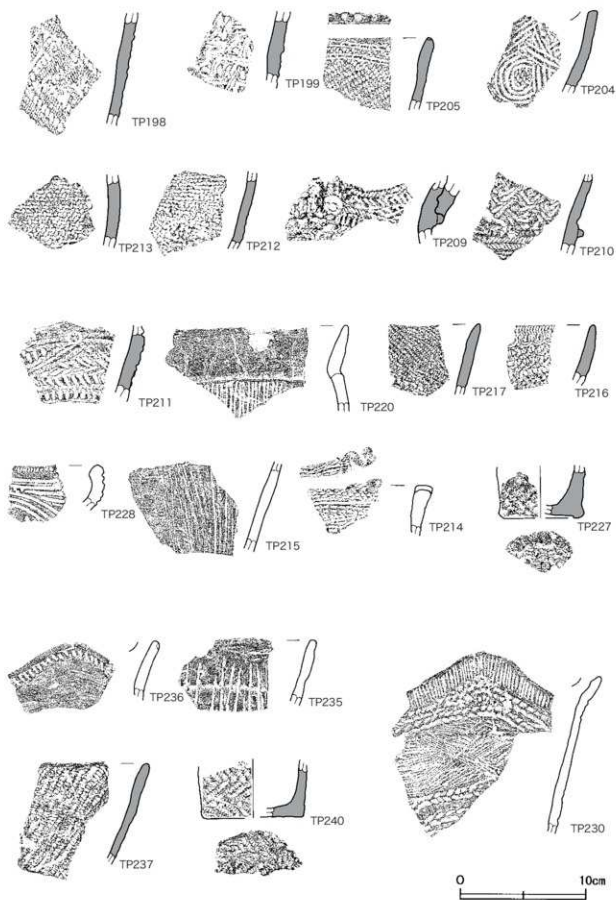
今回の調査では、遺構に伴わない縄文時代から近世に至るまでの遺物が出土している。特色ある遺物を抽出し、拓影図、実測図及び観察表で記載する。



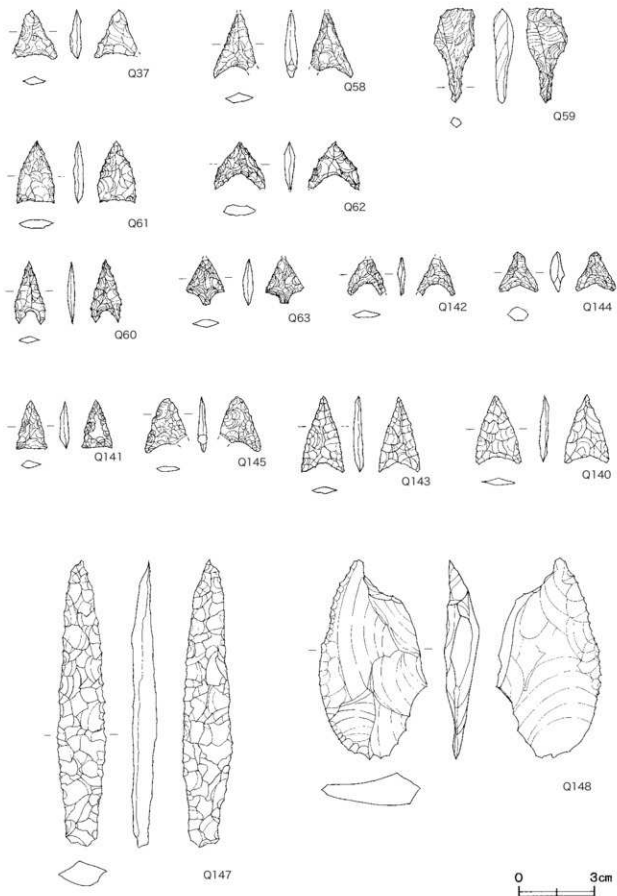
第121図 遺構外出土遺物実測図(1)



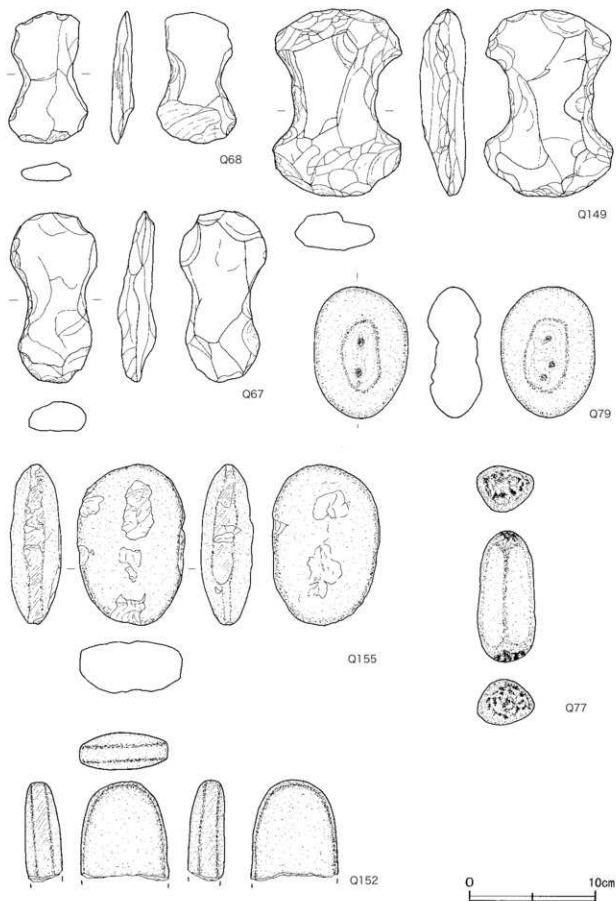
第122図 遺構外出土遺物実測図(2)



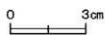
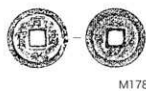
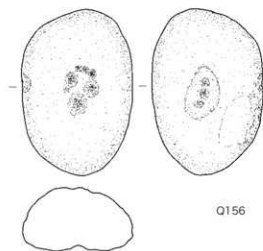
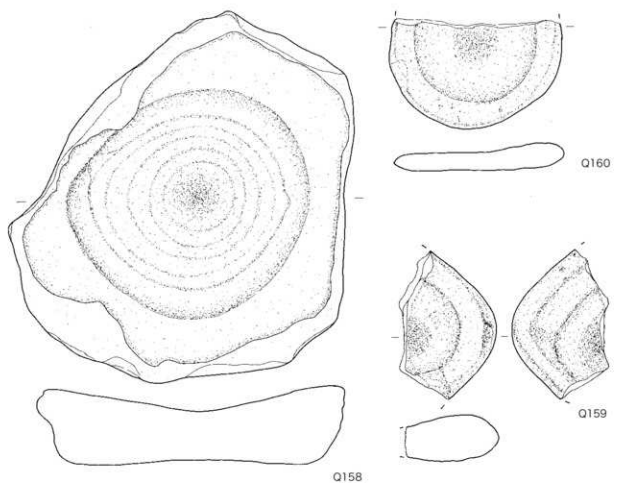
第123图 遺構外出土遺物実測図(3)



第124図 遺構外出土遺物実測図(4)



第125图 遺構外出土遺物実測図(5)



第126図 遺構外出土遺物実測図(6)

遺構外出土遺物観察表(第121～126図)

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴	色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP103	縄文土器	深鉢	口唇部に斜目 半截竹筒による爪形文を施文	褐	長石・雲母	良	E 5b6区	
TP104	縄文土器	深鉢	波状貝殻文・半截竹筒による沈線及び爪形文を施文	褐	白色粒子	普通	E 5a6区	
TP105	縄文土器	深鉢	半截竹筒による平行沈線及び爪形文を施文	明褐	長石・雲母	普通	E 5e6区	
TP106	縄文土器	深鉢	半截竹筒による平行沈線を施文	にぶい褐	長石・雲母	普通	E 5c8区	
TP107	縄文土器	深鉢	波状貝殻文・半截竹筒による沈線を施文	にぶい褐	長石・雲母	普通	E 5d5区	
TP108	縄文土器	深鉢	波状貝殻文・半截竹筒による平行沈線を施文	明褐	長石・雲母	良	E 5c8区	
TP110	縄文土器	深鉢	口唇部付近にR Lの単節斜縄文を施文 棒状工具による沈線を施し、刺突文を施文	にぶい褐	長石	普通	E 5e7区	
TP111	縄文土器	深鉢	口唇部に斜目 口縁部外面にR Lの2段の縄文を施文	褐	長石	普通	E 5e0区	
TP112	縄文土器	-	口縁部下に沈線による区画内に刺突文を施し、縦位の沈線を施文	明褐	長石・白色粒子	普通	表土	
TP113	縄文土器	深鉢	口唇部肥厚 懸赤文を施文	にぶい褐	長石	普通	表土	
TP114	縄文土器	深鉢	口唇部肥厚 懸赤文を施文	にぶい褐	長石	普通	E 5e8区	
TP115	縄文土器	深鉢	棒状工具による連続山形文を沈線で区画 貝殻線文を施文	褐	長石	普通	E 5g9区	
TP116	縄文土器	深鉢	波状口縁 R Lの単節斜縄文を施文後、粘土粒による浮線文に斜目を施し、刺突文を施文	にぶい褐	長石・雲母	普通	E 5e7区	
TP117	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文後、粘土粒による浮線文に斜目を施文	褐	長石・雲母	普通	E 5c4区	
TP118	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文後、粘土粒による浮線文に斜目を施文	にぶい褐	雲母	普通	E 5b6区	
TP120	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文後、粘土粒による浮線文に斜目を施文	にぶい橙	雲母	普通	E 5e6区	
TP125	縄文土器	深鉢	波状口縁半截竹筒による沈線を施文	褐	石英・長石	普通	E 5d0区	
TP126	縄文土器	深鉢	波状口縁半截竹筒による沈線を施文	褐	石英・長石	普通	E 5c8区	
TP127	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線を縦位に施文	明褐	長石・雲母	普通	E 5e8区	
TP128	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線を縦位・横位に施し、爪形刺突文を施文	にぶい褐	長石・雲母	良	E 5e7区	
TP129	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線を縦位に施文 沈線による区画内に貝殻線文を施文	明褐	長石	良	E 5c8区	
TP130	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線を施文	明褐	長石	普通	E 5e7区	
TP131	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線を縦位に施し、貝殻線文を施文	明褐	長石	良	E 5e7区	
TP132	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線及び爪形刺突文を縦位に施文	明褐	石英	良	E 5e9区	
TP133	縄文土器	深鉢	棒状工具による沈線及び爪形刺突文を縦位に施文	明褐	砂粒	良	TM2周縁	
TP141	縄文土器	深鉢	半截竹筒による平行沈線を施文	褐	長石	普通	E 5c8区	
TP142	縄文土器	深鉢	半截竹筒による平行沈線・コンパス文を施文	褐	長石	普通	表土	
TP143	縄文土器	深鉢	半截竹筒による平行沈線・連続山形文を施文	褐	長石	普通	E 5c8区	
TP144	縄文土器	深鉢	半截竹筒による平行沈線・連続山形文を施文	褐	長石	普通	表土	
TP151	縄文土器	深鉢	ナデ	明褐	長石	普通	表土	
TP152	縄文土器	深鉢	貝殻文を施文	褐	白色粒子	普通	E 5b4区	
TP153	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文	褐	長石・繊維	普通	表土	
TP154	縄文土器	深鉢	R Lの単節斜縄文を施文	褐	長石・繊維	普通	TM2周り方	
TP187	縄文土器	深鉢	口唇部に粘土瘤を貼付し、貝殻線文を施文 棒状工具による沈線・貝殻線文を施文	明褐	長石	普通	F 5a0区	

番号	種別	器種	文 様 の 特 徴	色調	胎 土	焼成	出土位置	備 考
TP188	縄文土器	深鉢	口唇部に刻目 半截竹管による爪形文を施文	褐	長石	良	E 5e7区	
TP189	縄文土器	深鉢	口縁部外面に半截竹管による沈線を縦位に施文 半截竹管による爪形文を施文	にぶい褐	長石	普通	表採	
TP190	縄文土器	深鉢	半截竹管による平行沈線を施文	にぶい褐	長石	普通	E 6e3	
TP191	縄文土器	深鉢	波状貝殻文を施文	にぶい褐	雲母・白色粒子	普通	表採	
TP192	縄文土器	深鉢	半截竹管による平行沈線を施し、波状貝殻文を施文	にぶい褐	長石	普通	E 5e9区	
TP193	縄文土器	深鉢	半截竹管による平行沈線を施文	にぶい褐	長石・雲母	雲母	E 4e0区	
TP194	縄文土器	深鉢	半截竹管による平行沈線を施し、波状貝殻文を施文	にぶい褐	長石・雲母	普通	E 5d5区	
TP195	縄文土器	深鉢	波状口縁RLの単節斜縄文を施し、集合条線を施文	明褐	長石	良	D 5h3区	
TP196	縄文土器	深鉢	RLの単節斜縄文を施し、粘土瘤を貼付 半截竹管による沈線を施文	明褐	長石	普通	D 5h3区	
TP197	縄文土器	深鉢	口唇部に刻目 隆帯及び原体押圧を施し、棒状工具による刺突文を施文	褐	長石・繊維	普通	D 5h8区	
TP198	縄文土器	深鉢	附加条一種を羽状に施文	褐	長石・繊維	普通	E 5g1区	
TP199	縄文土器	深鉢	結束文を施文	褐	長石・繊維	普通	E 6e3区	
TP201	縄文土器	深鉢	口唇部下に刻目 刻目による円形文に円形浮文を貼付	にぶい褐	長石・石英・繊維	普通	E 5e1区	
TP202	縄文土器	深鉢	刻目による区画に、菱形文を施文し、円形浮文を貼付 RLの単節斜縄文を施文	にぶい褐	長石・石英・繊維	普通	E 5e1区	
TP203	縄文土器	深鉢	刻目による菱形文に円形浮文を貼付	にぶい褐	長石・石英・繊維	普通	E 5d2区	
TP204	縄文土器	深鉢	RLの単節斜縄文を施文後、半截竹管による沈線を施文	にぶい褐	長石・白色粒子・繊維	普通	E 5d2区	
TP205	縄文土器	深鉢	口唇部に工具による押圧 RLの単節斜縄文・附加条一種を羽状に施文後、半截竹管による爪形文を施文	褐	長石・繊維	良	表採	
TP209	縄文土器	深鉢	原体押圧を伴う隆帯に刻目を施す円形スタンプ文、刺突文を施文	明褐	長石・繊維	普通	F 6a3区	
TP210	縄文土器	深鉢	原体押圧を伴う隆帯に刻目を施す円形スタンプ文、ループ文を施文	明褐	長石・繊維	普通	E 6j1区	
TP211	縄文土器	深鉢	原体押圧を伴う隆帯に刻目を施す円形スタンプ文、刺突文を施文	明褐	長石・繊維	普通	E 6j3区	
TP212	縄文土器	深鉢	組紐を施文	にぶい褐	長石・繊維	普通	表採	
TP213	縄文土器	深鉢	組紐を施文	褐	長石・繊維	普通	F 5d3区	
TP214	縄文土器	深鉢	刺突文を施し、沈線で区画 口唇部に隆帯を貼付	にぶい褐	長石・繊維	普通	表採	
TP217	縄文土器	深鉢	略刻 長石・繊維	暗褐	長石・繊維	普通	D 5g7区	
TP220	縄文土器	深鉢	口縁部内外面ナデ 附加条一種を施文	にぶい橙	長石	良	F 5d8区	
TP226	縄文土器	深鉢	口縁部外縁に爪形文、コンパス文を施し、LR・RLの単節斜縄文を羽状に施文	にぶい褐	長石・繊維	普通	表採	
TP227	縄文土器	深鉢	LR・RLの単節斜縄文を羽状に施文	褐	石英・長石・繊維	普通	F 5a0区	
TP228	縄文土器	深鉢	口唇部に刻目 半截竹管による平行沈線を施文	暗褐	石英・長石	普通	E 6c3区	
TP230	縄文土器	深鉢	波状口縁部外縁に刻目 半截竹管による爪形文を施し、同じく平行沈線を斜交状に施文	にぶい褐	長石	普通	D 5h6区	
TP235	縄文土器	深鉢	輪積痕を残し、棒状工具による沈線を縦位に施文	にぶい褐	長石	普通	D 5h4区	
TP236	縄文土器	深鉢	波状口縁 口縁部外縁に刻目	褐	長石・雲母	普通	D 5h4区	
TP237	縄文土器	深鉢	LRの単節斜縄文を施文	褐	長石・雲母・繊維	普通	D 5h4区	
TP240	縄文土器	深鉢	LR・RLの単節斜縄文を羽状に施文	にぶい褐	石英・長石・繊維	普通	表採	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q37	石鏃	1.94	(1.63)	0.44	(0.92)	チャート	若干挟り有り	TM12石室内	
Q58	石鏃	2.58	(1.68)	0.50	(1.32)	チャート	挟り有り	TM 2石室掘り方内	
Q59	石鏃	3.70	1.68	0.75	3.72	チャート		E 5e6区	P L26
Q60	石鏃	2.48	1.21	0.29	0.66	チャート	挟り有り	E 5e9区	P L26
Q61	石鏃	2.48	1.50	0.41	1.44	チャート	平根	E 5e9区	P L26
Q62	石鏃	(1.58)	2.01	0.41	(0.96)	チャート	挟り有り	F 5e0区	P L26
Q63	石鏃	(1.80)	1.51	0.40	(0.80)	チャート	有茎	E 5e3区	P L26
Q67	石斧	13.60	6.71	3.00	293.00	ホルンフェルス		TM 2 両溝	P L27
Q68	石斧	10.50	6.24	1.85	110.20	ホルンフェルス		E 5e9区	P L27
Q77	敲石	10.40	4.60	3.60	250.00	安山岩	小門に敲き痕	TM2表土	
Q79	凹石	10.40	7.50	4.50	431.00	砂岩	凹み2ヶ所	TM2表土	
Q140	石鏃	2.70	1.80	0.30	2.70	チャート	若干挟り有り	F 5a3区	
Q141	石鏃	1.89	1.20	0.35	2.10	チャート	平根	E 5区	
Q142	石鏃	(1.47)	(1.50)	0.28	(0.90)	チャート	挟り有り	D 5i9区	
Q143	石鏃	3.00	1.70	0.40	2.80	チャート	挟り有り	F 6a1区	
Q144	石鏃	1.60	1.59	0.58	2.50	チャート	挟り有り	F 6a1区	
Q145	石鏃	(2.15)	(1.60)	0.37	(2.40)	チャート	挟り有り	D 5h4区	
Q147	石槍	11.30	2.00	1.00	19.30	頁岩	神子架型か	D 5h5区	P L26
Q148	未製品	7.90	4.30	1.30	35.10	メノウ	槍	D 5h6区	P L26
Q149	石斧	14.70	10.20	3.60	576.00	ホルンフェルス		西側斜面部	P L27
Q152	磨石	(7.90)	7.00	2.90	(236.00)	安山岩	外周に磨り跡	D 4h4区	
Q155	凹石	12.70	8.40	3.90	520.00	安山岩	凹み4ヶ所 外周に磨り跡	F 5h6区	P L27
Q156	凹石	17.40	11.60	7.70	1620.00	安山岩	小さな凹み5ヶ所 外周に磨り跡	E 4e2区	
Q158	石皿	40.00	36.30	8.20	18650.00	ホルンフェルス	両面使用	F 6a1区	P L27
Q159	石皿	(15.60)	(8.20)	(4.90)	(600.00)	安山岩	両面使用	F 6a1区	
Q160	石皿	18.20	(11.60)	(2.90)	(660.00)	安山岩	片面使用	F 6a1区	

番号	銭名	計 測 値				材質	初鋳・鋳造年		特 徴	備 考
		銭径(cm)	挟孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		年号	西暦		
M178	寛永通宝	2.41	0.50	2.60	3.90	銅	寛永13年	1636	錆上がりやや不良	TM 2出土
M181	寛永通宝	2.34	0.59	1.00	2.22	銅	寛永13年	1636	錆上がり良好	TM 2出土

表10 炉穴一覧表

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(m)					
1	D 4 e4	N-79°-E	円形	0.50×0.43	9	外傾	皿状	-		
2	D 4 e3	N-32°-W	楕円形	0.60×0.56	7	外傾	皿状	-		

表11 溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規 模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備 考 (旧→新)
				長さ(m)	土幅(cm)	下幅(cm)	深さ(m)						
1	E 6⑨-0	N-82°-E N-11°-W	U字形	5.20	31~61	9~25	18~25	外傾	皿状	自然	-	SK 48→本跡	
2	E 5 c8	N-16°-W	U字形	(2.20)	31~35	18~24	21~30	外傾	皿状	人為	-	SK 80・81と重複 本跡→TM 2	
3	F 8b-c6-7	N-3°-W	U字形	(4.30)	430~551	322~351	10~30	傾斜	皿状	自然	土層断片・鼠患断片	-	

表12 土坑一覽表

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(m)					
3	F 5 i 8	N-7°-E	隅丸方形	1.30×1.30	52	外傾	皿状	人為	土師器片	TM5→本跡
4	E 4 h 0	N-3°-E	円	1.10×0.92	67	垂直	平坦	人為		
6	E 4 f 9	N-6°-E	楕円形	0.76×0.54	20	緩斜	皿状	自然		
7	E 4 g 0	N-3°-W	不整形方形	1.99×0.90	20	緩斜	皿状	人為		
10	F 5 b 8	N-85°-W	長楕円形	(2.52)×(1.24)	40	緩斜	平坦	自然		
11	F 5 a 6	N-62°-W	不整形円形	2.02×1.37	(68)	外傾	段状	人為		
12	F 5 a 5	N-90°-W	楕円形	1.65×0.81	24	外傾	皿状	自然		
13	F 4 a 0	N-3°-W	楕円形	4.40×3.05	90	外傾	皿状	人為	縄文土器片、剥片	
15	F 5 a 7	N-47°-W	不整形円形	3.60×2.30	75	緩斜	皿状	人為		
16	F 5 a 6	N-10°-W	不整形円形	1.09×1.01	13	外傾	皿状	自然	縄文土器片、剥片	
17	E 5 i 7	N-90°-W	楕円形	1.22×0.71	22	外傾	平坦	自然	縄文土器片、剥片	
18	E 4 c 3	N-71°-E	不整形円形	2.05×1.50	46	緩斜	平坦	人為	縄文土器片	
19	E 4 f 4	N-7°-W	不整形方形	1.97×1.25	56	外傾	平坦	自然	縄文土器片、剥片	雑道部あり
23	F 5 c 1	N-53°-W	楕円形	1.46×1.11	60	外傾	平坦	自然		本跡→TM11
24	E 4 g 6	N-37°-W	楕円形	3.68×3.19	88	緩斜	平坦	人為		
25	F 5 b 0	N-6°-E	方形	2.89×2.50	125	外傾	平坦	人為		本跡→TM11
28	G 7 c 4	N-19°-W	楕円形	0.69×0.61	37	緩斜	皿状	人為		本跡→TM3
29	G 7 a 4	N-23°-W	不定形	(3.32)×1.10	20	緩斜	平坦	自然		
30	G 7 e 8	N-0°	円形	0.47×0.45	18	外傾	皿状	自然		
31	G 7 d 8	N-36°-E	楕円形	0.44×0.37	25	垂直	平坦	自然		
32	G 7 c 8	N-0°	円形	0.34×0.32	25	垂直	平坦	自然		
33	G 6 a 6	N-11°-E	楕円形	1.44×0.89	32	緩斜	皿状	自然		
34	F 6 i 7	N-0°	楕円形	0.45×(0.41)	23	外傾	平坦	自然		
35	F 6 j 7	N-0°	楕円形	0.59×0.49	34	緩斜	平坦	自然		
36	G 6 b 0	N-49°-E	楕円形	1.25×1.12	86	外傾	皿状	自然		
37	G 6 d 0	N-48°-E	楕円形	0.86×0.60	19	緩斜	平坦	自然		
38	G 7 d 1	N-40°-E	楕円形	0.89×0.86	95	外傾	皿状	自然		
39	F 6 j 7	N-36°-E	不整形	0.78×0.35	10	緩斜	平坦	自然		
40	G 6 a 5	N-25°-E (楕円形)	(楕円形)	2.07×(0.94)	110	外傾	平坦	自然		
41	F 6 i 6	N-33°-E	円形	0.85×0.80	38	外傾	凹凸	自然		
42	F 6 b 7	N-7°-E	楕円形	1.15×0.73	30	外傾	平坦	自然		
43	E 6 i 6	N-19°-E	楕円形	0.60×0.53	15	緩斜	皿状	自然		
44	E 6 h 6	N-80°-E	円形	1.54×1.45	16	外傾	平坦	自然		
45	E 6 f 8	N-58°-W	楕円形	1.20×0.87	35	緩斜	皿状	人為		
46	E 6 f 8	N-49°-E	楕円形	1.30×0.93	28	緩斜	皿状	自然		
48	E 6 j 9	N-14°-E	長方形	1.25×1.02	24	緩斜	皿状	自然		
49	E 6 g 0	N-43°-W (楕円形)	(楕円形)	1.72×1.40	46	緩斜	平坦	自然		
50	E 6 g 9	N-35°-W	楕円形	1.02×0.57	25	緩斜	皿状	自然		
51	G 7 e 6	N-20°-E	楕円形	2.10×1.45	65	緩斜	皿状	人為		
52	G 7 e 4	N-40°-W (楕円形)	(楕円形)	1.82×1.28	28	緩斜	平坦	人為		
53	F 6 i 3	N-0°	円形	0.75×0.75	12	緩斜	皿状	自然		
56	E 4 i 5	N-29°-E	不定形	3.05×1.91	61	緩斜	凹凸	人為		SK 57→本跡
60	F 5 h 6	N-73°-W	楕円形	1.68×1.08	62	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	
61	F 5 h 7	N-32°-E	楕円形	0.84×0.65	54	緩斜	皿状	自然		

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
62	F 5g8	N-64°-W	隅丸長方形	1.12 × 0.91	30	緩斜	皿状	自然	割片	
65	E 5f1	N-78°-W	楕円形	0.49 × 0.39	73	垂直	皿状	自然		
66	E 5f1	N-31°-W	楕円形	0.41 × 0.30	51	垂直	皿状	自然		
68	E 5f0	N-40°-E	楕円形	1.02 × 0.82	33	緩斜	皿状	人為		
69	E 5f0	N-83°-W	円形	0.34 × 0.31	15	外傾	皿状	自然		
70	E 5f0	N-52°-E	楕円形	1.52 × 0.82	12	緩斜	皿状	自然		
73	E 5e9	N-50°-E	不定形	1.43 × 1.28	31	外傾	平坦	人為	縄文土器片、割片	
74	E 5e9	N-74°-E	不定形	(2.36) × 1.19	30	外傾	平坦	人為		
78	E 5b5	N-20°-W	不定形	(2.37) × (0.90)	44	外傾	皿状	人為		SI 5→本跡
79	E 5b5	N-46°-W	不定形	2.67 × 1.86	40	外傾	皿状	自然	縄文土器片	
81	E 5d8	N-19°-W	(楕円形)	(1.70) × 1.55	30	外傾	平坦	自然	縄文土器片	SK 80と重複
82	F 7h3	N-59°-E	不整形	0.76 × 0.74	40	外傾	凹凸	人為		
83	F 7h3	N-70°-E	楕円形	0.36 × 0.23	15	緩斜	皿状	自然		
84	F 7h3	N-80°-E	楕円形	0.45 × 0.33	27	外傾	皿状	人為		
85	F 7h3	N-70°-W	楕円形	0.50 × 0.41	36	外傾	平坦	人為		
86	F 7g3	N-67°-E	不定形	1.58 × 1.06	19	緩斜	平坦	人為	縄文土器片	
87	F 7g4	N-30°-W	不定形	1.40 × 0.89	22	緩斜	凹凸	人為		
88	F 7h4	N-0°	円形	0.29 × 0.27	21	外傾	皿状	自然		
89	F 7h4	N-7°-W	不定形	1.76 × 0.80	47	外傾	凹凸	人為		
90	F 7g3	N-79°-W	不定形	(1.33) × 0.84	54	外傾	平坦	-		SK 91と重複
91	F 7g3	N-7°-E	不定形	(1.10) × (1.10)	61	外傾	凹凸	-		SK 90・92と重複
93	F 7g3	N-41°-W	不定形	2.30 × 0.81	25	外傾	皿状	自然		SK 94と重複
95	F 7f3	N-48°-W	(楕円形)	(1.40) × 1.30	9	外傾	皿状	自然		
96	F 7f3	N-49°-W	不定形	2.03 × 1.29	25	緩斜	平坦	人為		
97	F 7i6	N-21°-E	不整形	0.85 × 0.74	19	緩斜	皿状	人為		
98	F 7h6	N-79°-W	不整形	1.90 × 1.14	20	緩斜	平坦	自然		
99	F 7g6	N-0°	円形	0.39 × 0.36	23	緩斜	皿状	自然		
100	F 7e3	N-84°-W	楕円形	1.45 × 0.94	30	外傾	凹凸	人為		
102	E 5e8	N-30°-E	楕円形	0.52 × 0.40	29	外傾	皿状	自然		
103	E 5e8	N-44°-W	楕円形	0.43 × 0.31	8	外傾	皿状	自然		
104	E 5e8	N-34°-E	楕円形	0.52 × 0.40	27	外傾	皿状	自然	縄文土器片	
105	E 5e8	N-87°-E	不定形	1.29 × 0.85	35	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
106	E 5e9	N-76°-W	(楕円形)	1.23 × 0.92	70	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
107	E 5d7	N-24°-W	不定形	(1.70) × 1.10	22	緩斜	皿状	自然		
110	E 6g9	N-59°-E	楕円形	1.03 × 0.88	42	緩斜	皿状	自然		
111	E 6g4	N-31°-W	楕円形	0.45 × 0.33	17	外傾	平坦	自然		
112	E 6h4	N-24°-E	楕円形	1.04 × 0.62	20	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
115	D 5h5	N-58°-W	楕円形	0.94 × 0.85	24	緩斜	皿状	自然	土師器(甕)、縄文土器片	FP 4と重複
117	E 5e1	N-31°-W	楕円形	1.78 × 1.30	14	外傾	平坦	自然	縄文土器片	

第4節 まとめ

1 はじめに

山ノ入古墳群の調査の結果、古墳・石室23基のほか、縄文時代の竪穴住居跡7軒、炉穴跡2基、土坑29基、石器集中地点2か所古墳時代の土器溜まり1か所、平安時代の竪穴住居跡1軒、土坑3基、土器溜まり1か所、近世の炭焼き窯跡1か所など、各時代を特徴付ける様々な遺構が確認されている。

ここでは当遺跡の主体となる縄文時代から平安時代の遺構と遺物について、各時代ごとに概観するとともに、若干の考察を行ってまとめたい。

2 縄文時代(第127図)

(1) 遺構と立地

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡7軒、炉穴2基、土坑29基、石器集中地点2か所が確認された。

竪穴住居跡は尾根上に立地し、そのほとんどが調査区域の北部に分布している。最も北に位置する第6号住居跡は標高95.1m、南に位置する第2号住居跡は標高79.8mで、その標高差は約15mである。松田古墳群¹⁾や加茂遺跡²⁾と同じく丘陵上に形成された集落である。

住居跡の平面形は確認された状況から判断すると、円形又は楕円形を基調とし、規模は径又は一辺が約3.5～5mである。壁溝は2軒の住居跡から確認され、全周しているものはない。ピットは一部の例外を除いて2～6か所を基本とし、柱穴と補助的な支柱穴で構成されていると考えられる。

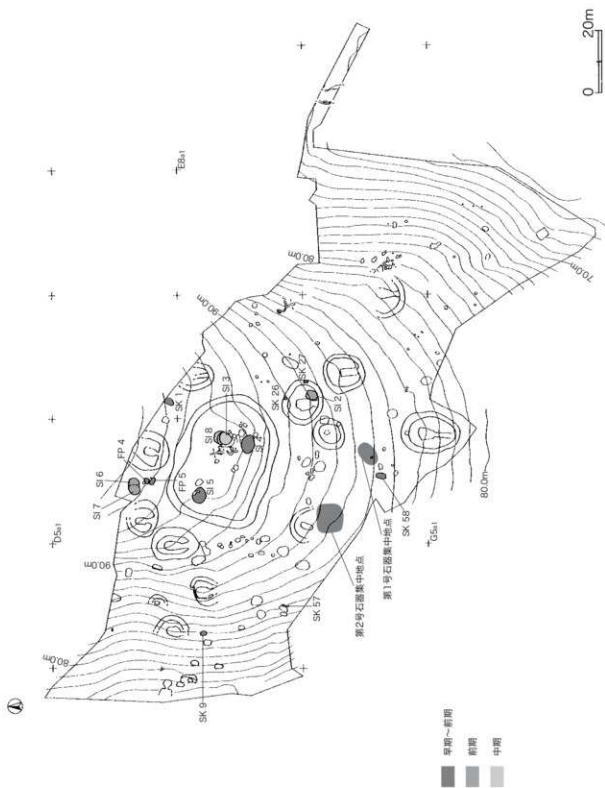
炉跡は4軒の住居跡から確認され、その内第3・8号住居跡では2基の炉が構築されていた。炉は、第3号住居跡の1基が土器囲い炉であるほかは、すべて地床炉である。第3号住居跡の炉2は、床面を楕円形に掘り込んだ中に、底部を欠いた土器(第7図P3)を設置している。

7軒の住居跡の時期は、出土遺物から第2・6・7号住居跡が前期、第3・8号跡が中期、第4・5号住居跡が早期から前期と考えられる。

炉穴は2基が確認されている。第4・5号炉穴は第6・7号住居跡の南側に隣接して位置しており、早期から前期の土器片が出土している。早期から前期の住居跡には炉を伴わないものもあることから、屋外に炉穴を設置して火を使用したと考えられる。

土坑は29基確認され、袋状土坑と考えられるもの3基と陥し穴と考えられるもの4基が検出された。袋状土坑は貯蔵的な機能を持つと考えられる。第1・26号土坑は比較的傾斜の緩やかな尾根上に位置しているが、第9号土坑は西側斜面に位置しており、その分布もかなりまばらである。陥し穴は出土した遺物が乏しいため構築された時期を断定することは困難である。立地は地形の変換点付近又は斜面に位置しているが、各遺構とも単独で構築されている。

石器集中地点では、南部の第1号石器集中地点から出土した石器は石鏃が多く、しかも欠損品(第28図Q88・Q89など)や刃部の調整が不十分な製品(第28図Q87など)など製作途中のものと判断される遺物が見られる。石鏃以外の製品は有舌尖頭器(第29図Q95)と石匙(第29図Q94)及び石槍又はその未製品(第29図Q103)がそれぞれ1点ずつ出土しているだけである。台石と考えられる遺物も出土していることから、石器の製作に関わる遺構である可能性が高い。縄文時代では、狩猟具としての弓矢の役割が大きいことから、ここで集中的に石鏃を製作していたと考えられる。



第127図 縄文時代の遺構

(2) 土器及び石器・石製品

縄文時代の遺物は土器と石器・石製品で占められ、土製品などは確認できなかった。遺物は遺構の内外から出土しており、古墳など後世の遺構からも出土している。土器は全体の形状がわかるものは少なく、器種としては深鉢が大半を占めている。

時期的に見ると、最も古い時期の土器は、早期前半の土器で、口唇部がわずかに肥厚し、摺糸文が施文されている(第121図 TP113・TP114)。同時期の遺構は確認されなかったが、当遺跡では早くもこの時期に人々の生活が開始されていたことを示す資料として貴重である。続く早期中葉には沈線で文様を構成する土器群が見られる(第121図 TP127～TP129, 第122図 TP130～TP133)。貝殻腹縁文を沈線で区画する文様構成の土器が多く見られ、これらは田戸下層式に比定される。また、田戸上層式と考えられる土器も出土しているが(第121図 TP115, 第122図 TP187)、数量的には少ない。

前期では、羽状構成の縄文や、原体が組紐と推定される施文具が使用され、胎土に繊維を含む土器群が出土している(第122図 TP197・TP201～TP203, 第123図 TP198・TP199・TP204・TP205・TP212・TP213)。中にはルーブ文や結束文が施される土器片も見られ、これらの一群は前期前半の関山式に比定されるものである。これに後続する形で、諸磯式(第121図 TP116～TP118・TP120・TP125・TP126)及び浮島式(第121図 TP103～TP108, 第122図 TP188～TP194)に比定される土器群が出土している。これら前期の土器群は比較的多まった数量が出土しており、当遺跡の縄文時代の中心となる一群である。

それに対し、中期になると住居跡内からの出土は見られるものの、その他の遺構や遺構外からのものは前代に比べ極端に減少する。中期後半には第3・8号住居跡に代表されるような深鉢形土器があり、これらは口縁部の形態や文様から加曾利EⅡ式に比定される。後期になると減少傾向はさらに進み、ごくわずかな量が出土しているにすぎない。石器・石製品は、先に挙げた第1・2石器集中地点から出土しているものほか、打製石斧、凹石、石皿などが見られる。狩猟具である石鏃の出土量が多いことはうなずけるものであるが、当遺跡では石鏃に次いで打製石斧が多く見られる。機能的に樹木の伐採や根茎類の採取に使用された道具である³¹⁾。また、植物や堅果類を加工する道具も出土しており、第2号住居跡からは凹石が出土し(第5図Q2)、遺構に伴わないものの石皿も数点が出土している。

3 古墳時代(第128図)

(1) 古墳

山ノ入古墳群は旧岩瀬町の分布調査で、円墳2基からなる古墳群と捉えられてきた。今回の調査の結果、前方後円墳1基を含む23基が調査され、古墳が群集していることが確認された。周辺を踏査したところ、北側には地影れ状の高まりが確認されることから、さらに分布が広がることが予想される。

第2号墳は墳丘の長さは25.3mで、周溝の外縁まで含めると全長は42.7mで当古墳群の中心となる前方後円墳である。

周溝の外形はほぼ盾形で、くびれ部に対応する部分が若干狭くなっている。霞ヶ浦周辺の後期古墳には、土浦市東台古墳群⁴¹⁾などのように周溝のくびれ部が弱い小形の前方後円墳が存在し、それらとの類似性を指摘できる。

墳丘の端部と周溝の内縁の間には、4.5～9.3mの空間が存在している。栃木県の後期古墳には、第2号墳と同じように、周溝と墳丘の端部の間に空間を設ける古墳が築かれている。これらの古墳は、周溝の内部に基壇を設け、その上に墳丘を構築しているため、周溝と墳丘の間に平坦な面が確保されている。基壇は基本

的には墳丘の第1段目と捉えられている⁵⁾。第2号墳は墳丘の北側は平坦であるが、南側は傾斜しており、調査以前の墳丘(付図1)を見てもその傾向はうかがえる。周溝と墳丘との間には盛土は確認されず、墳丘は旧表土から直接積み上げており、この点については栃木県内の基壇を持つ古墳と様相が異なっている。栃木県でも基壇を持つ古墳は分布が限られていることから、第2号墳は限定的な影響を受けたものと考えられる。

墳丘には冚石が残存しており、墳丘の端部はほぼ明瞭に確認できる。県内で調査によって冚石が確認された例は少なく、他にひたちなか市磯崎東古墳群第1号墳が知られるのみである⁶⁾。周辺の古墳や山ノ入古墳群の円墳でも確認されていないことから、墳丘に冚石を施すことは一般的な行為ではなかったと言える。

埋葬施設として横穴式石室が前方部に構築されている。山ノ入古墳群が築かれた岩瀬盆地周辺は、乱石積み横穴式石室が形成される地域である⁷⁾。第2号墳に先行する石室を持つ古墳としては、稲古墳群中にかつて存在していたひさご塚古墳(前方後円墳、全長約40m)があげられる⁸⁾。ひさご塚古墳の横穴式石室は後円部側に構築されており、支室と羨道部からなる単室構造で、支室の平面形は緩やかに弧を描く羽子板状である。埴輪を伴うことや出土した須恵器の年代から、構築された時期は6世紀の後半と考えられる。

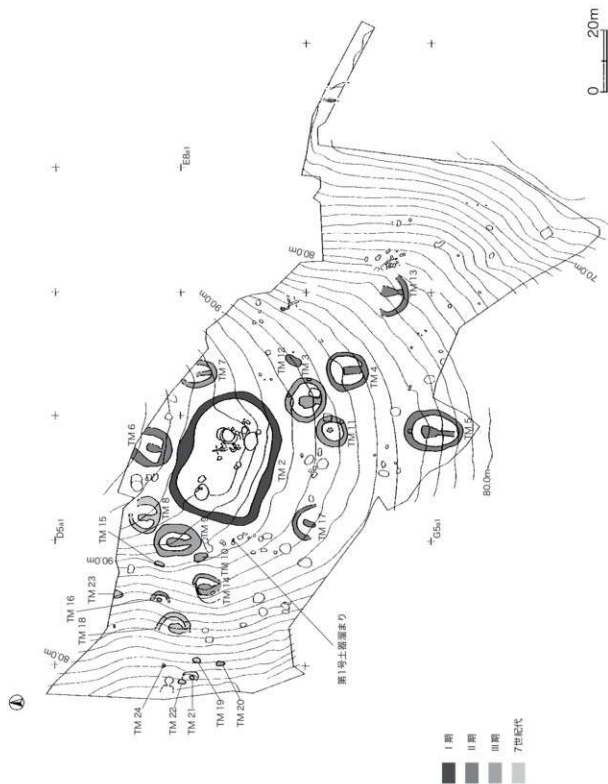
県内に横穴式石室が採用されるのは高崎山古墳群西支群第2号墳⁹⁾や、石岡市(旧八郷町)丸山第4号墳¹⁰⁾など、県内の他地域の状況から見ると6世紀中葉で、岩瀬盆地ではそれに若干遅れて導入されたようである¹¹⁾。ひさご塚古墳と第2号墳の石室を比較すると、側壁の積み方は共通するものの、支室の平面形は異なる。ひさご塚古墳の平面形の方が、その後、岩瀬地域周辺で構築される石室の形態に近い。第2号墳の支室が長方形であるのは、西側の側壁に大形の石材が使われていることがその一因と考えられる。

遺物は後述するが、墳丘からは埴輪は確認されず、須恵器の大甕が出土している。復元できた個体数は6個であるが、残存している口縁部を加えると合計14個にのぼり、それに近い数が墳丘上に置かれていたと考えられる。確認された設置場所は、墳丘上のほか、くびれ部付近である。埴輪の樹立が終わったあとの時代と考えられ、第2号墳の構築時期を考える指標となる¹²⁾。

円墳は第1・3～9・11・13・14・16～18号墳で、今回は第1号墳を除いた13基の古墳が調査された。第3～9・11・13・17号墳は尾根上に位置し、その他の古墳は西側の斜面に構築されている。古墳の規模は、尾根上に位置する古墳は周溝が全周し、比較的大きなものが多い。尾根上に位置する古墳は標高の低い南側の周溝は浅く、北側の周溝は深い傾向があり、斜面側に構築された古墳が山側だけ周溝を巡らしているのを含め、比較的小さい盛土の量で墳丘を高く見せるための工夫がなされている。

埋葬施設は横穴式石室と堅穴系石室の2系統が認められる。横穴式石室は第2号墳よりも小形化している。支室には軽い胴張りがあり、袖部が明瞭ではなく羨道部と支室との間に段差を持っているものが多い。同様の横穴式石室は寺山・丑塚古墳群Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ号墳¹³⁾などでも採用され、周辺地域に分布している形態である。寺山・丑塚古墳群は羨道と墓道の関係が明らかではないものもあるが、山ノ入古墳群では第3・4・7号墳などに墓道が支室までスロープ状に下がっていく構造が認められる。これは小山市飯塚古墳群や同市寺野東遺跡など小山市周辺の無袖タイプの石室と共通した要素¹⁴⁾であり、無袖タイプの石室が岩瀬地域へ導入される際に小山周辺から影響を受けた可能性が想定される。

また第11号墳は、内法で全長1m足らずの小形の石室を有しているが、それにもかかわらず構造的には横穴式石室の形態をとり、他の横穴式石室以上に顕著な胴張りが見られる。容量から考えて成人の伸展葬は不可能であり、小人が埋葬されたか、あるいは火葬などによって骨化した後に埋葬したのであろうか。堅穴系石室にもこのような小形の石室が構築されており、当時の葬送のあり方が復元されないと理解できないものがある。



第128図 古墳時代の遺構

竪穴系石室を持つ古墳は第16号墳である。西側斜面に位置し、石室自体も小形のものである。石室の平面形は長方形で、横穴式石室が胴張りをしていてのとは対照的である。第16号墳の石室は、第15号墳と平面形が類似しており、周溝の有無は両者に埋葬された被葬者の階層性を示すものであろう。

周溝を持たず、石室のみであるのは第10・12・15・19～24号墳の9基である。このうち、第10・12号墳は他の石室と状況を異にしている。第10号墳は、階段状の墓道と短い羨道部を持ち、先に述べた飯塚古墳群タイプの墓道・羨道部によく似た構造である。玄室の側壁は割石積みであるが、根石には切石を使用しており、割石積みが主体である当古墳群の中ではやや異質な存在である。小宅古墳群¹⁵⁾など切石積みの石室が見られる益子町方面の影響であろう。

第12号墳は側壁を3枚の石材で構成し、箱式石棺と同じ構造である。箱式石棺との相違は、南側を複数の石材で構築している点である。これは石室の床面に敷かれている石を南北で変えていることを合わせて考えれば、南側を石室への出入口口として意識していると言える。追葬を前提とする横穴式石室の構造につながるものである。

(2) その他の遺構

古墳以外の遺構としては、土器溜まり1か所、土坑3基が確認されている。第1号土器溜まり、第108号土坑は第9号墳の南側、第2号墳の西側に位置し、それぞれ甕などの須恵器が出土している。第1号土器溜まりは甕が2個体出土しているが、その下部からはそれぞれに対応する円形の掘り込みが確認されている。これは、甕を設置するために掘り込まれたものと想定される。甕の内容及び設置された理由等も不明な点があるが、理由の一つとして古墳に対して甕を供献したことが考えられる。対象となる古墳は、東側の第2号墳と北側の第9号墳が有力な候補とされるが、後述する第2号土器溜まりが南側に位置しているため、第2号墳に対して供献されたものであろう。

(3) 出土遺物

古墳に供献された土器は須恵器が主流を占める。第2号墳の墳丘から十数個体の須恵器の甕が出土している(第42～44図P73～P86)。これらは口径が40～50cmで、口縁部に縦位の柳描文を施した後平行沈線で区画するものがほとんどで、刺突文が見られるのは一部にすぎない。また、甕に歪みや器面に他の甕が溶着したもので、還元が不十分な焼成のものも存在する。産地を特定することはできないものの、搬入に伴う労力から考えて近隣の須恵器産と想定される。その対象としては常陸太田市韓山窯跡や、栃木県側に位置する真岡市南高岡窯跡¹⁶⁾など、古墳時代に遡る窯跡が候補となるが、今後の課題である。

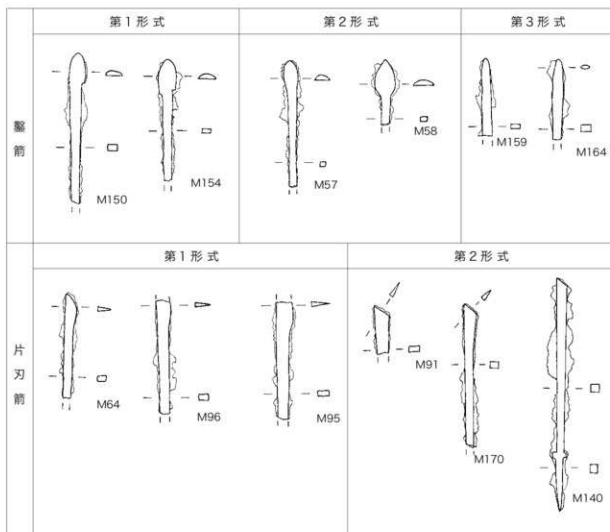
第2号墳出土の提瓶(第42図P72)は格子叩きの後、掻目と平行叩きが施され、同一個体の体部に異なる調整が施されている。このような事例は古墳から出土した遺物の中には確認できなかったが、辰海道遺跡第603C号住居跡のP5017に同様の調整が施されていたものが確認できる¹⁷⁾。数量的には少なく、在地の窯で焼かれたものであろう。

長頸瓶・フラスコ瓶は第2号墳出土のP67(第41図)、第14号墳出土のP36(第84図)のように、猿投産と考えられるものも含まれる。また、第2号墳のP63～P66(第41図)、第3号墳のP10・P11・P14(第50図)など、高台付坏や返りのない蓋が出土し、8世紀前葉にまで下がる須恵器も出土している。その中には堀之内内窯跡産と推定されるものもあり、古墳の構築後も長期間にわたって土器の供献が行われていたことを示している。

一方で土師器の出土量は少ない。山ノ入古墳群が形成された時期には、土師器が古墳に供献されることが少なかったためであろう。その中で、第2号墳のP61(第41図)は6世紀後葉の土師器の特徴を持ち、出土

した状況から古墳の築造期に関わる遺物である。また、第14号墳のP34・P35(第84図)は口径に対して器高が低く、8世紀代に下がる可能性がある。

武器は直刀、鉄鏃、刀子などが副葬されている。直刀は第4・14・17号墳から、各1ずつ出土している。第4号墳のM3(第55図)は鐔に銀象嵌が施されており、柄頭は残存していないものの裝飾付大刀であったことが判明した。象嵌は二重円を基調としたものである。一方第17号墳のM84(第90図)はM79の直刀の鋒付近から出土し、円頭柄頭であることが判明した。M84は目釘が貫通した状態で残っており、茎が柄頭まで及ばない木芯式の茎を持つ直刀に装着されていたと考えられる。M79の鐔は無窓で、茎には目釘孔が一つ開けられている。茎の幅は中細で、茎尻の形状は丸尻である。円頭柄頭の構造とM79の無窓の鐔という組み合わせを持つ刀は他の古墳にも見られることから、両者は拵えとしてはセット関係にある可能性が考えられる。M84にも銀象嵌が施されており、その文様は半円文と退化した意匠からなる。当古墳群から出土した直刀の鐔は、M3が10窓と推定され、その他の直刀は無窓である。直刀の関の形状は両関と考えられ、茎は中細で茎尻の形状は丸尻で共通している。鋒はふくらを持つものが2口、直線のものが1口である。刀装具は直刀に付属しているもの以外は出土していない。年代的には、6世紀後半から7世紀にかけてのものである¹⁸⁾。



第129図 長頭鏃の分類

鉄鍬は大別して長頭鍬、短頭鍬の2種が見られる。長頭鍬は基本的に鑿箭と片刃箭で構成され(第129図)、少数ながら鍬身部に逆刺を持つ柳葉形の鉄鍬がこれに加わる。鑿箭は鍬身部の形状から3つの形式に分類できる。第1は鍬身部の片側に直閔をもつものであり、第2号墳から出土したM141・M150・M151・M153～M155(第47図)などがこれにあたる。基本的には6世紀末から7世紀初頭にかけてみられる一般的な鑿箭とあまり変化がない³⁰⁾。しかし他地域の古墳でもあまり類例が見られず、当古墳群では第2号墳にのみ出土しているため、かなり限定的に使用された形式と言える。

第2は鍬身部の両側が撫で閔のものである。第5号墳の墓道から出土したM56～M58(第60図)などで、6世紀末から7世紀前半にかけて多くの古墳で副葬されている形式である。この二つの形式の鍬身部は片刃造であり、この点では共通性が認められる。第3は小形の鍬身部の先端に刃部をつけ、閔を持たないものである。第2号墳から出土したM159・M164(第47図)がこれにあたり、鍬身部は両刃造で、年代的には先の2つの形式よりも下がる。

片刃箭は2つの形式が認められる。第1は刃部を側面に付け、逆刺を持たないものである。第12号墳出土のM64(第77図)などである。第2は刃部を先端部に付けるもので、第2号墳出土のM140(第46図)などである。基本的には後者の方が年代的には新しく、端部に刃部を持つ鑿箭とセット関係となるものである。

短頭鍬は鍬身部の形状が三角形で、若干逆刺を持つ形式を基本とするが、個体差が見られる。第14号墳出土のM67(第84図)は、大形で深い逆刺を持つ形状で、他の短頭鍬とは一線を画している。

長頭鍬・短頭鍬を含め、鍬板の閔の形状は、確認できたものは韓閔がほとんどで、若干台形閔が残る。

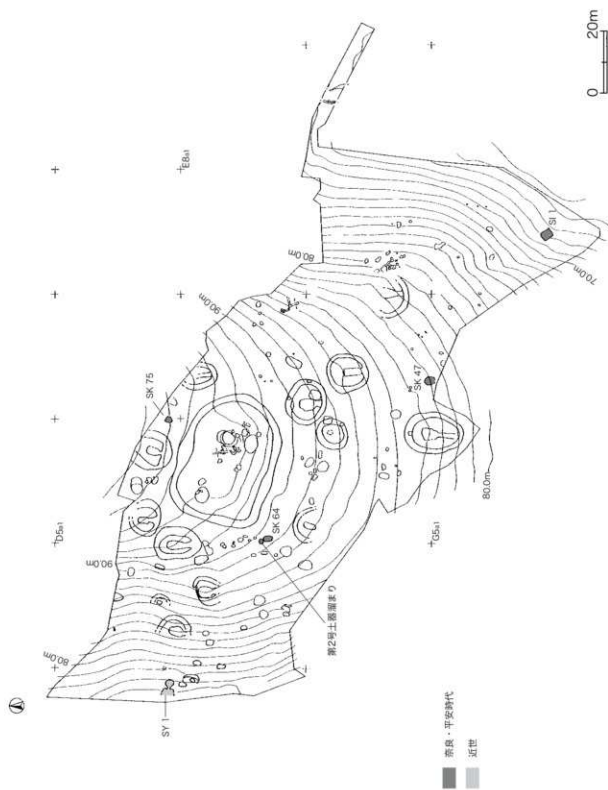
なお、弓の飾り金具と考えられるものが第2号墳(第46図M127～M130・M191)、第4号墳(第55図M4～M9)から出土している。出土状況が明らかな第4号墳では、直刀に沿って出土しているため、一緒に弓が置かれていた可能性が高い。この遺物は、6世紀末から7世紀初め頃に集中する傾向があり、円墳や横穴から出土している例が多く前方後円墳からの出土例は少ないことから、階級性の強い遺物であることが指摘されている³¹⁾。

馬具は第2号墳から出土し、円墳では副葬されていない。馬具には轡のほか、鍔金具、雲珠の宝珠飾りと考えられる製品があり、そのほか釵具や帯先金具も存在する。轡はM101の1点である(第45図)。M101は銜の両端に直接引手が取り付けられている。素環の鏡板が引手とは別に銜に付けられていた可能性は考えられるが、鏡板と考えられる製品は出土していない。雲珠の宝珠飾りと考えられるM106(第46図)は、1枚の花弁状の宝珠座を持ち³²⁾、本来は脚部が存在していたと思われる。M107(P L28)・M108(第46図)は雲珠の脚部片と考えられる遺物であるが、特にM107はM106の直下から出土しており、その可能性が高い。M105・M122(第45図)は鍔の吊り金具と考えられ、縦方向に新留めするタイプで形式的には奈良時代まで続くものである³³⁾。

4 奈良・平安時代及び近世(第130図)

古墳時代以降は、遺構数が極端に減少する。奈良・平安時代の遺構としては、堅穴住居跡1軒、土器溜まり1か所、土坑3基が確認され、近世の遺構としては、炭焼き窯跡1基が確認されている。

第1号住居跡は単独で営まれている。その東側はすぐ谷部に面した手狭な地形で、他に住居を築くには空間的なゆとりはあまりない。当初は山ノ入古墳群に対する陵戸的な性格を持つと想定したが、住居から出土した遺物の年代と古墳群との間には断絶がある。このため現状では東に位置する当道遺跡³⁴⁾に付属する、出造り小屋的な住居と想定している。



第130図 奈良・平安時代及び近世の遺構

第2号土器溜まりは第2号墳の前方部側の周溝外縁に位置し、出土した土器は全て須恵器である。その内容は小形の甕が1個、口径が約15cmの高台付坏4個及びそれに対応する蓋である(第112図P51~P59)。これらは、P51を除いてへら記号を持ち、器形と胎土の特徴から益子窯跡群から搬入された製品であろう²⁵⁾。第1号土器溜まりと共に古墳に対して供献されたものと想定でき、そのような行為が行われた最終段階の土器と考えられる。

5 古墳群の変遷と被葬者の性格

最後に年代が明らかな古墳の変遷と、埋葬された被葬者について若干ふれて考察としたい。

山ノ入古墳群は、前方後円墳である第2号墳がもっとも時期を遡る古墳であり、その築造を契機として形成された古墳群と言える。それでもその構築された時期は6世紀末から7世紀前葉であり、古墳時代では終末期にかかる時期である。第2号墳に後続して前方後円墳が築かれなかったため、最終末期の前方後円墳の一つとして位置づけられる。

第2号墳は葦石が残存していたために古墳の形状を明確にすることができたが、それは定形的なものではない。前方後円形を呈しているが前方部は後円部の中心よりやや北側に偏り、しかも前方部は中心線に対しては左右対称ではない。これは、終末期になると前方後円墳の基本的な理念や埋葬への思想が薄れてきたことが一つの背景として考えられ、横穴式石室が前方部に構築されていることなど²⁶⁾、終末期に築かれた霞ヶ浦沿岸の中小規模の前方後円墳と共通する内容である。

古墳の築造企画について見ると、近年再調査が行われた、かすみがうら市風返稲荷山古墳は、山ノ入第2号墳と同じく前方部の形状が南北で異なることが指摘されている²⁷⁾。両者を比較すると、山ノ入第2号墳の墳丘の長さは風返稲荷山古墳(墳丘長781m)の3分の1の規模であり、古墳の形状は風返稲荷山古墳を左右反転したものの相似形にはほぼ等しい。風返稲荷山古墳の形状が南北で異なることについて、霞ヶ浦沿岸の古墳に古墳時代後期に採用された墳丘企画と、つくば市松塚第1号墳(墳丘長62m)や同大井第5号墳(墳丘長46m)など内陸部に位置する古墳の企画を併せ持つものとされている²⁸⁾。第2号墳の場合、風返稲荷山古墳の墳丘企画と同列に扱うことは難しいが、現時点では霞ヶ浦沿岸の首長墓との間に墳丘の企画に共通する傾向が見られると指摘したい。第2号墳は松塚第1号墳よりさらに内陸に位置しているが、桜川を通じて霞ヶ浦沿岸の首長との交流が行われていたと理解される。

第2号墳の後は円墳へと移行し、石室のみ構築される例も存在する。円墳は石室の形態から2つの系統がみられるが、主流となるのは横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳である。第2号墳の築造期を1期とすると、それに続くⅡ期には第4・5・6・13・17号墳の5基の円墳と第12号墳が築かれる。第2号墳の次の世代と考えられる古墳は墳丘及び石室の規模の大きな第5号墳で、未調査ではあるが南に位置する第1号墳もその可能性が考えられる。これらの古墳は丘陵の稜線上を占めており、古墳群の中心に築かれている。

Ⅲ期は円墳の築造が終了する時期である。7世紀中葉を中心とする年代で、第3・7・9・11・14・16号墳の6基の円墳と、第10・20号墳が築かれる。また年代の明らかでない堅穴系石室もこの頃を中心に構築されたと考えられる。堅穴系の石室を持つ第16号墳は斜面に構築されていることから、古墳群の中では傍系的な位置にある。この時期には掘出した墳丘や石室を持つ円墳はなく、均質化が進んでいる。

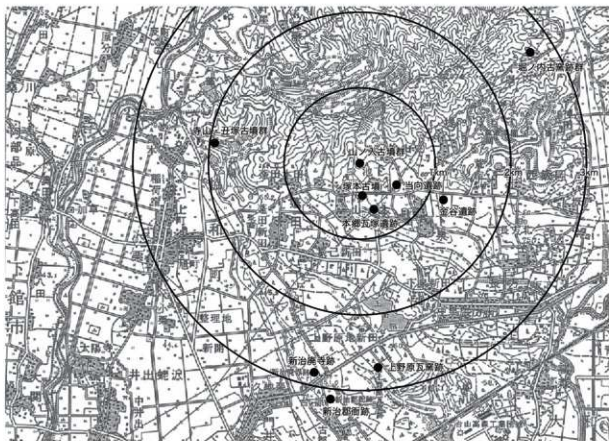
Ⅳ期は、古墳への供献が終了する時期である。第7号墳では返りが消滅しかかった須恵器の坏蓋(第65図P23)が出土し、第3号墳でも高台付坏や内側に返りのない坏蓋が存在する(第50図)。第2号土器溜まりの須恵器を含めると、8世紀前葉を最後として土器の供献が途絶える。この時期に仏教という新しい思想が

古墳にとって替わる時期でもある²⁹⁾。

それでは、山ノ入古墳群に埋葬された人物はどのような人たちであろうか。山ノ入古墳群が形成されるきっかけとなった第2号墳は、墳丘の規模から見れば中小規模の前方後円墳であり、同じ時期の風返稲荷山古墳、ひたちなか市虎塚古墳（墳丘長55m）など有力な前方後円墳と比べると見劣りがする規模である。しかし、構築されている横穴式石室は全長6mに及び、使用された石材も大きく投入された労力からみても大型古墳の石室に匹敵する。また一部金銅装の馬具が副葬されていた可能性があることから、地域の中でも有力な古墳と言える。

また、2基の円墳からは装飾大刀が出土しており、うち一つは円頭柄頭を伴う可能性が大きい。装飾大刀は儀仗用の大刀で、所有者の階層を反映すると考えられる遺物である。県内では風返稲荷山古墳から椎頭大刀にとまって円頭大刀3口が出土し、また舟塚古墳からも双龍環頭大刀と円頭大刀が出土したことが伝えられている³⁰⁾。この2つの古墳に副葬された円頭大刀は金銅装であり、地方の有力な首長層に対して与えられた製品と位置づけられる。これに対し山ノ入古墳群から出土した円頭柄頭は鉄製で、象嵌が施されているものの風返稲荷山古墳、伝舟塚古墳出土の円頭大刀と比べると遜色がある。しかも単独で出土しており、複数の装飾大刀を持つ大型前方後円墳の場合とは性格が異なることが指摘されている³¹⁾。従って山ノ入古墳群の円頭柄頭は、風返稲荷山古墳の首長よりも下位に位置する首長層に対して下賜されたものと考えられる。

古墳時代後期の岩瀬盆地の状況を概観していると、東部に装飾古墳である花園第3号墳³²⁾を造営した集団があり、一方西部には山ノ入古墳群と金銅装の主頭大刀を出土した寺山・丑塚第1号墳を造営した集団が有力集団として存在していたことがうかがえる。東部の集団では、後期前半には松田第1号墳(前方後円墳、



第131図 山ノ入古墳群と主要古代遺跡との位置関係

全長40m)が、後期後半にはひさご塚古墳が築かれている。盆地の北寄りに位置する篠ノ沢古墳(前方後円墳、全長43m)³⁰⁾を含めると、花園第3号墳に先行して40m規模の前方後円墳が首長墓として構築されている状況が認められる。

一方西部の集団では、山ノ入第2号墳に先立つ首長墓の様相は不明確な点が多い。西側に位置する二門塚古墳は前方後円墳とされているが³¹⁾、規模や内容とも明らかではない。内山古墳群の中の一古墳³²⁾は墳頂部に平坦な面を持つことから、少なくとも古墳時代の後期前半以前にさかのぼる古墳である。この古墳は山ノ入第2号墳に先行するものであるが、規模の点では東部の集団に劣っている。古墳時代後期の段階では西部の集団は、東部に匹敵する勢力を持っていなかったことになる。ところが後期末から終末期にかけては、西部に山ノ入第2号墳が築かれると様相が変わる。寺山・丑塚1号墳は円墳であるが、墳丘の規模は直径40mと山ノ入第2号墳の周溝を含む長さにはほぼ匹敵する。金銅製の主頭大刀と馬具が出土していることから、後期から終末期にかけての有力な古墳である。また、山ノ入古墳群の南に位置する塚本古墳は直径約20mほどの円墳で、山ノ入第2号墳と系譜的なつながりが想定できる古墳である³³⁾。規模の点では寺山・丑塚第1号墳よりも劣るが、有力な古墳の一つである。西部では20~40m規模の古墳がこの時期造営されているが、東部では一辺30mの方墳である花園第3号墳以外には今のところ30mを越える規模の古墳は知られていない。後期に東部の集団が持っていた優位性は失われ、両者は拮抗しているか、もしくは西部の集団が優位に立っていると言える状況にある。律令期に入るとその差は一層広が^り、西部集団の勢力圏内に新治郡衙と新治廃寺が置かれている(第130図)。西部の集団は古墳時代後期末に勃興した新興の勢力であり、その出現には置ヶ浦北岸の首長層と畿内勢力の動向が背景にあると考えられる。

岩瀬盆地は律令期には新治郡に含まれ、文献上では郡の大領として新治直が知られている³⁴⁾。古墳時代の豪族が律令制の成立と共に郡司として体制に組み込まれる例はあり、新治直の一族は新治国造の後裔と考えられる。岩瀬盆地の東西二つの有力集団のうち、自己の勢力圏に寺院を建立し郡衙を設置した山ノ入古墳群と寺山・丑塚古墳群の被葬者が「新治直につな^がり」、古代の新治郡の運営に関わったと考えられる。

註

- 1) 横倉要次「松田古墳群 北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書V」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集 2004年3月
- 2) 島田和宏「加茂遺跡 北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書XI」『茨城県教育財団文化財調査報告』第249集 2005年3月
- 3) 鈴木次郎「打製石斧」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣出版 1995年1月
- 4) 小川和博・大淵淳志「木田余台~茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報-」
1989年3月
なお、小山市飯塚古墳群第27・28号墳の周溝でも同様の事例が認められることから、後期に築造された中小規模の前方後円墳の特徴となる可能性がある。
- 5) 福田定信・ほか「飯塚古墳群発掘調査概報1」『小山市文化財調査報告書』第22集 1988年3月
- 6) 中村亨史「栃木県における後期古墳の諸段階」『シンポジウム後期古墳の諸段階』第8回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 2003年2月
- 7) 井上義安「那珂湊市磯崎東古墳群-国民宿舍白亜紀荘増改築に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書-」
1990年3月

- 7) 石橋 光 「常陸の横穴式石室と前方後円墳」『シンボジウム横穴式石室と前方後円墳』第2回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 1997年2月
- 8) 萩原義昭 「岩瀬ひさご塚(稲古墳群第2号墳)」『岩瀬町埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集
岩瀬町教育委員会 1991年6月
- 9) 平岡和夫・高野浩之 「高崎山古墳群西支群第2号墳・第3号墳」山武考古学研究所・新治村教育委員会
2001年3月
- 10) 後藤守一・大塚初重 「常陸丸山古墳」丸山古墳顕彰会 1957年11月
- 11) 稲村 繁 「茨城における前方後円墳の終焉とその後」『シンボジウム前方後円墳の終焉とその後』
第5回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 2000年1月
- 12) 県内の古墳で埴輪が樹立されなくなるのはTK209期併行と考えられている。前掲誌11
- 13) 瀬谷昌良・他 「丑塚古墳群・寺山古墳群・裏山道跡-スプリングフィズゴルフクラブ造成に伴う
小栗地内道跡群発掘調査報告書」協和町教育委員会 1986年3月
- 14) 大橋泰夫 「下野の横穴式石室と前方後円墳」『シンボジウム横穴式石室と前方後円墳』第2回東北・
関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 1997年2月
- 15) 益子町史編さん委員会 「益子町史 第1巻 考古資料編」1987年3月
- 16) 真岡市史編さん委員会 「真岡市史 第1巻 考古資料編」1984年3月
- 17) 越田真太郎 「辰海道道跡2 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第223集 2004年3月
- 18) 白杵 勲 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 1984年2月
- 19) 関 義昭 「古墳時代後期鉄鍬の編年と分類」『日本古代文化研究』3 古墳時代研究会 1986年12月
- 20) 水野敏典 「鉄鍬にみる古墳時代後期の諸段階」『シンボジウム後期古墳の諸段階』
第8回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 2003年2月
- 21) 田中新史 「古墳出土の飾り弓-飾り飾りの弓の出現と展開-」『伊知波良』1 1979年2月
- 22) 宮代栄一 「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』3 古墳時代研究会 1986年12月
- 23) 津野 仁 「奈良時代武器・武器生産への変化」『武器生産と流通の両面-七世紀研究会シンボジウム-』
七世紀研究会 2003年5月
- 24) 小澤重雄・小野克敏 「当向道跡1 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第224集 2004年3月
- 25) 当向道跡においても益子産と考えられる須恵器が一定量出土している。前掲誌24
- 26) 霞ヶ浦周辺に分布する、いわゆる「変則的古墳」と同一の事象と考えられる。
- 27) 日高 慎 「風返稲荷山古墳の墳丘企画と常陸の前方後円墳の墳丘企画」『風返稲荷山古墳』
霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会 2000年3月
- 28) 上総・下総・毛野では、終末期の大型古墳に後続して古代寺院が建立される事例が見られる。常陸でも後期・終末期古墳
と古代寺院との関係が指摘されている。
稲田健一 「常陸国の七世紀-古墳を中心に-」『古墳から寺院へ-関東の7世紀を考える-』
第5回大学合同考古学シンボジウム予編集 大学合同考古学シンボジウム実行委員会編 2004年11月
- 29) 千葉隆司・ほか 「風返稲荷山古墳」霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会 2000年3月
- 30) 玉里村教育委員会 「玉里村の道跡-玉里村村内道跡分布調査報告書-」 2004年11月

- 31) 滝瀬芳之 「円頭・主頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 1984年2月
- 32) 伊東重敏・川崎純徳 「花園壁画古墳(第3号墳) 調査報告書」『岩瀬町文化財調査報告書』第7集
岩瀬町教育委員会 1985年3月
- 33) 岩瀬町教育委員会 「岩瀬町の文化財」 2002年3月
- 34) 仁平郎夫氏宅の敷地内に所在している。現況では直径約20mの円墳である。2005年2月実見。
- 35) 塚本古墳は開き取りによると以前は石室が開口していたとのことである。後期から終末期の古墳である可能性は高い。
- 36) 鏡日本紀神護景雲元年の条に新治郡大領新治直子公、同延暦9年の条に同じく新治直大直の名が見える。

参考文献

- ・大川 清・ほか編 『日本土器事典』雄山閣出版 1996年12月
- ・杉山秀宏 「古墳時代の鉄鏡について」『権原考古学研究所論集』第八 1988年10月
- ・内山敏行 「古墳終末期の長頸鏡-東日本における韓岡長頸脇扶鏡の評価-」『武器生産と流通の両期-七世紀研究会シンポジウム-』七世紀研究会 2003年5月
- ・鈴木一有 「副葬鏡の変質」『武器生産と流通の両期-七世紀研究会シンポジウム-』七世紀研究会 2003年5月
- ・石橋 充 「霞ヶ浦沿岸地域の古墳埋葬施設」『特集 関東6世紀古墳の埋葬空間』考古学ジャーナル535 2005年10月
- ・中村亨史・内山敏行 「下毛野の古墳埋葬施設」『特集 関東6世紀古墳の埋葬空間』考古学ジャーナル535 2005年10月

第4章 大日下遺跡

第1節 遺跡の概要

当遺跡は、桜川市(旧岩瀬町)の北西部に位置し、泉川右岸に所在する独立丘の標高48~54mの裾部に立地している。

調査によって、縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡であることが確認できた。また、覆土中からは旧石器時代の遺物も出土している。

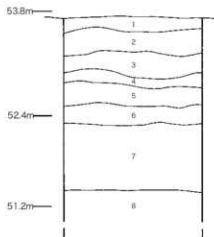
遺構は、縄文時代の土坑1基、古墳時代の堅穴住居跡2軒、平安時代の堅穴住居跡5軒、掘立柱建物跡4棟、中・近世の方形堅穴遺構1、掘立柱建物跡2棟、溝跡3条、道路跡1条、炭焼窯跡4基、土坑3基、時期不明の堅穴住居跡1軒、方形堅穴遺構2基、掘立柱建物跡5棟、溝跡3条、道路跡1条、ピット群4か所、段切り遺構1か所、地下式竈1基、土坑51基が検出された。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に17箱出土している。主な遺物は、旧石器(尖頭器、石刃)、縄文土器片、土師器(坏、高台付坏、碗、甕)、須恵器(坏、蓋、盤、高盤)、土師質土器(甕、鍋、焙烙)、瓦、陶磁器(小碗、蓋)、石器・石製品(磨石、凹石、砥石、石臼)、鉄器・鉄製品(釘、鎌、鍋)、古銭、煙管等である。

第2節 基本層序

調査区西部のB2j1区にテストピットを設定し、基本層序の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は53.7mで、地表から2.8m掘り下げ、第132図のような堆積状況を確認した。以下、テストピットの観察から層序について記述する。

- 第1層は黒褐色をした表土層である。ローム粒子を微量含み、粘性・締まりは弱い。層厚は10~20cmである。
- 第2層は暗褐色の土層である。ローム粒子を微量含み、粘性・締まりは普通である。層厚は25~37cmである。
- 第3層は暗褐色の土層である。ローム粒子を少量含み、粘性・締まりは普通である。層厚は19~35cmである。
- 第4層は褐色のソフトローム層である。層厚は10~18cmである。
- 第5層は褐色のハードローム層で、締まりは強いが粘性は普通でソフト化が進んでいる。層厚は22~32cmである。
- 第6層は褐色のハードローム層である。粘性・締まりは共に強い。層厚は20~28cmである。
- 第7層は黄褐色の鹿沼バミス層である。ロームブロックを少量含み、締まりは強い。層厚は80~90cmである。
- 第8層は暗褐色のハードローム層である。粘土粒子を少量含んでいる。層厚は40cm以上あるが、下層は未掘のため本来の厚さは不明である。
- 遺構の多くは、第4層上面で確認された。



第132図 基本土層図



第133図 大日下遺跡調査区設定図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては土坑1基が検出された。また、遺構外からは縄文時代の遺物が出土している。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

土坑

第66号土坑(第134図)

位置 調査区東部のC5d7区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

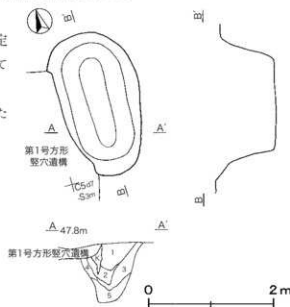
規模と形状 長径2.31m、短径1.37mの長楕円形と推定され、深さは90cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-0°である。

覆土 5層からなる。全体的に周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量。締まり強
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量。締まり強
- 3 黒暗褐色 ローム粒子少量。締まり強
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量。締まり強
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量。締まり強

所見 形状と覆土の状況から、陥し穴と考えられる。



第134図 第66号土坑実測図

表13 土坑一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(m)					
66	C5d7	N-0°	長楕円形	2.31×(1.37)	90	外傾	平坦	自然		本跡→第1号方形竪穴遺構

2 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡2軒が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

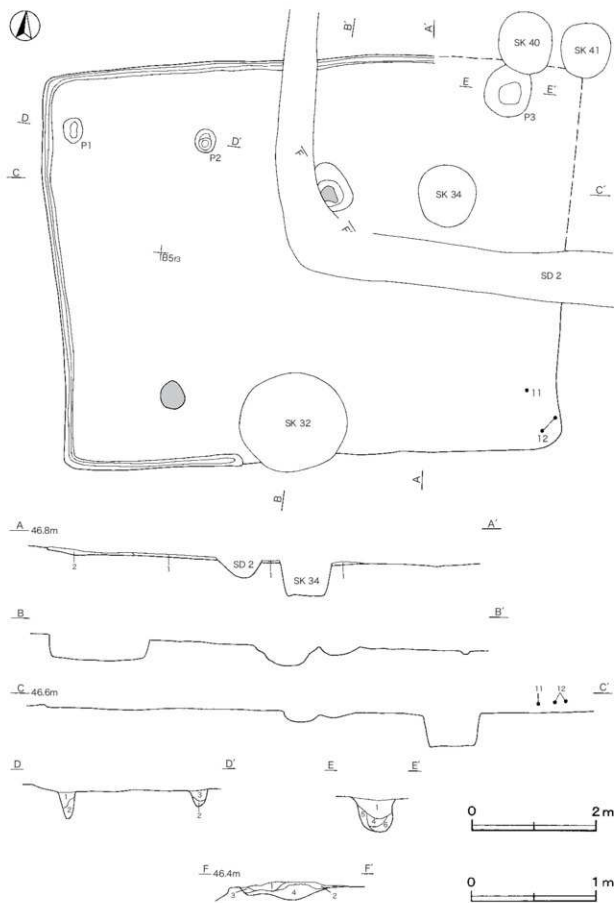
竪穴住居跡

第5号住居跡(第135・136図)

位置 調査区東部のB5e3区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第12号住居跡を掘り込み、第2号溝、第34号土坑に掘り込まれ、第32・40号土坑と重複している。

規模と形状 長軸8.0m、短軸6.4mの長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は2~4cmで、外傾して立ち上がっている。



第135图 第5号住居跡实测图

床 平坦で、全体的に軟弱である。南西コーナー部の床面に若干の焼土塊が見られる。

炉 中央部北寄りに位置している。長径80cm、短径48cmの楕円形と推定され、床面を12cm掘り込んだ地床炉である。火床面は熱を受けたロームブロックが堆積し、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量。締まり強 | 4 におい味褐色 焼土ブロック多量 |

ピット 3か所。P1は深さ45cmで、主柱穴と考えられる。P2は深さ26cmで、支柱穴と考えられる。P3の性格は不明である。

ピット土層解説

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

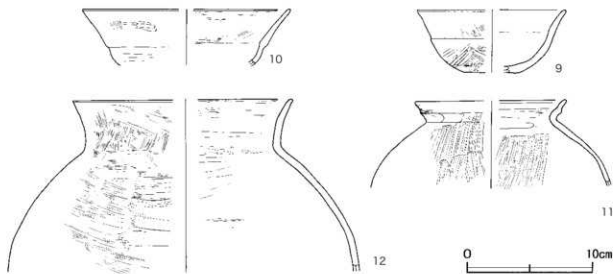
覆土 2層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 2 暗褐色 ロームブロック少量 |
|---------------|-----------------|

遺物出土状況 土師器片53点（椀坏類1、壺類1、甕類51）が出土している。11・12は南東コーナー部の床面付近から、9・10は覆土中からそれぞれ破片の状態で出土している。

所見 時期は、出土遺物から5世紀前葉と考えられる。



第136図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表(第136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	土師器	碗	[12.0]	5.0	[4.4]	石英・長石	灰黄褐色	普通	外面ハケ目後ミガキ 内面ハケ目後ナデ	覆土中	30%
10	土師器	碗	[16.4]	(4.5)	-	白色粒子	におい味褐色	普通	口縁部ハケ目後ナデ 体部内外面ナデ	覆土中	35%
11	土師器	甕	[12.0]	(6.9)	-	石英・長石	灰黄褐色	普通	口縁部横ナデ 内外面一単位6本のハケ目	床面	10% S字状口縁・外面塚付着
12	土師器	甕	[17.6]	(13.3)	-	石英・長石・雲母	におい味褐色	普通	内面一単位5本のハケ目 外面一単位20本のハケ目	床面	10%

第12号住居跡(第137図)

位置 調査区東部のB 5e1区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第53号土坑を掘り込み、第5号住居、第11号掘立柱建物、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北壁は削平され、東壁は第5号住居に掘り込まれており、全体の形状は不明である。確認された規模は長軸5.1m、短軸4.8mの隅丸方形で、主軸方向は西壁からN-2°-Eと推定される。壁高は2~15cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床面 若干起伏があり、南東部は踏み固められている。壁溝は南東隅に一部残存し、断面はU字形である。

ピット 5か所。P1~P5は深さ2~39cmで、配置が不規則であるため性格は不明である。

覆土 3層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

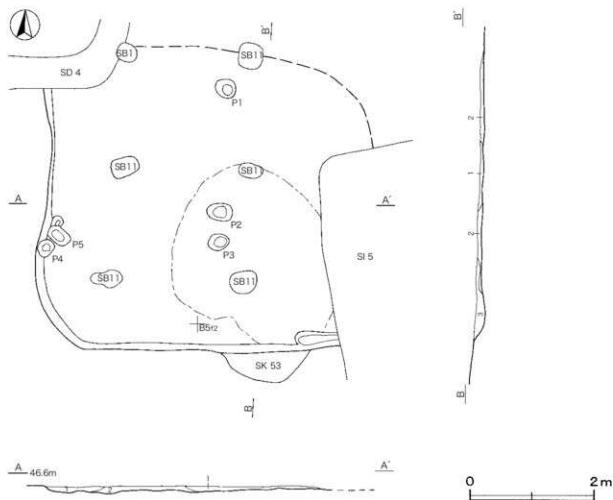
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、第5号住居との重複関係から5世紀前葉以前と考えられる。



第137図 第12号住居跡実測図

表14 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
								主柱穴	出入口	ピット	伊・羅	若藏穴				
5	B5e3	N-5°-W	長方形	8.00×6.40	2-4	平坦	半周	1	-	2	1	-	自然	土師器	5世紀前半	SI12→本跡→SD 2・SK34
12	B5e1	N-2°-E	隅丸方形	[5.10×4.80]	2-15	平坦	-	-	-	5	-	-	自然		古墳時代	SK53→本跡→SI 5・SB11・SD 4

3 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡4棟が検出された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡(第138図)

位置 調査区東部のB5j7区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

規模と形状 長軸2.87m、短軸2.18mの長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は15~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竪前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝が南東コーナー部を巡っており、断面はU字形である。中央部付近の床面上に、焼土が若干堆積している。

竈 北壁の北西コーナー部近くに付設され、焚口部付近をP5に掘り込まれている。残存している規模は焚口部から煙道部先端まで59cm、袖幅88cmである。天井部は崩落しており、袖部は砂質粘土で構築されている。火床部の煙道部寄りに石製支脚が設置され、火床面は赤変している。煙道部は壁外へ50cm掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 黒暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量、粘性弱 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 黒暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子微量 |

ピット 5か所。P1・P2は深さ12~38cmで、位置から主柱穴と考えられる。P3・P4は深さ29~42cmで、支柱穴と考えられる。P5は深さ26cmで、性格は不明である。

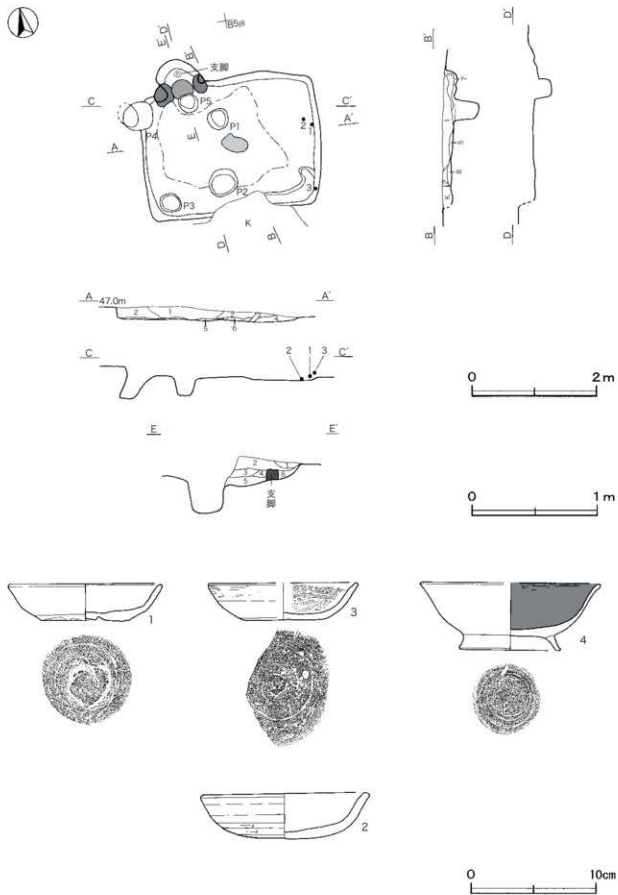
覆土 8層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量、締まり強 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒暗褐色 | ロームブロック少量、締まり強 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子中量 | 8 黒褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片72点(坏類15、甕類57)が出土している。1・2は東壁際の覆土中層から下層にかけて、それぞれ正位の状態でも出土している。3は南東コーナー部付近の覆土上層から正位の状態でも出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第138图 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	環	120	3.0	6.9	長石・雲母	にぶい橙	普通	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	覆土下層	95% P.L40
2	土師器	環	129	3.9	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り	覆土中～下層	75%
3	土師器	環	[11.8]	3.0	[7.2]	雲母・黒色粒子	にぶい橙	普通	内外面ロクロナデ 底部手持ちへラ削り	覆土上層	40%
4	土師器	高台付杯	[14.4]	5.3	8.2	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	摩滅のため調整不明	壺内	45%

第4号住居跡(第139・140図)

位置 調査区東部のB5h6区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺3.65mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は35~47cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周しており、断面はU字形である。

竈 北壁の中央部やや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部先端まで94cm、袖部幅103cmである。天井部は崩落し、第3層が相当する。袖部は第10~13層が相当し、ロームを主体とした土で構築され、左袖は甕を補強材として使用している。内側は火熱を受けて赤変している。火床部の煙道部寄りに石製支脚が設置され、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ40cm掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。

ピット 1か所。深さ9cmで、南壁寄りの中央部付近に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

甕土層解説

1 灰 褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量、粘性強	7 暗赤褐色	焼土ブロック少量、粘土粒子微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子微量	8 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、粘性強	9 暗赤褐色	焼土粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化物・粘土粒子微量	10 灰褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量、粘性・粘まり強
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量	11 灰褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量、粘まり強
6 にぶい赤褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量	12 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
		13 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

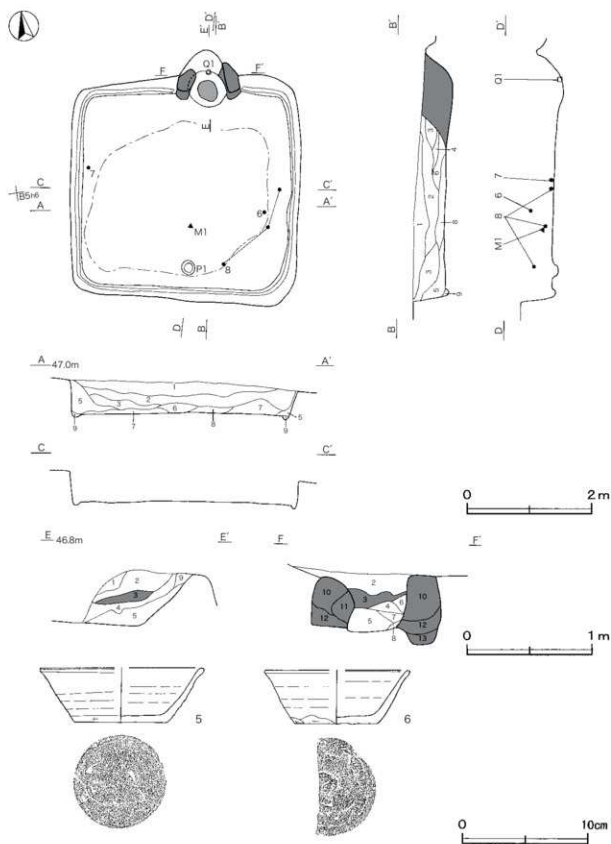
覆土 9層からなる。含有物を均等に含み、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

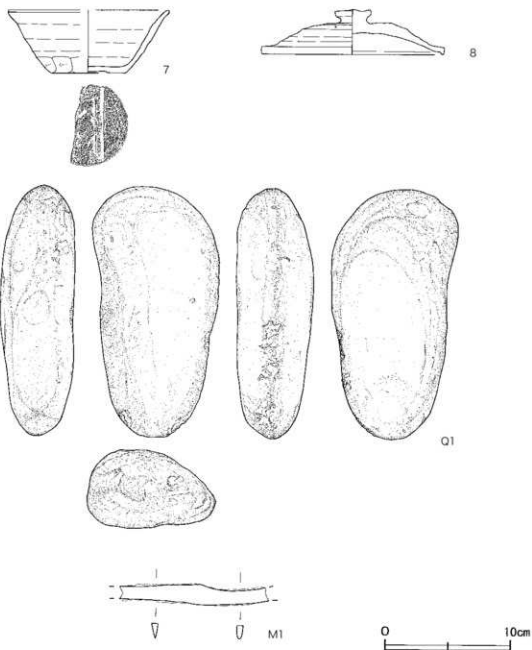
1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	6 黒褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量、粘性強
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	7 黒褐色	ローム粒子中量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック微量
4 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	9 暗褐色	ローム粒子少量
5 黒褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師器片295点(坏類23, 甕類272), 須恵器片102点(坏類89, 甕類7, 盤6), 石器・石製品5点(敲石), 鉄製品片(刀子)点が出土している。6は、東壁寄りの第2層の上面付近からほぼ正位の状態、M1は中央部やや南寄りの同じく第2層中からそれぞれ出土している。7は西壁際の第5層下層から、8は東壁寄りの覆土中層から下層にかけて、それぞれ破片の状態で出土している。Q1は竈の底面に設置されていた石製支脚である。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第139図 第4号住居跡・出土遺物実測図



第140図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表(第139・140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	須恵器	坏	[12.8]	4.3	7.4	長石	褐灰	良	体部・底部回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	覆土上~中層	60%
6	須恵器	坏	[11.5]	4.3	6.7	長石・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り	第2層上面	45%
7	須恵器	坏	[13.0]	5.0	6.2	石英・長石	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り	第5層下層	30%
8	須恵器	蓋	14.4	3.6	-	長石・黒色粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中~下層	80% P L40

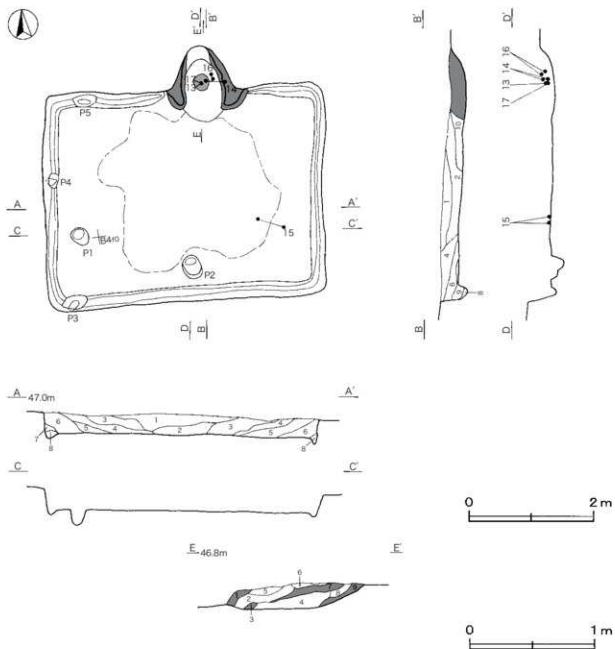
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	支脚	20.0	10.2	5.9	160.0	砂岩	川原石利用	竈内	P.L.41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀子	(7.9)	1.1	0.35	6.7	鉄	切先・葉欠損	第2層中	P.L.41

第6号住居跡(第141・142図)

位置 調査区東部のB4e0区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.50m、短軸3.42mの長方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は30~32cmで、ほぼ直立している。



第141図 第6号住居跡実測図

床 平坦で、竈前面からP2にかけて踏み固められている。壁溝が全周しており、断面はU字形である。

竈 北壁の中央部やや東より付設されている。規模は焚口部から煙道部先端まで122cm、袖部幅128cmである。天井部は崩落し、第1・3・7層が相当する。袖部はローム混じりの粘土で構築され、内側は火熱を受けて赤変している。火床部に坯と甕を転用した支脚が設置され、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ78cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1 濃い黄褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック微量。締まり強 | 6 褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量 | 7 暗褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量 |
| 3 濃い黄褐色 粘土ブロック中量、炭化物少量。締まり強 | 8 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子多量 | 9 暗褐色 粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、粘土ブロック少量。締まり弱 | |

ピット 5か所。P1は深さ28cmで、主柱穴と考えられる。P2は深さ26cmで、南壁寄りの中央部付近に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P3・P4は支柱穴と考えられる。

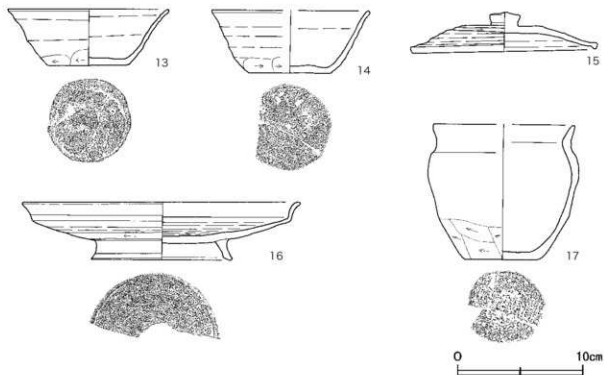
覆土 10層からなる。ロームブロックを含んでいる層が多いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 | 7 黒褐色 ローム粒子微量。締まり弱 |
| 3 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック少量。締まり弱 |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | 9 灰褐色 粘土粒子中量、粘性強 |
| 5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量 | 10 灰黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片130点(甕類)、須恵器片76点(坏類74、甕類1、盤1)、瓦片3点が出土している。13・17は竈内から出土している。17を火床部に伏せ、その上に13を逆位に積み重ね、支脚として転用されている。14は竈内の焚口部寄りから破片の状態で、16は煙道部寄りから逆位の状態ですれぞれ出土している。15は東壁寄りの床面上から2片に分かれ、正位の状態ですれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第142図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表(第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	須恵器	坏	12.6	4.5	6.5	白色粒子・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちへう削り 底部手持ちへう削り	竈内	90% 転用支脚 P.L.40
14	須恵器	坏	[12.4]	5.0	6.6	白色粒子・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ちへう削り 底部回転へう切り後手持ちへう削り	竈内	30%
15	須恵器	蓋	14.8	3.4	-	長石・白色粒子	灰	普通	天井部回転へう削り	床面	90% P.L.40
16	須恵器	盤	22.2	4.7	11.3	石英・長石	灰黄褐	普通	底部回転へう削り	竈内	50%
17	土師器	小形甕	[11.1]	10.8	5.9	石英・長石	橙	普通	体部下端手持ちへう削り 器面荒れ調整不明	竈内	70% 転用支脚

第7号住居跡(第143・144図)

位置 調査区中央部のB4e4区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第37号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西側は調査区域外に延びており、全容は不明である。規模は調査された範囲で長辺4.32m、短辺4.10mの方形と推定され、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は8-12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部付近が踏み固められている。壁溝が北壁から南壁にかけて巡っており、断面はU字形である。

竈 北壁に付設されている。焚口部を第37号土坑に掘り込まれており、現存する規模は焚口部から煙道部先端まで151cm、袖部幅192cmである。天井部は崩落し、第2層が相当する。袖部は砂質粘土を用いて構築されている。火床部は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外へ82cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 3 黒褐色 | 赤褐色粘土粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック少量 | 4 黒褐色 | 粘土粒子少量 |

ピット 8か所。P1～P4は深さ81～112cmで、主柱穴と考えられる。P5・P7は深さ18～32cmで、南壁寄りに位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P8の性格は不明である。

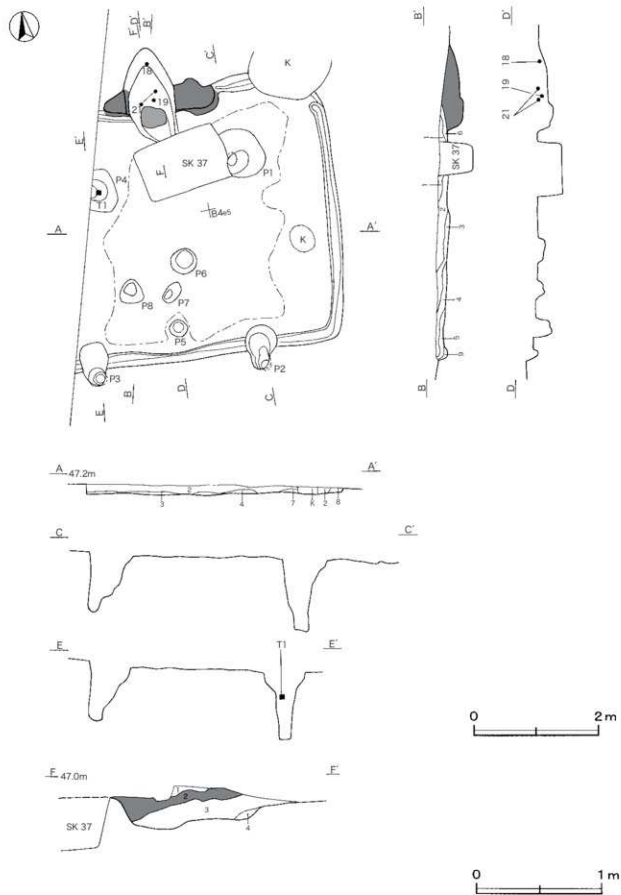
覆土 9層からなる。ロームブロックを含んでいる層が多いことや不規則に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

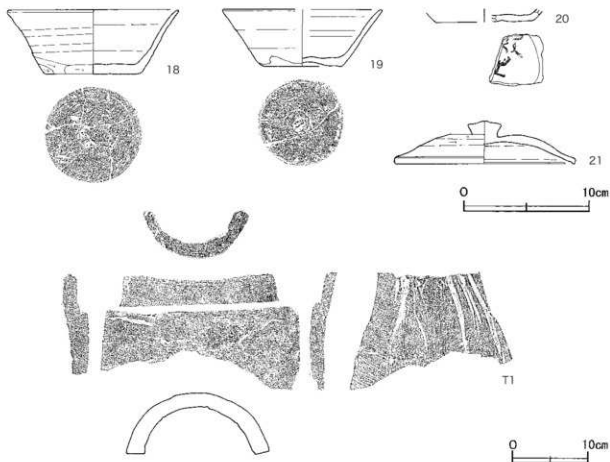
- | | | | |
|-------|----------------------|--------|--------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片75点(坏類2、甕類73)、須恵器片55点(坏類50、甕類4、高盤1)、瓦片1点(丸瓦)が出土している。形状が判明した遺物は、ほとんどが竈内から出土している。18は煙道部付近から、19・21は焚口部寄りからそれぞれ破片の状態で出土している。20は東側の覆土中から、T1はP4内からそれぞれ出土している。

所見 T1は、柱を安定させるためにP4内に設置されたものと考えられる。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第143图 第7号住居跡実測図



第144図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表(第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	須恵器	坏	13.4	5.1	7.8	白色粒子・黒色粒子	灰	普通	体部下端持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り	竈内	60% P.L.40
19	須恵器	坏	[12.6]	4.6	6.0	雲母・黒色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ切り	竈内	30%
30	須恵器	坏	-	(1.0)	[7.8]	白色粒子・黒色粒子	黄灰	普通	底部ヘラ削り	覆土中	5% 黒書「□□」
21	須恵器	蓋	14.4	3.4	-	石英・長石	灰黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り	竈内	70% P.L.40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
T.1	丸瓦	(16.0)	19.0	8.1	1130.0	土	内面布目	P.4内	

第8号住居跡(第145・146図)

位置 調査区東部のB4i0区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

規模と形状 北壁の一部が攪乱によって壊されている。長軸3.95m、短軸3.32mの長方形で、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は20~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈前面から中央部が踏み固められている。壁溝がほぼ全周しており、断面はU字形である。

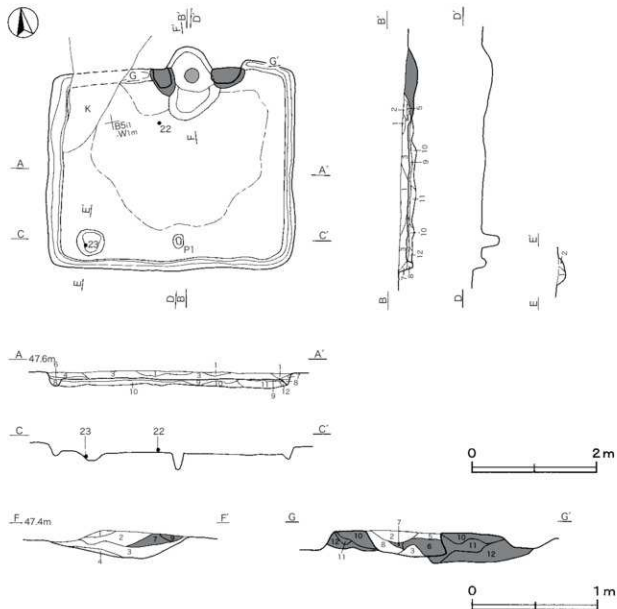
竈 北壁の中央部やや東寄りに構築されている。規模は焚口部から煙道部先端まで115cm、袖幅は150cmである。天井部は崩落し、第6・7・9層が相当する。袖部は粘土混じりのロームを用いて構築されている。火床部は火熱を受けて亦変硬化している。煙道部は壁外へ30cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子微量 | 8 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子少量 | 9 赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量 | 10 褐色 ロームブロック多量、粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子中量 | 粘性・締まり強 |
| 5 暗赤褐色 焼土ブロック微量 | 11 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、 |
| 6 黒褐色 粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 粘土粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子微量 | 12 暗褐色 ロームブロック多量。 |

ピット 1か所。深さ28cmで、南壁際の中央部付近に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置し、長軸45cm、短軸42cmの隅丸方形で、深さは14cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。



第145図 第8号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量

覆土 12層からなる。第9層は貼床の構築土で、第10層以下は掘り方の埋土である。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

8 黒褐色 ローム粒子中量。締まり強

2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

9 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量。

3 黒褐色 ロームブロック微量

締まり強

4 極暗褐色 ローム粒子微量

10 暗褐色 ロームブロック多量。締まり強

5 極暗赤褐色 焼土粒子少量

11 極暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

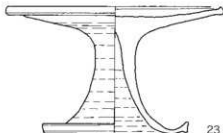
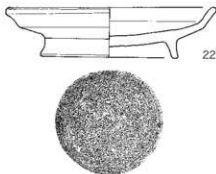
6 黒褐色 ローム粒子中量

12 褐色 土 ローム粒子多量

7 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片15点(甕類)、須恵器片15点(坏類12点、甕類1点、盤2)が出土している。22は竈前面の床面上からほぼ正位の状態で、23は貯蔵穴内から横位の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第146図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表(第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	須恵器	盤	10.2	4.1	10.7	白色粒子・黒色粒子	黄灰	普通	内外面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り	床面	85% P.L.40
23	須恵器	高壺	17.0	10.1	11.4	石英・長石	灰	普通	内外面ロクロナデ	貯蔵穴	95% P.L.40

(2) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡(第147図)

位置 調査区東部のB5a2区で、北に緩やか傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第1号道路に掘り込まれている。

規模と構造 北側と東側を第1号道路跡と後世の削平により失われ、全容は明らかではない。規模は現状で桁行3間(平均5.88m)、梁行2間(平均5.00m)の隅柱式建物跡で、桁行方向はN-88°-Eの東西棟と想定される。柱間寸法は桁行が約1.96m、梁行が約2.50mで、面積は29.40㎡である。

柱穴 6か所。平面形は長径56~68cm、短径54~65cmの円形または隅丸方形である。断面形は逆台形を呈し、

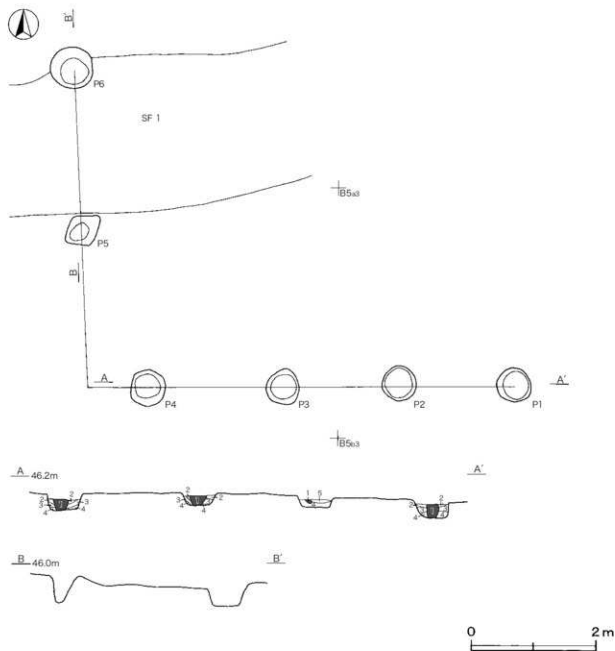
深さは17～25cmである。柱痕は第1層が相当し、ロームブロックと焼土粒子を含んでいる。柱材の径は15～24cmと推定される。

土層解説

- | | | | |
|----------|------------------|--------|--------------|
| 1 黒 暗 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 暗 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子少量 | 5 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片2点(甕類)が出土している。小片のため図化できなかった。

所見 出土した遺物が土師器であることから、廃絶時期は平安時代と考えられる。



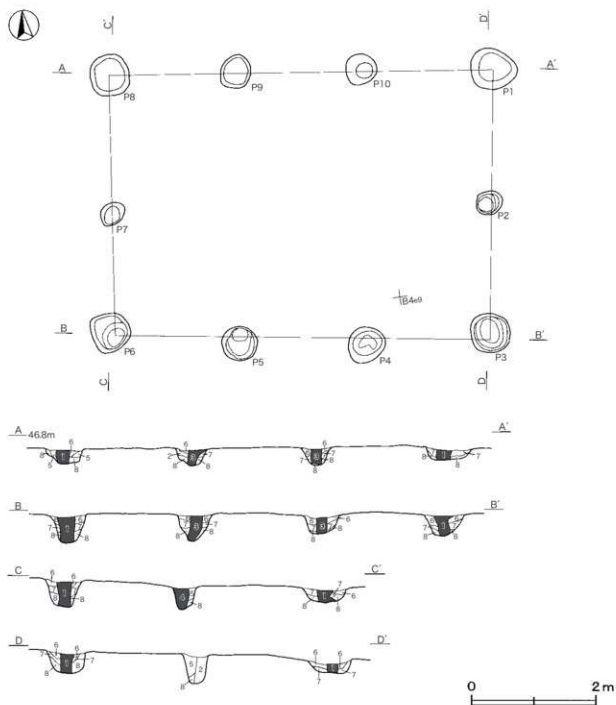
第147図 第2号堀立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡(第148図)

位置 調査区東部のB4d8区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

規模と構造 桁行3間(平均6.03m)、梁行2間(平均4.21m)の側柱式建物跡で、桁行方向はN-84°-Wの東西棟である。柱間寸法は桁行約2.01m、梁行2.10mで、面積は25.38㎡である。

柱穴 10か所。平面形は長径45~68cm、短径42~60cmの円形または隅丸方形である。断面形は逆台形を呈し、深さは22~48cmである。柱痕は第1・3・4層が相当し、第4層は締まりの弱い土層である。柱材の径は8~12cmと推定される。



第148図 第3号掘立柱建物跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、締まり弱 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片4点(甕類)、須恵器片2点(坏類)が出土している。小片のため図示できなかった。

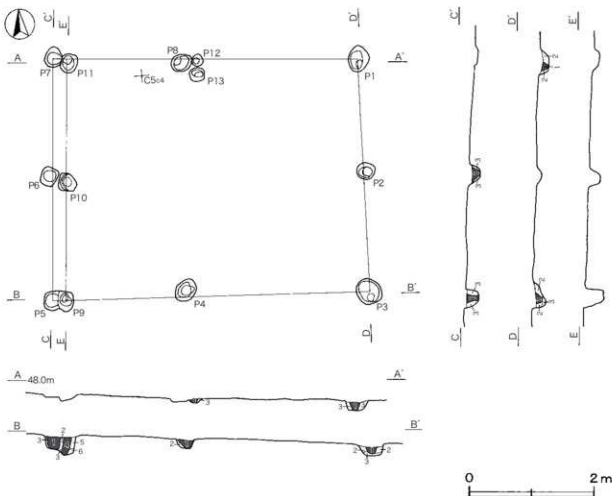
所見 遺物に須恵器が含まれていることから、廃絶した時期は9世紀を中心とした平安時代と考えられる。

第6号掘立柱建物跡(第149図)

位置 調査区東部のC5c3区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

規模と構造 桁行2間(平均4.93m)、梁行2間(平均3.83m)の側柱式建物跡で、桁行方向はN-87°-Wの東西棟である。柱間寸法は桁行が約2.47m、梁行が1.92mで、面積は19.44㎡である。中央の柱が西側に寄った構造の建物である。

柱穴 13か所(P1~P13)で、平面形は長径20~43cm、短径18~37cmの円形または楕円形である。断面形は逆台形を呈し、深さは10~30cmである。柱痕は第1・4層が相当し、柱材の径は8~12cmと推定される。P9~P13は、立て替えに伴う柱穴と考えられる。



第149図 第6号掘立柱建物跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量。締まり強 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量。締まり弱 |

遺物出土状況 土師器片2点(甕類)、須恵器片1点(坏類)が出土している。小片のため図示できなかった。

所見 遺物に須恵器が含まれていることから、廃絶した時期は9世紀を中心とした平安時代と考えられる。

第8号掘立柱建物跡(第150図)

位置 調査区東部のB5c3区位置し、北に傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第63号土坑に掘り込まれている。

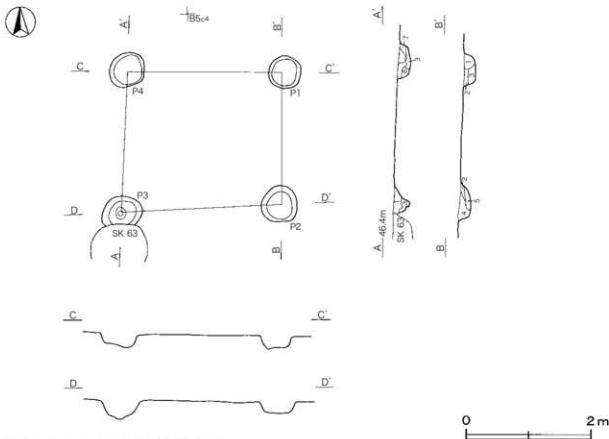
規模と構造 桁行1間(平均2.49m)、梁行1間(平均2.32m)の側柱式建物跡で、桁行方向はN-86°-Wの東西棟である。面積は5.72㎡である。

柱穴 4か所。平面形は長径51~65cm、短径50~60cmの円形または楕円形である。断面形は逆台形を呈し、深さは21~34cmである。P3の底面は一段掘り下げられていることから、柱が置かれた痕跡と考えられ、柱材の径は18cm前後と推定される。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|-------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量。炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量。粘性強 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量。粘性強 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量。粘性強 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 須恵器片1点(坏類)が出土している。小片のため図示できなかった。



第150図 第8号掘立柱建物跡実測図

所見 桁行方向が第3・6号掘立柱建物跡とほぼ同一であり、遺物に須恵器が含まれていることから、廃絶した時期は9世紀を中心とした平安時代と考えられる。

表15 堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時代	備考 (出→新)	
								柱穴	出入口	ピット	炉・竈					
3	B5j7	N-0	長方形	2.87×[2.18]	15-25	平坦	一部	2	-	3	1	-	自然	土師器	10世紀前	
4	B5k6	N-14'-E	方形	3.65×3.65	35-47	平坦	全周	-	1	-	1	-	自然	土師器・須恵器・刀子	9世紀前葉	SI11→本跡
6	B4e0	N-10'-E	長方形	4.50×3.42	30-32	平坦	全周	1	1	3	1	-	人為	土師器・須恵器・瓦片	9世紀前葉	
7	B4e4	N-4'-E	[長方形]	(4.32)×4.10	8-12	平坦	[全周]	4	2	2	1	-	人為	土師器・須恵器・瓦片	9世紀前葉	本跡→SK37
8	B4i0	N-13'-E	長方形	3.95×3.32	20-22	平坦	全周	-	1	-	1	1	自然	土師器・須恵器	9世紀前葉	

表16 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模 (m)	面積 (㎡)	構造	桁行 (m)	梁間	柱穴平面形	深さ	柱穴	時代	備考
2	B5a2	N-88'-E	3×2	5.88×5.00	29.40	個柱	5.88	5.00	円形・隅丸方形	17~25	6	平安	本跡→SF1
3	B4d8	N-84'-W	3×2	6.03×4.21	25.38	個柱	5.94~6.12	4.20~4.21	円形・楕円形	22~48	10	平安	
6	C5c3	N-87'-W	2×2	5.03×3.84	19.44	個柱	4.83~5.03	3.82~3.84	円形・楕円形	10~30	13	平安	
8	B5e3	N-86'-W	1×1	2.54×2.25	5.72	個柱	2.45~2.54	2.10~2.25	円形	21~34	4	平安	本跡→SK63

4 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構としては、方形堅穴遺構1基、掘立柱建物跡2棟、溝跡3条、井戸跡1基、道路跡1条、炭焼窯跡4基、土坑3基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

(1) 方形堅穴遺構

第1号方形堅穴遺構(第151・152・153図)

位置 調査区東部のC5d6区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第66号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.46m、短軸2.45mの長方形で、主軸方向はN-80'-Wである。壁高は23~37cmで、西壁は直立して、その他の壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

覆土 15層からなる。ロームブロックを含んでいる層が多く、ブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

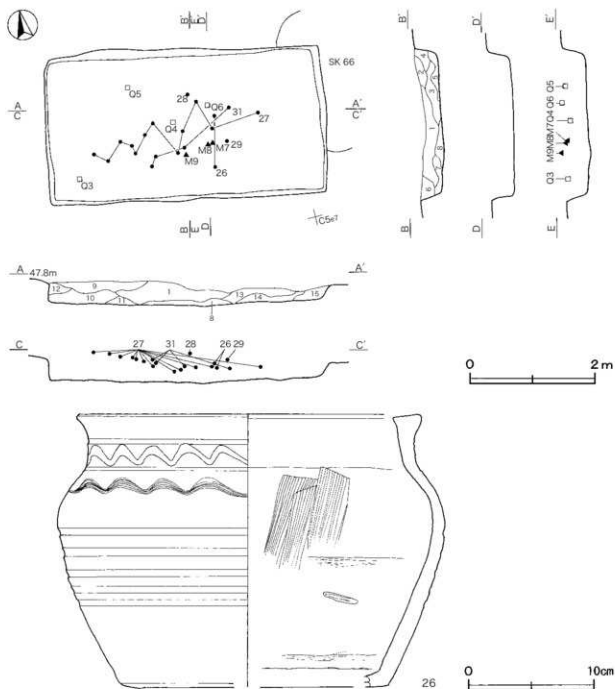
土層解説

1 黒 褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	9 極暗 褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10 黒 褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
3 黒 褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量	11 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子微量、炭化粒子微量
4 黒 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	12 暗 褐色	ロームブロック少量、粘性強
5 黒 褐色	ロームブロック少量	13 黒 褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
6 極暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量、跡まり弱	14 極暗 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
7 黒 褐色	ロームブロック中量	15 黒 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
8 暗 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量		

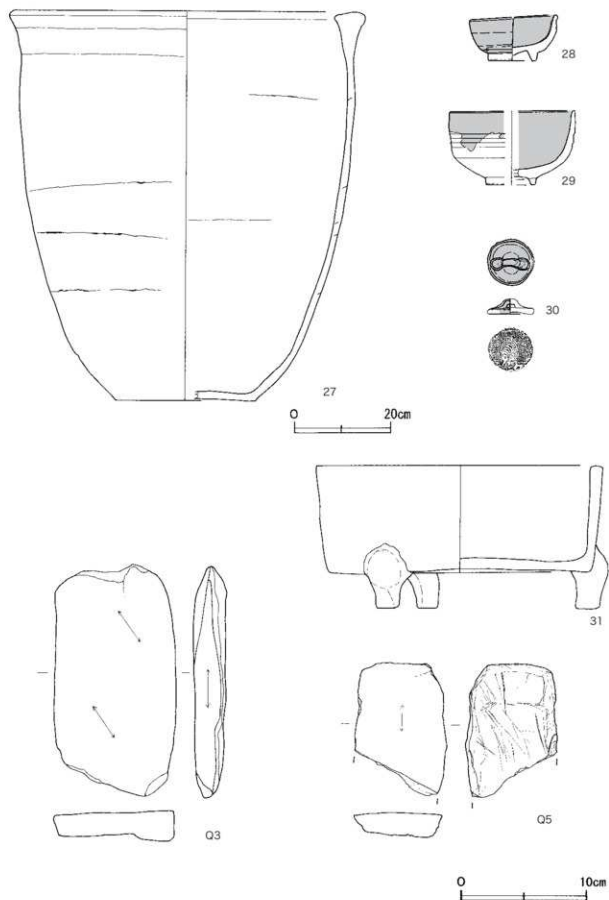
遺物出土状況 土師器片6点(坏類4、甕類1、高坏1)、須恵器片9点(甕類)、陶磁器片40点(碗28、鉢2、その他10)、土師質土器片245点(甕類146、鍋3、火舎6、焙烙50、皿類6)、土製品1点(鈔)、鉄製品5点(釘)。

石製品片4点(砥石), 銅製品4点(煙管), 鉄滓3点が出土している。27・31は確認面から第1・9・13層にかけて破砕された状況で出土しており, 26・28-30, M9, Q4・Q6は27・31の破片と混在した状態で出土している。M7・M8は鉄滓で, 確認面の狭い範囲からまともって出土している。27・31の出土状況から, 一括して投棄されたと考えられる。

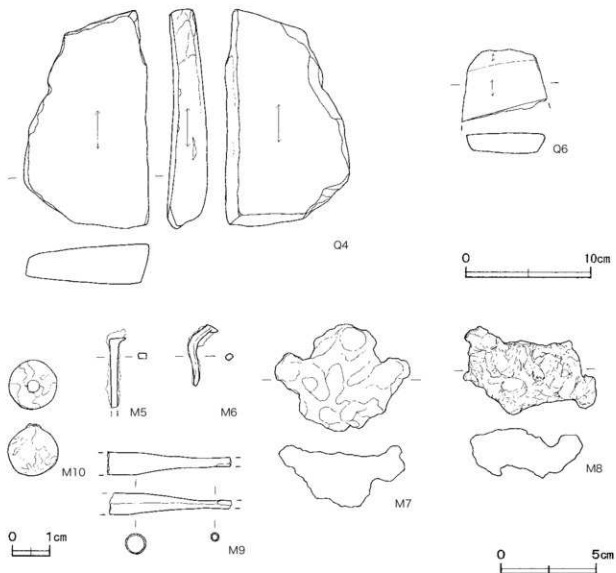
所見 底面が踏み固められているため, 日常的に使用されたと考えられるが, 竈や柱穴は確認されなかったことから, 住居の可能性は低い。遺構を廃棄する際に, 遺物を一括して投棄したと思われる。時期は, 出土遺物から近世後期と考えられる。



第151図 第1号方形竪穴遺構・出土遺物実測図



第152図 第1号方形竪穴遺構出土遺物実測図(1)



第153図 第1号方形堅穴遺構出土遺物実測図(2)

第1号方形堅穴遺構出土遺物観察表(第151・152・153図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
26	土師質土器	甕	27.1	21.7	[31.2]	長石・雲母・黒色粒子	橙	普通	淵部・唇部波状文 内面ハケ目	覆土上～中層	70% P.L.41
27	土師質土器	甕	69.6	77.6	28.0	石英・長石	明褐	普通	内外面ナデ	覆土上～中層	90% 炭化物付着 P.L.41
28	陶器	小碗	7.0	3.6	3.8	砂粒	灰褐	良	ロクロ整形 削り出し高台鉤軸	覆土上～中層	90% 瀬戸内面付着物有 P.L.41
29	陶器	小碗	[10.0]	5.9	[3.9]	砂粒	灰褐	良	ロクロ整形 付け高台 鉄軸・灰軸	覆土上～中層	30% 瀬戸
30	陶器	蓋	3.6	1.7	-	砂粒	灰褐	良	底部回転糸切り	覆土上～中層	100% 瀬戸 P.L.41
31	瓦質土器	焙烙カ	22.8	10.3	20.8	石英・長石	黄灰	普通	内外面ナデ	覆土上～中層	85% 煤付着 P.L.40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	砥石	18.5	9.8	2.7	697.0	ホルンフェルス	砥面2面	覆土中層	P.L41
Q4	砥石	17.2	10.0	3.2	686.0	砂岩	砥面3面	覆土中層	P.L41
Q5	砥石	(10.6)	(7.4)	(1.9)	(210.0)	粘板岩	砥面1面	覆土上層	
Q6	砥石	(5.6)	(6.9)	(1.7)	(93.9)	頁岩	砥面1面	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	釘	(4.0)	0.5	0.3	(3.1)	鉄	断面四角	覆土中	
M6	釘	(3.6)	(0.8)	(0.4)	(1.8)	鉄	断面丸	覆土中	
M7	輪状滓	7.1	5.7	3.1	108.4	鉄		覆土上層	
M8	鉄滓	(4.8)	(7.0)	(2.3)	(84.9)	鉄		覆土上層	
M9	煙管	(6.6)	1.2	0.1	(5.0)	銅	吸い口	覆土上層	
M10	玉	1.3	1.3	1.3	11.3	鉛	鉄砲玉	覆土中	

(2) 掘立柱建物跡

第9号掘立柱建物跡(第154図)

位置 調査区東部のC4b9区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第10号掘立柱建物、第65号土坑に掘り込まれ、第10号住居跡と重複している。

規模と構造 北東側を攪乱により削平され、全容は明らかではない。桁行4間(平均5.61m)、梁行2間(平均3.63m)の側柱式の建物跡で、桁行方向はN-0°の南北棟と推定される。柱間寸法は桁行約1.87m、梁行約1.82mで、面積は20.64㎡である。

柱穴 12か所。平面形は長径33~89cm、短径27~44cmの円形または楕円形である。断面形は逆台形を呈し、深さは24~60cmである。柱痕は第1層が相当し、締まりの弱い土層である。P8を除くピットの土層が乱れていることから、柱は抜き取られた可能性がある。P1・2・5・6の底面は硬化しており、柱が置かれた痕跡と考えられる。柱材の径は12~15cmと推定される。P11・12は掘り込みが浅いことから、東柱的な性格を持つものと考えられる。

第9-10号掘立柱建物跡土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|---------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量。締まり弱 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量。締まり強 | 8 明褐色 | ローム粒子中量。締まり強 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック微量。締まり弱 | 10 極暗褐色 | ロームブロック微量。締まり弱 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック少量。締まり弱 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量。締まり強 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量。締まり弱 | 12 暗褐色 | ロームブロック中量 |

所見 第10号掘立柱建物跡と同規模で、位置もほとんど同じである。廃絶した時期は、重複関係から第10号掘立柱建物より古い近世と考えられる。

第10号掘立柱建物跡(第154図)

位置 調査区東部のC4b9区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第9号掘立柱建物跡を掘り込み、第65号土坑に掘り込まれ、第10号住居跡と重複している。

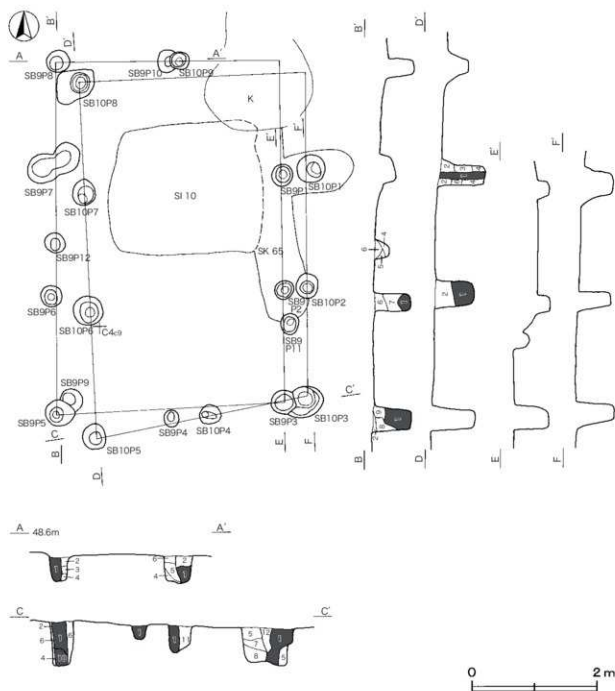
規模と構造 北東側を攪乱により削平され、全容は明らかではない。桁行3間(平均5.43m)、梁行2間(平均3.59m)の側柱式の建物跡で、桁行方向はN-3°-Wの南北棟と推定される。柱間寸法は桁行約1.81m、梁行約1.80

mで、面積は21.02m²である。

柱穴 9か所。平面形は長径30~61cm、短径26~48cmの円形または隅丸長方形である。断面形は逆台形を呈し、深さは47~70cmである。柱痕は第1・10層が相当し、締まりの弱い土層である。P1・2・6~9の底面は硬化しており、柱が置かれた痕跡と考えられる。柱材の径は12~16cmと推定される。

遺物出土状況 須恵器片1点(坏類)、陶磁器片1点(小碗か)が出土している。小片のため図示できなかった。

所見 第9号掘立柱建物跡と同規模で、位置もほとんど同じであることから、第9号掘立柱建物跡を建て替えたものと考えられる。陶磁器片が出土していることから、廃絶した時期は近世を中心とした時代と考えられる。



第154図 第9・10号掘立柱建物跡実測図

(3) 溝跡

第1号溝跡(第153図, 付図4)

位置 調査区西部のC5a5～C5f6区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

規模と形状 N-0°の方向に延び、C5b8区付近でN-30°-W、C5f8区付近でN-85°-Wにそれぞれ方向を変えている。長さは37mで、上幅21～67cm、下幅10～36cm、深さ19～28cmである。断面はU字形で、壁は外傾して立ち上がっている。第31・35・36・66号土坑、第1号方形堅穴遺構を囲むような形で構築されている。

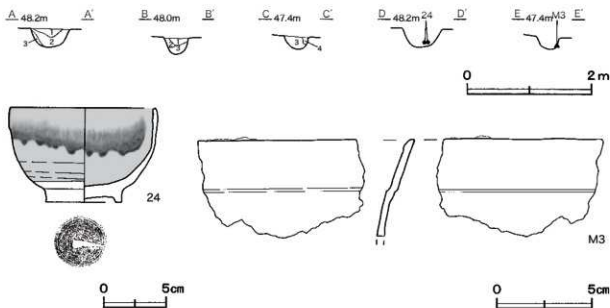
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 弥生土器片1点(広口壺)、土師器片1点(甕)、陶磁器片3点(碗)、土師質土器片5点(鍋)、石片1点、土製品1点(紡錘車)、鉄製品片1点(鍋)が出土している。24はC5f7区の覆土下層から、M3はC5a5区の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 第1号方形堅穴遺構を囲むような形で構築されていることから、何らかの区画溝と想定される。時期は、出土土器などから中世以降と想定される。



第155図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表(第155図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
24	陶器	碗	11.5	7.5	6.0	砂粒	黄灰褐	良	ロタロ整形 削り出し高台 鉛釉	覆土下層	90% P.L41

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
M3	鉄製品	鍋	[35.0]	(5.1)	-	(67.7)	鉄	铸造		覆土上層	P.L41

第4号溝跡(第156図, 付図4)

位置 調査区北部のA 5i2～A 5e1区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第12号住居跡、第1号道路跡、第6号溝跡を掘り込み、第11号掘立柱建物跡、第1号井戸跡、第51・52号土坑、第3号溝跡と重複している。

規模と形状 北側は調査区域外に延びており、全容は不明である。N-6°-Wの方向に延び、A 5i1区付近でN-85°-Eに方向を変えている。南側は、第1号井戸跡を取り囲むように巡っている。確認できた長さは37.5mで、上幅38～146cm、下幅16～61cm、深さ11～41cmである。断面はU字形で、壁は外傾して立ち上がっている。

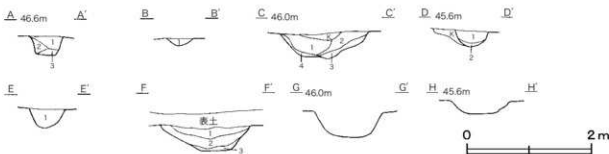
覆土 4層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック微量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子中量 | 4 極暗褐色 ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片7点(坏類1, 甕類6), 須恵器片12点(坏類10, 甕類2), 陶磁器片1点(碗), 土師質土器片1点(鍋), 石器片1点(剥片)が出土している。いずれも小片のため図示できなかった。

所見 本跡の南端部は第1号井戸跡の周囲を巡っていることから、井戸を区画し、その水を利用するために構築された可能性が想定される。時期は第1号道路跡との重複関係から、第1号道路跡より新しい中世から近世と考えられる。



第156図 第4号溝跡実測図

第6号溝跡(第157図, 付図4)

位置 調査区東部のB 5d1～B 5e1区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれ、第1号井戸跡と重複している。

規模と形状 北側は第1号井戸跡と重複し、南側は第4号溝に掘り込まれており、全容は不明である。N-3°-Wの方向に延び、確認できた長さは3.02mで、上幅21～51cm、下幅11～39cm、深さ4～7cmである。断面は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。

所見 時期は、重複関係から第4号溝跡より古い中世から近世と考えられる。



第157図 第6号溝跡実測図

(4) 井戸跡

第1号井戸跡(第158図)

位置 調査区東部のB5c1区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第4・6号溝跡と重複している。

規模と形状 長径1.19m、短径1.08mの楕円形で、深さ1.91mの円筒状に掘り込まれている。長径方向はN-5°-Eである。周囲に長軸2.21m、短軸1.78m、深さ18~26cmの長方形にテラスを設けている。

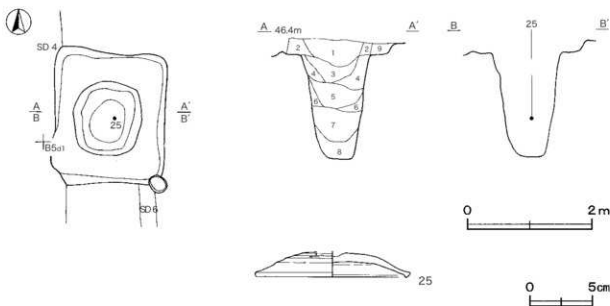
覆土 9層からなる。ロームブロック・ローム粒子を含んでいる層が多く、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒子多量
2 暗褐色	ロームブロック少量、締まり弱	7 黒褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック微量	8 褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ローム粒子中量	9 褐色	ロームブロック多量
5 暗褐色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 須恵器片5点(坏類2、甕類3)が出土している。25は第7層中から出土している。堆積状況から、覆土に混入したものと想定される。

所見 時期は不明であるが、第4号溝跡が本跡の周囲を巡っていることから、同時期に構築された可能性が考えられる。



第158図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表(第158図)

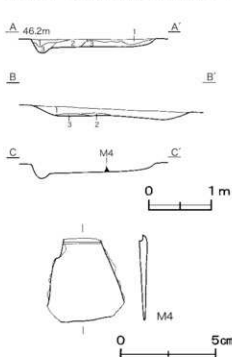
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
25	須恵器	蓋	12.0	(1.9)	-	石英・長石	にぶい灰黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り	第7層中	70% P.L.40

(5) 道路跡

第1号道路跡(第159図, 付図4)

位置 調査区北部のA 5j3-B 4a5区で, 北側に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第2号掘立柱建物跡を掘り込み, 第3・4号溝に掘り込まれている。



第159図 第1号道路跡・出土遺物
実測図

規模と形状 東側は削平され, 西側は調査区域外に延びており, 全容は不明である。N-87°-Eの方向に延び, 確認できた長さは30.6mで, 上幅1.62~1.95m, 下幅1.38~1.72m, 深さ12~18cmである。断面は浅い皿状で, 壁は緩やかに立ち上がっている。中央部の南側には長さ13.4mにわたって上幅20~50cm, 下幅5~16cm, 深さ10~14cm, 断面U字形の溝が確認された。

覆土 3層からなる。踏み固められており, 最上面が路面と考えられる。堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 赤褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 須恵器片1点(坏類), 瓦片3点(平瓦), 鉄器片1点(筥ヶ)が出土している。M4はB 4a8区の覆土中層から出土している。

所見 本跡の覆土は踏み固められた形跡があり, 道路跡と考えられる。中央部南側の溝は, 排水用の側溝の可能性が考えられる。時期は, 重複関係から中世から近世と考えられる。

第1号道路跡出土遺物観察表(第159図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	甕	(4.4)	4.1	0.5	(38.2)	鉄	刃部・茎欠損	覆土中層	P.L41

(6) 炭焼窯跡

第1号炭焼窯跡(第160・161図)

位置 調査区西部のB 2f3区で, 北に傾斜する斜面部位置している。第2号炭焼窯跡の1.3m西に構築されている。

規模と形状 上面は削平されており, 全容は明らかではない。規模は長径3.09m, 短径1.80mの砲弾形で, 長径方向はN-6°-Eである。壁高は10~30cmで, 西壁はほぼ直立して, その他は外傾して立ち上がっている。煙道部は南壁の中央部を幅30cm, 奥行き38cm掘り込み, 壁との境界に切石を設置して構築している。

覆土 16層からなる。第1~8層は室内に堆積した土層で, 第1・3層は赤褐色で焼土粒子を含んでいることから, 崩落した天井部と推定される。第5~8層の底面が窯の床面と考えられ, その下に堆積している第9~16層は火熱を受けており, かなり締まりが強い。窯は地山を掘り込んだ後, 粘土粒子を含んだ第12層を壁と床

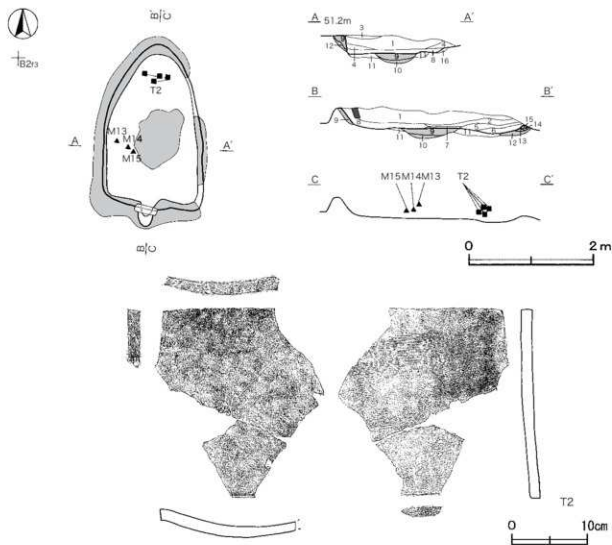
に貼って構築している。その中には灰や炭化粒子を含んでいる層が見られることから、一度底面を作り直した時に固められた可能性が考えられる。また、南東部の底面に石塊が見られることから、一部底面に石を敷いていたものと思われる。

土層解説

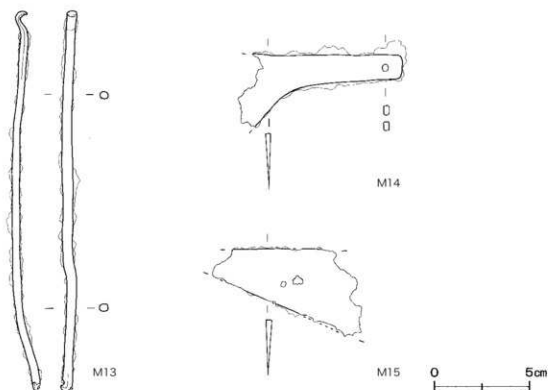
1 明赤褐色	焼土粒子中量、炭化物少量、粘性弱・締まり強	10 濃い赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量、締まり強
2 黒色	炭化粒子多量、焼土粒子微量、粘性弱・締まり強	11 黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子微量、締まり強
3 濃い赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	12 暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子、締まり強
4 赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量	13 灰色	灰多量、焼土粒子微量、締まり強
5 黒色	炭化粒子多量、焼土ブロック少量	14 明赤褐色	焼土粒子中量、灰少量、締まり強
6 灰色	灰多量、炭化粒子少量	15 灰色	灰多量、焼土粒子少量、締まり強
7 明赤褐色	焼土粒子多量、炭化物微量	16 暗赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量、締まり強
8 黒褐色	炭化粒子中量、焼土ブロック少量		
9 明赤褐色	焼土粒子多量、締まり強		

遺物出土状況 陶器片1点(碗)、瓦質土器片1(甕)、瓦片24点(丸瓦9、平瓦15)、鉄製品片3点(鈎針、包丁カ、鎌)が出土している。T2は灰口部寄りの底面付近から破片の状態で出土し、表面に熱を受けた痕跡が認められる。M13~M15は南東部の石塊に混じてそれぞれ出土している。

所見 少なくとも1回は底面を作り直しており、数回にわたって使用されたものと考えられる。時期は、出土遺物から近世以降である。



第160図 第1号炭焼窯跡・出土物実測図



第161図 第1号炭焼窯跡出土遺物実測図

第1号炭焼窯跡出土遺物観察表(第160・161図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
M13	鈎針カ	21.0	0.5	0.4	21.8	鉄	断面円形	覆土下層	
M14	缶丁カ	(8.7)	(4.0)	0.3	(26.7)	鉄	刃部欠。茎に目釘穴あり	覆土下層	
M15	鎌カ	(7.9)	4.5	0.3	(17.7)	鉄	切先・茎欠	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
T.2	平瓦	24.9	(17.8)	3.6	(799.0)	土	両面ナデ	覆土下層	

第2号炭焼窯跡(第162図)

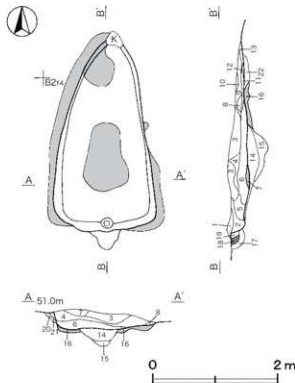
位置 調査区西部のB 214区で、北に傾斜する斜面部に位置している。第1号炭焼窯跡の1.3m東に構築されている。

規模と形状 上面は削平されており、全容は明らかではない。規模は長径3.21m、短径1.61mの砲弾形で、長径方向はN-2°-Eである。壁高は8~26cmで、外傾して立ち上がっている。南壁の中央部に径18cm、深さ6cmのピットがあり、この部分に煙道部が設置されていたものと考えられる。

覆土 22層からなる。第1~13層は窯内に堆積した土層である。天井部の崩落による土層と想定される層は確認できない。第6・11~13層の底面が窯の床面と想定され、火熱を受けて赤変しているがあまり硬化していない。窯は地山を掘り込んだ後、第16~22層を壁と床に貼って構築している。

土層解説

- 1 灰 褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量。締まり弱
- 2 黒 色 炭化粒子中量、焼土ブロック・灰粒子少量。粘性弱
- 3 暗 褐色 焼土粒子少量、炭化物微量。締まり弱
- 4 にふい赤褐色 焼土粒子中量、炭化物少量。粘性弱
- 5 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗 赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
- 7 暗 赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子微量。粘性弱
- 8 赤 褐色 焼土粒子多量。粘性弱
- 9 にふい赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量。粘性・締まり弱
- 10 暗 褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 灰 色 灰多量、焼土粒子微量。粘性弱・締まり強
- 12 明 赤褐色 炭化粒子中量、灰粒子少量。粘性弱・締まり強
- 13 黒 色 炭化粒子多量、焼土粒子微量。粘性弱
- 14 赤 色 焼土粒子・炭化粒子少量。粘性・締まり弱
- 15 暗 赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量。粘性・締まり弱
- 16 暗 赤褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量。粘性弱
- 17 黒 褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量。粘性弱
- 18 褐色 ローム粒子・粘土粒子中量。粘性強
- 19 にふい赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量。粘性・締まり弱
- 20 暗 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量。粘性・締まり弱
- 21 黒 色 ローム粒子多量。粘性・締まり強
- 22 明 赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子微量。粘性弱・締まり強



第162図 第2号炭焼窯跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片7点(甕5, 鍋1, 小皿1), 陶磁器片4点(碗3, 蓋1), 瓦片1点が出土している。いずれも小片のため図示できなかった。

所見 第1号炭焼窯跡と長径方向がほぼ一致し、隣接していることから、同じ頃に構築されたものと考えられる。底面はあまり硬化していないことから、操業は短期間で終了したものと想定される。

第3号炭焼窯跡(第163・164図)

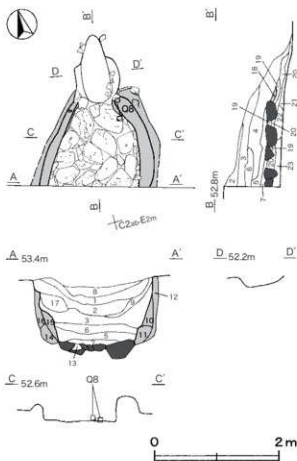
位置 調査区西部のB 2j6区で、北に傾斜する斜面部位置している。

規模と形状 上面は削平され、南は調査区域外に延びているため全容は明らかではない。規模は長径2.44m、短径1.77mの楕円形と想定され、長径方向はN-11°-Eである。壁高は30~110cmで、ほぼ直立している。焚口部は窯の北側を長軸1.1m、短軸0.7mほど地山を若干掘り込んで構築し、竈体との境界は積石によって区画している。煙道部は南側に設けられていたものと想定される。

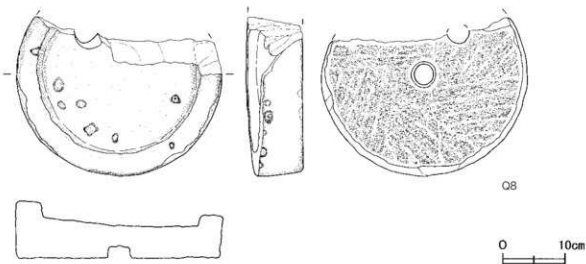
覆土 23層からなる。第1~7・9・17層は室内に堆積した土層で、第3層は焼土粒子を多量に含み、窯の床面全体を覆っていることから、崩落した天井部の一部と推定される。窯は地山を掘り込んだ後、壁は最下段に石塊を並べて鹿沼バミスを含んだ第10~12・14~16層を貼り、底面は石塊を平らな面を上に向けて敷き詰めている。壁と底面の石は火熱を受けて赤変している。

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|---------|------------------------------|
| 1 暗 褐色 | ローム粒子少量 | 6 赤 褐色 | 焼土粒子多量、炭化物少量。粘性弱・締まり強 |
| 2 暗 赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 7 赤 褐色 | 焼土粒子多量、炭化物少量 |
| 3 赤 褐色 | 焼土粒子多量。粘性弱・締まり強 | 8 暗 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 明 赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子多量。粘性弱・締まり強 | 9 暗 赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子微量。締まり弱 |
| 5 赤 色 | 焼土粒子多量、灰少量。粘性弱・締まり強 | 10 赤 褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・鹿沼バミスを微量。締まり弱 |



第163図 第3号炭焼窯跡実測図



第164図 第3号炭焼窯跡出土遺物実測図

第3号炭焼窯跡出土遺物観察表(第164図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	石臼	32.7	(21.2)	9.1	(8110.0)	安山岩	上臼*	焚口部	P.L.42

- 11 暗赤褐色 焼土粒子多量、鹿沼バミス少量、粘性弱・締まり強
- 12 暗赤褐色 焼土ブロック多量、鹿沼バミス中量、ロームブロック少量、粘性弱・締まり強
- 13 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量、粘土ブロック微量
- 14 赤色 鹿沼バミス中量、炭化物少量、粘性弱・締まり強
- 15 赤褐色 焼土ブロック・鹿沼バミス少量、粘性弱
- 16 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・鹿沼バミス少量、粘性弱
- 17 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量、粘性弱
- 18 細暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化物中量、締まり強
- 19 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘性弱・締まり強
- 20 褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量
- 21 黄褐色 鹿沼バミス多量
- 22 赤褐色 鹿沼バミス多量、焼土ブロック中量
- 23 明赤褐色 鹿沼バミス多量

遺物出土状況 陶磁器片1点(碗), 石製品片2点(石臼)が出土している。Q8は焚口部から、2片に分かれて出土している。火熱を受けた様子はなく、廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 壁の最下段と床に石塊を使用しており、耐久性に優れた構造となっている。時期は、近世以降と想定される。

第4号炭焼窯跡(第165図)

位置 調査区部のC3b3区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

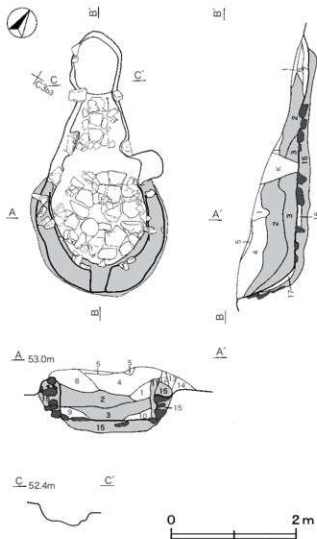
重複関係 段切り遺構を掘り込み、第1号掘立柱建物跡と重複している。

規模と形状 規模は長径4.22m、短径2.05mの洋梨形で、長径方向はN-18°-Wである。壁高は30~98cmで、ほぼ直立している。焚口部は窯の北側を長径1m、短径0.8mの楕円形に掘り込んで構築している。煙道部は南壁中央部を幅30cm、奥行き46cm掘り込み、壁面に扁平な石を設置して補強している。

覆土 17層からなる。第1~11層は室内に堆積した土層である。天井部の崩落による土層と想定される層は確認できない。底面付近には大量の焼土が堆積しており、操業時に形成されたものと考えられる。窯は地山を掘り込んだ後、壁は石を小口積みで積み上げて間を粘土で埋め、底面は石塊を平らな面を上に向けて敷き詰めている。壁と底面は、火熱を受けて変色している。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量
- 2 濃い赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量、粘性弱
- 3 赤褐色 焼土粒子多量、灰少量、炭化物微量、粘性弱・締まり強
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、粘性弱
- 5 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子少量、炭化物微量
- 7 黒色 炭化粒子多量、焼土粒子微量、粘性弱
- 8 濃い赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 9 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量、粘性弱・締まり強
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量、締まり強
- 11 濃い赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量、締まり強
- 12 赤褐色 焼土粒子・粘土粒子多量、締まり強
- 13 赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 14 黒褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック微量
- 15 赤褐色 焼土粒子多量、締まり強
- 16 オリーブ灰色 粘土粒子多量、粘性強
- 17 赤褐色 焼土粒子多量



第165図 第4号炭焼窯跡実測図

所見 壁と床に石塊を使用しており、第3号炭焼窯跡と比較してより耐久性に優れた構造となっている。時期は、近世以降と想定される。

(7) 土坑

第4号土坑(第166図)

位置 調査区西部のB2h7区で、北に傾斜する斜面に位置している。

規模と形状 長軸1.35m、短軸0.88mの長方形で、深さは22cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。西壁の中央部に煙道状に幅30cm、奥行き24cm壁外へ掘り込んでおり、壁との境界に石を設置している。

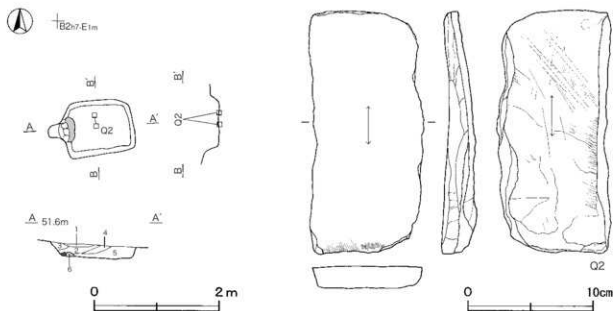
底面は平坦で、火熱を受けて赤変している。壁は外傾して立ち上がっている。長軸方向はN-95°-Wである。
覆土 6層からなる。焼土粒子・炭化粒子を含む層が多く、締まりの弱い層も見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒色 | 炭化粒子多量、焼土ブロック微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量、締まり弱 | 5 極暗褐色 | 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量、締まり弱 | 6 赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化物・灰粒子少量、粘性・締まり弱 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(羽釜, 鍋), 石製品片1点(砥石)が出土している。Q2は底面上から2片に分かれて出土している。

所見 煙道状の施設を持ち、覆土に焼土粒子・炭化粒子が含まれていることから、何らかの焼成が行われていたものと考えられる。時期は、出土土器から近世と想定される。



第166図 第4号土坑・出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表(第166図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砥石	19.3	9.0	2.9	629.0	頁岩	砥面2面	覆土中	

第15号土坑(第167図)

位置 調査区西部のB 2j8区で、北に傾斜する斜面に位置している。

規模と形状 長径0.58m, 短径0.50mの楕円形で、深さは32cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-62°-Wである。

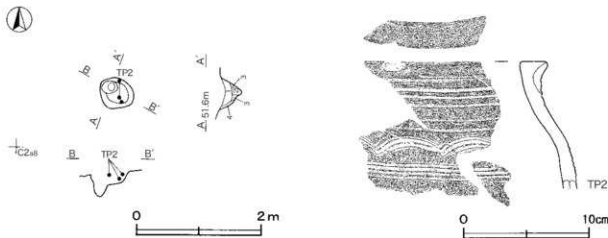
覆土 4層からなる。鹿沼バミスを含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 鹿沼パミス少量
2 黒褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
3 暗褐色 鹿沼パミス微量
4 極暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量

遺物出土状況 土師質土器片46点(甕)が出土している。TP2は割れた状態で出土しており、全体の形状は復元できなかった。

所見 時期は、出土遺物から近世と考えられる。



第167図 第15号土坑・出土遺物実測図

第15号土坑出土遺物観察表(第167図)

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP2	土師質土器	甕	4本1単位の平行沈線及び3本1単位の波状文	赤褐	長石・白色粒子・黒色粒子	普通	覆土中層	

第31号土坑(第168図)

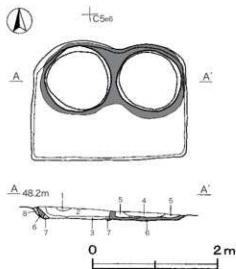
位置 調査区東部のC5e6区で、北に緩やかに傾斜する斜面に位置している。

規模と形状 長径2.28m、短径1.17mの双円形で、深さは6~14cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はN-86°-Wである。掘り方は、地山を長軸2.96m、短軸1.89mの長方形で、深さ6~14cm地山を掘り込んでいる。掘り方の北寄りに径94~98cmの円形に粘土を2ヶ所貼って構築し、二つの円は接合した状態である。当初、東西それぞれを別の遺構としたが、掘り方が同じであることから同一の遺構とした。

覆土 8層からなる。第6~8層は掘り方の土層である。第1~5層は粘性または締まりの強い層が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量。締まり強
2 極暗褐色 ロームブロック・粘土粒子微量



第168図 第31号土坑実測図

- 3 褐色 ローム粒子中量
 4 黒褐色 産沼バミス少量、粘土ブロック微量、粘性強
 5 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
 6 灰色 粘土粒子多量、樟まり強
 7 黒褐色 ローム粒子微量
 8 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(欠)が出土している。小片のため図示できなかった。

所見 底面が平坦で、円形に粘土を貼っていることから、2か所に樽などを設置した土坑の可能性が考えられる。時期は、近世と想定される。

表17 方形堅穴遺構一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
								土柱	出入口	ピット	伊・籠	貯蔵				
1	C566	N-80°-W	長方形	4.46×2.45	23-37	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師質土器片・陶磁器片	近世	SK66→本跡

表18 堀立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模(m)	面積(m ²)	構造	桁行(m)	梁間	柱穴平面形	深さ	柱穴	時代	備考
9	C449	N-0°	4×2	5.61×3.63	20.64	側柱	5.58-5.64	3.60-3.66	円形	24-60	12	近世	SK6510・SD10
10	C459	N-3°-W	3×2	5.43×3.59	21.02	側柱	(5.20)~5.65	3.46~3.72	円形・隅丸長方形	47~70	9	近世	SK6510・SD9

表19 溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
1	C5a3~C516	N-30°-W N-0° N-85°-W	U字状	37.0	21~67	10~36	19~28	外傾	平坦	自然	土師器片・陶磁器片・鉄製品片	中世	
4	A5i2~B440	N-5°-W N-6°-W N-30°-E N-80°-E	U字状	(37.5)	38~146	16~61	11~41	外傾	凹状	自然	陶磁器片・土師質土器片	中・近世	SI12・SF1・SD6→本跡 SE1SK51・SE2SD3と重複
6	B541~B541	N-3°-W	逆台形	(3.02)	21~51	11~39	4~7	外傾	平坦	-		中・近世	SEL 本跡→SD4

表20 井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	断面形	規模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
				長さ×短径(m)	深さ(cm)	平面形						
1	B5c1	N-5°-E	円筒形	1.19×1.08	1.91	筒円形	直立	凹状	人為	須恵器片	中・近世	SD4・6と重複

表21 道路跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)						
1	A5j3~B446	N-87°-E	凹状	[30.6]	162~195	138~172	12~18	緩斜	凹状	人為	須恵器片・瓦片・鉄器片	中・近世	SB2→本跡→SD3・4

表22 炭焼窯跡一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	B 2 f3	N-6°-E	砲弾形	3.09×1.80	10~30	直立	平坦	自然	陶器片・瓦片・鉄製品片	
2	B 2 f4	N-2°-E	砲弾形	3.21×1.61	8~26	外傾	平坦	自然	土師質土器片・陶器片	
3	B 2 j6	N-11°-E	砲弾形	2.44×1.77	30~110	直立	平坦	自然	陶器片・石製品片	
4	C 3 b3	N-18°-W	洋梨形	4.22×2.05	30~98	直立	平坦	自然		段切り遺構→本跡, SB1と重複

表23 土坑跡一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
4	B 2 h7	N-95°-W	長方形	1.35×0.88	22	外傾	平坦	人為	土師質土器片、砥石	
15	B 2 j8	N-62°-W	楕円形	0.58×0.50	32	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
31	C 5 e6	N-86°-W	楕円形	2.28×1.17	14	外傾	平坦	人為	土師質土器片	

5 その他の遺構と遺物

時期の明確でない住居跡1軒、方形堅穴遺構2基、掘立柱建物跡5棟、溝跡3条、道路跡1条、ピット群4か所、段切遺構1か所、地下式竈1基、土坑51基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第11号住居跡(第169図)

位置 調査区東部のB 5g 9区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第4号住居、第42号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北壁は削平されており、全体の形状は不明である。床の残存状況から長軸4.50m、短軸4.10mほどの長方形で、主軸方向は西壁からN-9°-Eと推測される。壁高は最大14cmで、外傾して立ち上がっている。

床面 平坦で、やや軟弱である。

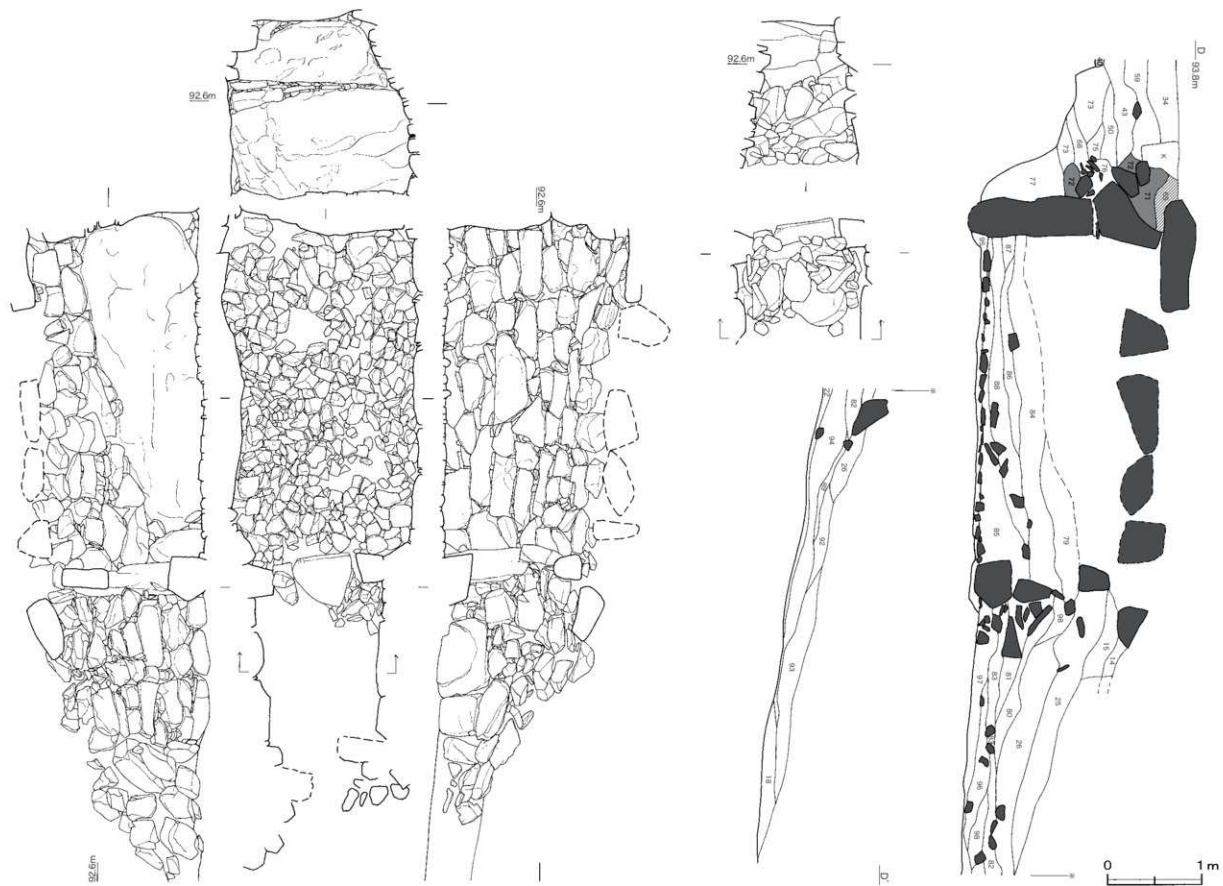
覆土 3層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

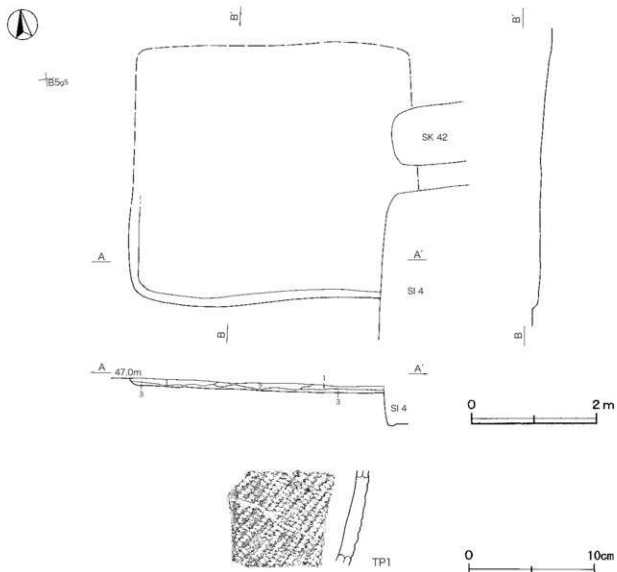
- 1 褐 色 ローム粒子微量 3 褐 色 ローム粒子中量
2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片6点(甕)のほか、縄文土器片12点(深鉢)、弥生土器片1点(壺)、土師質土器片1点(小皿)が出土している。

所見 時期は、第4号住居跡との重複関係から9世紀前葉以前と考えられる。



第36図 第2号墳 石室実測図



第169図 第11号住居跡・出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表(第169図)

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	LRの単節斜縄文	にぶい黄橙	雲母・白色粒子・黒色粒子	普通	覆土下層	

(2) 方形竪穴遺構

第2号方形竪穴遺構(第170図)

位置 調査区東部のC 4a9区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

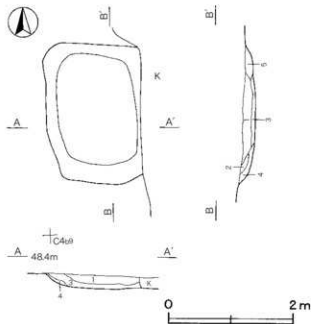
規模と形状 西壁は後世の攪乱によって破壊され、全容は明らかではない。現存する規模は長軸2.21m、短軸1.58mの隅丸長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は17~21cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。床 平坦で、全体的に踏み固められている。

覆土 5層からなる。ロームを含み、特に第3・5層は締まりが強いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒 色 ローム粒子微量
- 3 黒 色 ローム粒子少量。締まり強
- 4 黒 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 黒 褐色 ローム粒子少量。締まり強

所見 底面が踏み固められていることから、日常的に使用されたものと思われるが、規模が小さく竈や柱穴が確認されなかったことから、住居の可能性は低い。時期は、判断できる土器が出土していないため不明である。



第170図 第2号方形竪穴遺構実測図

第3号方形竪穴遺構(第171図)

位置 調査区東部のC4b9区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第65号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.46m、短軸2.10mの隅丸長方形で、主軸方向はN-88°-Eである。壁高は20~25cmで、西壁は緩やかに、その他の壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

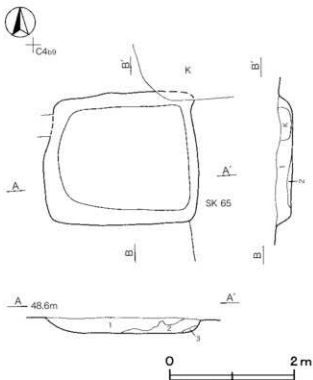
覆土 3層からなる。第1層の土量が多く、第2層もロームブロックを多く含んで締まりも強いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量。締まり強
- 3 黒 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片1点(広口壺)、土師器片10点(坏類1、甕類9)、須恵器片5点(坏類)が出土している。これらは、覆土に混入したものと考えられる。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 底面が踏み固められていることから、日常的に使用されたものと思われる。しかし規模が小さく竈や柱穴が確認されなかったことから、住居の可能性は低いと考えられる。時期は、明らかではない。

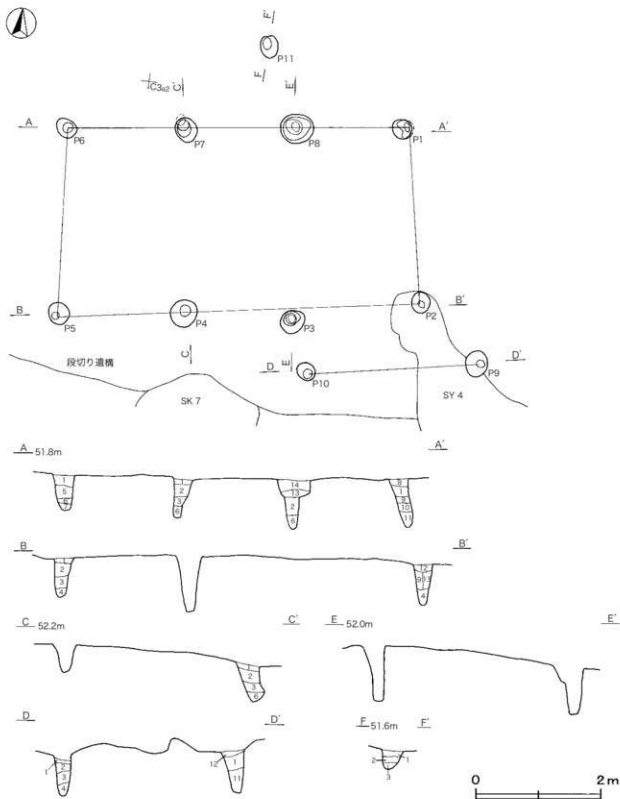


第171図 第3号方形竪穴遺構実測図

(3) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第172図)

位置 調査区西部のC3a2区で、北に傾斜する斜面部に位置している。



第172図 第1号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第4号炭焼窯、段切り遺構と重複している。

規模と構造 桁行3間(平均5.59m)、梁行1間(平均2.92m)の側柱建物跡で、桁行方向はN-85°-Eの東西棟である。柱間寸法は桁行約1.87m、梁行約2.93mで、面積は16.39㎡である。

柱穴 11か所。平面形は長径30-54cm、短径25-45cmの円形又は楕円形である。断面形は円筒形を呈し、深さは43-92cmである。土層は14層からなり、柱痕は確認できなかった。P9・P10は庇に伴うピットと考えられる。P11の性格は不明である。

土層解説

1 褐色	ロームブロック中量	9 黒褐色	黒色粒子多量、ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック中量	10 極暗褐色	ローム粒子・黒色土粒微量
3 暗褐色	ロームブロック少量	11 黒褐色	黒色粒子多量、ローム粒子微量
4 極暗褐色	ローム粒子微量	12 暗褐色	炭化粒子中量、ロームブロック少量
5 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量	13 明褐色	ローム粒子多量、鹿沼バミス微量
6 暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量	14 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
7 暗褐色	鹿沼バミス多量		
8 暗褐色	黒色粒子多量、ロームブロック少量、粘性弱・締まり強		

所見 時期は明らかではないが、段切り遺構の南壁と桁行方向がほぼ一致していることから、同じ時期に構築されたものと考えられる。

第4号掘立柱建物跡(第173図)

位置 調査区東部のB4j8区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

規模と構造 桁行3間(平均4.88m)、梁行2間(平均3.93m)の総柱建物跡で、桁行方向はN-0°の南北棟である。柱間寸法は桁行約1.63m、梁行約1.97mで、面積は19.18㎡である。中央部の柱間が左右よりも狭い構造の建物である。

柱穴 11か所。平面形は長径33-92cm、短径30-89cmの円形又は楕円形である。断面形は逆台形を呈し、深さは10-33cmである。柱痕は第1・2層が相当し、柱材の径は15-20cmと推定される。また第3・4層は掘り方の埋土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量	3 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子中量	4 黒褐色	ローム粒子微量

所見 時期は、不明である。

第5号掘立柱建物跡(第174図)

位置 調査区東部のC5a2区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

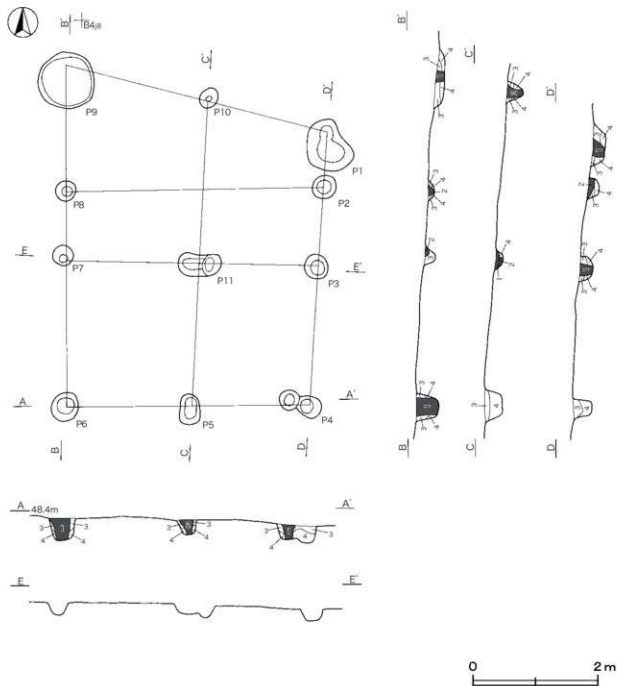
規模と構造 北東側が削平されており、全容は明らかではない。規模は現状で桁行5間(平均11.65m)、梁行2間(平均4.71m)の側柱式建物跡で、桁行方向はN-88°-Eの東西棟と推測される。柱間寸法は桁行約2.33m、梁行約2.30mで、面積は54.87㎡である。

柱穴 12か所。平面形は長径20-51cm、短径18-50cmの円形である。断面形は逆台形を呈し、深さは6-21cmである。柱痕は第1・2層が相当し、柱材の径は10-14cmと推定される。その他の土層は掘り方の埋土で、ローム粒子を含み締まりに強弱が見られる。

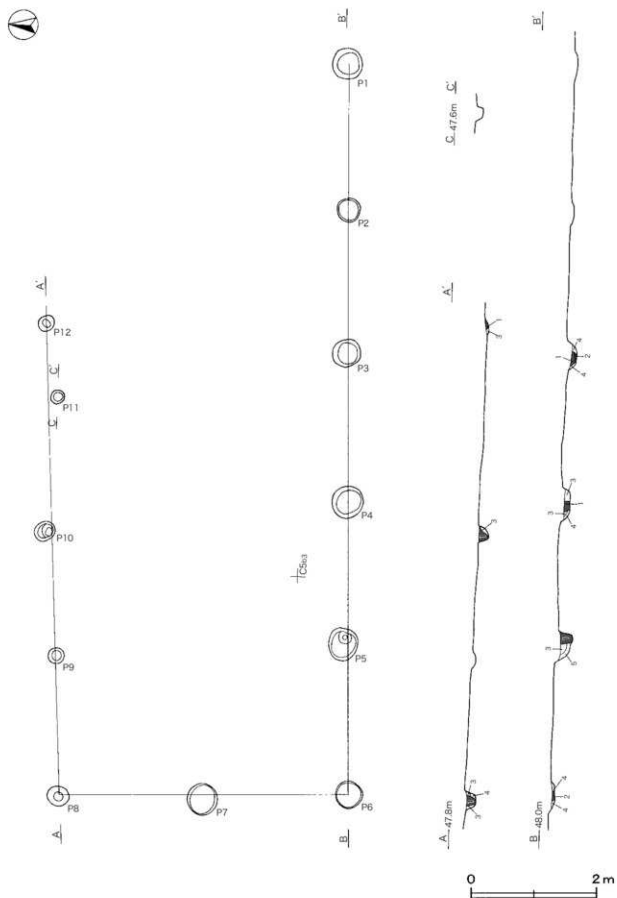
土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化物微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 締まり強 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック微量, 締まり弱 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, 締まり弱 | | |

所見 本跡の桁間は5間確認されており, 当遺跡では最も長大な建物跡である。時期は, 遺物が出土していないため明らかではないが, 桁行方向が第2号掘立柱建物跡と同一であることから, 同じ規格に基づいて建てられた可能性が考えられる。



第173図 第4号掘立柱建物跡実測図



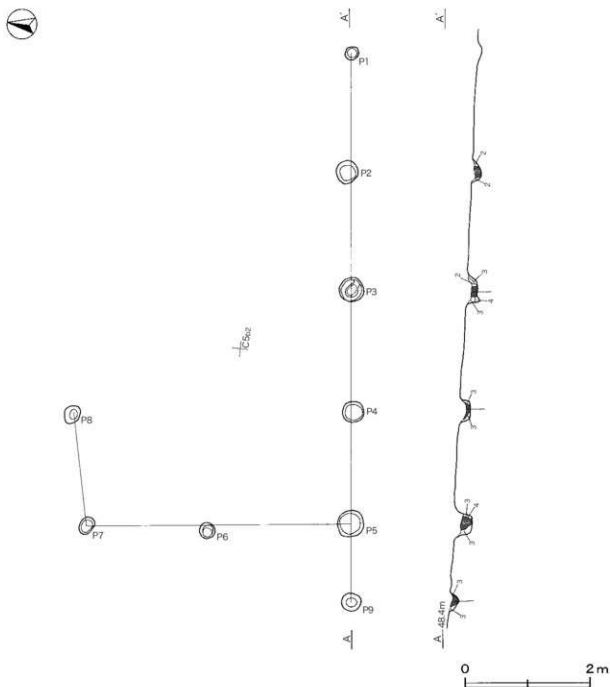
第174図 第5号堀立柱建物跡実測図

第7号掘立柱建物跡(第175図)

位置 調査区東部のC5b1区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

規模と構造 北東側が削平されており、全容は明らかではない。桁行4間(平均7.98m)、梁行2間(平均4.36m)の掘立柱建物跡で、桁行方向はN-85°-Eの東西棟と想定される。柱間寸法は桁行約2.00m、梁行約2.16mで、面積は35.19㎡である。

柱穴 9か所で、平面形は長径24~44cm、短径20~40cmの円形又は楕円形である。断面形は逆台形を呈し、深さは6~28cmである。柱痕は第1層が相当し、柱材の径は14~18cmと推定される。P9はP1~P5の延長線上に位置し、径も小さく浅いことから、足場杭を設置したピットの可能性が考えられる。



第175図 第7号掘立柱建物跡実測図

土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子微量

- 3 灰褐色 ローム粒子中量
4 黒褐色 ローム粒子少量

所見 本跡は現存で桁行4間の規模を持ち、第5号掘立柱建物跡に次ぐ規模の建物跡である。この2棟はほぼ同じ場所に位置していることから、新旧関係は不明であるが立て替えられた可能性が考えられる。時期は明らかではない。

第11号掘立柱建物跡(第176図)

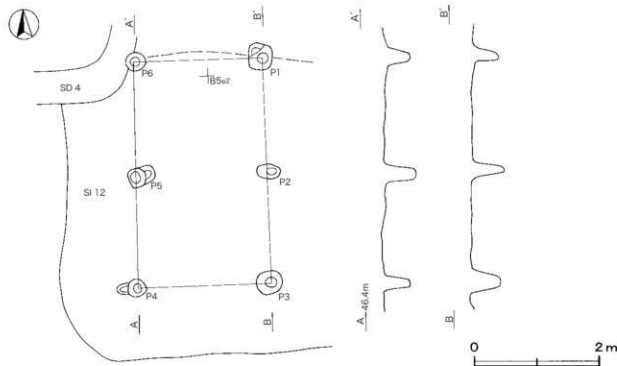
位置 調査区東部のB5e1区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第12号住居跡を掘り込み、第4号溝跡と重複している。

規模と構造 桁行2間(平均3.57m)、梁行1間(平均2.09m)の側柱式建物跡で、桁行方向は $N-3^{\circ}-E$ の南北棟である。柱間寸法は桁行約1.79m、梁行約1.05mで、面積は7.70 m^2 である。

柱穴 6か所で、平面形は長径32~45m、短径28~36mの円形又は楕円形である。断面形は円筒形を呈し、深さは33~50cmである。

所見 第12号住居跡との重複関係から古墳時代以降と考えられる。



第176図 第11号掘立柱建物跡実測図

(4) 溝跡

第2号溝跡(第177図, 付図4)

位置 調査区東部のB5d3~B5e8区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第5号住居跡を掘り込んでいる。また、第5号溝跡と重複しているが新旧関係は不明である。

規模及び形状 北側は削平され、東側は調査区域外に延びているため全容は不明である。方向はN-90°-Eに延び、B5e4区付近でN-0°に変わっている。確認できた長さは23.8mで、上幅30~118cm、下幅18~30cm、深さ28~52cmである。断面は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。

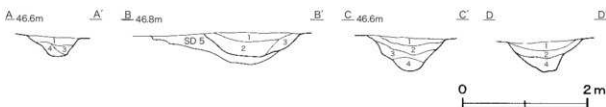
覆土 4層からなる。ロームブロックを含んでいることから、人為堆積の可能性が考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-----------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片3点(甕)、土師質土器片4点(鍋2、小皿1、羽釜1)、石器片1点(剥片)が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

所見 時期は、明らかではない。



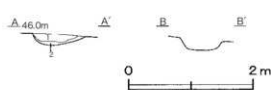
第177図 第2号溝跡実測図

第3号溝跡(第178図、付図4)

位置 調査区北部のA5i1~B4a0区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第1号道路跡を掘り込み、第4号溝跡と重複している。

規模及び形状 N-15°-Eの方向に延び、長さは10.5mで、上幅43~74cm、下幅25~52cm、深さ15~18cmである。断面は緩やかな弧状で、壁は西壁は緩やかに、東壁は外傾してそれぞれ立ち上がっている。



土層解説

- | | |
|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 |

覆土 2層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

第178図 第3号溝跡実測図

遺物出土状況 土師器片5点(甕)、須恵器片12点(坏類11、盤1)、陶磁器片2点(鉢)、土師質土器片3点(鍋)が出土している。いずれも小片のため図示できなかった。

所見 時期は、明らかではない。

第5号溝跡(第179図, 付図4)

位置 調査区西部のB5d4～B5e4区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第2号溝跡と重複している。

規模及び形状 北側は削平されており、全容は不明である。N-9°-Eの方向に延び、確認できた長さは5mで、上幅53～78cm、下幅20～30cm、深さ18～50cmである。断面形は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

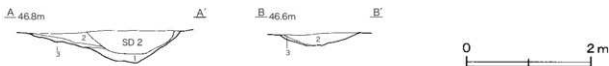
覆土 3層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点(甕類)、須恵器片1点(坏類)、陶磁器片2点(碗)、土師質土器片2点(甕、鍋)、瓦片1点(平瓦)が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

所見 出土土器がいずれも細片のため、時期は明らかではない。



第179図 第5号溝跡実測図

(5) 道路跡

第2号道路跡(第180図, 付図4)

位置 調査区南部のC4c4～C4e5区で、北側に傾斜する斜面部に位置している。

規模と形状 東西は調査区域外に延びており、全容は不明である。N-30°-Wの方向に延び、確認された長さ9.2m、上幅0.30～0.52m、下幅0.15～0.21m、深さ8～10cmである。断面形は緩やかな弧状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層からなる。非常に締まっており、踏み固められている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子微量

所見 覆土は全体的に硬化しており、道路跡と考えられる。時期は、土器が出土していないため不明である。

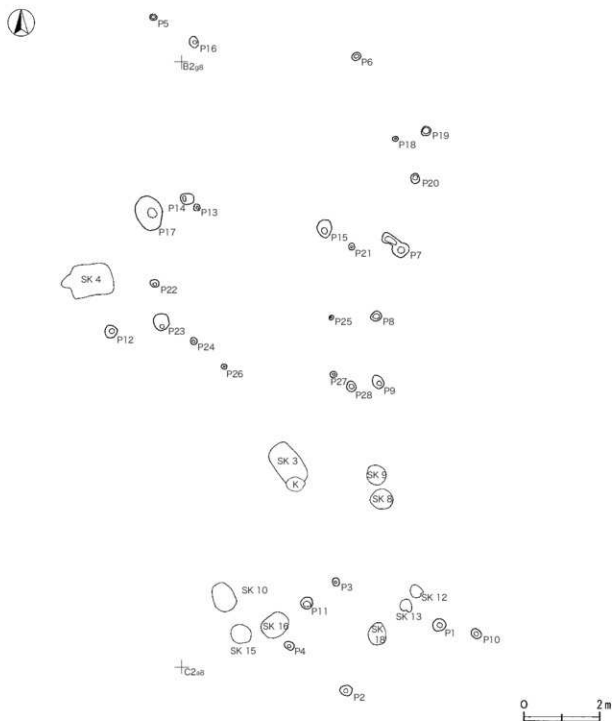


第180図 第2号道路跡実測図

(6) ビット群

第1号ビット群(第181図)

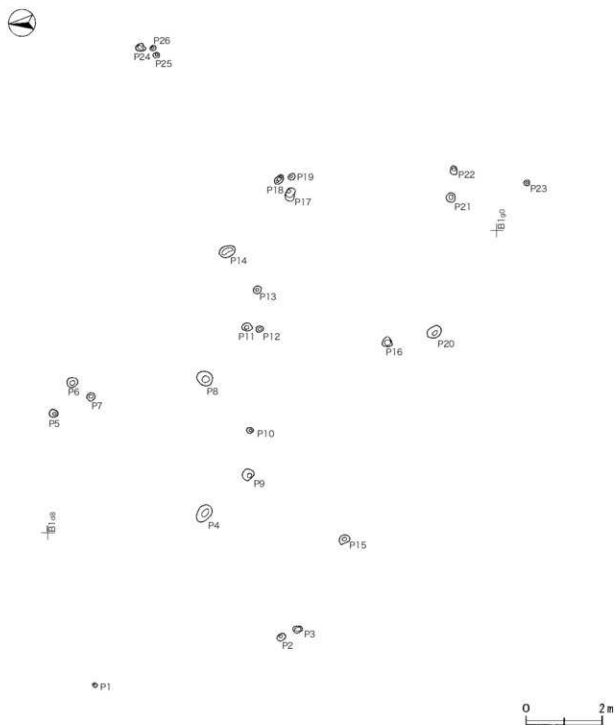
調査区西部のB2f7～h7・B2f9～j9、C2a9区の東西18m、南北11mに広がり、第3号炭焼窯跡の東側に位置している。配列は規則性がなく建物跡を想定できなかったため、ビット群とした。出土土器がなく、時期は明らかではない。



第181図 第1号ピット群実測図

第2号ピット群(第182図)

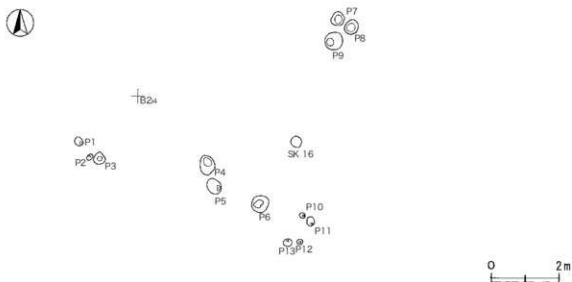
調査区西部のB1d8・e7～e0・f9・g0、B2d1・e1区の東西14m、南北17mに広がり、第1号炭焼窟跡の西側に位置している。配列には規則性がなく建物跡を想定できなかったため、ピット群とした。出土土器はなく、時期は明らかではない。



第182図 第2号ピット群実測図

第3号ピット群(第183図)

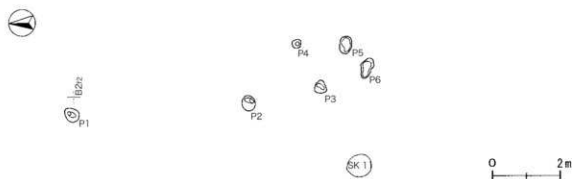
調査区西部のB 2h5・i4・i5区の東西8 m、南北7 mに広がり、第2号炭焼窯跡と第3号炭焼窯跡の間に位置している。ピット群の範囲は配列には規則性がなく建物跡を想定できなかったため、ピット群とした。出土土器がなく、時期は明らかではない。



第183図 第3号ピット群実測図

第4号ピット群(第184図)

調査区西部のB 2f1, g1・2区の東西3 m, 南北8 mに広がり, 第1号炭焼窯跡の西側に位置している。ピット群の範囲は配列には規則性がなく建物跡を想定できなかったため, ピット群とした。出土土器がなく, 時期は明らかではない。



第184図 第4号ピット群実測図

第1号ピット群計測表(第181図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	32	28	16	11	31	28	9	21	18	16	7
2	30	23	27	12	34	33	17	22	23	18	29
3	20	19	22	13	17	15	17	23	44	42	15
4	28	18	43	14	34	28	26	24	18	17	8
5	20	14	21	15	46	40	18	25	11	10	9
6	25	18	21	16	28	23	12	26	12	10	10
7	80	44	25	17	95	67	25	27	18	15	9
8	38	21	27	18	14	14	34	28	28	24	20
9	39	30	35	19	28	28	14				
10	27	22	17	20	26	26	19				

第2号ピット群計測表(第182図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	16	11	9	10	18	15	13	19	20	18	27
2	23	18	19	11	25	22	33	20	39	30	28
3	26	18	11	12	21	16	19	21	28	22	30
4	50	36	29	13	23	20	18	22	25	17	20
5	23	23	26	14	45	30	14	23	15	15	12
6	28	28	21	15	28	23	28	24	36	16	17
7	23	20	20	16	30	25	40	25	15	13	12
8	44	37	27	17	37	27	40	26	16	13	12
9	31	28	21	18	31	20	23				

第3号ピット群計測表(第183図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	23	21	9	6	24	19	16	11	26	20	24
2	14	13	4	7	37	23	12	12	17	15	31
3	31	29	16	8	40	35	15	13	24	20	16
4	55	50	14	9	48	45	23				
5	45	35	23	10	17	15	16				

第4号ピット群計測表(第184図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	45	38	20	3	36	35	38	5	50	33	26
2	40	35	33	4	25	22	30	6	55	34	40

(7) 段切り遺構

段切り遺構(第185・186図)

位置 調査区西部のC3b1～b3区で、北に傾斜する斜面部に位置している。

重複関係 第4号炭焼窯、第7号土坑に掘り込まれている。また第1号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 南北2m、東西8mで、長軸方向は南壁からN-84°-Eと想定される。深さは最大50cmで、壁は東側に途中20～120cmの平坦な面を形成しながら、外傾して立ち上がっている。北側に平坦な区画を設けており、底面は踏み固められた形跡は見られない。

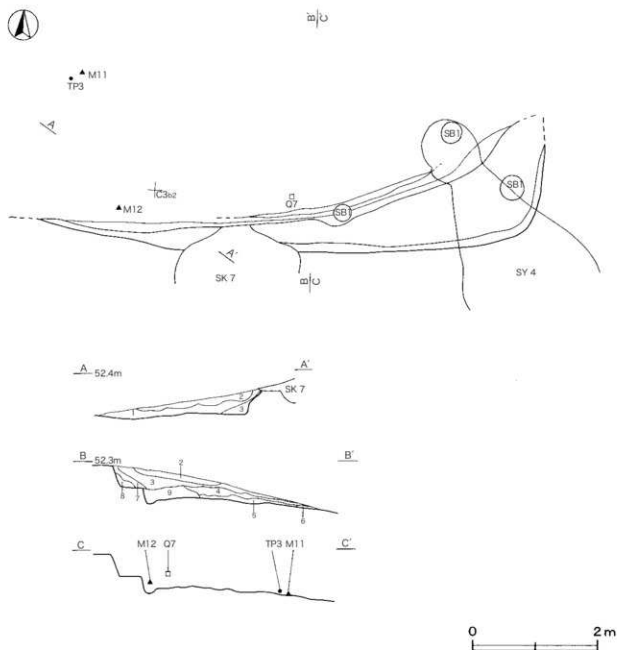
覆土 9層からなる。南側から流れ込んだ堆積状況を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

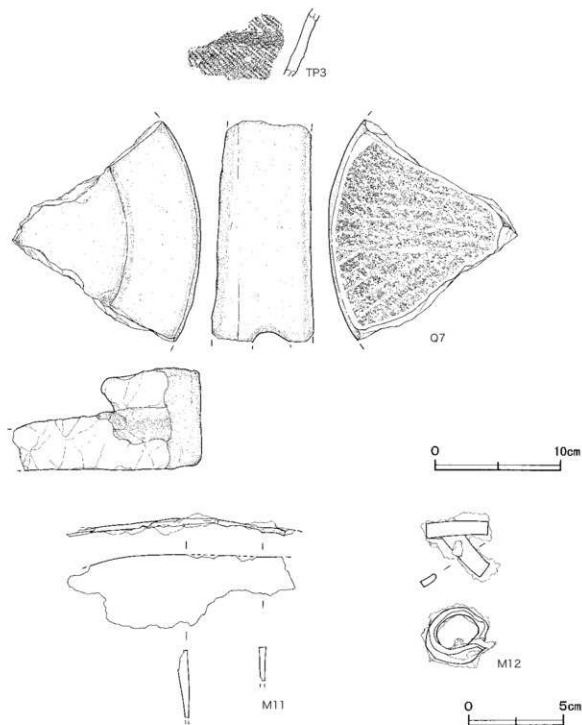
- | | | | |
|-------|--------------------|--------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化物粒子微量 | 7 黒褐色 | 炭化物粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | 土ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片1点(広口壺), 土師質土器片9点(甕類6, 焙烙1, 鍋2), 陶磁器片2(皿, 播鉢), 石器片1点(石臼), 鉄製品片2(鈎力, 鍔金具力)が出土している。TP3・M11は西部の底面付近から, M12は南壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。Q7は南壁中央部の確認面付近から出土している。M11・M12は本跡が廃絶後まもなく遺棄されたもので, その他は埋没に伴って流れ込んだものと考えられる。

所見 本跡のすぐ北側に第1号掘立柱建物跡が位置しており, 軸方向もほぼ同じであることから, 第1号掘立柱建物跡を建てる際に平坦な面を造成するために構築されたものと考えられる。時期は明らかではないが, 第1号掘立柱建物跡と同時期と想定される。



第185図 段切り遺構実測図



第186図 段切り遺構出土遺物実測図

段切り遺構出土遺物観察表(第186図)

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP3	縄文土器	深鉢	R Lの半節斜縄文を施した後、磨り消し	明赤褐	長石・雲母・白色粒子	普通	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	石臼	[17.6]	[15.0]	[7.9]	(2000.0)	安山岩	上白	覆土上層	P.L.42

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	仲杵	(12.1)	(3.9)	(0.5)	(49.7)	鉄	内面に破断面あり	覆土下層	
M12	黄金具	(3.0)	(3.3)	(0.4)	(15.6)	鉄	幅3.3cmの鉄板を円形に曲げている	覆土下層	

(8) 地下式墳

第1号地下式墳(第187図)

位置 調査区西部のB311区で、北に緩やかに傾斜する斜面部に位置している。

竪坑 北側に位置し、長軸1.76m、短軸1.07mの長方形で、主軸方向は主室と直交している。確認面からの深さは50～66cmである。底面は平坦で主室の底面との段差は見られず、壁はほぼ直立している。

主室 長軸2.24m、短軸1.71mの隅丸長方形で、主軸方向はN-71°-Wである。確認面からの深さは66～99cmで、天井部は遺存していない。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

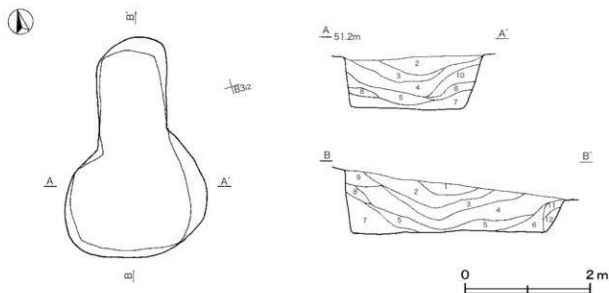
覆土 12層からなる。主室の天井部と想定される土層は確認できなかった。第8・9層はローム粒子を多く含んでいることから、壁の崩落に伴う土層と思われる。その他は外部から流れ込んだような堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子微量。締まり弱	7	黒褐色	ロームブロック中量。炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量。締まり弱	8	褐色	ローム粒子中量
3	黒暗褐色	ロームブロック少量	9	褐色	ローム粒子中量。鹿沼パミス微量
4	褐色	ロームブロック中量。鹿沼パミス少量。締まり弱	10	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック少量。鹿沼パミス微量。締まり弱	11	褐色	ローム粒子多量
6	黒褐色	ロームブロック微量	12	褐色	ローム粒子多量。締まり強

遺物出土状況 土師質土器片3点(鍋1、甕2)、陶磁器片2点(碗1、搔鉢1)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

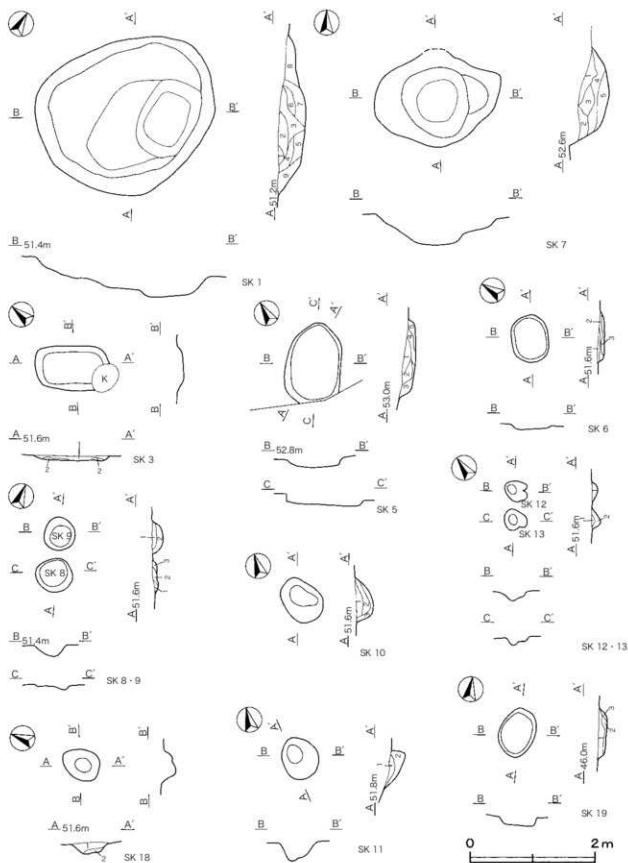
所見 竪坑と主室の主軸が直交するタイプの地下式墳である。天井部と考えられる土層が確認できなかったため、早い段階に削平されたものと思われる。出土土器が細片のため、時期は明らかではない。



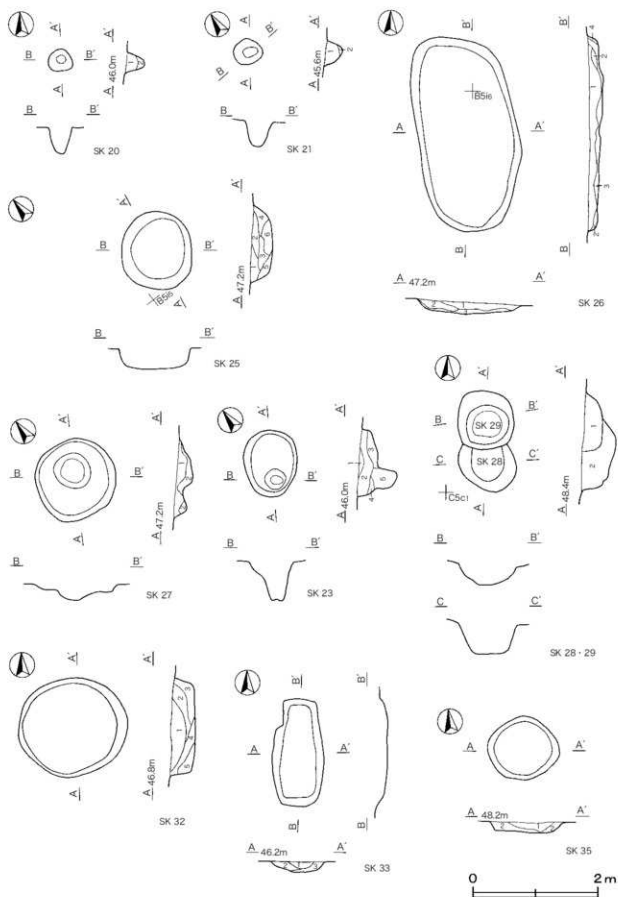
第187図 第1号地下式墳実測図

(9) 土坑(第188図～第192図)

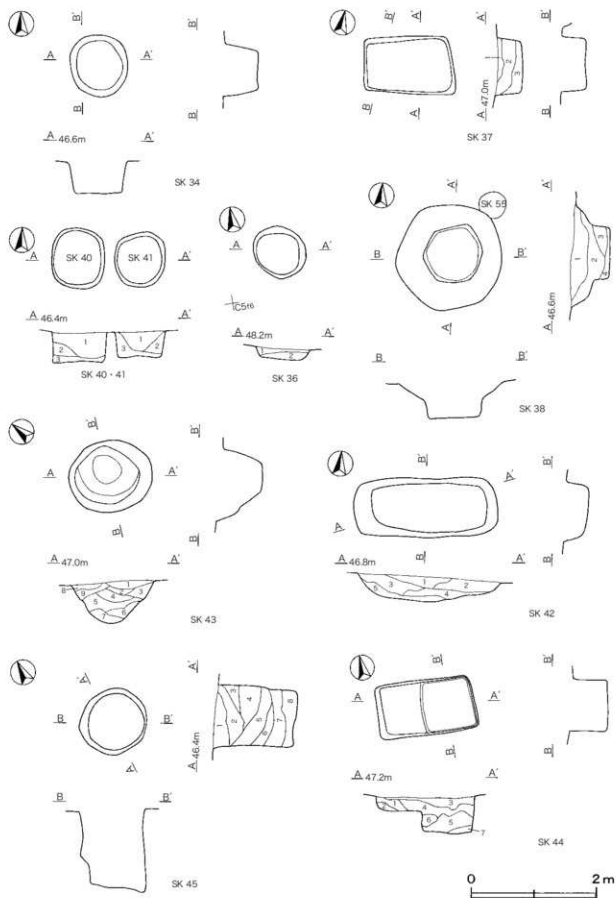
ここでは、時期不明の土坑について、実測図と土層解説を記載する。



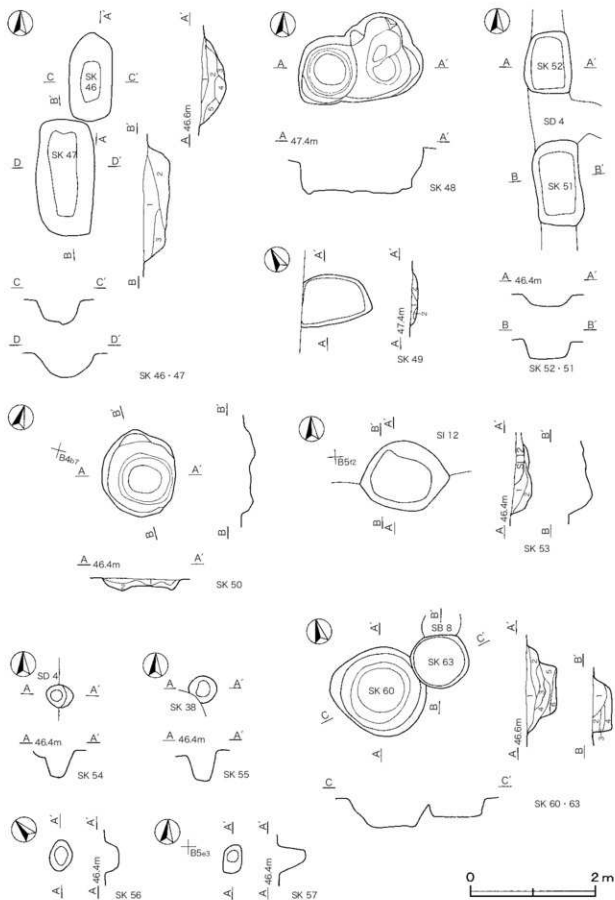
第188図 土坑実測図(1)



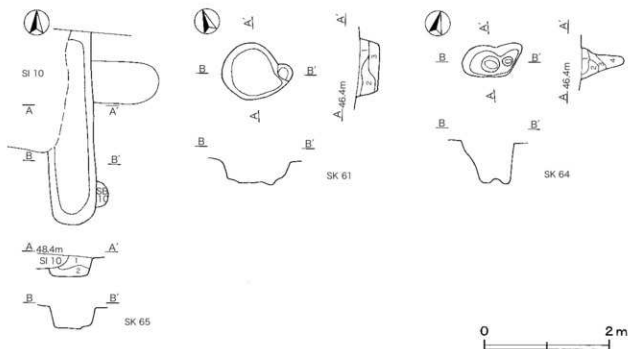
第189图 土坑实测图(2)



第190图 土坑实测图(3)



第191图 土坑实测图(4)



第192図 土坑実測図(5)

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 4 黒暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量、締まり弱
- 5 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量、締まり弱
- 6 暗褐色 炭化物少量、ローム粒子微量、締まり弱
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 8 黒褐色 ローム粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子少量

第3号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第5号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミス微量
- 2 黒褐色 鹿沼バミス中量、ロームブロック少量
- 3 明褐色 鹿沼バミス中量

第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量
- 5 褐色 炭化物少量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 黒暗褐色 ロームブロック微量

第9号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 黒暗褐色 ロームブロック少量

第10号土坑土層解説

- 1 暗褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
- 2 黒暗褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
- 3 黄褐色 鹿沼バミス中量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス少量

第13号土坑土層解説

- 1 黒暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス少量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 鹿沼バミス少量、ローム粒子微量
- 2 黒暗褐色 鹿沼バミス少量、ローム粒子微量

第19号土坑土層解説

- 1 黒暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第20号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第21号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、締まり弱

第23号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒暗褐色 ローム粒子少量、締まり弱
- 5 黒褐色 ロームブロック中量

第25号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ローム粒子微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 6 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

第26号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第27号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 炭化物中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

第28・29号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック多量
- 2 暗 褐色 ローム粒子多量

第32号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量・炭化物微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量
- 4 灰 褐色 ローム粒子少量、締まり強
- 5 暗 褐色 ローム粒子少量

第33号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子少量

第35号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子中量

第36号土壌土層解説

- 1 極暗 褐色 炭化物少量、ロームブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量

第37号土壌土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量

第38号土壌土層解説

- 1 極暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 黒 褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第40号土壌土層解説

- 1 極暗 褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 2 黒 褐色 ローム粒子少量、締まり弱
- 3 暗 褐色 ロームブロック中量

第41号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子微量
- 3 黒 褐色 ローム粒子微量

第42号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 5 極暗 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第43号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量、締まり強
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 極暗 褐色 ロームブロック少量
- 6 黒 褐色 ロームブロック少量、締まり弱
- 7 暗 褐色 ロームブロック少量、締まり弱
- 8 黒 褐色 ローム粒子微量
- 9 暗 褐色 ロームブロック中量

第44号土壌土層解説

- 1 極暗 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、締まり弱
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、締まり弱
- 3 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 極暗 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量、締まり弱
- 5 極暗 褐色 ロームブロック少量、締まり弱
- 6 黒 褐色 ロームブロック微量、締まり弱
- 7 黒 褐色 ロームブロック中量、締まり弱

第45号土壌土層解説

- 1 極暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ロームブロック微量、締まり弱
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量、締まり弱
- 4 極暗 褐色 ロームブロック中量、虎沼バミス少量、締まり弱
- 5 極暗 褐色 ローム粒子少量
- 6 黒 褐色 ロームブロック少量
- 7 黒 褐色 ロームブロック微量
- 8 極暗 褐色 ロームブロック少量、虎沼バミス微量

第46号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 極暗 褐色 ロームブロック少量
- 5 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第47号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 極暗 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第49号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量

第50号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量

第53号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第60号土壌土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量、締まり弱
- 4 暗 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子少量、締まり弱
- 6 褐色 ローム粒子微量

第61号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量、締まり弱
- 2 極暗 褐色 ロームブロック少量、締まり弱
- 3 暗 褐色 ロームブロック多量、締まり弱

第63号土壌土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、締まり強
- 2 黒 褐色 ローム粒子少量
- 3 黒 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗 褐色 ローム粒子少量、締まり強

第64号土壌土層解説

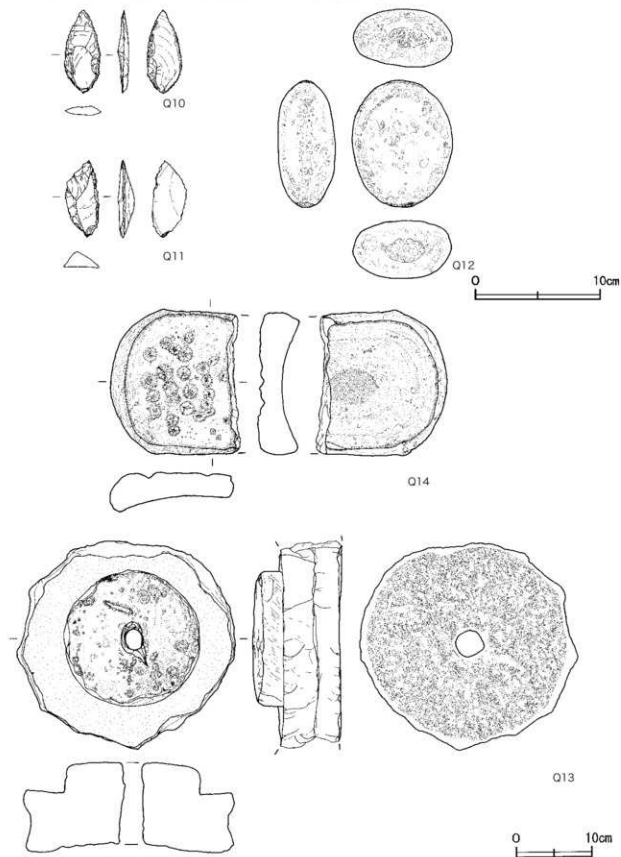
- 1 暗 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗 褐色 ロームブロック少量

第65号土壌土層解説

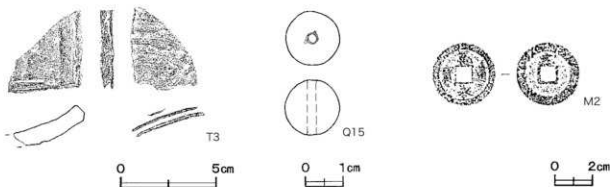
- 1 黒 褐色 ローム粒子中量
- 2 黒 褐色 ローム粒子微量

00 遺構外出土遺物(第193・194図)

遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で掲載する。



第193図 遺構外出土遺物実測図(1)



第194図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第193・194図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q10	石軸	6.7	2.9	0.7	13.4	頁岩	くぼみあり	表探	P L 41
Q11	ナイフ形石器	6.1	2.8	1.2	14.0	頁岩	両縁調整	表探	P L 41
Q12	敲石	10.1	7.9	4.5	471.0	安山岩	使用痕2ヶ所	表探	
Q13	石臼	29.0	27.5	11.8	9920.0	安山岩	下臼*	表探	P L 42
Q14	凹石・石皿 (17.3)	19.3	5.0	(1950.0)	安山岩	石の片側を凹石、反対側を石皿として使用		表探	P L 42

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q15	丸玉	1.45	1.49	0.27	5.2	ガラス	赤色	表探	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
T 3	軒平瓦	(10.7)	(10.2)	2.2	(284.0)	土	三重弧文	覆土下層	

遺物番号	銭名	計 測 値				初鑄・鑄造年		特 徴	備 考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	年号		
M2	寛永通宝	2.52	0.60	1.40	2.50	銅	寛永13年	1636	背面に「文」 寛文8年(1668年) 鑄造品*

表24 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
								柱穴	出入口	ピット	伊・籠	貯蔵					
11	B5g	N-9'-E	[長方形]	[4.50×4.10]	0-14	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器片・土師質土器片	9世紀 以前	本跡→SI 4・ SK 42	

表25 方形竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時代	備考 (旧→新)
								柱穴	出入口	ピット	伊・籠	貯蔵					
2	C4d	N-5'-W	隅丸長方形	2.21×(1.58)	17-21	平坦	-	-	-	-	-	-	人為		-	旧 SI 9	
3	C4b	N-8'-E	隅丸長方形	(2.46×2.10)	20-25	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師器片・須恵器片	-	旧 SI 10	

表26 堀立柱建物跡一覽表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模		構造	桁行(m)	梁間	柱穴平面形	深さ	柱穴	時代	備考
				規模(m)	面積(m ²)								
1	C3a2	N-85°-E	3×1	5.59×2.92	16.39	側柱	5.44~5.75	2.81~3.04	楕円形	43~92	11	-	SY 4、段切り遺構
4	B4j8	N-0°	3×2	4.88×3.93	19.18	総柱	4.33~5.42	3.83~4.02	円形・楕円形	10~33	11	-	
5	C5a2	N-88°-E	5×2	11.65×4.71	54.87	側柱	11.65	4.62~4.80	円形	6~21	12	-	
7	C5b1	N-85°-E	4×2	7.98×4.36	35.19	側柱	7.98	4.31~4.41	円形・楕円形	6~28	9	-	
11	B5e1	N-3°-E	2×1	3.57×2.09	7.70	側柱	3.54~3.60	2.04~2.14	円形・楕円形	33~50	6	-	SI 12、SD 4

表27 溝跡一覽表

番号	位置	方向	断面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考 (出→新)
				長さ(m)	上幅(cm)	F幅(cm)	深さ(cm)						
2	B5d3-B5e8	N-0°	逆台形	23.8	30~	18~	28~52	外傾	平坦	人為	土師器片・土師質土器片	-	SI 5→本跡、SD 5と重複
		118			30								
3	A5i1-B4a0	N-15°-E	屈状	10.5	43~74	25~52	15~18	緩斜	屈状	自然	土師器片・須恵器片・陶磁器片	-	SF1→本跡、SDと重複
5	B5d4-B5e4	N-9°-E	屈状	[5.0]	53~78	20~30	18~50	緩斜	屈状	自然	土師器片・須恵器片・陶磁器片	-	SD 2と重複

表28 道路跡一覽表

番号	位置	方向	断面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考 (出→新)
				長さ(m)	上幅(cm)	F幅(cm)	深さ(cm)						
2	C4c4-C4e5	N-30°-W	屈状	[9.2]	30~52	15~21	8~10	緩斜	屈状	人為	土師質土器、石製品、鉄器	-	

表29 段切り遺構一覽表

位置	方向	断面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時代	備考 (出→新)
			長さ(m)	上幅(cm)	F幅(cm)	深さ(cm)						
C3b1~b3	N-84°-E	-	8.0	2.0	50.0	50	外傾	平坦	自然		-	SY4・SK7・SB1と重複

表30 地下式竈一覽表

番号	位置	方向	規模						覆土	主な出土遺物	時代	備考 (出→新)
			竈坑			主室						
			長さ(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)	平面形	長さ(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)	平面形				
1	B3i1	N-71°-W	1.76×1.07	66	長方形	2.24×1.71	99	隅丸長方形	自然	土師質土器片・陶磁器片	-	

表31 土坑一覽表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (出→新)
				長さ×短径(m)	深さ(cm)					
1	B3j2	N-22°-E	楕円形	2.92×2.38	41	緩斜	平坦	人為	土師器片・土師質土器片	
3	B3i8	N-39°-W	長方形	1.18×0.70	8	緩斜	平坦	自然	土師質土器片	
5	C3c3	N-50°-E	楕円形	1.33×0.88	15	緩斜	平坦	人為		
6	B2j8	N-57°-E	楕円形	0.75×0.60	7	外傾	平坦	人為		
7	C3b2	N-71°-E	楕円形	2.09×1.50	46	緩斜	屈状	自然		段切り遺構→本跡
8	B2i9	N-89°-E	円形	0.60×0.54	7	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	
9	B2i9	N-35°-W	円形	0.54×0.52	18	外傾	屈状	人為		

番号	位置	長径(軸) 方向	平面形	規 模		傾面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 (旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
10	B 2j8	N-24°-W	楕円形	0.75×0.58	26	緩斜	皿状	人為	土師質土器片	
11	B 2g1	N-15°-W	円形	0.66×0.58	27	外傾	皿状	自然		
12	B 2j9	N-26°-W	不定形	0.38×0.30	12	緩斜	皿状	人為	土師質土器片	
13	B 2j9	N-45°-W	不定形	0.35×0.33	15	外傾	皿状	人為		
18	B 2j9	N-2°-E	楕円形	0.61×0.46	20	外傾	皿状	人為	土師質土器片	
19	B 5b7	N-6°-W	楕円形	0.79×0.56	14	外傾	平坦	人為		
20	B 5b4	N-57°-W	円形	0.38×0.35	42	外傾	皿状	自然		
21	B 5a4	N-47°-W	楕円形	0.45×0.42	37	外傾	皿状	自然		
23	B 5a2	N-27°-E	楕円形	1.07×0.85	62	外傾	平坦	人為		
25	B 5h5	N-0°	円形	1.24×1.21	32	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
26	B 5i5	N-15°-W	楕円形	3.14×1.60	22	外傾	平坦	自然		
27	B 5h4	N-0°	円形	1.26×1.25	26	外傾	凹凸	人為	須恵器片	
28	C 5b1	N-0°	楕円形	[1.18]×0.91	48	外傾	平坦	人為		
29	C 5b1	N-0°	円形	0.94×0.89	30	外傾	皿状	自然		
32	B 5f3	N-8°-W	楕円形	1.76×1.54	38	外傾	平坦	人為		SI 5
33	B 5e4	N-0°	長方形	1.71×0.82	15	緩斜	平坦	自然		
34	B 5d4	N-0°	円形	1.00×0.93	51	垂直	平坦	-	陶器片	SI 5
35	C 5e5	N-66°-W	楕円形	1.13×1.03	15	外傾	平坦	自然		
36	C 5f6	N-41°-W	楕円形	0.87×0.76	16	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
37	B 4d4	N-89°-W	長方形	1.38×0.91	40	垂直	平坦	人為	土師器片・須恵器片	SI 7→本跡
38	B 5d1	N-0°	円形	1.68×1.67	56	緩斜	平坦	人為	土師器片	SK55→本跡
40	B 5e4	N-10°-E	楕円形	0.98×0.85	43	垂直	平坦	人為	土師器片・陶器片	SI 5
41	B 5e4	N-10°-E	円形	0.90×0.82	41	垂直	平坦	自然	須恵器片	SI 5
42	B 5g9	N-89°-E	長方形	2.29×0.95	36	外傾	皿状	人為		SI11
43	B 5f4	N-41°-W	楕円形	1.33×1.15	64	緩斜	皿状	人為		
44	B 5g9	N-84°-W	長方形	1.55×0.88	60	垂直	平坦	人為		
45	B 4b7	N-71°-W	円形	1.07×1.07	134	垂直	凹凸	人為	土師器片	
46	B 4c7	N-0°	長楕円形	1.30×0.69	33	緩斜	皿状	人為	土師器片・須恵器片	
47	B 4c7	N-0°	楕円形	1.85×0.93	37	緩斜	皿状	自然	土師器片・土師質土器片	
48	B 4f5	N-78°-E	不定形	2.00×1.35	45-52	垂直	凹凸	自然		
49	B 4f4	N-50°-W	[長方形]	1.19×0.80	9	緩斜	平坦	自然		
50	B 4b7	N-32°-W	楕円形	1.36×1.17	10-17	外傾	凹凸	人為	土師質土器片	
51	B 4b0	N-2°-W	不整形長方形	0.96×0.73	29	外傾	平坦	-		本跡→SD 4
52	B 5b0	N-0°	不整形長方形	1.35×0.72	17	緩斜	平坦	-		本跡→SD 4
53	B 5f2	N-54°-W	楕円形	1.15×1.07	36	外傾	凹凸	人為		本跡→SI 12
54	B 5d1	N-89°-W	楕円形	0.43×0.35	35	外傾	平坦	-		
55	B 5d2	N-0°	円形	0.43×0.42	43	外傾	平坦	-		
56	B 5d2	N-33°-E	楕円形	0.52×0.36	21	外傾	平坦	-		
57	B 5e3	N-0°	楕円形	0.44×0.29	42	外傾	平坦	-		
60	B 5d3	N-76°-W	円形	1.55×1.41	46	外傾	平坦	人為		本跡→SK63
61	B 5c3	N-79°-W	不定形	1.10×0.88	35	外傾	平坦	人為		
63	B 5c3	N-0°	円形	0.90×0.90	30	垂直	平坦	自然		SB 8、SK60→本跡
64	B 5d4	N-84°-E	不定形	0.87×0.51	57-65	外傾	凹凸	自然		
65	C 4b9	N-10°-W	長楕円形	2.95×0.73	35	外傾	平坦	自然	土師器片・陶器片	本跡→SI 10、SB10

第4章 4節 まとめ

大日下遺跡では、縄文時代から近世までの遺構が確認されている。ここでは時代の概要を述べてまとめとする。

(1) 旧石器時代～縄文時代

大日下遺跡では旧石器時代の遺物として、石槍・ナイフ形石器各1点が出土している。石槍は基部にくほみを持つタイプで、ナイフ形石器は二側縁に加工が施されている。後者は後期旧石器の中でも新しい段階に属する石器と考えられる¹⁾。本遺跡は斜面に形成されているため流れ込んだ土層が多く、石器集中地点等の遺構は確認できなかった。

縄文時代は陥し穴と考えられる遺構が1基確認されており、縄文土器が極少数が出土したにすぎない。この地が狩猟場として利用されていたと考えられるものの、遺構の密度は極めて希薄なものとなっている。

(2) 古墳時代

遺構の密度は薄く、集落の様相は明らかではない。遺構としては、第5・12号住居跡の2軒が確認されている。第5号住居跡は、5世紀前半の遺構と考えられる。重複関係にある第12号住居跡が前期に遡る可能性があり、第5号住居跡からはS字状口縁を持つ甕の破片が出土していることから推測される。

また、本遺跡の東には辰海道遺跡6区が隣接している。辰海道遺跡の集落としての中心は、居館跡が存在する東部にあるが、古墳時代前期から中期にかけては、北西部に当たる6区周辺にも遺構が分布している²⁾。この時期は北西部にもう一つの拠点があったと想定され、大日下遺跡はその影響下にあったと考えられる。

(3) 平安時代

竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡4棟が確認されている。いずれも9世紀前葉に構築されたと考えられることから、古墳時代中期以降長期にわたって集落が営まれていなかったことになる。また、存続期間もかなり限定されたものである。

確認された4棟の掘立柱建物跡は、年代が明確ではない第2号掘立柱建物跡を除いて、9世紀を中心に構築されたと考えられる。辰海道遺跡6区では15棟の掘立柱建物跡が確認され、そのうち9世紀代と考えられるものは2棟である。辰海道遺跡の中心部である1～3区では、9世紀代に掘立柱建物跡が増加することを考えると³⁾、6区においてもこの時期の建物の比率は多くなると思われる。このような掘立柱建物跡の状況は、6区において竪穴住居跡が8世紀後半には3軒みられるものの、9世紀に入ってから住居が見られないことと連動している。この間、居住域が6区から大日下遺跡へ移動したと考えられる。

また遺構に伴うものではないが、三重弧文の軒平瓦が出土している。同様の文様を持つ瓦は新治廃寺跡から出土しており⁴⁾、大日下遺跡の位置する地域が古代新治郡の坂戸郷に比定されることと無関係ではないと考えられる。

(4) 中世

方形竪穴遺構1基、掘立柱建物跡2棟を中心に、溝跡・道路・井戸・炭焼窯跡などが確認されている。遺構数は相変わず少なく、集落としてのまともさは希薄である。若干の掘立柱建物跡が中世に構築されたと考えられるが、恒常的に人々が居住していた様子うかがえない。北側の丘陵には、この地域の拠点的な城館として機能していた坂戸城跡が存在するが、大日下遺跡周辺はその外郭線に入っていないと考えられる。

(5) 近世

近世になると、建物の礎石などは確認されていないが、掘立柱建物や遺構のあり方から屋敷地として利用されていた可能性がうかがえる。遺物に陶磁器片が含まれることが多くなり、遺跡の東部に位置する第1号方形竪穴遺構では、大形の甕の破片と鉄滓などが共に出土している。北部には道路跡が確認されており、遺跡の北側を東西に走る道路の原型と考えられ、現在の地割りや土地利用に近い関係が成立していたものと思われる。

また年代は不明であるものの、西部に位置する段切り遺構は、第1号掘立柱建物跡と密接な関係を持つと考えられ、その構築に伴って斜面部を造成した跡と考えられる。近年に至るまで遺跡の東部と西部にそれぞれ民家が存在したことから、おそらくはその祖先の構築した遺構の可能性がある。また、西部においては4基の炭焼窯跡が確認され、この付近で炭の生産が行われたことも知られている。地形的に遺跡の西部は傾斜が急で、炭焼窯の構築に適していたためと考えられる。

(6) 小結

大日下遺跡は辰海道遺跡の外縁部に位置し、古代においては辰海道遺跡6区とほぼ同じ展開を見せている。しかし、遺構数は極めて少なく、独立した集落を形成しているとはいえ、現況では辰海道遺跡の縁辺部を構成していると考えた方が妥当である。大日下遺跡が立地する地形は北側の斜面部であり、こうした地理的要因が集落を形成する上で不利に働いたのであろうと考えられる。

註

- 1) 茨城県考古学協会・ひたちなか市教育委員会 「茨城県における旧石器時代研究の到達点-その現状と課題-」発表要旨・資料集 2002年3月
- 2) 鹿島直樹 「辰海道遺跡4-北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-」[茨城県教育財団文化財調査報告]第247集 2005年3月
- 3) 仲村浩一郎ほか 「辰海道遺跡1-北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書1-」[茨城県教育財団文化財調査報告]第222集 2004年3月
- 4) 高井樺三郎 「常陸國新治郡上代遺跡の研究」1944年10月

写 真 図 版

山ノ入古墳群



第2号墳 調査前（北西から）



第2号墳 調査前 (南西から)



第2号墳 全景



第2号墳 北側くびれ部



第2号墳 後円部南側葺石



第2号墳 後円部東側葺石



第2号墳 南側くびれ部



第2号墳 前方部南側コーナー



第2号墳 後円部北側土層断面



第2号墳 後円部南側土層断面



第2号墳 後円部東側土層断面



第2号墳 くびれ部付近土層断面



第2号墳 前方部北側土層断面



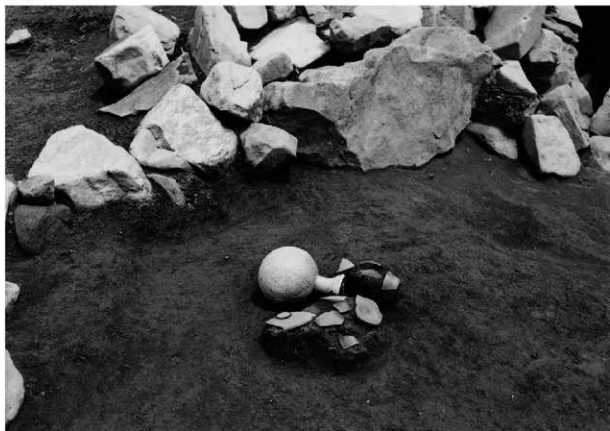
第2号墳 前方部石室東側土層断面



第2号墳 周溝北側土層断面



第2号墳 周溝東側土層断面



第2号墳 墓道西側遺物出土状況



第2号墳 南側くびれ部遺物出土状況



第2号墳 羨道部遺物出土状況 (鉄鉢)



第2号墳 羨道部遺物出土状況



第2号墳 石室遺物出土状況



第2号墳 墓道遺物出土状況



第2号墳 石室天井石



第2号墳 石室



第2号墳 西側袖部



第2号墳 石室完掘状況



第2号墳 石室東側壁



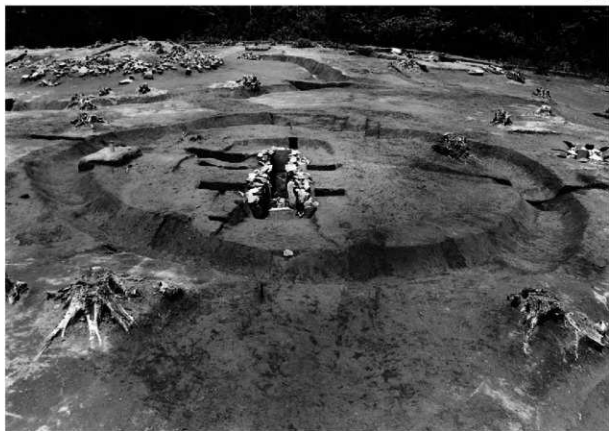
第2号墳 石室西側壁



第2号墳 石室玄門部及び玄室床面



第2号墳 奥壁



第3号墳 完掘状況



第3号墳 石室閉塞確認状況



第3号墳 遺物出土状況（長頸瓶）



第3号墳 石室完掘状況



第3号墳 玄門部及び墓道



第4号墳 完掘状況



第4号墳 遺物出土状況



第4号墳 遺物出土状況 (直刀)



第4号墳 遺物出土状況 (釘)



第4号墳 羨道部・墓室完掘状況



第5号墳 完掘状況



第5号墳 羨道部遺物出土状況



第5号墳 羨道部遺物出土状況



第5号墳 墓道



第5号墳 石室完掘状況



第6号墳 完掘状況



第7号墳 完掘状況



第9号墳 完掘状況



第9号墳 石室完掘状況



第9号墳 玄門部完掘状況



第8号墳 石室完掘状況 (南から)



第8号墳 石室完掘状況 (北から)



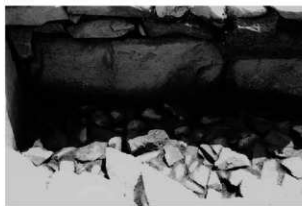
第11号墳 完掘状況



第11号墳 石室完掘状況



第10号墳 完掘状況



第10号墳 遺物出土状況



第10号墳 閉塞状況



第13号墳 完掘状況



第13号墳 玄門部石材崩落状況



第13号墳 石室完掘状況



第12号墳 完掘状況



第12号墳 蓋石確認状況



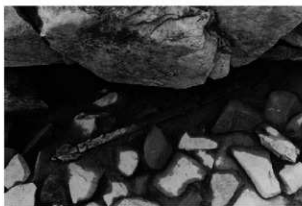
第14号墳 完掘状況



第14号墳 遺物出土状況



第14号墳 閉塞状況



第14号墳 遺物出土状況（直刀）



第14号墳 石室完掘状況



第17号墳 完掘状況



第17号墳 遺物出土状況



第17号墳 閉塞状況



第17号墳 遺物出土状況（直刀）



第17号墳 石室完掘状況



第16号墳 完掘状況



第18号墳 完掘状況



第15号墳 完掘状況 (北西から)



第15号墳 完掘状況 (北から)



第16号墳 完掘状況 (北から)



第16号墳 完掘状況 (南から)



第18号墳 玄門部



第18号墳 石室完掘状況 (南東から)



第18号墳 石室完掘状況 (南から)



第18号墳 石室完掘状況 (北から)



第19号墳 完掘状況



第20号墳 完掘状況



第20号墳 東側壁残存状況



第21号墳 完掘状況



第22号墳 完掘状況



第23号墳 完掘状況



第23号墳 確認状況



第24号墳 完掘状況



第1号住居跡 完掘状況



第1号住居跡 遺物出土状況 (刀子)



第2号住居跡 完掘状況



第2号住居跡 遺物出土状況



第3号住居跡 遺物出土状況



第3号住居跡 遺物出土状況 (P3)



第3号住居跡 遺物出土状況 (P2)



第4号住居跡 遺物出土状況



第5号住居跡 完掘状況



第6・7号住居跡 遺物出土状況



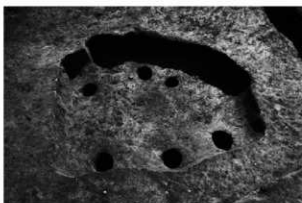
第8号住居跡 遺物出土状況



第1号石器集中地点 遺物出土状況



第4・5号炉穴 遺物出土状況



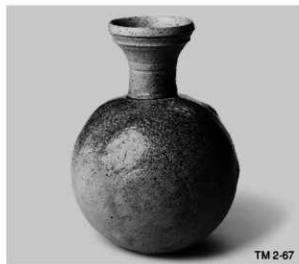
第75号土坑 完掘状況



第1号土器溜まり 遺物出土状況



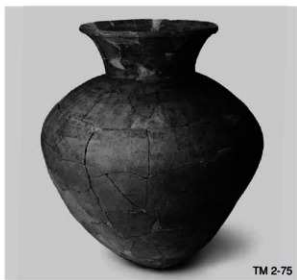
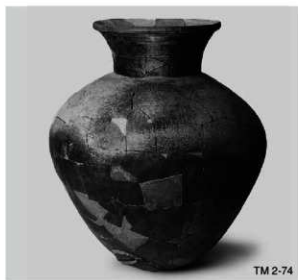
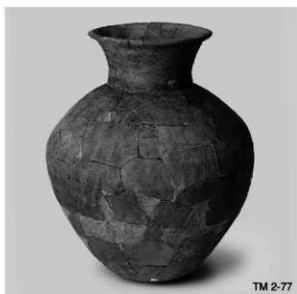
第2号土器溜まり 遺物出土状況



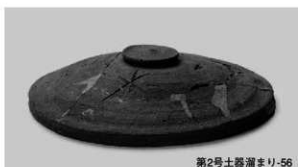
第3号住居跡,第2・7号墳 出土土器

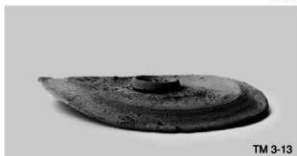


第2号墳 出土土器



第2号墳 出土土器

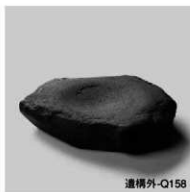
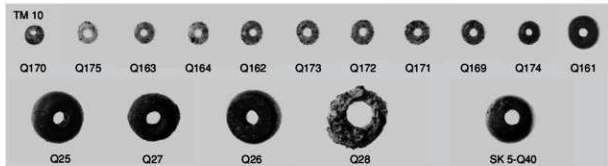


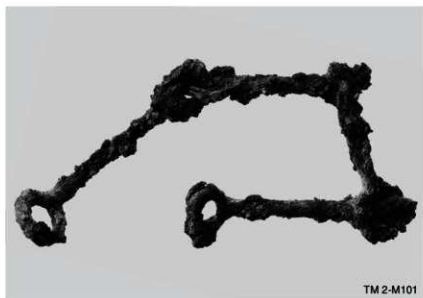
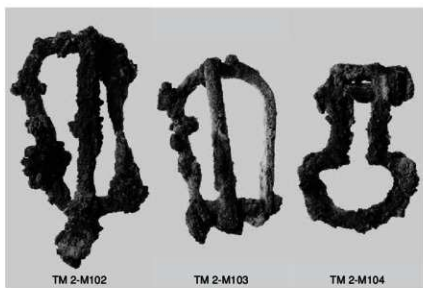
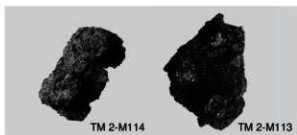
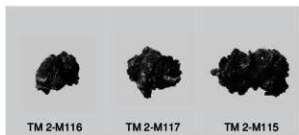
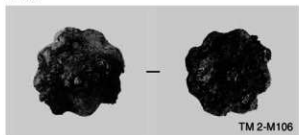


第3・5・14・17号墳 出土土器

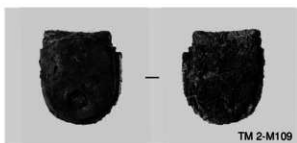
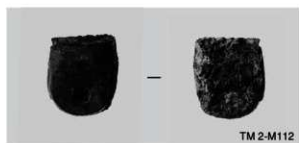
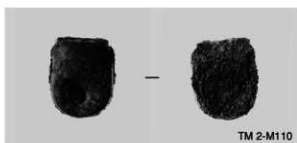
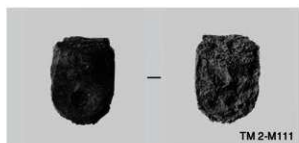
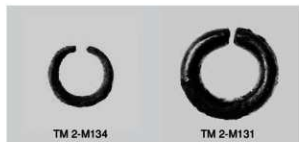


出土石器

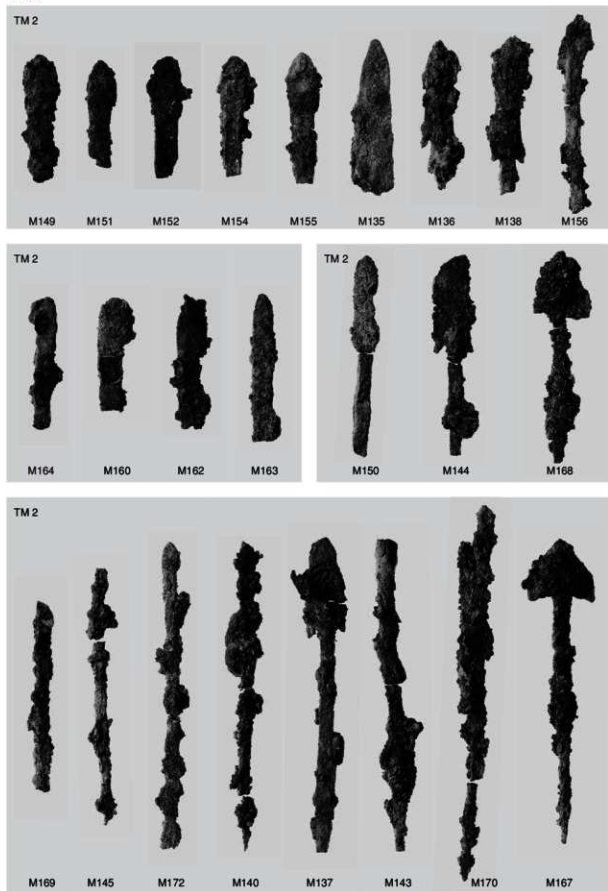




第2号墳 出土金属製品



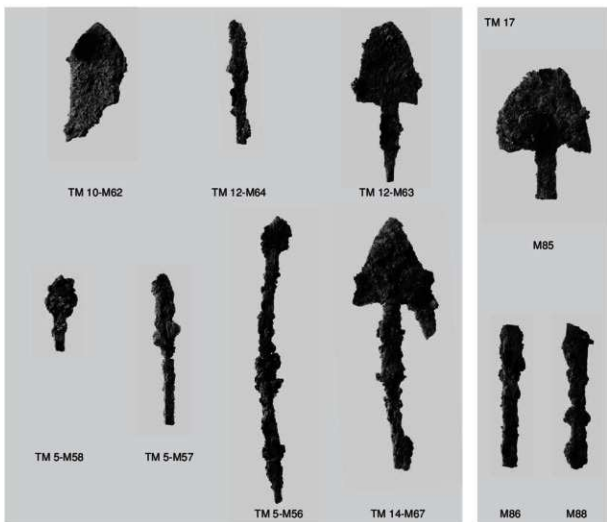
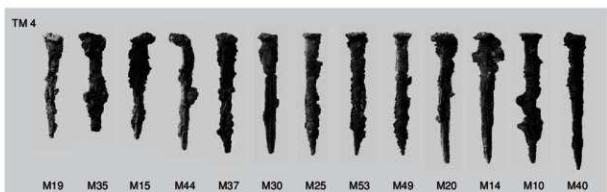
第2号墳 出土金属製品



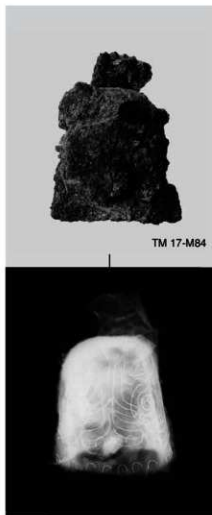
第2号墳 出土金属製品

写 真 图 版

大日下遺跡



第4・5・10・12・14・17号墳 出土金属製品



第3・4・14・17号墳 出土金属製品



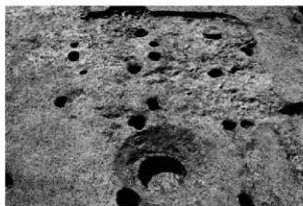
東側 全景



第5号住居跡 完掘状況



第5号住居跡 遺物出土状況



第12号住居跡 完掘状況



第3号住居跡 遺物出土状況



第4号住居跡 完掘状況



第4号住居跡 遺物出土状況



第4号住居跡 竈完掘状況



第6号住居跡 完掘状況



第6号住居跡 竈遺物出土状況



第7号住居跡 完掘状況



第7号住居跡 Pit4遺物出土状況



第8号住居跡 完掘状況



第8号住居跡 遺物出土状況



第8号住居跡 貯藏穴遺物出土状況



第1号方形竖穴遺構 完掘状況



第1号方形竖穴遺構 遺物出土状況



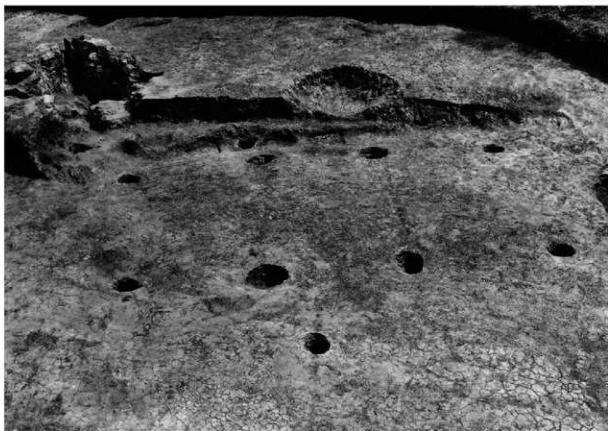
第2号方形竖穴遺構 完掘状況



第3号方形竖穴遺構 完掘状況



第1号井戸跡 完掘状況



第1号掘立柱建物跡 完掘状況



第3号掘立柱建物跡 完掘状況



第4号掘立柱建物跡 完掘状況



第5・6号掘立柱建物跡 完掘状況



第9・10号掘立柱建物跡 完掘状況



第1号溝跡 完掘状況



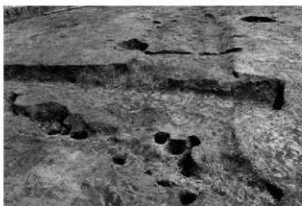
第4号土坑 完掘状況



第4号土坑 遺物出土状況



第38号土坑 完掘状況



第1号道路跡 完掘状況



第4号炭焼窯跡 完掘状況



第1・2号炭焼窯跡 完掘状況



第1号地下式廣 完掘状況



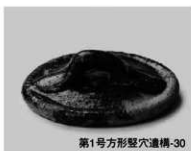
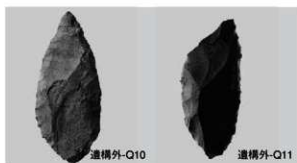
第31号土坑 完掘状況



第31号土坑掘り方 完掘状況



第3・4・6・7・8号住居跡,第1号井戸跡,第1号方形竪穴遺構出土土器



第4号住居跡,第1号方形竪穴遺構,第1号溝,第1号道路跡,遺構外出土遺物



第3号炭焼窯跡,段切り遺構,遺構外出土石器

茨城県教育財団文化財調査報告書第255集

山ノ入古墳群
大日下遺跡

北関東自動車道(協和～友部)建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ

平成18(2006)年3月20日 印刷
平成18(2006)年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL. 029-225-6587

印刷 株式会社 高野高速印刷
〒310-0853 水戸市平須町1822-122
TEL. 029-305-5588